
昆虫人、異世界を逝く

ふりふり県

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昆虫人、異世界を逝く

【Nコード】

N7127V

【作者名】

ぷりぷり県

【あらすじ】

人間嫌いで引き籠もっていた特撮ヒーローヲタクが、ある日神様に召喚されて、自分の正体を知る。

そして神様の依頼で、昆虫人に生まれ変わって異世界へ。

目的は人間の監視と抹殺!?

彼は神の依頼をどう処理していくのか?

でも、物語はギャグ7割、シリアス3割位で展開して逝きます。

各種設定など 10/22設定更新(前書き)

設定です、話が進むにつれ

随時更新していきます。

各種設定など 10/22設定更新

《 スキルや称号について 》

昆虫人 インセクター

種族名：レギオン

” ギフト 種族的恩恵 ”

ギフト名

効果

【不可侵】 物理攻撃無効 (超重量による圧殺とかも含む)

【レジスト】 魔法攻撃及び特殊攻撃無効 (石化、一撃死、魂砕き、LVドレイン、呪い等)

【ライダーアクション】 四次元的な動きと、蹴り技主体の格闘技
SSS

【ハリー・掘ったー】 急いで何かを掘る時や地中での活動に補正極大、
地中に埋まってる物質をサーチできる (自分を中心に半径5 キロメトル
メートル) (ント)

【超加速】 物理法則 (慣性) を無視、1000分の1秒の速度で
行動可能。 一回 30秒・連続使用5回まで可能 (5回以降は5
時間のインターバルが必要)

【直観像素質】 パツと一瞬見た映像が、まるで目の前にあるかの
ように鮮明に思い出す事が出来る。 一度見たものは、数年後でも
原色で色鮮やかに記憶の中に再現される。

【天才】 あらゆる分野の学問や知識及び技術の記憶・習得速度
S (LVアップに必要な経験値 1/3、能力値の伸び率 15
0%)

【虫の知らせ】 メチャメチャ勘が鋭い。 危険予知 SSS

【こつち見んなW】 気配隠匿、目の前に居ても認識されない。 O
N/OFFの切り替え可能

【こつち来んなW】 自分よりも生物的に弱い、敵性存在が寄つて
来なくなる。 ON/OFFの切り替え可能

【芸術神の祝福】 あらゆる芸術的才能に恵まれている。 絶対音
感を所持。

【腐蝕神の眷属】 ブラッド神の眷属になる事で”モノを腐らせる
”つまり”発酵”を任意で操れるようになる。

【友達百人できるかな】 会話術補正 S (補足：上位ギフトに
”友達千人できるかな：SS”と”友達万人できるかな：SSS”
が存在するらしい。)

【鍛錬の鬼イ】 通常は敵を倒す事により失われた、その”存在の
因果律”を補完する為に、世界が”失った分の因果”を倒した相手に
追加する事で、”存在の格”が上がりLVアップが行われるが、
このスキルを所持する事で、敵を倒さない”訓練”でも”経験値”
が得られ、それを一定量貯める事でLVアップが可能となる。

【レポート】 任意の眷属の元に空間転移できる、逆に眷属が居
ない処には転移不可。

【エスケープ】 緊急避難。 危険な状態に陥った時、もしくはは任意で、ポーチ内の空間に”封印球に封印”された状態で、転移する。 誰かに封印を解除して貰わなければ、自力での脱出は不可。

【サイコネシス】 物理的エネルギーを発生させて対象物を動かす、自分を対象として自身が宙に浮く事も出来る。 自重の50倍の重さまで可能。

【サーチ・アイ】 解析眼。 解析したい対象の詳細な情報を得る事が出来、物質の透視も可能とする。

【物質透過】 無機物や植物（大木）の中を透り抜けて、移動が可能。

【概念破壊】 対象とした”概念”を消し去る。

【ラーニング】 自分が受けたスキルを習得できる。 又、スキル【サーチ・アイ】を習得済みなら、解析しただけでスキルを習得可能。

【黄金虫】 コガネムシと読む。 金運に恵まれ、一生お金がついて廻るが、原始生活には無用の長物。

NEW!!

【孔雀明王】 毒や穢れを喰らい 浄化する仏の名を冠されたスキル。 【第二の口】 からあらゆる有害な物質を取り込み 自身のエネルギーに変換。 一度に半径50キロの範囲を浄化出来る。

【メギドの火】 生命と死を司るエネルギー。ケガをしたり死んだ直後の生物に、癒しを望んで使えば、傷の治癒や生命力の回復を可能とするが、破壊を望んで使用すれば、あらゆる存在を”原子の塵”に変えてしまう”純エネルギー”。使用には”四大元素”を取り込む必要があり、取り込む元素の”数”によつてエネルギーの質は変化する。破壊やケガの治癒に使う場合、1つの元素でも量を多く取れば”威力”を増すが、”蘇生”に使うなら最低でも3つ以上の元素を取り込んで、”エネルギーの質”を上げる必要がある。

インセクター
昆虫人 個人名：アバドーン ”王”の個別恩恵（あなた個人が有するギフト）

【超天才】 あらゆる分野の学問や知識及び技術の記憶・習得速度 SSS（LVアップに必要な経験値 1/10、能力値の伸び率 200%）又、新しく”自分の流派”を生み出す事も容易に可能。

【一人ぼっちの王国】 物理法則（慣性）を無視、体感時間で約10分ほど”時間”を止める（再使用は10時間のインターバルが必要）

【アポーツ】 任意の眷属を転移させて、傍らに引き寄せる。

【虚空からの帰還】 身体が原子の塵に変わっても、その場で再生

する。

【神様がみてる】 いつも神様が気に掛けてます。(強く念じれば、手が空いてる時は念話に応じてくれるでしょう。)

昆虫人 インセクター 個人名：アバドーン ”王”の所有物(あなた個人が所有するアイテム)

【赤いマフラー】 スカーフのような薄い生地で作られた、お洒落なマフラー。汚れが付いても水に浸ければすぐ落ちる、とても丈夫で、燃えたり破れたりしない。ポーチの中にはストックが沢山

【封印球】 ポーチに大量ストックしてある”ゴルフボール大”の水晶球。生物を封印して置く為の道具で、封印された生物の時間は止まる。

【知識神の贈り物】 調べモノに最適な、色々な事が載っている本。(表紙には汚い字で”ういきぺであ”と書いてあるようだ。)

【倍々ハンマー】 この神器で増やしたい”食べ物”をぶっ叩けば、2つに増える。別に叩いて2つに割れる訳では無い。…多分。

昆虫人 インセクター

種族名：レギオン ”生態種族的特長”

【体色】 一般の個体は黄緑と深緑の体色で、地球の”飛蝗”^{バッタ}に酷似しており。”王”の体色は黒に近く、緑色掛かっている地球の”蝗”^{イナゴ}に酷似している。

【メチャ硬い甲殻】 ダイヤモンドなんかメじゃねえぜ

【メチャ強い筋力】 人の平均値の50倍 LV1の段階で

【大空は俺のモノ】 普段は折り畳んである”背中の羽”で飛行可能 (マツハ3)

【海が好き】 海水や淡水の中でも生存及び自由に行動可能 (水中50ノット、最大潜航深度〃ギフトの恩恵で限界無し)

【星のヒト】 真空中でも生存可能 (短時間のみ羽からタキオン粒子出して移動可能)

【生体レーザー】 眉間の結晶体から走査レーザーを発射可能 (連続使用はエネルギーを大幅に消費するので注意が必要)

【ムシキング】 あらゆる虫と意思の疎通、及び命令が可能。又、他種族のインセクターからの好感度UP

【森の音楽家】 背中の羽を、振動・共鳴させる事によって、美しい音色を奏でる事が可能。美声・音量有り。

【超生命体】 強靭な生命力(身体が千切れても付けとけば治癒する、毒、マヒ、病気、寄生虫等の無効化)、如何なる環境でも生存

可能（極寒・灼熱等）、能力進化・適応速度が高い。

【俺様脳内会議】 分割高速思考。 同時に別々の事柄に対して、マイクロセカンドの領域で思考が可能。 幾つもの情報処理を同時に進めたり、戦闘時には格闘戦をしながら 呪文を紡いだり等。 又、移動などの単純な行動の最中に”脳の一部を使って、他の大部分は睡眠を取る”事も可能になる為、睡眠時間を取らずに何日も行動出来る。

【超感覚】 自身の周り360°の情報取得（死角が無い）、平衡感覚や知覚の補正 SSS

【なうろーでいんぐ】 記憶の共有。 同種族の間でのみ可能な、テレパシーの送受信による、知識の補完が可能。

【感覚器官】 丸く大きな赤い”複眼”と、眉間の結晶体付近から伸びている”触角”。 前方180°は”複眼”で、それ以外の領域は”触角”と前述の”超感覚”及び”虫の知らせ”で補足している。 ちなみに”なうろーでいんぐ”は、この触角を使って行う。

【テレパシー】 同族間でのみ可能な”精神感応能力”。 他の個体が取得した情報をリアルタイムで同時処理するので、仲間と共に【集団で行動】する時に、【群れでありながら一個の生命体】としての行動が可能。 多種族間での交感は不可。 種族名の”レキオン軍団”という名前の由来は、この能力から付けられている。

【四肢の甲殻】 四肢の末端に付属している甲殻、パッと見には手の部分は”グローブ”に、足の部分は”ブーツ”に酷似しているが、表皮部分が色違いで甲殻化したモノ。 掌や足裏部分には無い。

【四肢の先端】 掌や足裏部分には、木や岩肌に取り付く為の”微細なトゲ”があり、更に大地を？む為の”爪”と、滑らかな場所を登る為の”吸盤”がある。 いずれも、必要に応じて出し入れ可能。

【食性】 嗜好は草食性、樹液や野草など 何でも食べるが、サトウキビなどの糖分のある植物を好む。 実際は雑食性で、胃袋に入った物は原子に分解され、直接”エネルギー”に変換されてしまう為、口に入るモノは何でも栄養にできる。

【異次元ポーチ】 腰に有るベルト状の甲殻側面に付随する”ポーチ状の器官”、不思議な空間に繋がっており、物品の収納が可能。 空間内部の時間は止まっているので、食料の保存も可能とし、かなりの大きさの物も”なぜか”収容できる。(スカーフも最初はこの中) 基本的に生物は収納不可。 例外として、”封印球”に封じ込められた状態の生物なら、収納可能。

【第二の口】 腰に有るベルト状の甲殻前面に付随する”バックル状の甲殻”の中心にある”第二の口”。 ”第二の口”の中にある”風車状の器官”が回転してモノを吸い込んだり、強力な竜巻を放出したりする。 前述の”メギドの火”は、この器官から”土・火・風・水”の”四大元素”を”元素エネルギー”として直接取り込み、体内で変換する事によって生成される。

【虫の転生術】 身体が原子の塵に変わっても、”霊体核”が王の体内に吸収されて、卵の中に転生する。 卵から生まれた個体は転生前の個体と同一存在。 記憶もそのまま継承される。

【不死身の体】 ある程度の大きさの、細胞の塊が残ってさえいれば、そこから記憶までも再生可能。

NEW!!

インフィニティ・ハート

【無限の心臓】 永久機関とまでは往かないが ほぼ無限に近い時間、少量ではあるがエネルギーを供給し続ける器官。

【繁殖方法】 王に拠る単体生殖。 1日10個、卵を体内に生成出来、”口から”吐き出して産卵する。 卵は”野球の軟式ボール”位の大きさで、カムフラージュの為”球形の石”の様に見える。 そうして、”丸い石”として様々な【魔力】や【生命力】、【大地の気】に【知識】までも吸収しながら、1週間かけて徐々に大きくなって行き、”1.5メートル”ほどの大きさまで育った後、”成体”として誕生してくる為、彼らには”幼年期”が存在しない。 又、卵限定のギフト【生命の賛歌】による加護の為、危害を加えようとすするあらゆる事象から、完全に守られ快適な状態が保たれる。(溶岩に落ちても温泉タマゴにならない) 追記：魂こんぶと太ゼクタクの使用により”脱童貞”に成功しました。 童貞卒業乙w

《 単位について 》

1モルダント)(M)

1ダント)(M)

1ダル (cm)

1モコダス (t:トン)

1モコス (kg)

1モツコ (g)

《魔法について》

四大元素の【火】を力の源とする魔法

ラメエ 【炎系下級呪文】

ラメラー 【炎系中級呪文】

ラメラオン 【炎系上級呪文】

ラメラツテエー 【炎系最上級極大呪文】

四大元素の【水】を力の源とする魔法

チャプ 【氷系下級呪文】

チャップー 【氷系中級呪文】

チャプオン 【氷系上級呪文】

チャプイッテエー 【氷系最上級極大呪文】

四大元素の【風】を力の源とする魔法

シビィ 【雷系下級呪文】

シビレー 【雷系中級呪文】

シビレオン 【雷系上級呪文】

シビレッタアー 【雷系最上級極大呪文】

四大元素の【地】を力の源とする魔法
精神に作用する木や植物の精霊が関与している

ラリィ 【混乱系下級呪文】

ラリラー 【混乱系中級呪文】

ラリッラッテエー 【混乱系上級呪文】

《 神様と主神について 》

【風と芸術の神、ロベルト】

この世界の主神にして、風と音楽や彫刻など芸術全般を司る神様、フリーダムだが人望はあるらしい。この世界で”主神”の事は”カーロン”と言い、呼称する時は名前の後ろに役職名の”カーロン”が来るので、正式名称を”ロベルト・カーン”と言う。

【水と知識の神、サイオン】

水と知識を司る冷静な言動の神様、この世界の神々の参謀的な位置に就いているが、実は愉快犯的な性格をしてるので一番性質が悪い神w。有能。

【火と戦の神・アーバレスト】

火と戦を司る神様、戦闘能力はピカ一だが、温和で朴訥な性格。けっこう腰が低い。

【大地と鍛冶の神、ヘルトン】

一番図体のでかい大地と鍛冶を司る神様、気は優しく力持ち、見た目に反して手先が器用。ルランジェルの弟。

【植物と豊饒の神、ルランジェル】

全ての樹や植物と豊饒を司る神様、見た目も行動も幼女だが、ヘルトンのお姉いさん

【酒と腐蝕の神、ブラッド】

酒とツマミをこよなく愛する念情な神様、司る”腐蝕”は、酒やチーズ等を造る際の”発酵”を操る為だけに選んだ、己の欲望に忠実な神。^トある意味コイツが一番フリーダム。

各種設定など 10/22設定更新(後書き)

10/22 ギフトや生態に関する設定を一部入れ替えと

新規更新しました。

Episode:01 ハツチャケ神と(不)愉快な仲間たち(前書き)

読む専門でしたが、誘惑に逆らえずに投稿。

慣れて無いので、あまりキツイ突込みは無しの方向で

お願いします。(汁)

8/27 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

Episode:01 ハツチャケ神と(不)愉快な仲間たち

「やあ、俺は【木村一郎】名前の通り、外見も能力も平凡な普通の人間だ。」

俺は世間一般で言うところの所謂【ヲタク】、それも【特撮ヒーローヲタク】と分類される、ヒキコモリのナマモノだw

俺が、ヒッキーのヒロヲタになったのには、一応理由がある。」

「俺は【人間が嫌いだ】、【自分が人間である事】すら嫌悪するほど、人間が嫌いだ。」

「何時ごろから人間嫌いになったのかは ハッキリと思い出せないけど、ヒロヲタになったのは、普通の子供と同じで、子供の頃からだっただ。」

そうなった理由を自分なりに自己分析して見たのだが、少なくとも物心ついてからの理由は【人間以外のモノ】に”変身”したかった。

つまり、【人間を辞めたかったから】ではないか？ と、自分なりの結論に落ち着いた。」

…やっべ、これってヤバくね？ 俺って、そんなにニンゲンが嫌いかよ？！ ヒトとして、人間社会で生活して逝く【誤字じゃないよw】上で、

これって致命的じゃね？ …まあ、だからこそヒキコモっているんだけどさw

「でも、なぜ人間嫌いになったかは謎のままだ、家族は俺と両親のみ、兄弟・姉妹は居ない、一人っ子だ。

両親は普通に優しく、間違った事をした以外で叱られたり、不当に虐待された事も無い。

家族の会話だって普通にしてたし、今だってヒキコモってる俺を心配して、なんとか更生wさせようと、知恵を絞ってくれている。

一般家庭よりは裕福みたいだから、両親も【良い方法が見つかるまでは、このままそつとして置こう】という方針のようだ。」

「俺としても、家族だけは嫌いではない。 家族以外の人間全部、”人類”という種族が嫌いなのだ。

当然、親しい友人などは居ないし、居たとしても【ネットの向こう側】に居る、【顔も知らない友人】だけだw」

「で、なぜこんなに長々と自己紹介のような駄文を垂れ流している

かというと、今現在の、俺の置かれている廻りの状況の所為だ。」

「足元は、まるで雲のような”モヤ”が覆い、足の裏が『なにも触れてない』にもかかわらず、しっかりと足場が安定しており。

廻りを見回せば、光に溢れてどこまでも続く空間と、足元から伸びる雲・雲・雲。そして、はるか遠くに見える神殿のような建物。

…まるで、ファンタジー物のDVDで見た事のある【天上の世界】そのものですねw アリガトウございますww」

昨日はネトゲやった後に寝て、起きたらコンナなっていましたw
この状況で、他に どうしる と？ww

『…そろそろ、逃避はやめて現実と向き合ってくれないかな？』

「うるせえ！！そんな簡単に現実と向き合えるなら、わざわざヒキコもったりしてねーよ！！！！ ヒキヲタなめんな！！！！」
【切実w】

『！説得力あるって言うレベルじゃねーぞ！！ww』

…極めつけは”彼”の存在だ。

淡い光に包まれて、細部がハッキリとしない【ヒトガタ】の生物？
つか、現状までの情報から出される答えとして、一番それっぽいのはやっぱり…

……………。

「がんのすけ雁之助はん？」

『ぼ、僕は塩オニギリが、大好物。な、なんだな！』

やっほり！

『違うよ！ 裸の大 じゃないよ！！ 神だよ！ カ・ミ・サ・マ
！！ このタイミングで、こんなネタ振られるとは思わなかったよ
！！！！』

ついで、ボケちゃったじゃないか！！！！』

エエエエエ (; ;) エエエエエ

『エエエエじゃないよ！ 君、最初から理解かってたじゃない！』

∴ いや、俺が驚いたのは、神様がこんなにハツチャケていた事にだよ。(汗)

∴ やつべ、そんな事よりも さつき、神様相手に「うるせえ！」とか言っちゃったよ∴。普通に心読まれてるっポイし∴メチャメチャやばくね？

『∴ ああ、そんな事なら気にしなくても大丈夫だよ、そんな詰まらない事でバツとか与えないからw』

「おお、なんて心が広いんだ！∴やつぱり神様だから？」

『ネタ振りのタイミングが絶妙だったからね。』

「そんな理由かよ?! しかも、裸 大将とか、普通に知っていたし∴∴」

『全知全能だからねw』

…なんとこの能力の無駄使い…。ダメだこの神様、早くなんとかしないとw

『それで、モチついたかな？そろそろ話しを始めても良いかな？』

モチつくとかw。…まあいいやw

「それで、俺がなぜここに居るかって事ですか？」

『うん、それなんだけど僕が呼んだんだ、話を聞いて欲しくてね。話というより提案というか選択して欲しかったんだ。君に。”運命”をね。』

…運命？ 随分大げさな単語が出てきたなあオイ…。 いや、こんな状況で神様に会ってる時点で、すでに大事か…。

『ぶっちゃけて言うと、人間辞めて別の生物になり、別の世界で使命を果たして欲しいんだよ。君を神の使徒としてスカウトする為に、

ここに呼んだんだよ。』

「…本当にぶっちゃけましたよ。しかも【人間以外の生物】とかw。そこんとこkws.k。」

『…ナニこのスゴい食いつきw 期待してたとはいえ、予想以上なんですわw』

『まあ、そのほうが都合だからいいやw じゃあ、まずは順を追って説明するよ、まず僕だけど、さっきも言ったとおり神様って存在だよ。』

もともと、君の世界の神じゃなくて、こことは違う次元世界を創造・管理してる、新米の神のリーダー的存在さ。』

…ん？んん？？【新米の神のリーダー的】？？世界を創れるのに【新米】とか【リーダー的】とか、いまいち意味不明なんだけど？

『うん、神にも色々と格付けや仕事があって、僕は創造神にランクアップしたばかりの新米で、まずは自分達の創った【下位世界】を仲間の神々と一緒に、管理・運営していく事で、神としての経験と実績を積んで、立派な一人前の神様になってゆくんだ。』

今は、その為の”修行”の真つ最中って訳なんだよ。

…ここまではOKかな？　ちなみに、君が住んでる世界は大先輩の神様が創り、管理している【上位世界】ね。』

…なるほど、新米ってそういう意味か、そしてリーダー的と言うのは神話で使われる”主神”って意味でマチガイ無いなさそうだな。

『そそ、その認識でマチガイ無いよ。』

『…だけど、僕らが創った世界で問題が出て来たんだ、正確には後々で重大な問題に発展しそうなもつと詳しく言うなら世界の存続に関わりかねない問題になりそうな懸念事項が出て来たんだ。…それが今回、君をスカウトに来た理由の発端なんだよ。』

「…数在る人間の中から”人間嫌いの自分”が選ばれた事、別の生物になると言う言葉、神の使徒、スカウト、世界の存続などの単語、もしかして、その問題って”人間”そのもの？」

『…うん、察しが良くて話が早いね、まさにその通り。　問題にな

つてるのは”人間”そのものなんだ、実際、彼らほど可能性に満ちた種族は他に類をみない。

脆弱なわりに、決して諦める事無く”進化”し続け、やがては僕らの居る場所まで到達するであろう”無限”とも言つべき、素質と可能性を秘めた種族。

多分それらは、彼らを創るとき素材のひとつに【知恵の実】が使われたのにも起因するんだと思う。

けれど、その所為で彼らは”知恵”を付け過ぎた、慎重な反面、臆病な彼らは”猜疑心”を覚えた。

探究心や向上心に富む反面、”貪欲”と言う悪徳を身に付け、【物を分け合う】とか【必要な分だけ取る】と言う節度を失っていった。

火を使う事によって、夜の闇を畏れる気持ちを無くし。

自分達の生活の向上と安全の為に、石で囲まれた”街”を築き”都市”を創りあげ、大自然を敬う事を忘れ。

自然や精霊、果ては神々への感謝と畏れの気持ちさえ無くし、【宗教】と言う名で神の権威を騙り、私欲にまみれていった。

せめて、彼らの寿命がもつと遙に長く、頑強な体を持っていたなら、長い生の営みの中で 自らの行いを振り返ったり、反省したりして、間違いや過ちに気付いたのかも知れないけれど、彼らの”生”は短く、深い知恵を得たと思つたら、すぐに寿命が尽きてしまう。

その結果、彼らは奢り高ぶって自分達以外の【他の種族】を【亜人】（人で無い者）と呼び、見下す様にまでなっていた。

もはや、自然と共に生きる事を忘れ、”世界”と言う【システム】から自ら外れていった彼らに、その行動を諫めようとする【神々や精霊の声】が届くはずも無く、”声”を聞くことの出来る 他の種族の言葉を”迷信”と言い捨てる有様だ。

…事、此処に至って、僕ら神々と精霊は彼らに【不信と恐怖】を覚えた。このままで良いのか？と、何か手を打たなければ、折角ここまで育った世界が、取り返しの付かない事になるのでは無いかと。

「なるほど、まだ大丈夫だけど、近い将来に世界が危機を迎えて、手の施しようが無くなる前に、人間に対して【神々の目】となって監視し、その意を受けて行動する【代行者】、もしくは最悪の場合に備えての【処刑者】を、送り込もうって事になり。その対象に選ばれたのが、”俺”って事か。」

『まさしくその通り、君は理解が速いね。』

「いや、常日頃から考えていた、【人類に対する懸念】とその【対処】だったからね。でも、なぜ俺？ 言っちゃナンだが普通の人間

ですよ？ 他人に誇れるほど優秀なモノが何ひとつ無いパンピーですよ？」

『いや、君が最適だと言う理由は、ちゃんと有るんだ、その理由こそが、君が人間を嫌悪する”原因”でもあると考えられる。』

君は【この次元世界に於ける人類の滅びの因子】が、【物質として形を成した】存在なんだよ。』

……………へ？ 【滅びの因子】?? 【形を成した】???

『…うん、これも説明するから良く聞いてね。』

あらゆる次元世界に在る全ての存在は【例外無く】、誕生すると同時に”滅び”と言う因子を内包しているんだよ。

形あるものは、いつかその形を失い、だからこそ新たなるものが生まれる。そうやって、万物は廻って行くのさ。

そして その因子は通常、形を成す事無く【概念】として存在し、君達からは【運命】と言う名で、認識されるのがほとんどで、直接的に顕現しても、遺伝子に込められた”命令”と言う形を取るんだ。

【レミングスの集団自殺】って、聞いた事あるだろ？ あれが、遺伝子に込められた”命令”の成せる現象の一つなんだよ。

この世界の人類はハツチャけ過ぎて、既に【滅びの因子】が【物質化】するほど、危険な状態になってるんだ。

…でも、ここまで進化した【上位世界】の人類を このまま滅ぼすのも惜しいんで、ちょうど因子が物質と言う形を成しているのを幸いに、因子を取り除く事にしたんだ。

…まあ、やがて別の形で因子が再構成されるから、一時凌ぎにしかならないんだけどね。

今回の場合は、君（因子）を僕の次元世界に移住させるって事だね。

さっきの話に戻るけど、元々【人類を否定する概念としての存在】故に、又”因子”という【システム】の性格上、君は感情よりも論理的な思考を優先するけど、人間は感情を優先して愚かな行いを繰り返す。

…要は、相性が最悪なんだ、そこら辺が、君の人間嫌いの理由なんだと思う。』

『半分正解、幸いな事に君の【因子】としての能力は、”まだ”完全に覚醒していないんだ。 ……只の人間にすぎない、君のご両親のおかげだね。』

…親父とお袋？

『そう、何も特殊能力を持たない普通の人間だけれど、最愛の息子として、君に深い愛情を注いでいるから。』

そして、君自身も、ご両親の愛情を感じ取って彼らの幸せを願っているから。

もし、因子が覚醒すれば、真っ先に彼らが因子の影響を受けてしまう。

だから君自身、自覚していないけれど 無意識下で因子の覚醒を抑えているんだ。 ……親子の絆と愛情が起こした奇跡だよ。』

「……………」

『でも、それも限界に来ている。 覚醒し始めているんだよ。 現に【地球温暖化】や、最近の【地震の多発】、外国を襲った【噴火】による津波【なんかは、君が覚醒し始めたから、起こったんだよ。』

実際、もう時間はあまり残っていない、さっきは運命を選んで言ったけれど、本当は選択肢なんて無いんだ。

「……………それでも、奇麗事かも知れないけど、強制されたのでは無く、状況に流されるのも無く、君自身で決めて、選んで欲しい。」

誰の為でも無く、君自身が後悔しないために。」

「……………」

「……………神様ありがとうございます。」

「え？ ナゼお礼？ 僕をなじったり、愚痴を言ったりしても良いんだよ？」

「こんな面倒な手順を踏まなくても、あなた達は【世界の運命】と言う大義名分を振り翳して、”強制”する事も”命令”する事も出来たのに、誠実に話をしてくれて、そして選択する機会も用意してくれました。……………だから、ありがとうございます。」

「……………！」

「……………俺行くよ、異世界に。大切な家族を守る為、後悔しない為、自分自身の意思で、異世界に行くよ。」

『…ありがとう。君の勇気と決断に、世界を管理する神の石柱として、感謝を表します。…本当にありがとう。』

「所で、俺が異世界に行った後、残された両親はどうなる？」

『心配いらないよ、ちょうど”幸薄いまま死んだ魂”の救済を考えていたから、その魂に君の体を与え、彼とご両親の記憶を修正するから、ご両親に【最愛の息子を失う悲しみ】を、与えずに済むように手配するよ。』

「……………よかった。」

『…そんなに気を落とさないでよ、どの道このままでは居られなかったし、万が一、奇跡的に因子が覚醒しなかったとしても。24才のヒキヲタじゃあ、彼女も出来なかったら、童貞コジラせて死んじゃう可能性がかなり高かったし、もしそうなら別の意味で、ご両親も嘆き悲しんだらうから。…きっと、これで良かったんだよw』

「!?! ほつとけよ!?! よけいなお世話だよ!?!?! なんだよ、さ
つきのまともな会話との差は!?! ちよつと感動した”5分前の俺
”に謝れ!?!?!?!?!」

『だが、断る!?!』

「断りやがった!?!?!?!?!」

『まあまあ、ここはこの”サイオン”に免じて穩便に済ませてくれ
まいか?』

「誰!?!?」

『同じく、この”アーバレスト”の戦斧と誇りに免じて、お願いす
るでござす。』

「名乗ってるけど、何者!?!?!?」

『『『『我等からも、お願いします。』』』』』

「なんか増えたし!?!?!?!?!」

『やあ、みんな来てくれたんだw ああ紹介するよ。彼らは僕の盟友にして、同じ次元世界の管理者達だよ』

『改めてよろしく、私は【水と知識の神、サイオン】と言います。
…とりあえず、童貞乙w』

『おいは【火と戦の神・アーバレスト】でござす。…何はともあれ、童貞乙w』

『【大地と鍛冶の神、ヘルトン】ですけー。童貞乙w』

『【植物と豊饒の神、ルランジェル】なのですよー。童貞乙w』

『【酒と腐蝕の神、ブラッド】じゃんw、童貞スレと聞いてwww』

『おまいらw』

『もう帰れよ！ お前ら！…www』

『まあ、君が童貞だと言う事実は、この際置いておきましょうか、田村くん。』

「童貞を連呼すな！ それと名前間違ってるよ！！」
「木村」だから
「らー！！！！」

『申し訳ないですのー、野村っちゃん。』

「その名前も違うから！間違ってるから！！」
”村”しか合っていないから！！！！！！！！！！

『どうせ、ありきたりな名前なんだから、どうでも良いじゃん。』

鬼邑君ww『

「【ありきたり】【とか】【どうでも良い】【とか言うな！それに絶対ワザと間違ってるよね！！！！？」

『なかなか、本題に入れませんかえ……。』

「！！俺！？俺の所為せい！！？俺が悪いの！！！！？」

『『『『『いや、コイツ（主神）の所為^{せい}。』』』』』

『！？まさかの裏切り！！！？』

……主神エ……。(;、)
どんだけ人望無いんだよ……。

『いえ、彼は人望有りますよ？ でなければ主神なんて成れませんから。』

『わが友【サイオン】、君だけは信じていたよ！！！』

『『『『『ただ、イジると楽しいからWWW』』』』』

『！？周り全てが敵であります！！！？』

……主神エ……。(;、)
なんだろ涙が止まらないや。

『同情なんて要らないから!?!?』

『次は、君が転生する新たな種族の姿やスペックに関しての説明ですね。』

「キタ
（ノ）＼（。）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）
（ノ）＼（。）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）（ノ）
（ノ）
!?!?」

『速っ!?!? もう、流された!?!?』

『すでに君の好みはリサーチ済みですので、一応暫定的に決めてあります。』

『それで、これから説明。その後、修整案や意見があれば取り入れると言っ感じで進めますね。』

「やぶーー!?!? 了解しましたw」

『モチつけw』

「サーセンW」

「それで、外見ですが 一見した感じは「仮面ライダー THE FIRSTの一号」ですね、細部は生物だから有機的になってますけどね。

ですから、君の種族は昆虫人インセクターと言う事になります。

：時間も無い事だし、もう実際にその姿になつてもらいましょうか、サービスでスカーフっぽいマフラー着けておきますよ。』

「く。。。くノ来た！ ライダー来た！！ これで勝つる！！！」

姿見で確認中

『名前は【アバドーン】…本来は【蝗イナゴの群れを率いる天使】の名前なんです、君の場合は”蝗イナゴの王”と言う意味ですね。

そして、君とその眷属の【種族名】は、”軍団レギオン”。君の眷属である一般兵士の名称は”飛蝗ホッパー”となっています。

蝗と飛蝗は同じ卵から生まれるので、イメージを優先してこの名前にしました。 問題無ければ、このまま決めようかと思っています。

「【アバドーン】とか【ホッパー】とか、どんだけシビレさせる気ですかwww」

「チート仕様は、この程度で終わりじゃありませんよ。なにせ必要とあれば、たった一人で人間の国を相手に、戦う事になるかも知れないのですから。」

まず、筋力は人の平均値の50倍、身体を覆う甲殻や表皮、外骨格は元々かなりの硬度を誇るのですが、”種族的恩恵”^{キフト}の、【不可侵】^{キフト}と言う【概念】を纏っているので、如何なる物理攻撃であろうと、基本的には傷一つ付ける事が出来ません。

自分に向けられた魔法や特殊能力（石化）等も、”種族的恩恵”^{キフト}の【レジスト】^{キフト}が有りますから、無効化されません。

例外が有るとすれば、世界に一頭だけ存在する”竜王”^{ドラゴン・ロード}のプレス、【始原の焔】^{しげんのほむら}とか、時空震の乱れによる【次元断層】に巻き込まれるとか、時空魔法による【空間をも破壊する現象】等の、【硬さや概念】とは関係無しに影響受ける【現象】は、防げないので過信や油断は禁物です。

後は、【なんでも貫く】とか【斬れぬ物は無い】等の【概念】が込められた武器とかも同様です。

まあ前述した状況は、いずれも滅多に遭遇しないでしょうけど。』

「ナニこのチート生物WWW」

『自分で言つてたでしょう？ 地上に措いて【神の意を受け行動する】代行者であると、当然これ位の能力は無いと…。それでは、続けますよ。』

…と云つても”種族的恩恵”と”種族的特長”を前述のも含めて羅列した方が、解かり易いでしょうから表にしますね。』

昆虫人
インセクター

種族名：レギオン ”種族的恩恵”

ギフト名

効果

【不可侵】 物理攻撃無効 (超重量による圧殺とかも含む)

【レジスト】 魔法攻撃及び特殊攻撃無効 (石化、一撃死、魂砕き、LVドレイン、呪い等)

【メチャ硬い甲殻】 ダイヤモンドなんかメじゃねえぜ

【メチャ強い筋力】 人の平均値の50倍 LV1の段階で

【ライダーアクション】 四次元的な動きと、蹴り技主体の格闘技
SSS

【大空は俺のモノ】 普段は折り畳んである”背中の羽”で飛行可能 (マツハ3)

【海が好き】 海水や淡水の中でも生存及び自由に行動可能 (水中50ノット、最大潜航深度〃ギフトの恩恵で限界無し)

【星のヒト】 真空中でも生存可能 (短時間のみ羽からタキオン粒子出して移動可能)

【生体レーザー】 額の結晶体から走査レーザーを発射可能 (連続使用はエネルギーを大幅に消費するので注意が必要)

【超生命体】 強靱な生命力(身体が千切れても付けとけば治癒する、毒、マヒ、病気、寄生虫等の無効化)、如何なる環境でも生存可能(極寒・灼熱等)、能力進化・適応速度が高い。

【超感覚】 自身の周り360°の情報取得(死角が無い)、平衡感覚や知覚の補正 SSS

【超加速】 物理法則(慣性)を無視、1000分の1秒の速度で行動可能。一回 30秒・連続使用5回まで可能(5回以降は5時間のインターバルが必要)

【直観像素質】 パツと一瞬見た映像が、まるで目の前にあるかの

ように鮮明に思い出す事が出来る。一度見たものは、数年後でも原色で色鮮やかに記憶の中に再現される。

【天才】 あらゆる分野の学問や知識及び技術の記憶・習得速度
S (LVアップに必要な経験値 1/3、能力値の伸び率 15
0%)

【虫の知らせ】 メチャメチャ勘が鋭い。 危険予知 SSS

【ムシキング】 あらゆる虫と意思の疎通、及び命令が可能。 又、他種族のインセクターからの好感度UP

【こつち見んなW】 気配隠匿、目の前に居ても認識されない。 ON/OFFの切り替え可能

【こつち来んなW】 自分よりも生物的に弱い、敵性存在が寄って来なくなる。 ON/OFFの切り替え可能

【芸術神の祝福】 あらゆる芸術的才能に恵まれている。 絶対音感を所持。

【森の音楽家】 背中の羽を、振動・共鳴させる事によって、美しい音色を奏でる事が可能。 美声・声量有り。

【友達百人できるかな】 会話術補正 S (補足：上位ギフトに”友達千人できるかな：SS”と”友達万人できるかな：SSS”が存在するらしい。)

【なつろーでいんぐ】 記憶の共有。 同種族の間でのみ可能な、テレパシーの送受信による、知識の補完が可能。

【俺様脳内会議】 分割高速思考。 同時に別々の事柄に対して、マイクロセカンドの領域で思考が可能。 幾つもの情報処理を同時に進めたり、戦闘時には格闘戦をしながら 呪文を紡いだり等。 又、移動などの単純な行動の最中に” 脳の一部を使って、他の大部分は睡眠を取る ” 事も可能になる為、睡眠時間を取らずに何日も行動出来る。

【メギドの火】 生命と死を司るエネルギー。 ケガをしたり死んだ直後の生物に、癒しを望んで使えば、傷の治癒や生命力の回復を可能とするが、破壊を望んで使用すれば、あらゆる存在を” 原子の塵 ” に変えてしまう” 純エネルギー ”。 使用には” 四大元素 ” を取り込む必要があり、取り込む元素の” 数 ” によってエネルギーの質は変化する。 破壊やケガの治癒に使う場合、1つの元素でも量を多く取れば” 威力 ” を増すが、” 蘇生 ” に使うなら最低でも 3つ以上の元素を取り込んで、” エネルギーの質 ” を上げる必要がある。

インセクター
昆虫人 個人名：アバドーン ” 王 ” の個別恩恵（あなた個人が有するギフト）

【超天才】 あらゆる分野の学問や知識及び技術の記憶・習得速度
SSS （LVアップに必要な経験値 1 / 10、能力値の伸び率 200%） 又、新しく” 自分の流派 ” を生み出す事も容易に可能。

【一人ぼっちの王国】 物理法則（慣性）を無視、体感時間で約10分ほど”時間”を止める（再使用は10時間のインターバルが必要）

【神様がみてる】 いつも神様が気に掛けてます。（強く念じれば、手が空いてる時は念話に応じてくれるでしょう。）

インセクター
昆虫人 個人名：アバドーン ”王”の所有物（あなた個人が所有するアイテム）

【赤いマフラー】 スカーフのような薄い生地で作られた、お洒落なマフラー。汚れが付いても水に浸ければすぐ落ちる、とても丈夫で、燃えたり破れたりしない。ポーチの中にはストックが沢山

【封印球】 ポーチに大量ストックしてある”ゴルフボール大”の水晶球。生物を封印して置く為の道具で、封印された生物の時間は止まる。

【知識神の贈り物】 調べモノに最適な、色々な事が載っている本。（表紙には汚い字で”ういきぺであ”と書いてあるようだ…。）

（。。。）

(。 。)

『「っち見んなWWW」』

「W……コレもうナマモノ(生物)じゃ無くな?WWW」

『可能な限り”死亡フラグ”を回避させようと、気を使ったのですよ、なにせ未解決の問題が山積みでして。』

「それって、【危険のオンパレード】って事? (汗)」

『一言で説明するなら【危険って言うレベルじゃねーぞ!?!】と言ったところでしょうか。』

「………………。 (滝汗)」

『自重して、弱くしておきますか?』

「…チートのままで、お願いします。(土下座)」

『そしてこちらの表が”^{生態}種族的特長”を記したモノです。』

昆虫人 インセクター

種族名：レギオン

”^{生態}種族的特長”

【体色】 一般の個体は黄緑と深緑の体色で、地球の”飛蝗”^{バッタ}に酷似しており。【王】の体色は黒に近く、緑色掛かっ^{イナゴ}ていて地球の”蝗”に酷似している。

【感覚器官】 丸く大きな赤い【複眼】と、眉間の結晶体付近から伸びている【触角】。前方180°は【複眼】で、それ以外の領域は【触角】と前述の【超感覚】及び【虫の知らせ】で補足している。ちなみに【なうるーでいんぐ】は、この触角を使って行う。

【テレパシー】 同族間でのみ可能な”精神感応能力”。他の個体が取得した情報をリアルタイムで同時処理するので、仲間と共に『集団で行動』する時に、『群れでありながら一個』の生命体としての行動が可能。多種族間での交感是不可。種族名の”^{レギオン}軍団”という名前の由来は、この能力から付けられている。

【四肢の甲殻】 四肢の末端に付属している甲殻、パツと見には手の部分は”グローブ”に、足の部分は”ブーツ”に酷似しているが、表皮部分が色違いで甲殻化したモノ。掌や足裏部分には無い。

【四肢の先端】 掌や足裏部分には、木や岩肌に取り付く為の『微細なトゲ』があり、更に大地を？む為の”爪”と、滑らかな場所を登る為の”吸盤”がある。いずれも、必要に応じて出し入れ可能。

【食性】 嗜好は草食性、樹液や野草など 何でも食べるが、サトウキビなどの糖分のある植物を好む。 実際は雑食性で、胃袋に入った物は原子に分解され、直接”エネルギー”に変換されてしまう為、口に入るモノは何でも栄養にできる。

【異次元ポーチ】 腰に有るベルト状の甲殻側面に付随する『ポーチ状の器官』、不思議な空間に繋がっており、物品の収納が可能。 空間内部の時間は止まっているので、食料の保存も可能とし、かなりの大きさの物もナゼか収容できる。（スカーフも最初はこの中）基本的に生物は収納不可。 例外として、”封印球”に封じ込められた状態の生物なら、収納可能。

【第二の口】 腰に有るベルト状の甲殻前面に付随する『バツクル状の甲殻』の中心にある『第二の口』。 第二の口の中にある”風車状の器官”が回転してモノを吸い込んだり、強力な竜巻を放出したりする。 前述の【メギドの火】は、この器官から”土・火・風・水”の”四大元素”を”元素エネルギー”として直接取り込み、体内で変換する事によって生成される。

【繁殖方法】 卵に拠る単体生殖。 雌雄の区別は無いが、性格的には雄のみ。 ”成体”は常に卵を体内に生成しており、いつでも好きな時に”口から”吐き出して産卵する。 卵は『野球の軟式ボール』位の大きさで、カムフラージュの為”球形の石”の様に見える。 そうして、”丸い石”として様々な”魔力”や”生命力”、”大地の気”に”知識”までも吸収しながら、100年かけて徐々に大きくなって行き、やがて”1.5メートル”ほどの大きさまで育った後、”成体”として誕生してくる為、彼らには”幼年期”が存在しない。 又、卵限定のギフト”生命の賛歌”による加護の為、危害を加えようとするあらゆる事象から、完全に守られ快適な状態が保たれる。（溶岩に落ちても温泉タマゴにならない） 追記：

結果として”永遠に童貞のまま”です。 童貞乙W

……orz

「絶望した!! これから永遠に童貞って事に絶望した!!……!!」

『『『『『童貞乙W『『『『『

………どっかに”神殺し”とか落ちて無いだろうか…。

『いや!?!ちよつと待つのですよー!!…! そのまま30歳過ぎれば、”魔法”使えるようになるから、お得なのですよー!?!?』

「”都市伝説”じゃねーか!?!www」

『…ふう、わかったよ。 耳の長い女の子や獣耳の女の子とH出来

るように、股間に収納式の”魂太^{こんぶと}ゼクター”を付けてあげるから、その”殺意”を止めてww」

『その代わりに、【異種族間での交配は無理】ですよ。種族を増やしたいなら地道に”卵”吐いて下さい【ナメツ 星人】の様にww』

「やっぱり、元ネタそれがよー!」

『…んじゃ、早速ポチっとな!』

『……………。』

『…すごく、大きいですw』

『ウホッ! いいゼクターww』

『やらないかwww』

『www』

「こっち来んじゃねエエエエエエエエ!…!…!」

/ _ _
ノ
(
^
^
^
(・A、)
<
キングクリムゾン
!

「…今、時間 跳ばなかった？」

『いえ、気の所為でしょうw』

『一応、言つべき事は伝え終わったから、そろそろ逝く？』

『字が違つてすけーw』

「…いや、地上に降りた後の、大まかな方針を打ち合わせないと。」

『…？ 君の好きにやって良いよ。』

「でも”間引き”なら兎も角、”絶滅”は嫌なんでしょう？。」

『……うん、本当はね。でも出来るの？”絶滅”させずに収める事が？。』

『……迂闊でした、なるほど【補助的なモノ】を使う事で、より効果的な介入を可能にするとは。』

『……ウチらは普段”道具”を使ったりしないですからねー、【道具を使って補助】なんて考えもしなかったのですよー（汗）』

「だとすると、最初から高すぎる能力持って生まれてくるのも、考えものだなー。」

『……本当でござすな（汗）』

「んじゃ、その事は何とかなりそうだから、最初から説明してくね。」

『ええ、お願いします。』

「まず、宗教を利用して私服を肥やす連中は”間引く”。」

『……………。』

「奴らを何とかしないと、そう遠く無い未来に”神”の名を振り翳かさした【亜人狩り】が起きる。」

『…やっぱり、そうなるのですか？』

「かなり高い確率でね、…”元人間”として断言出来るよ。それに、予想はしていたでしょう？」

『……………』

「だから最初に【人間以外の種族の長達】に事情を説明して、人間から距離を取って貰う。彼らの中には人間社会で暮らす者も居るだろうからね。」

その次は神の名を勝手に使い、【神を蔑ろにして驕り高ぶった事】の罰として、権力に溺れた腐った者達を”罰する”と、【声】を届けて下さい、世界中に。

……………あなた達が、どれだけ彼らを”子供”として愛していたか、たとえ道を踏み外そうと【彼らが早く自らの過ちに気づく】のを、期待して待ち望んでいたか、そして今回の”罰”が、どれほどつらい決断なのか、【理解出来る】なんて言いません、俺には想像するしか出来無いから。

…でも、やらなければ。

他の種族の為に！ …” 彼ら” も又、あなた達の” 子供” なのだから。」

『…うん、そうだね。 その通りだ…。』

『迷ってる時間は…もう余り残って無いでしょうね。』

『『『…異議無し。』』』

「後は、俺とその眷属達の仕事です。」

「あ、それと、俺らの食料になる植物の”種”と、獣耳を”もふもふ”したいから”マタタビ”みたいな効果の有る植物の”種”頂戴。」

『…今までの、シリアスな雰囲気は粉々ですね…。』

『欲望に忠実なのですw これが【サトウタケ】の種で、こちらが【カララム】と【マララム】の種なのですよー。 【サトウタケ】は見た目が”竹”で中身が”サトウキビ”になってる植物で、【カララム】はイヌ科に【マララム】はネコ科の生物に効く”マタタビ”だと考えてもらえば、マチガイ無いのですよー。』

どの植物も植えたら1日で成長するけど、”生態系”には影響しないように調整したから、ガンガン植えて構わないのですよーw』

「サンキューw。」

次に、地上に降りたら直ぐにアンテナ設置させるんで、10個位で良いから”卵”がすぐ孵るようにして下さい。 アンテナは異次元ポーチに入れといてくれれば良いんで。」

『それでは、卵を出して置いて下さい。 ”孵化直前”まで、力と知識を注ぎますから。』

「後は、”各戦族の長”に話を通しておいて貰えば準備完了だね。」

…んぐっ、っぺっ。

…んぐっ、っぺっ。

…んぐっ、っぺっ。

…以下10回分ww

【 神様、詠唱中 】

『これで、注入は終わったですけんー！。』

『あと、忘れてる事は無かったかな？』

『無いと思っばいっわすよ。』

「…あと一つだけかな。」

『何でしたかのー？』

「…まだ、神様の名前を聞いて無いよ。」

『…そういえば、まだ名乗って無かったね。僕は【風と芸術の神、ロベルト】だよ。』

「“風”だから、そんなに”フリーダム”なんだw それに意外と平凡な名前だし。」

『君にだけは”平凡”とか言われたく無いなあ…。』

…”フリーダム”は良いんだ…。

『あと、僕らの言葉で【主神】の事は【カーロン】と言うんだ、だから正式に僕を呼称する時は、名前の後ろに役職名の【カーロン】

が来るから

【ロベルト・カロン】と呼んでくれたまえ。』

(´、´) ・カハッ 【吐血した】

「そのネタがやりたくて、今まで引っ張ったのかよ!!?」

『何を言う、この【ロベルト・カーン】、そのような矮小な精神など 持ち合わせておらんわ。』

「ウソつけ!!!w」

『それでは、さらばだ!』

「ちょwwおまww ……アーーーーー!?!?」

……そして俺は、足元に開いた黒い穴から、地上に向けて回りながら落ちていった。

Episode:01 ハツチャケ神と(不)愉快な仲間たち(後書き)

あまり、キツく無い感想お待ちしてます。(^ ^) v

Episode:02 昆虫人、異世界に立つ！（前書き）

第2話、投稿！。

8/27 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

……お？ すごいでっけー”樹”を発見！ つーか、山よりもデカイとかwどんだけだよww

きつとあれが、【世界樹】ってヤツにマチガイ無いだろ、JK。

あの”根元”と言うか”麓”に【エルフ】が住んでるらしいから、まずは彼らに挨拶すつか。 ……イキナリ”怪しい奴”呼ばわりで争いに発展しないよな？

まあ、そこら辺は神様に”伝言”頼んだから、大丈夫だろ、多分。

【カーロン】ならともかく【サイオン】なら有能そうだしな！
愉快犯っポイけど……。

しかし、この回りながら落ちるの楽しいな…クセになるかもしれん

ww

地表まで、あと10モルダントキロメートルほどかな？ 下に見える小さくて動いているの、アレ【エルフ】じゃね？

激突したら【ボディープレスってレベルじゃねーぞ！？】って怒られそうだし、死んだりされたら気まずいから、声出して知らせるか……。

今日は【世界樹の森】全体が、騒めいているな、まるで妖精達や精

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

…さすがに全員、蜘蛛の子を散らすような勢いで逃げ出した。その直後！！！！

ズツゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「……………ヒイ　　ナニ　#タスケゞ　て　ら　！！！！」
「……………」

………　一体何が起きたんだ！！？

「…おい、タク・ラン無事か？　他の者も皆無事だったかアーーー
ー？」

「ああミシ・ワン、お前も無事だったか、誰も怪我とかした奴は居ないみたいか？」

「……………こつちには、誰も居ないみたいだ。」

「……………こちらも、無事だ。」

「あーびっくりした、一体ナニがあったしW？」

「何か落ちて来たんだらうけど……………」

「おい！アレを見る！！！」

！！。
地面に”人型の穴”が！！？

しばらくの間、皆で恐々と注視していたが、やがて落ち着いて来たのか皆それぞれ今の出来事について話し始めた。

「落ちて来たのは【人】か？」

「穴の形からしてそうなるんだらうが……………」

「大方、大きな飛翔生物に”エサ”として捕まったのが、途中で落ちたんじゃ無いか？」

「なるほど、有り得ない話では無いな。最近は見事もない生き物やコウモリの羽の付いた大きなトカゲを見た、と言う話も頻繁に聞くしな。」

「だとすると、落ちて来た”奴”も気の毒に……。運が無かったんだなア。」

「せめて、丁寧に弔ってやるか。」

そう、私達が結論付けて、皆で穴に近づいて行った時、突然”穴”の中から黒っぽい手が伸びて、穴の淵に手を掛けた。

「……………！！？」

そして、次の瞬間には、赤く大きな目をした黒い人影が穴から這い出て来た！

「イテテテ・・・」

…流石チート生物だけあってダメージは無かったモノの、”衝撃”
までは完全に消せ無かったようだな。 2〜3秒ほど意識が飛んで
いたw

穴の外なので良く聞こえ無いが、なにやら声が聞こえて来る、イキ
ナリ降って来て驚かせたみたいだし、驚かせた詫びと”長”への案
内を頼まないとな。

穴の淵に手を掛け、一息に身体を穴から引き上げると、突然「
「「「「…うわああああ!!?」「「「「「」と言う悲鳴が聞こ
えて、

『何事!?!』とあって、声のした方を見たら、「じーーーーー
ーーーーー」と言う擬音が聞こえて来そうな感じで、

数人の【エルフ】が木の陰から、こちらをメツチャガン見してまし
たww

…… やつべ！ イキナリ警戒度MAXですよ！！w

これから、友好度上げて協力を仰がないとダメな相手に、イキナリ不安と恐怖を撒き散らしちゃいましたよ！！！！w

じーーーーーじーーーーーじーーーーーじーーーーーじーーーーーじーーーーーじーーーーーじーーーーーじーーーーー

互いに目を逸らす事無く、緊迫感に満ち溢れまくってる、地獄のよ
うな沈黙の中、この沈黙に耐えきれ無くなったので、原因である俺
の方から【アクション】を起こす事にした。

「やあ、エルフの皆さん始めまして。俺の名は”アバドーン”。

さっき、”造物主”に創られたばかりの【最新しい13番目の種
族】だ、君たちの”長”に挨拶したいので、取り次いで貰えないか
な？」

…まあ、それはともかく此方も新興とは言え【一つの種族の長】として、ちゃんと挨拶しないと。

「お初にお目にかかる。俺は最も新しき種族”レギオン”の王、”アバドーン”、わざわざのご足労、痛み入ります。

【造物主】に託された使命を果たさんが為、まずは、【最初に生まれた種族】である【エルフ】の長に挨拶せんと、この地を訪れた次第。

又、先ほどはお騒がせして、大変申し訳ない。

生まれて初めて見た”世界”の、あまりの美しさに、つい目を奪われてしまい。羽を広げる事すら失念して、大地に激突してしまいました。」

…ホントは、【身体の強度】を試してみる為、ワザと激突したんだけどねw さすがに、そんなハツチャけた理由であんなに騒がせたと分かったら、怒るだらうしなーw ウソも方便って奴？

こう締め括るとエルフの長は、『ほづ』と感心したような顔をして。

「これは、丁寧なるご挨拶、こちらこそ痛み入ります、ワシは【エルフ】を束ねておる”エル・パス”と申す。周りの者は【氏族の長】や【古老】達じゃ。

お主の背負った”使命”については神々より、承っておりますぞ、俄かに信じがたい話なれど、現実にお主がこうして目の前に居られる以上、信じる他には無いじゃろう。

…それよりも、安心しましたわい。」

「？」安心した”とは、又、如何なる事でしょうか？」

「…神々より、聞き及んだお主の能力は、大凡の事しか判らぬが、それでも強力無比なモノであった、

それゆえ、少々不安だったのじゃ、お主が、好戦的で荒々しい者では無いか？とな…。

だが、先ほどのお主の話では世界の美しさに目を奪われて、大地に激突したと言う。

それで無事に済んだ、と言うのも驚嘆に値するが、ワシが安心したのは、美しさに想いを寄せる”心”を持っているのなら、きつと”優しさの意味”を理解しておると思うたからじゃ。」

「…過分な評価に、身のすくむ思いです。」

やっべ、心が痛え…w。 怒りを買わない為に付いた”軽い嘘”で、

なんと言っ高評価w 動揺が顔に出ない”昆虫人”^{インセクター}で助かったわ

w
w

「ともあれ、このような場所で”立ち話”も、なりますまい。

わが集落においで下され、【エルフ】は”レギオンの王アバドーン

”殿を、歓迎いたしますぞ。」

そう言うと、エル・パスは 周りのエルフ達にも合図して、先導するかの様に歩きはじめた。

・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

「…おお、これは凄い…。」

思わず、声に出してしまったが、目の前に広がる光景を目にしたら、それも仕方ないと思う。

俺の目の前にあるのは【森の樹上】に造られたエルフ達の”大集落”
”いや、もはや”都市”と言っても良いくらいの”威容”を誇る、

【空中都市】とも言うべき光景だった。

「ほっほ、どうやら気に入って貰えたようですね。」

エル・パスも、俺の様子を見て満足そうにしていた、やはり、自分の統治する集落を褒められるのは、誇らしいのだろう。

そうして、俺とエルフの幹部達は、中深部に位置した一際高い”家”に、招き入れられた。

中部はかなり広く、窓や照明器具のような物が無いのにやさしい光に満ちていて、どうやら、大広間のような部屋で、車座になって胡坐を組んで座るのだろう。

座布団らしき物が中央を囲む様に、敷いてあった。

「まずは、これで喉を潤してください。」

そう言ってエル・パスは、ガラスの器に入れた【薄い黄金色の液体】を、俺や皆の前に差し出した。

俺は腹を壊す事が無いし、少々得体が知れない飲み物だろうが、こちらの”信頼”を表す為にも一気に飲んでみるか。

「では、お言葉に甘えて、遠慮無く。」

…！ 美味しい、なんとも表現の仕様が無い、芳醇な香りと爽やかな味が口中に広がって、更には体中に活力が満ちてくるのが分かる。

「この様な、美味しい飲み物を、初めて口にしました。」

俺が、素直に驚きを伝えると、エル・パスは笑いながら、

「ウイッシュクウエーハ 生命の水” と呼ばれる液体での、精霊の力が強い場所に泉のよ
うに湧き出して、あらゆる生き物に活力を与えてくれるのじゃ。」

この世界が、我等に与えてくれる”恵み”そのものじゃよ。」

好々爺とでもいう笑顔で、教えてくれた。

.....

それから、友好的な雰囲気のまま、今後の事や、今の世界情勢の
確認、他の種族の動向などを話し合い、俺を歓迎する宴に突入。

・
・

・
・
・
・
・

【芸術神の祝福】で、更に強化された【森の音楽家】を駆使して、羽と喉チンコを震わせ捲まくった俺の歌声に、宴は大いに盛り上がったようだ。

そして、現在いま。

長に許可を貰って、世界樹の根元に卵を設置中。

眷属を増やして、早速【アンテナ】を配らないとね。

既に孵化寸前まで神力メギンを注がれた卵は、直径1.5ダントメートルほどの丸い岩いって感じた。

ピキピキ！

程なく、卵の一つにヒビが入ったと思ったら 中から最初の眷属が生まれてきた。

その姿は、緑を基調としてる色以外は俺と同じで、既に成体になっており、興味深げにキョロキョロと辺りを見回している。

そうしている内に、俺と目があつた。

じーーーーーっ。

ただいま、メツチャ見られておりますw。

「ハジメマシテ、王様。 ……コンゴトモヨロシク」

悪魔合体かよww。

「ああ、初めまして。 これからよろしくな！ 他と区別を付ける
為に、暫定的に”1号”と呼ぶぞ。」

そして1号の【シオルダーガード】みたいな甲殻に、神様から貰った”001”と書いてあるシールを貼りつけた。

これで見分けが付け易くなっただろう。

パキパキパキ！

次々と生まれて来る眷族たちに、同じ要領で名前とシールを付けて

ゆき、ポーチに入れてあった【赤いマフラー】を首に巻いてやる。

「よし、全員揃ったみたいだな。早速……」

「王様、一人足りないっす。」

「えっ？」

「あそこに、一個転がったままですよ。」

「……ホントだ……」

……注がれた神力メギンが足りなかったのかな？

バリン！バリン！

お！手足が出て来たぞ。

………つーか、卵からライダーの手足が生えてる、この姿っつ。

「『『『『『…エツグマ？』』』』」

半熟英 かよ？！ww

ピキピキ！ パリン！！

「ふう〜、おはようございます。」

…なんだが、ノンビリした奴っちなー。

まあ これで全員揃ったし、今日は宛があてわれた家でゆっくり寝て、
明日【アンテナ】を配ってもらおう。

Episode:02 昆虫人、異世界に立つ！（後書き）

ちよつと、ネタバレですが。

作中の【コウモリの羽の付いた大きなトカゲ】というのは

プテラノドンのような生き物だと思って下さいw

後々明らかになりますが、主人公があそこまで強化された

伏線だったりします。

Episode:03 アリさんとの出会い(前書き)

3 話目投稿！。

ちよい、短いかも。

8/27 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

Episode:03 アリさんの出会い

やあ、おはよう。　　良い朝だな！　　昨日、眷属が増えたアバドーンだよ！

今朝は早速【アンテナ】を持って設置場所に向かっているんだ。

眷属達ホッパに任せっぱなしでも良いんだろうけど、やっぱり”レギオンの王”としては、苦楽を共にしないと！

【アットホーム】がうちの種族の掟だからねw。

…ところで、肝心の【アンテナ】の形なんだけどさ…。

1ダント程メートルの大きさで、円錐形の本体にアンテナみたいなの丸い顔、本体の真ん中に顔と左右に伸びる手みたいなの突起って……。

どー見ても縮小版『太陽塔』じゃね？　岡本太　さんに怒られるよ！？

……あ、いま神様から電波来た、『異世界だから大丈夫』だって？
ホントかよ！？

まあいいや、これを神様から指定された位置に埋めとけば良いらしい。

わざわざ埋めるのは人間とか、その他の生物によって運ばれるのを防止する為なんだと。

そんな他愛も無いを事考えながら 注（【俺様脳内会議】の効果でマイクロセカンドの領域での思考なので、これまでの考えは一瞬で終わっている）

【こつち見んなw】を発動し、隠匿状態で飛んでいたら、あらかじめ予め指定場所の情報を送らせていた現地のスナサソリくんが、異変を知らせて来た。

ちなみに、このスナサソリくん 特別な個体でもなんでも無い。

単純に指定地域を頭に思い浮かべて、その周辺に生息していた”虫達”の中から適当に選んだだけの個体だ。

虫が居るだけで、思った所の情報がすぐ得られるんだから、この身体ってホント、チートだよな。 【ムシキング】マンセーw。

彼からの情報を音声と視覚に置き換えて、【俺様脳内会議】の分割マル高速思考で情報整理をした結果、どうやら、人型の生物が何人が魔獣に襲われているらしい。

人間では無さそうだし、急いで助けるとしようか！
【くどい様
ヒューマン
だけど、この間マイクロセカンド秒W】

ドオン！！！

一気に音速に突入した為に、空気の壁をぶち抜く音を轟かせ、俺はマッハ3の速度でそこに向かった。

…キイイイイイイン！！！！

大気を引き裂く音を響かせて高速で飛ぶ、俺の目に入ってきたのは、

「……………って、無一よw。」

『エイラオツシャアアアアアア！』とか、言ってる時点でマジに無いわwww」

「…アリ！アリリ。」

「ん？」

俺が自分のアホさにセルフ突っ込みしてたら、黒い小人さんが話し掛けて来た。

改めて観察してみたら、黒い小人さんは、俺達レギオンと同じくインセクター昆虫人”だった。

彼らは60センチダル位の身長で、つぶらな目をした2頭身の子供が”蟻”のコスプレをしてるみたいな、可愛らしい姿の温厚な種族だったようだ。

蟻いんせき子ですね、俺を萌え殺す気ですか、漏マイラw（*、、）

「アリアアリア！」

「ほうほう、奴に仲間が丸呑みにされたから助けてくれないかな？」

「アリ！」

「よし、まかせとけ！」（*、*、*）ナンデモカナエタルガナ！

言葉自体は、さっぱり解からんが【ムシキング】の効果で、意思の疎通に問題は無い。

それぐらい、お安い御用だ。

俺は早速、【超感覚】と【虫の知らせ】を使い、アリさん達を傷つけ無い様に、^{エルボ・ブレイド}高周波爪刃”で奇怪生物を解体し、無事に全員助け出す事に成功した。

「アリ、アリアリ・アリガトネ！」

(* 、) カワイスギダロコノヤロー

あまりの可愛さに、”アリガトウ”と元の世界の言葉を使った事は、この際スルーしとくw

…それにしても、奇怪な生き物だな、コイツ。

俺はアリさん達を襲った奴に意識を向けて、改めてそう思った。

身体の外見と構造は、多分Tレックスに酷似している、それだけなら奇怪でもなんでも無いのだが、頭が、イソギンチャクに似ているのだ。

頭部分だけがイソギンチャクになっていて、口の周りの触手を伸ばして、獲物を丸呑みにするようだ。

俺が何故、こんなにもコイツを気にするかと言うと、神様に貰った知識の中にコイツの事が入ってないからだ。

そもそも、俺の一族がここまで強力な身体からだと能力ちからを貰ったのは、人間を相手にする為じゃ無い。

神様にもその発生理由の解からない、この魔獣と呼ばれる存在に対処する為だ。

発生理由が不明故ゆえに、今後、より強力な個体が現れる可能性も予測されたからこそ、俺達はこれほどまでに強力な、身体からだと能力ちからを与えられたのだ、人間だけを相手にするなら、ある程度の力は必要でも

此処までの力は必要無かった。

…一応、魔獣の定義を説明するなら、”進化の過程で不自然な部位を持つ生き物”が、魔獣とその他の生き物を分ける基準になる。

このイソギンサウルス（仮称）は、明らかに”水棲生物”と”爬虫類”の部分に分けられるから、魔獣で間違いないだろ。

「…ア〜リ、アリ・アリリー」

「ん？ 解体したコイツの肉をクレないかって？」

「アリー！」

「ああ、構わないよ！ 全部持って行くといい。」

「アリ〜」

うん、うん、可愛いのう。

…おお！ そうだこの蟻ありんこン子達に相談してみっか。

【……………イナゴ蝗とありんこ蟻ン子相談中……………】

……よし！ 相談の結果、アリさん家に居候させて貰える事に決定。

要は、俺達【用心棒】兼【食用肉の調達係】アリさん達が【住居】と【心の癒し】を提供【理想的な共生関係】

俺ってSUGEEEEEEEE！ 天才じゃね？

「アリアリ！」

どつやら巢ねすに帰って、今の話を報告&餌エソを運ぶインギンサウルス為の応援を呼びに行
くそうだ。

「うん、俺等は仕事があるから、それが終わったら合流するよ。
それじゃあ、又あとでなー。」

「アリア
ルチ！」なら

ゴフッ！ 【吐血した】

…なぜ最後のアリデアリのベルチ！の時だけ「○○顔になる！！？」

2頭身で、【顔】だけブチャラテとか、無いわ！！！！ww

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

…気を取り直して、仕事すっか。

ここは岩場と砂漠が混ざったような場所で、俺が立ってる所は岩のよじな固い地面になってるようだ。

俺はその場に屈むと、無造作に地面に指を突き立てて土を掘り始める。

おそらくは、かなりの硬度を持つであろう地面を、柔らかい砂を掘るように何の抵抗も無しに掘り進む。

およそ2分後、直径1ダントメートル深さ10ダントメートルの穴の底に、例のアンテナを設置した後、一息で穴の外にジャンプして、埋め立てる。

なんか、穴を掘る時も何らかの”補正”が掛かっているっぽいな、俺等って蝗イナゴや飛蝗バッタじゃ無くて、オケラなんじゃねーの？www

ピンピロリン

『種族全員で、穴を掘るといふ行為をしたので、あなたの種族はス
キル【急いでハリー・掘ったー】を取得しました。』

うおおい！！www

いいのか、それで！！！！

…念の為、【知識神の贈り物】ついでで調べてみるか……………。

あ、あった！ コレに書いてある内容によると、今ので”種族的恩恵”トに追加されているから、これから増える眷属も使えるのか。

んで、俺らの眷属そのものが容易く”種族的恩恵”ギフトや”称号”を獲得し安くなってるみたいだな。

チート種族乙wwww。

(王様、王様。)

ん？ 眷属からテレパスィーが来たぞ？

(なんで”スィー”って伸ばすのww)

(無駄に発音いいしw)

(発音いいのか？それw)

…食いつきイイな藻マエラW

(いや、さつき新しい”種族的恩恵”^{ギフト}を獲得したみたいなんで)

(どんな、”種族的恩恵”^{ギフト}か、王様に聴こうと思ってW)

おk、【なうろーでいんぐ】で記憶を転送、アリさんの事も一緒に伝える。

(アリさん、カワユスWWW)

(蟻ン子^{あひんこ} キタ (。。() ……!!!!)

(アリさん来た！ これで勝つる!!)

(王様、グツジョブWW)

(そこに痺れる！ 憧れるう!!!! WW)

はっはっはっ！この俺様を褒め称える事をゆるそう！ もっと褒めれ！ 藻マエ達。

(ビュービューww)

(この半熟 雄！w)

(いよ！異世界きつてのお調子者！！ww)

(童貞乙w)

まてや！ゴルア！！ 他の奴なら兎も角、藻マエラだけには童貞呼ばわりされたく無いんじゃない！！！！

”生態種族的特長”で、藻マエラも童貞だろうが！！！！！！(泣)

(もー大人げ無いなーw、4号も王様もーww)

(仲間内で起こす争いはダメだよw)

(血を吐きながら続ける、悲しいマラソンのようなモノだよw)

(ウルト セブンかw)

.....
次回に続く!!

Episode...03 アリさんとの出会い(後書き)

いや、ホントは続きますからw

E p i s o d e : 0 4 天の御柱（前書き）

今回、シリアス部分多目です。

8 / 2 7 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

Episode : 04 天の御柱

やあ、みんなのヒーロー^{アバドーン}蝗の王だよ。今日はアリさんの巣^{うち}から挨拶するよー。

昨日は予定どおりに皆と合流した後、約束してたアリさんの巣^{うち}にお邪魔して、『仲間を助けたお礼』も兼ねた大歓迎を受けましたw。

俺等はあるさんのテリトリーの内、岩盤の固い岩山（かなり巨大な）を丸ごと好きに使っていいと言われ、そのまま住み着いた。

この岩山、岩盤が固過ぎてアリさんには掘りにくいけど、俺らにはスキル【^{急いで}ハリー・掘ったー】があつて、硬い岩盤は気になら無い為、お互いに良い取引だったと思うw。

現在、急ピッチで岩山を魔改造中w。

優先順位が高いのは、ルランジェルから貰った種を栽培^{さいばい}する為の畑と、燻製肉や酒を造る為の作業スペース（こちらは主にアリさんの為）の2部屋かな。

次点で、音響効果の高い会場だね。こちらは俺らとアリさんの共用。

俺ら軍団^{レギオン}は、どうやら主神^{ロケルト}の影響を強く受けたらしくて、芸術全般、

特に音楽が大好きだ。

まあ、”種族的恩恵”^{ギフト}に【芸術神の祝福】や【森の音楽家】がある程だしなww。

ピロリロリン

『メールが届きました。』

うお！ メール来た！？

…どこでメール受け取るんだよ！

って、”魂太^{こんぶと}ゼクター”に着信しやがった！！ww

「魂太^{こんぶと}ゼクター”万能説！」

「どっやって見るとw」

「うほっ！いいゼクターww！！！」

…藻マエラ、何時の間にw w

『メール自体は、ギャグだから気にしなくてもいいじゃんw』

お、ブラッドじゃまいかw。 何のよう？

『おう、ざっくり言うとなー。 オマエら俺らの祭壇造って、酒やオツマミなんかを奉げるじゃんw』

ホントにざっくり言ったなw。 でも祭壇は【芸術神の祝福】で、立派なの造れるけど、酒とか時間掛かるぞ？

『わかってるって、だから素敵なスキルと”神器”をあげるじゃん。 【腐蝕神の眷属】と【倍々ハンマー】の2つじゃん。』

2つもかー、気前いいな。

『なら、沢山お供えするじゃんw、スキルと神器の説明するじゃん？』

おk w

『まずスキル【腐蝕神の眷属】は、俺様の眷属になる事で”モノを腐らせる”つまり”発酵”を任意で操れるようになるじゃん。』

なるほど、酒やチーズなんか造り放題だな。

『だから酒の他に”腐蝕”を選んだじゃんw。』

……なんというフリーダムw。

『んで、次は神器【倍々ハンマー】じゃん、コイツで増やしたい”食べ物”をぶっ叩けば、2つに増えるって言うスグレ物じゃん。』

……叩いて、2つに割れてるだけじゃねーの？

『そんな訳無いじゃん！？ 失礼すぎじゃん！？』

まあ、何はともあれアンガトな！。 早速祭壇造ってお供えするよ。

『あっさり、スルーされたじゃん…。』 ションボリ

『……………まあいつかw、お供え期待してるじゃん!』

立ち直り早えーな、あ、それと!!

『何じゃん?』

…今夜やるから、他の神様達に伝えといて。

『!?!……………いよいよか。 伝えとくじゃん。』

…ああ、頼むわ。

「そんな訳で、
”王様命令”！
『祭壇を造れ』
」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

「…唐突だねw」

「イキナリすぎるしw」

「事情の説明くらいしる！w」

「我がままだなあ…w」

「命令来たコレ！」

「藻マエラ、どうせ【テレパシー】で盗聴してたしww」

「…まあ、その通りなんだけどねw」

「今夜は仕事あるし、時間も無いからとっとと造る。」

「…はぁ…w」

「イノシシ狩ってきたよーw」

「早速、お供えするw」

「「「「「……」」」」」

「藻マエラ、血抜きくらいしる……！
「……？」
「邪神の祭壇にする気ですか！」

「「「「「サーセンw w w」」」」」

「「しげえw」

•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

王国暦412年。 【蟻】の月。

王国のみならず、大陸中の”ヒューマン”達に衝撃が奔^はつた。

この大陸に住まう、全ての知恵もつ”人族”に『神々の声』が届いたからだ。

『声』は、富める者も貧しき者も、貴き者も卑しき者も、区別する事無く届いた。

声の内容は、

【同じ世界に生まれた兄弟を亜人と呼んで虐げた事】

【世界の一部である自然を破壊し続けている事】

【神の名を使い私腹を肥やした事】

以上、3つの行いについて最早^{もはや}許容出来ないと言つものだった。

特に3番目の行いについては、”裁き”を与えると宣言された。

この声を聞いて尚、『これは、誰か（自分の政敵等）の陰謀では無いか？』

あるいは、『神の名を騙る偽者の仕業だろう』等、この期に及んで、自分の所業を省みぬ者達が^{おおぜい}大勢居たが、すぐに彼らはそれが間違이었다と思ひ知る事になる。

大陸中央のカテゴリナ王国内で、最も大きく荘厳な【神殿協会】の
総本山”でもある大神殿で、それは起きた。

「た、大変です。神殿の外に出られません！！声も届いて無い様子ですし、外の音も聞こえません！！！」

神殿の警備を統括する神殿騎士の隊長が、あわてた様子で広間に飛び込んで来ながら報告して来た。

清貧を旨とする神殿にあるまじき、豪華な装飾の施された広間では、
教皇を始めとして枢機卿、祭祀長等の、神殿内の主だったものが集まっていた。

別に会議とかで集まっていたのでは無い、彼らは『神の声』が聞こえて来る直前まで、この場で贅を尽くした宴を開き、我が世の春を謳歌していたのだ。

王都の民や熱心な信徒から巻き上げた、寄付と言う名の富を湯水のように使って。

そして、『声』が聞こえてからは、疑い半分・動揺半分と言った状

態で、効果的な行動や、今後の対策を練る事など、何一つやらない、もしくは出来ないままに、

只、右往左往して、騒ぎ立てる事しか出来ずにいたのだ。

そして、件の神殿騎士の隊長の報告を受け、やはり、先ほどの怪異と思えた現象は『神の御業』であったとか、そんなバカな事がある訳無い、これは何かの間違いだ等と、無意味に騒ぎ立てては、余計に混乱を増していくのだった。

未だ、混乱覚めやらぬ広間に、一つの人影が入ってきたのはそんな時だった。

「な、何だ貴様は？　だ、誰の許しを得て此処に入って来た?!」

その人影は彼らの目には、正しく”異形”と映った。

まるで鎧を着ているかの様な黒い光沢の在る甲殻に、”飛蝗”…いやこの場合は黒く不吉な色から、”蝗”を彷彿とさせる姿と、顔の

中で結構な面積を占める、赤く不気味に輝く”目”。

先ほどの誰何すいかの声に反応したのか、”ソレ”は徐おもむきに言葉ことばを紡いだ。

主しゅ

造り《うまれ》し存在もに問いたもう

『汝ななこの名は何か？』

彼かの存在も、答えて曰いわく

「我が名は軍団^{レギオン}、我等^{われら}大勢^{たいせい}なる故^{ゆえ}に。」

「「「「「!!!?!?!?!?」」」」」

「俺は、造物主によって生み出された、最も新しき13番目の民^{レギオン}軍団^{アパドーン}の長、”蝗^{アパドーン}の王”」

「神の下僕^{しもべ}の名の下^{しも}に…貴様^{あなた}らの命^{いのち}、貰^{もら}い受ける。」

「く。ふ、ふざけるな!!! 侵入者^{しゆりしや}だ!衛兵^{えいへい}、衛兵^{えいへい}!!!」

混乱からいち早く脱した騎士隊長の聲が響き渡ると、数十人の神殿騎士が広間に雪崩れ込み、一糸乱れぬスムーズな動きで、”蝗アバドーンの王”の廻りを何重にも包囲した。

「ほう、無辜むこの民から、賄賂こむを搾り取ってる割には良い動きだな…。

「ほざけ！ コイツを八つ裂きにしてしまえ！！」

「」「」「はっ」「」「」

騎士隊長の号令の元、騎士たちは一斉に槍を突き出した。

ここに居る者達で、”蝗アバドーンの王”の言葉に反論出来る者など、誰一人として居なかったので、凶星を指された事で、皆気が立っていたのだ。

だが、そんな騎士達も次の瞬間、驚愕に目を見開く事になった。

ガギイイイイイインン！！！！

なんの動きも見せぬ侵入者に伸びた無数の穂先は、全てが狙いを外さなかった。

にも関わらず、重複する甲高い響きと共に、ある者は弾かれ、ある者は刃毀れしたり、穂先の半ばから折れ飛ぶ者さえ居た。

そして、肝心の侵入者といえば、”何も変わった事など起きてはいない”といった風情で、自然体のまま、その場に佇んで居た。

「ば、馬鹿な……。」

信じられない光景に唾然と立ち尽くす騎士隊長の横から、一人の騎士が進み出て来て、言葉を発した。

「隊長、お下がりにください。皆も下がれ。」

「おお、副長だ！」

「如何に硬い化物でも、副長の魔法には適うまい!!」

副長と皆に呼ばれたその騎士は、芝居気のある気取った仕草で、

「大方、その固い甲殻を過信したのだろうが、俺の魔法の前には紙切れ同然!! 死ねい! 炎系上級呪文・ラメラオン!!」

そう叫ぶと、直径1メートルの火球を頭上に生み出し、”蝗の王”に向けて放つて来た。

対する”蝗の王”の方は、白く輝く1ダルの位の火球を、副長の放つ

た火球の方に”無造作”に放った。

「馬鹿め！そんな”火の粉”で何が出来る！！蹴散らしてくれるわ！！」

だが、そんな自信に満ちた態度も

轟！！！！！！！！

互いの火球がぶつかり、直系5ダントメートルの白い火柱が上がる光景の前では、擦れ声かすで咳くのがやっとならなかつた。

「……………な、なんと云う威力の”ラメラッテエー”だ……………。」
炎系最上級極大呪文

だが、彼を更なるどん底に突き落としたのは、次の言葉だった。

「……………どうやら誤解しているようだな、今は”ラメラッテエー”
炎系最上級極大呪文で
は無い。」

「”ラメエ”だ。」
炎系下級呪文

「ば、馬鹿な……………」

「見る！これが俺の」炎系最上級極大呪文「ラメラツテエー」！
エクステインクシヨン E x t i n c t i o n (消滅を司る魔王) 「
S a t a n
o f

そう叫んで”蝗アバドーンの王”が頭上に右手を掲げると『紫色の炎で造られた、禍々しい巨大なドラゴン』が、顕現した。

「ひひい！」

「た、助け・・・」

「……さらばだ、穢^{けが}れし者共よ。」

「 閃 光 」

王国暦412年。 【蟻】の月。

この夜、大神殿を始めとした大陸中の主だった神殿が残らず消滅した。

天と地を繋ぐ紫色の巨大な光柱は、大陸中のあらゆる場所からも観測出来たと言う。

それと同時に、永きに渡って大陸中にその権勢を誇った【神殿協会】は、腐敗した上層部と共に、その300年にも及ぶ歴史の幕を閉じた。

・
・

あー、熱かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

密封された空間で【炎系最上級極大呪文】とか、

本^{マッ}気で無いわww。

Episode : 04 天の御柱（後書き）

最後の最後で才子をつけるワナW

Episode:05 何気ない日常の中で(前書き)

5 話目投稿！。

あれ？シリアス部分メチャメチャ多くなった。

8 / 27 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

Episode : 05 何気ない日常の中で

ここは、レギオン軍団とありんこ蟻ン子達が棲む岩山から、最も近い場所にあるカテジナ王国のホーン侯爵領。

かつて神殿協会の大神殿があつた、建国以来412年の歴史を誇る、最も古い王国のその一角。

ホーン侯爵の屋敷、その執務室で、侯爵その人が苛ただしげに、部屋の中を歩き回っていた。

137

「誰か！誰かおらぬか！」

「はい、侯爵さま。 お呼びでございますか？」

「ええい！』お呼びでございますか？』では、無いわ！！ まだ、下手人は、げしゅにん見つからぬのか！ 一体、どれだけ時間を掛ければ気が済むのだ！！！！」

「…申し訳ございませぬ。何分、その場を見た者や証拠の品すら無く、雲を掴む様な状況でございしますので…。」

「わしは、その様な言い訳が聞きたいのでは無いわ!! 金なら十分分出しているはずだ! 何故、未だに見つからぬのだ!!!」

「は、そうは申されましても、既に金にモノを言わせて腕利きの者を集めさせております。これ以上の成果は、正直見込めませぬ…。」

「もう良い! 見つけれぬとあれば、期待はもてぬ! 腕に覚えのある者達を雇い入れ、わしの身の回りを警護させるのだ!!! 今度こそ、抜かり無い様に取り計らえ!!!」

「は、はい。早速手配致します。」

ボタン。

「ふう、まったくどいつもコイツも、モノの役にも立たぬ奴らばかりだ!!! ……くそ! 何でこんな事に…。」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

大陸中の人々に【天の断罪】と呼ばれる、” 神殿協会が消滅した日” から、すでに1ヶ月あまりが立とうとする頃。

あの日を境に、大陸の彼方此方あつちこちで、奇妙な殺人事件が頻発していた。

その事件は瞬く間に大陸中に知れ渡り、未だ犯人の目星すら立っていなかったにも係わらず、人々にはあまり問題視され無かった。

と言うのも、殺された被害者達は、普段は寧ろむし” 加害者” と言われる側の人間であり、ほとんど犯罪者や犯罪者紛いの者達で、身元がハッキリしている者も、証拠が無いと言うだけで、うまく立ち回っていたり、地位や家柄を利用し法の目を掻い潜っているけれど、悪事に手を染めているのが” 公然の秘密” になっている様な連中はかりであった為だろう。

又、その死に方が、人々に執とつて納得の往くものであった事も理由の一つと思われる。

死んだ被害者達はいずれも”塩の塊”と化していたのだ。

塩は”魔を払う力を秘めた神聖なもの”であると信じられており、魔除けや厄除けに使われたりするので、”悪人が死んで塩になった”と言つのを、人々は”神が不浄を清めた”のだと噂しあつた。

その為、怯えるのは後ろ暗い事をして来たと自覚のある者達で、普通の善良な人達は寧ろ喝采を上げてたほどだ。

このホーン侯爵も後ろ暗い事に身に覚えがありすぎる人物なので、何時自分の番が廻ってくるか恐れながら、”その時”を回避すべく金と地位にモノをいわせて見苦しく足掻いているのだった。

だが、そんな侯爵の足掻きは、何の成果も挙げられ無かった。

何故なら。

「何かを成せば、結果がついて来る。今まで、成して来た事の”

「報い」を受けると言うだけだろうか？」

「だ、誰だ？」

突然、自分しか居ない筈の部屋の中に、聞き覚えの無い声が響いた。

あわてて周りを見回し、声の主を探しても見つける事は出来無かった。

そもそも、執務室の中で隠られる様な場所など、それほど有りはしないのだ。

背筋が凍る思いで、尚も周りを見回す侯爵の前に、まるで虚空から滲み出る様にして、”異形”の影が姿をみせた。

「ひつ！？ お、お前は誰だ！ ど、どうやって此処まで入って来た！？」

「俺は、”^{レギオン}軍団”と言う種族の者で、”^{ホッパー}飛蝗”……まあ、蟻とかで言えば【^{レギオン}兵隊蟻】ってところかな。」

「怪しい奴め！ だ、誰か！誰かおらぬか？ 誰でもいい！誰か、誰かー！！」

「…無駄だよ、既にこの部屋は【^{レギオン}結界魔法】で隔離してある。何が起ころうと外に気づかれる事は無い。」

「な、何が望みだ？ ……か、金か？お前が見た事も無いほどの金額

をくれてやるぞ！ それとも、地位か？わ、我が臣下に取り立ててやるぞ？！」

「んー、中々魅力的な話だけど、欲しいのは別に在るんだよね。……あんた、いままで数え切れない程の【獣人族】を攫って、奴隷として売り飛ばして来ただろ。」

「の、望みは奴隷か？ だ、だったらこの屋敷の地下牢に集めてある。何匹かくれてやろう！ だから、頼む！ 手荒な事はしないでくれ！」

「金も、地位も、奴隷にも興味は無いね。欲しいものはたった一つ。」

「そ、それは何だ？」

「……貴様の命。」

「ひ、ひいひいひい……!?!」

バコン!!

音と共に、ちようどベルトのバツクルに似た甲殻部分が左右にスライドし、風車状の器官が現れて、風を吸い込み回転し始める。

轟!!!!!!!!!!

「うわぁぁぁぁ!?!」

数秒、或いは数十秒。 部屋の中を風が吹き荒れ、唐突に止む。

侯爵が恐る恐る顔を上げると、そこには全身に紫電を纏い、仁王立ちでコチヲを睨めつける”飛蝗”の姿があった。

「ひ、ひ、たす、たすけてくれ・・・」

「……それが、オマエの遺言か？」

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

「：やれやれ、侯爵様の我が俵にも困ったモノだ、仕事が終わった
ら気晴らしに地下の奴隷を、鞭打ってやるか。」

「無理だな、オマエはここで死ぬ。」

「！？な、誰……」

バシユツ！！

ズザアアアア！

「オマエらは”塩”の塊になってるのがお似合いだ…。」

…それにしても、無機物なら原子の塵に還るのに、人間だと浄化されて”塩の塊”になるとは予想外だったな。

まあいい、奴隷売買に手を染めていた連中は、看守を除いて全員始末したし、関係無い者は魔法で眠らせた。

後はマダラクモくんから送られた情報を使って、奴隷にされていた”ヒト”達を解放するだけだ。

バシユツ!!

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

「うぼあーっ!?!?」

ザアアアア!

「「「「「!?!?!?」」」」」

「静かにしろ、上は既に制圧してあるが、罪無き者達は眠らせただけだ、へたに目を覚まされると始末せねばならん、なるべくなら遣りたく無い。」

「体力の有る奴は、無い奴に手を貸してやれ、なるべく静かに迅速に動け。」

「「「あ、ありがとう」「」

「「これで、里に帰れます…。」「」

「礼など不要、それより急げ！」

「「「「は、はい！」「」「」

「森に入ったらコイツの後について行け、俺達の眷属だ、誰にも見
つから無い様に案内してくれる。」

彼がそう言っと一匹のカブトムシが先導する様に森に向かって飛び始めた。

「この恩は忘れません、ありがとうございます。」

「いつかきつと、恩返しします。」

「「「ありがとうございます。」」」

.....

・
・
・
・
・

・
・

翌朝、カテジナ王国ホーン侯爵領は、大混乱に陥おちいった。

何せ、侯爵の屋敷では殆どの者が塩の塊と化しており、侯爵の執務室では、侯爵自身と思われる塩の塊が確認されたからだ。

塩にされ無かった者達は、魔法で眠らされていた痕跡こんせきがあり、その後とがの調べでも怪しい所が無かったので、最終的にはお咎め無しとさ

れた。

だが、何より問題だったのは、屋敷から出て来た奴隷売買の証拠と、屋敷の地下に隠されていた、奴隷を集めておく為の施設が発見された事だった。

この事が知れ渡ると人々は喝采し、やはり悪党には神の裁きが下るのだと噂があった。

・
・

・
・
・
・
・

.....

「やっぱり、この種パネエわw」

「植えて、1日で収穫出来るとかw」

「さっそく、これでお酒を造れるしw」

「糖分の高い【サトウタケ】なら、上質な蒸留酒や焼酎を造れるんじゃないね？w」

「焼酎に【カララム】と【マラム】を漬け込もうぜw」

「出来たお酒で犬耳や猫耳を”もふもふ”するんですね、わかりますW」

「とうとう、この”魂太しんぶとゼクター”が、陽の目を見る時が来た様だなW」

「欲望 駄々漏れだな、おいW」

「藻マイラWW」

「駄目だコイツら、早く何とかしないとW」

「昼と夜とでは、別人なんですけどコイツラW」

Episode:05 何気ない日常の中で(後書き)

今日も世界は平和でしたw

Episode:06 犬耳との遭遇(前書き)

いつもより遅れたけど、6話目投稿です。

8/27 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

Episode : 06 犬耳との遭遇

やあ、なんだか久しぶりの様な気がするね、レギオン軍団の長、アバドーン蝗の王だ。

今日はアリスさんとは、又違った、癒しを求めて獣人族の集落に行こうと思うんだ。

べ、別に好物で釣ってウハウハしようだなんて思って無いんだからね！

……邪な理由なんて無いよ？ホントだよ？

「本心駄々漏れだしw」

「どう見てもそれ以外無いだろ、JKw。」

「いろいろ、残念なヒトだなあw。」

「ナゼ、こんなに成るまで放置したしw。」

「ばかプーw」

「うるさいですよ！藻マエラ！？…さっきから聞いてれば言いた
い放題じゃないですか！？ 漏れは王様ですよ？ 偉いんですよ？
大事なヒトだいじなんですよ！！！！？

……………もつと、俺を大切にしろ！！！！！！（泣）

「わがままだなあw」

「まあ、王様だしなーw」

「仕方の無いヒトだなーw」

「王様命令じゃ仕方がないw」

「チカタナイねw」

……………いや、自分で言っというてナンだけど、

藻マエラそれでいいんですか？（汗）

「漏れら”虫”だしw」

「王様を頂点に置いた、生きてる【システム】だしw」

「どこにでも居る、なんの変哲も無い虫ケラだしねーw」

「こんな連中、どこにでも居られたら困るわw」

「俺等を”なんの変哲も無い”とは言わんだろw」

「普通に”地海空”で活動出来るしなw」

「でも、真面目な話、王様死んだら俺等”蟻とか蜂”みたいに、精神に異常をきたして、最終的には死んじゃうと思うよw」

「滅多な事では、死な無いだろうけどw」

「つーか、殺す方法、思いつかんしw」

エエエエエ (;) エエエエエ

「な、なんだってー（棒読み）」

「いや、それはイイからW」

「まあ、それはソレとして。」

藻マエラ、”アミダくじ”で5人選んでくれなさい。」

「切り替え、速!？W W」

「ん？5人??」

「なんで？」

「ぞろぞろ11人で行くのも、どうかと思うんで、漏れと5人で逝くわW　ハズれた5人はお留守番ね。」

「ええ〜っ?」

「皆で行けばいいじゃん。」

「そーだそーだ。」

「我が仮言つて無いで、さっさとする!」

「うわぁー!ーん!」

「そんなのヤダよー」

「ヤダヤダ、ミンナと行くんだい!」

「^{しゅつ}騾の出来てない子供ですか! 藻マイラ!」

「駄々を捏ねる”仮面ライダー”とかw、シユールって言うレベルじやねーぞ!?!? w w」

…つーか、嫌すぎるにも程があるわ!!!
W
W
W

・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

…で、結局1号〜5号は【エルフ】の里に、行商に行って貰ったわけだ。

この世界では、まだ”蒸留酒”は造られて無かったので、【倍々ハンマー】で量を揃えて、嗜好品や工芸品と交換。

その後、仕入れた”食料品（主に乳製品）”を増やす 行商、のループで食卓を豊かに彩るって寸法だ。

一方、俺等は陸路で森を突っ切り、”コボルト犬型獣人”の集落に向かってる最中だ。

深い森の中を、風のように走り抜ける6つの影、やっぱこのボディ身体、ハンパ無いわw

何で、飛んで行かないかって？ 俺等”虫”の所為か森の中とかだと『居心地が良い』んだよね。

それに、走つての移動だってそんなに時間を食う訳じゃ無い、疲れを知らぬ身体と強靭な脚は、容易くたやす時速300キロのスピードを叩き出す。

そんなスピードでも、【超感覚】 【虫の知らせ】 【俺様脳内会議】

等の、スキル補正のお陰で危なげ無く、走り続ける事が出来るしね。
まあ、折角”大自然”に囲まれた異世界に来たんだ、この世界の隅
々まで見て廻らないと、勿体無いだろ？

こんなに綺麗な風景なんだからさ。

「……そう思ってた時期が、私にもありましたwww。」

現在、目の前には体長5ダルクにも及ぶ、^{デビル・ベア}”鬼熊”の番が戦闘態勢を取っておりますw。

「 どうしてこうなったw 」

(王様、現実逃避してる場合じゃ無いっすよw。)

(あの”^{コボルト}犬型獣人”の親子助けないとw。)

(うーん、5ダルク級、2頭かあ。)

(一人じゃ、かなりの腕利きでもツライ相手だね。)

(…しかも、子供を後ろに庇いながら。)

(これ、何て無理ゲー？w)

^{デビル・ベア}”鬼熊”ってのは、地球の熊にフルプレート着せた上に、ドーピングしまくって、大きさも身体能力も、ついでに凶暴性も数倍にUPしたような生き物の事だ。

ちなみに、魔獣でも何でも無い、普通の獣ね。

(…まず手前の”デビル・ベア鬼熊”を【熊A】、奥の”デビル・ベア鬼熊”を【熊B】と呼称する。

6号7号は、あの親子の確保と傷の手当てを、俺と8号で【熊A】を、9号10号で【熊B】を傷つけ無い様に牽制、親子を安全圏に移動させたら、殲滅に移行。

尚、森や精霊への影響を考慮して、【メギドの火】及び、魔法の使用を禁止とする。)

(以上、作戦開始！)

(((((了解！))))))

(ちなみに、俺等の念話は【マイクロセカンドの領域】で行っているから、この間1000分の1秒ねw)

(…解説乙w。)

(メタ発言、自重しろ!!!w)

「とう！」

ドカツ！！

「くまつ！！！？」

まず、俺が親子の退避ルート及び【熊B】の方向と被らない様に、
【熊A】を手加減して2ダント程、蹴り飛ばす。

「我々は味方です、さ、此方へ！」

「ワウ？　ワ、ワン？」

間を置かず、6号7号が親子を抱えて安全圏に移動を開始。

「お前の相手はこつちだ！」

逃げる親子に、意識を向けた【熊B】の前に、俺の頭上を飛び越えて9号10号が、牽制する為に立ち塞がる。

「牽制してから、幾らも立たずに」親子を安全圏に確保した」と念話が入ったので、（鎧のような甲殻部分には傷をつけるな。）と、指示を出して殲滅に移行する。

「くまーーーーー!!」

ブオン!!

唸りをあげて振り回された右前脚を、後方宙返りでかわし、大樹の幹に垂直に着地する。

他の眷属達も、乱立する樹を足場に、三次元的な動きを駆使して、^{デビル・ヘア}”鬼熊”の甲殻を傷つけ無い様に、間接部分を中心に攻め立て、追

い込んで行く。

…今更だが、初めて俺達の”種族名”の由来を実感した。

俺と8号が【熊A】を牽制している時。

6号7号が親子を抱えて安全圏に移動を始める時。

9号10号が【熊B】を牽制している時や、”鬼熊”^{デビル・ベア}と交戦している、今この時でさえ！

俺達は互いの視線や情報を共有し合い、【分割高速思考】を駆使して最適化された情報の元、1000分の1秒での確な判断を下して、言葉も交わさず、1つの目的の為、最良な行動を取る。

まさに、群れでありながら一個の生命体として機能しているのだ。

だから”軍団”^{レギオン}、【大勢なる者】^{たいぜい}の名を与えられたのだと。

「……く……まあ……」

「……べ……べアア……」

流石に、タフネスで知られる”鬼熊”デビル・ベアも、俺達の連携攻撃で弱ってきたようだ、……そろそろ、止めをさすか。

(8号、9号で奴らの注意を引き付ける。)

((了解))

2人が、2頭の注意を引き付けている間に、気配を殺した俺と10号が死角に回り込んで、一気に首を捻って頸骨を粉碎して戦闘終了。

「く…ま…」

…ドサリ…。

いやあ、彼らは強敵でしたねw。

(((ミストさん!?)))

相変わらず、イイ突込みだww。

それよりも、戦闘中ずつと突つ込み入れたかつただけどき、「くまーっ」とか”鬼熊”デビル・ベアの鳴き声、変じゃね?

(…え? 普通じゃないの?)

)”鬼熊”デビル・ベアって「くまー」と鳴くモンでしょ?)

(別に変わった所は無かったよ?)

「…お」

EEEEH
(;)
EEEEH

「うそ!? マジで!?!?」

「本当だってw」

「うん、こんな事で嘘 言っても仕方が無いし。」

「相変わらず、王様は妙な事いっわw」

「まただよ(笑)」

周り全部が、敵であります!?!?

.....知らなかった、
”デビル・ヘア鬼熊”
って「くまー」と鳴く生き物だっ

たんだ……。

さすが異世界、意表をついて来るぜ！

……ん？ どうやら6号7号に治療された”コボルト犬型獣人”の親子がここに来た様だな。

「…あの、どうもありがとうございますワソ。

私は、”コボルト犬型獣人”のナタク、こちらは息子のセタクと言いますワソ。

「はふ、はふ。」

パタパタパタパタパタパタパタパタ。

…セタク君が、つぶらな目をして『はふはふ』言いながら、すごい勢いで尻尾を振ってます。

(*、)カワイスギダロコノヤロー

これです、これなんですよ！ 漏れが犬耳に求めてた”癒し”は…！

「食料を探しに森に入り、運悪く”デビル・ベア鬼熊”の番に遭遇してしまい、つがいもう駄目かと半ば諦め、

それでも何とか、この子だけでも逃がさなければと、相打ち覚悟で時間をかせぐつもりでしたワン。

貴方達のお陰で、命拾いをしましたワン。

此方の方（6号）に伺ったのですが、私どもの”長”に挨拶に向かわれる途中であったと聞きましたワン。

宜しければ、私をご案内致しますワン。」

「それは、ありがたい。

こちらこそ、よろしくお願い致します。

…ですが、少々時間を下さい、この”デビル・ベア鬼熊”を解体してしまうので。

」

そう話してる内にも眷属達が、”高周波爪刃”^{エルボー・ブレード}を操って、【コマ送り】の様なスピードで解体してゆき、”腑分け”^{そは}した傍から【ポーチ】の中にストックしていくので、もう終わりそうですw。

ちなみに、この光景を目にしたナタクさんは、目がまん丸になりましたw。

∴そして、俺達はナタクさんの案内で”犬型獣人の集落”^{コホルト}に、向かったんだ！

Episode:06 犬耳との遭遇(後書き)

次回は犬耳の村でのお話w

次回、君は時の涙を見る!!

………って、見ねーよwww。

Episode:07 その名は、ワン・ターレン(前書き)

筆が進まなくて、今回短めです。

Episode:07 その名は、ワン・ターレン

やあ、おはよう蝗^{アバドーン}の王だ。

現在、俺達は”犬^{コボルト}型獣人”の集落の入り口に着いた所だ。

付近にいた”犬^{コボルト}型獣人”達が俺達を見つけて様子^{つかが}を窺^{うかが}ってるみたいだな。

ナタクさんが進み出て、近くに居た”犬^{コボルト}型獣人”に、何やら話かけてる。

多分、俺達の素性と目的を説明してくれているんだろう。

ちなみに、セタク君は俺の背中で”はふはふパタパタ”しとるわw。

(* , ,) コノママサラウゾ、コノヤロー

……ん？ スゴイ勢いで、まるで転がる様に走ってくる集団がいるぞ？

その集団は、俺達の前に来ると、8号に向かって話しかけて来た。

「あなたは、あの時の方では、ありませんかワン！」

「憶えて、おいででしょうかワン？」

「あの時、開放して貰った者ですワン！」

……正直に言おう！ 『ワンワン』 五月蠅むじせえ！！w

だが、萌える！！！（キリッ！）

（どんだけイケメンなんですかw）

（無駄に凜々しいw）

（このロリコンめ！！w）

！？？ロリコンちゃうわ！！！？？

…俺は只、可愛いモノを愛でただけだ。（キリッ！）

(変態じゃないですかW)

(変態だW)

(うん、変態だねW)

変態じゃ無えよー！

仮に変態だとしても、変態と言う名の紳士だよー！！！！(泣)

(あー、いま紳士と言う単語で、気づいたんだけど…。)

(うん？)

(俺等、真^{まっば}つ裸に赤いマフラーだけの姿じゃね？W)

(…!!…!!…!!?)

(W そう言えば W W W)

(なんと云う紳士w)

(そう言えば、この甲殻で覆おおわれた格好って、”生まれのままの姿”だったわw)

(ライダー 変態説 w)

(漏れ達、＼(^o^)/オワタw)

(/(^o^)/ナンテコッタイw)

…アバドーン 蝗の王です。 嫌な事実が発覚したとです！

…アバドーン 蝗の王です。 心が折れそうになったとです!!

…アバドーン 蝗の王です。 記憶の底に封印する事にしたとです!!! (泣)

注 くどい様だが、思考速度は1000分の1秒ww

「ああやはり、捕まっていた仲間を、助けてくれた”見た事も無い昆虫人”とは貴方達の事でしたかワン。

案内している途中で、仲間の言葉を思い出して、もしかと思ってい

ましたワン。」

：「お？ 集落の奥から”白い体毛”の”コボルト犬型獣人”が、数人の大柄な”コボルト犬型獣人”に囲まれて、こっちに向かって来たぞ。」

「ようこそ、新しき種族の王とその眷属の方々。」

わしは、”コボルト犬型獣人”を統べる”長”、【ワン・ターレン】と申す者。

余りに長く生きていたので”コボルト犬型獣人”の歴史の中で、わしより長生きな”コボルト犬型獣人”は存在しない程。」

それ故、【大族長】の名で呼ばれております。」

過日、攫われた部族の者共を助けて頂いたばかりか、今又、甥のナタクとその息子セタクの命まで救って頂いたとか。」

まこと、感謝に堪えませぬ。」

本日はわざわざ我ら”コボルト犬型獣人”に、挨拶をしに参られたと聞きました。」

大したモノも無い村ですが、我等”コボルト犬型獣人”は、”レキオン軍団”と、その長、”アバドーン蝗の王”を歓迎いたしますぞ。」

突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、
突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、
突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、
突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、
突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ！

(シンジくんかw)

(まあ、その気持ちは理解できるw)

(つーか、ワン・ターレンかよw)

(ここは、男塾ですかw)

(民明書房みんめいとか置いてそうw)

「…ワン・ターレン殿、つかぬ事を、お聞きしますが、”江田島平”
”と言つ名前に心当たりは無いでしょうか？」

(うわ、聞いたしw)

(王様、自重するw)

(普通に、無ーだろw)

「ほほう、その名を知って居られるとは、”造物主”にお聞きになられましたかな？」

「ええ、その名を口にして居るのを、聞きましたので。 (うそお
!?! マジで居るのぉ!?!?!?)」

(いるんだw)

(やべえ、メツチャ見てえww)

(やべ、嫌な予感しかしねww)

「…それで、どのようなお方なのでしょうか？」

「……………申し訳ありませんが、わしの口からは申せません。

ですが、他ならぬ蝗アバドーンの王殿の頼みとあらば、わしから言えるのは、
一つだけ。

【セイレーン】を、尋ねなされ。」

「【セイレーン】ですか？」

「左様。

見目麗しく、美しき歌声で様々な事象を操り、女性のみしか存在せぬと言つ。

滅多に、他種族と関わらぬが故に”未知”と言う名の神秘のベールに包まれた謎多き種族。

「…ちなみに、他の2人の事を聞いても？」

「はい、構いませぬよ。」

一人はエルフで、レイ・アムロと名乗ってましたな。」

（！ 決定。）

（ビンゴかw）

（これで違うとか、無いわw）

「いま一人は、我が部族の者にて、”ロボ”と言う者です。」

（……シートン動物記？）

（…狼王”ロボ”か？）

（微妙に怪しいなw）

(とにかく、確認するにも後でだな。)

(そだね。)

「どつやら、場所の用意が出来たようです。

まずは、そちらへどつぞ。」

「では、お言葉に甘えて……。

そうだ、件の”鬼熊”デビル・ベアの肉を、土産に持って来ました。

よろしければどつぞ。」

「これは、お心遣い痛み入ります。

折角の、お志ですのでありがたく、受け取らせて頂きます。」

これ、手すきの者を何人か呼んできなさい。」

「わかりましたワン。」

「あと、甲殻も無傷で剥ぎ取っておいたので、こちらもどうぞ。」

「わかりました、代金は後ほど” 助けて頂いた” お礼も含めてお話させていただきます。」

「時に【大族長】殿は、他の【コポルト】の方と違って、語尾に”ワン”をつけていない様ですが？」

「ほっほっほ、わしぐらい長く、族長などをしておりますと、他の種族の方々と話す機会も多くなりますし、

これほど、長生きすれば、長生きしすぎて最早、通常の【コポルト】とは異なった存在になるのやも知れませぬ。」

「なるほど。 (多分この年老いた【コポルト】は、長生きしすぎ

てナニかを”超えちゃった”のかも知れないな。」

・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

そして、酒や料理が出来上がり、宴会が始まった。

俺達の持ち込んだ、鬼熊デビル・ベアの肉や、焼酎に「カララム」の実を漬け込んだ「カララム酒」は大好評で、期待した通り、この集落との交易で、主力商品になってくれそうだ。

そして、眷属達のバックコーラスで演出された俺の歌や、借りた楽器と羽での交響曲は、そんな”概念”の無かったこの世界の住人には、非常な驚きと感動を持って絶賛された。

…一人妙な顔で驚いてる【コポルト】が居たから、奴が【ロボ】だろう。

顔と特徴をチエックしとくのも忘れない。

そして、今現在、俺達は【コポルト】の女性に囲まれてチヤホヤされています。

【コポルト】の女性は、人間の女の子に犬っぽい”メイク”を施ほどこしたような顔立ちで、犬耳と尻尾があり、手足の先端部分と、尻尾からうなじまで毛が続いてると言った姿なので、とってもカワイイ娘

ばかりですた。

キタ (。°。) !!!!!!!

ついに、魂太こんぶとゼクターの性能をこの身で実感する時が来た!!

しかも、好都合な事に昆虫人特有の、インセクター”表情が解かり辛い顔”のおかげで、がつついて居るのが気取られません!!!!

(モチつけw)

(そんなに”魔法使い”の称号、嫌だっただw)

(つーか、漏れら普通に魔法使えるけどなw)

…誓いの時は来た、漏れは今、運命を越える! (皮の帽子装備中w)

(トキとラオウの対決かよw)

(しばらく戻って来ないだろw)

(もはや、手の施し様も無いなw)

(ナゼ、手遅れになるまで放置したしw。)

こうして、容赦ない眷属達の突っ込みを流しながら、俺の熱い夜は更けて逝ったんだw。

Episode:07 その名は、ワン・ターレン(後書き)

…昨夜は楽しみでしたねw

Episode:08 仲間を増やそう！（前書き）

9 話目、投稿。

”種族的^{生態}特長”の【繁殖方法】を、更新しました

Episode:08 仲間を増やそう!

おはよう、清々しい朝だね、昨夜進化を遂げた蝗アバドーンの王だ。

今日は、一旦拠点に帰ろうと思う、留守番してる5人の事も気になるしね。

昨日の内に、交易の話は終わったし、”江田島平”の事は、メッ
チャ気には為るけどなw w。

べ、別に、【セイレーン】の事が気になる訳じゃ無いよ?”見目麗
しい”って噂だからって、見に行きたい訳じゃ無いんだからね?

「ツンデレ乙w」

「まただよ(笑)」

「主に性的な意味の”進化”ですね、わかりますw」

「何度も同じギャグは自重するw」

「もげるw」

「そして爆発しろw」

「…だから、もっと俺に優しくしろ!!!」(泣)

「"ばった"のおにいちゃん達は仲良しだワン」　パタパタパタ
パタ　【しっぽをふる音】

「おはよございませすワン。……昨夜はお楽しみでしたねw。」

…ひい！　(；、)　バレテラ

(まあ、判るわなw)

(だから、自重しろとw)

(DQの宿屋w)

「あー、セタクさんとナタクさん、おはよございます。」

「私ら獣人系の種族は、あっちの事には解放的なので、キョドらなくとも大丈夫ですワンw」

「…おたのしみって、”うたげ”のことがワン？」　パタパタパタ
パタ

「あ、そうなんですか(ほっ)、

それとね、セタクくん。僕らの種族は”アットホーム”が掟だから、みんな仲良しなのさw。」

「(…掟なのかワン)…。」

”あつとほーむ”ってなに？」　パタパタパタパタ

「ぶっちゃけると、”全員ほのぼの家族”って感じの言葉かな。」

「拒否速！？w」

「ナゼ断ったしw」

「無駄にイケメンすぎるw」

「断りましたよ！！！！？」

「すごいや！みんな”おうさま”とか関係なく仲良しさんなんだね
！」

パタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタパタ

「…今の会話の何処に、そんな要素があつたし？」

「まあまあ（汗）、

それよりも今日はどうなさる予定ですワン？」

「一旦、拠点に帰ります。

頂いた交易品の整理とか、ありますから。」

「そうですね、名残り惜しいですが、そちらから交易に来られたり、
こちらから訪ねたりもできますからね、こればかりは、仕方ないで
すワン。」

∴その後、俺らは【大族長】と朝食を取り、コボルト犬型獣人達の盛大な見送りを受けて、拠点に戻って来た。

∴

∴
∴
∴
∴
∴

∴
∴
∴
∴
∴
∴
∴
∴

………
人手が足りねえ！

「また、唐突にw」

「突然どうしたのー？w」

「妙な事を思いつくのは、デフォだけどさw」

いやー、漏れらの”使命”（監視・抹殺）を遂行するに当たって、
人数足りねえと思わね？

「…ああ」

「そうだね。」

「これからは足りなくなるね。」

今までは、大体居る場所の分かる【神殿協会】とか、黒い噂のある【貴や族】【商人】なんかの屋敷に棲む虫達から、情報を集める様にして、比較的探し易い外道共を、始末して来た。

これは、問題無く終ろうとしている。

これからは、民家とかの広い範囲で情報を集めて、その中から外道共を探し出し、始末して往くのだけど。

大量に棲息する”虫達”から得られた、【膨大な情報】を解析・統合・整理して、外道共を特定してゆくと云う作業が、必要不可欠になって来ると予想される中で。

これから先、使命を果たして往くのに、たった11人では、お話に為らないのである。

(現状を、打破する方策か)

(まず、眷属増やすってのは時間的に無理だしなw)

(卵孵るのに、100年掛かるからねw)

(他の種族を雇うつてのも時間と金がネックだしな)

(うん、組織を立ち上げて機能するまでがね)

(やっぱり、神様をお願いかな?)

(あまり、頻繁にウラ技使うのもマズイけど)

(チカタナイかw)

(うんうん、チカタナイw)

…やっぱり、それしか無えか。

それじゃあ、神様に届くように意識を”集中”して……、

……集中、集中、集中、集中、集中、集中。

.....主神工.....(; ;)

『ちよ!?!?おま!?!?!? W W W W
あまりにも、酷すぎるでしょ!?!?
なんなの?その呼び出し方は!?!?!?』

『これは酷い W W』

『元気そうで何よりですよーw』

『お供え、お美味かったですけー。』

『早速、種を活用してるんですよーw』

『おう！あの供え物、中々良かったじゃんw』

あー、【造物主達】^{みんな}久しぶりー。

『渾身の抗議を無視された！！？』

『まあ、それは何時もの事ですのでw』

『そーそー、何時もの事w』

『！！？酷すぎる！！！？』

『
『
『
『
『
w
w
w
w
w
』
』
』
』
』

……主神エ……。；、（ 相変わらず）泣……。

『同情なんて要らないから!?!』

『なんだか、同じ光景をどこかで見たような気がしますけ - W』

『これが、既視感デシヤウユって奴ですかいのー? W』

『絶対、違つと思つのですよー W』

『 W W W』

『ほら、【ロベルト】。…話が進まないからあっちの隅っこに行つて下さい。』

『え!?!? 俺エ!?!?!?』

酷ひでー、言葉使いは丁寧だけど、容赦のカケラも無エ。 W W W

『それも何時もの事ですので W』

『そーそー、何時もの事w』

…しくしくしくしくしくしくしくしく…。

良いのか？ あれ放っておいて？

…ヒザ抱えてイジケる主神とか、シユールすぎるわ。 w

『話が進みませんからね。』

事情は理解してますが、此方こちらからの提案は出来ません。

あくまでも、使徒しとからの要請を”叶える”と言った形でないと、ルール違反になりますので。』

あいよ、それじゃあ、卵が孵化する時間を100年から1日にして。

『無理w』

…ちよつとおおおおおおおお！！？

『いや、当然でしょう、種の寿命と繁殖力は反比例すると言つ法則があるのですよ？』

当然、数年程度ならオマケ出来ますが、1000年を1日に縮めるのは無茶すぎるでしょう？』

うーむ、そつかあ…。

じゃあ、最短で何日位まで縮めれるかな？

『そうですね、現在の状況を考えるに、優先させたいのは、やはり孵化の速度みたいなので、幾つかの”制約”を付ければ、1週間までは短縮可能ですね。』

お、すごい短くなつたじゃん。

……んで？ 肝心の”制約”ってのは、何？

『まず、眷属も卵を産めたのが、産めなく為ります。』

今後は、貴方だけしか種族を増やせ無くなります。
童貞卒業したと思えば、今度は”ママ”になるとか、とんだ面白生物ですね。」

【童貞卒業乙W】

【えー、つまらないですよーW】

【アバドーン蝗の王ちゃんには、ずっと童貞で居て欲しかったのですよーW】

【主にイジラれ役な意味でW】

何、好き勝手ほざいてますか、藻マイラら！？

あと、面白生物とか言つな！！

……ポン。

肩を軽く叩かれたので、振り返って見たら、【ロベルト】が、なまぬる生温い目をしながら”ウンウン”と頷いていやがった。ww

「いかにも、”同類”って感じで、肩を叩くな—————！！」

『!?!? 周り全てが敵であります!?!?!?』

…もうヤダ、この神様 W W

…
…
…
…
…
…
…
…
…

…
…
…
…
…
…

・

「…そんな訳で、藻マイラの体内にあった卵は消滅しました。」

「そこで早速、卵吐くので岩山削って”孵化室”作成する！」

「「「「「はあ〜いw」「」「」「」

—
<キングクリームゾン!

—
(A、)
/>>>

「「「「出来たW「「「「

「速いな、おい!？WW

「まあいいけどW、…チャッチャとやっちやおつか。」

…んぐつ、く。ぺつ。

…んぐつ、く。ぺつ。

…んぐつ、く。ぺつ。

…以下10回分

「わーい、卵、卵w」

「わーい、仲間、仲間w」

「でも、涎^{よだれ}でバッチイかもw」

バッチく無えよ!! 失礼すぎですよ、藻マイラ!!!??

夢を見るのかな？

卵も

ピンピロリン

「種族的特長」の項目にある【繁殖方法】が、更新されました。」

NEW！【繁殖方法】 王に抛る単体生殖。 1日10個、卵を体内に生成出来、”口から”吐き出して産卵する。 卵は”野球の軟式ボール”位の大きさで、カムフラージュの為”球形の石”の様に見える。そうして、”丸い石”として様々な【魔力】や【生命力】、【大地の気】に【知識】までも吸収しながら、1週間かけて徐々に大きくなって行き、”1.5メートル”ほどの大きさまで育った後、”成体”として誕生してくる為、彼らには”幼年期”が存在しない。 又、卵限定のギフト【生命の賛歌】による加護の為、危害を加えようとするあらゆる事象から、完全に守られ快適な状態が保たれる。（溶岩に落ちても温泉タマゴにならない） 追記：魂こんがく太ゼクタクの使用により”脱童貞”に成功しました。 童貞卒業乙w

Episode:08 仲間を増やそう!! (後書き)

どんな夢を見るのだからか？w

Episode:09 ソシエットの狂君主(前書き)

一日送れてすいませんでした、9話目投稿。

8/27 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

ンテナ】の様な器官が付いた、イカした奴らだ。

全部で10匹（人？）いて、言葉を持たずに、【テレパシー能力】で直接”意思”を送受信して会話をこなす。

彼らの参入により、諜報作業は”お任せ”状態に出来るので、俺らは持てる能力を全て、【突撃・粉碎・殲滅】に当てれる様になった。ホント、感謝してますよーw

一番の懸念事項であった、【アリさん】との顔合わせも無事済んで、【アリさん】は【グフたん】をとても気に入った様子だ。

今も、【グフたん】の背中に何人が乗って昼寝してるし、【グフたん】も満更でも無さそうな様子をしてる。

表情は変わら無いけどなw

「それじゃあ、早速【グフたん】が収集してくれた情報で、”抹殺仕事”すつか。」

65号、何か緊急性の高い”抹殺仕事”ある？」

「王様、コレなんかどう？」

『“亜人種”に蹂躪戦争を仕掛けようと画策してる、【ソシエツト大公国】の“狂君主”、【ムンボー大公】の抹殺。報酬50000マネエ・・・。』

「……………突っ込み処コロコロが多すぎて、何処から突っ込んでいいモノか迷うんだが、…順番に逝こう。」

この”50000マネエ・・・”ってのは、何だ？」

「あー、それは神様から【グフたん】の方に直接、連絡行つたみたいで、”マネエ・・・”を一定以上消費すると、神様が色々な”願い”とか、叶えてくれるんだって。

例えば、『こんなギフトが欲しい』とか『あんな道具神器が欲しい』と言つた具合に。

だから、お金みたいに貯めて、大事に使えばすごく便利な【システム】だと思つよ。

【交換リスト】は、【グフたん】に聞けば分かるってさ。」

「……………そうか、【システム】に附いては理解した。

多分、”ネーミング”には、突っ込まない方がイイんだろうな。」

「そつだねw、ちなみに現在、”70万マネエ・・・”の借金が有るから、しっかり稼がないとね。」

「え？……………なんで？」

「この前の、”種族的^{生態}特長”の更新と、【グフたん】を派遣した分
だつてw」

「モノ渡した後に、請求かよ！？ 性質^{たち}の悪いサラ金並みじゃねー
か！！？w」

「僕らだけ何の制約も無しにポンポン願いを叶える事で、他の種族
に”妬みの心”が生まれたら困るから、その対策の為だつてさ。」

「…ふーん、そう言う事じゃ仕方ないな。」

「うん、チカタナイね。」

「じゃあ話を戻すけど、この”狂君主”って？ ウイザ ドリイネ
タか？ それに【むん坊大公】とかwおまw。」

「いや、【むん坊】じゃなくて【ムンボー】だよ、王様w

それと、メタ発言自重しろ！w

その”狂君主”って言うのは、ネタでも何でも無くて、国中の人
がそう呼んでるからなんだ。

もちろん、本人には聞こえない様にね。

実際、重臣達や街の人達も困ってるらしいよ、”亜人種”との仲が
悪くなれば、そこでしか手に入ら無い”交易品”とかが、品薄にな
るし、

交易してた種族のテリトリーにある、”街道”も使え無くなって、
”物流”そのものが大打撃を受けるからね。」

「なんで、”狂君主”とやらは、その亜人種を戦争で蹂躪しようと
するんだ？」

「理由は無いんだってさ。」

「……………はあ？」

「ただ、自分達【ヒューマン】以外の亜人種は、汚らわしくて、邪悪な存在だから、亜人種が生きてる事自体、我慢為ら無いんだと。」

ちなみに、攻撃対象は大公国の周辺に住む、5種族全部で、亜人種達が何かやったとかじゃ無いみたい。」

「それじゃあ、勝ち目なんか無いし、国軍は動かないんじゃない？」

「それがねー、軍人の軍将は、金に飽かせ揃えた装備を使って見たいし、その装備をもってすれば、『亜人種等恐れるに足らん!』とか言ってるらしいよ。」

優秀で常識的な軍人達は、亜人の能力の凄さを知ってるから、なんとか軍将を諫め様としたんだけど……。」

「……したんだけど?」

「全員、階級を剥奪されて、牢屋にぶち込まれたってw」

「馬鹿だろ！！軍将！！？」

…何で、軍将そんのが、軍のトップなんだ？」

「うん、それが【むん坊大公】の従弟いとこみたいだから、その所為じゃ無いかな。」

「……単なる”身内のコネ”かよ……。

そいつら、”逝おまえって良し！”だな。

(あと、65号も【むん坊】って言ってるだろw)

「どうするの？ 王様。

放っておいても、【ソシエット大公国】は、負けると思うし、この仕事や止めとく？ それとも受託うける？」

「いや、受託うけよう。

いくら、亜人側が負けないうってても、被害ゼロで済む訳が無いし、巻き込まれる大公国の善良な人達が、哀れすぎる。

……それに”50000マネエ・・・”はデカイしな！ww

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

「色々、台無しだよ!!」
W
W
「

【ソシエット大公国】の中心部に位置する城【ブルータクト】、その”君主の間”で、【狂君主ムンボー】と【軍将メン・ボウ】が、昼に開かれた会議での事を話していた。

「うむむむ、宰相の奴め重臣共を手懐けて、余の立てた計画に異を唱えるとは、真まことに持って不届きな奴!!」

「はっ、まさに従兄あにいづえ上の仰る通りかと。」

「そもそも、なぜ彼奴きやつらは反対しておるのだ？ 余は穢しれた亜人ミレニアムを一掃し、この混迷した人の世に、栄光と永遠の千年王国モタラを、齎もたらそうとしておるのこー!」

自分が如何いかに有能で正しい（実際に、そう思っているのは彼自信だけなのだが）と信じて疑わぬ【狂君主】は、宰相を始めとした重臣達が、何故自分の発案した”素晴らしい計画”を、“不当”にも邪

魔するのか、心底理解出来ずにいたので、

自分に残された”唯一の理解者”と信じて疑わぬ残忍な性癖の（この人並み外れて残忍な所を、少しも気にしてない事が、既に狂っている証拠みたいなモノのだが）従弟を相手に、如何に自分が不当に扱われているか、如何に周りの者達が不理解なのかを、切々と不満を垂れ流して自身の境遇を嘆き、その事によって段々と自身を、まるで悲劇の主人公の様に思い込みはじめ、自分の言葉に酔いしれていた。

そして、当の従弟が本当に、【狂君主】が信じてる程に忠誠と信頼を寄せているかと言えば、決してそんな事は無かったのであるが。

（…相変わらず、頭のイカした暗君ぶりですなあ、従兄上？
まあ最も、私の思惑を実行するには、その方が都合が良いのですがね。

精々、私の思惑のままに踊って下さい。

…その後は君主として責任を取らされるでしょうが、責任を取るの
はトップの役目ですからねw

…それにしても、金に飽かせて整えた軍備の数々に、早く人モドキ
共の血を吸わせて遣りたいモノだ…。）

…当の【軍将】と言えば、【狂君主】が自身の演説に酔ってるのを
いいことに、小声で内心を洩らしてしまっていたが、
喩え【狂君主】が正気であったとしても、聞こえる筈の無い小さな
声だった。

そう、人間相手であったなら。

……醜みにくいな。

頭のイカれた人間至上主義に染まった暗君も、それを裏で操る残忍な快楽主義者も、共に醜みにくくすぎる！

こんな、連中を見るにつけ、改めて【造物主ロベルト達達】に感謝せずに居られない。

俺を人間以外の存在にしてくれたのだから。

人間を滅ぼす為の”因子”で在りながら、滅ぼす筈はずの人間でも在った俺は、あのままで往けば、確実に精神に異常を来たして、親父やお袋に”破滅”を齎もたらしていた筈だ。

……受けた恩に報いる為にも、こんな外道共は一匹残らず、始末せねば。

「従兄上あにじょうえ、こうなつては非常手段も已む無やしでしょう。」

「従弟よ、何か妙案でもあるのか？」

「宰相や重臣達が、邪魔で在るなら、居なくなつて貰えば良いのですよ。」

「こゝ、殺すと言つのか？」

「いえ、あの者共も有能である事には変わりませんので、殺すには少々惜しい者共です。（殺してしまえば、私がこの国を支配した時に苦勞するからな、従兄に責任を取らせた後で、私が助けてやれば、恩義を感じて一層働いてくれるだろうしな。）

牢に入れるだけで良いでしょう。

「従兄上が亜人共を滅ぼして、理想郷への一步を踏み出せば、あの者共も己の不明を恥じて、改めて従兄上に忠誠を誓つてありますよ。」

「おお流石、余の従弟よ、見事である。此れからも余を支えてくれい！」

「お任せ下さい、従兄上。」

「…無理だな、貴様らは此処で死ぬ。」

「「！！！！？」」

「だ、誰だ！？」

「おのれ、何者だ！？」

主しゅ

造り《うまれ》し存在ものに問いたもう

『汝の名は何か？』

彼の存在、答えて曰く

『我が名は軍団、我等 大勢なる故に。』

「な、なに!？」

「…軍団だと!？」

「そつだ、主より与えられし使命を遂行する為、新たに生み出された”13番目の種族”。

その長、”蝗の王”。

「神の下僕の名の下に、…貴様らの命、貰い受ける。」

「ひい!!!?」

「落ち着かれませい！ 従兄上あにうえ!!!」

…愚かな虫人め、”飛んで火に入る”とは貴様の事だ！

その鎧の様な甲殻を剥ぎ取って、我が鎧として飾ってくれよう！

者共、出会え！ 曲者である！ 出会え！ 出会えい！！」

「…お前は馬鹿か？

何の対策とらずにノコノコ出て来る筈はず無かろう？

この場は既に【結界魔法】で隔離してある。

この場の音は向こうに聞こえんし、出る事も出来ん。

そして此処に人は寄って来なくなる。」

「く、馬鹿な!?!」

「ぶ、無礼な！余らに向かつて何たる口の利き方を！？ そのままには、捨て置かぬぞ！？」

「ほう、…では、どうすると言っただ？」

「ええい！ 誰も居らぬのか、誰かある！ 衛兵！ 衛兵！！」

無論、そう叫んだ所で【結界魔法】で隔離されたこの部屋に応援が来る筈も無く、空しく叫ぶ【狂君主】を視界に納めながら、彼は【ヤレヤレ】とでも言いたげに、肩を竦めて首を振っていた。

「そろそろ、覚悟は出来たか？ まあ出来なくとも、結果は変わらないがな。」

パソコン！！

「た、ただ助け、助けて・・・」

「絶望オーオーに身をよじれイ ド外道どもオオオーツ！！」

「絶望のオ~~~~！！ ひきつりにごうた叫び声をきかしてみ
せてくれえ~~~~！！」

「「キ、キイアアアアア~~~~！！！！？」」

(王様、それじゃ悪役だよお〜っ)

(何故、ここでエ ディシを!?)

(ええい! 外野は黙って観戦しろ!!!)

.....

.....

暫らくして、巡回の兵士が、無残に荒れた部屋と、そこに残された2つの、人の形をした塩の塊を発見し、城内は蜂の巣を突付いた様な騒ぎになった。

戒厳令が敷かれ、不審な者が居ないか探索されたが、誰も頭上を気に掛ける者はいなかった。

彼らの頭上、天井の影が濃くなり闇と化した空間で、彼は天井に立っていた、逆さまの状態で。

そうやって、頭上で狼狽え騒ぐ【人間達】を、表情を感じさせぬ顔のまま、暫らく無言で眺めていた。

その姿は、【人間達】の愚かで無様な振る舞いを、呆れている若しくは哀れむかのようであったが、やがて踵を返すと、影の蟠る暗い天井を、誰にも見咎められる事無く、逆さまのまま悠然と、歩き去って行った。

……途中まで、シリアスだったのに何故あそこで、突っ込み入れたし……？

「……あの場面での突っ込みは、仕方無いだろおおお……」
「……？」

Episode:09 ソシエットの狂君主(後書き)

やっぱり、最後はグダグダでしたw

Episode:10 究極の拉麺を求めて(前書き)

かなり、短くなっちゃいました。

みんな、暑さが悪いんです(T T)

Episode:10 究極の拉麵を求めて

やあ、おはよう！

ここ暫らく、拠点の拡張とか眷属の人数も殖^ふえて順調に日々を過ごしている、蝗^{アブドーン}の王だ。

最近のマイブームは、”元の世界の食事の再現”。

転生前は、拉麵が大好きで”隠れた名店”を探して歩き廻ったモノさ。

【エルフ】や【コポルト】の集落と交易を始めたお陰で、”良質な小麦粉”が手に入ったんだ。

その小麦を見てたら、どうしても拉麵が食べたくなくて、挑戦してみる事にした。

眷属達も、俺の知識を共有してる為か、実は拉麵に興味津々だったんで、あっさり食いついて来たw

とは言え、簡単に事が運ぶとは、思って無かったんだが、割と簡単に解決した。

まず、一番の障害だったのが、”正確で細かい造り方”なんだが、【知識神の贈り物】ういきへてあに載ってた。

【知識神の贈り物】ういきへてあマジパネエっす！

次に問題になったのは、”調理道具”だったんだけど、意外にも【マネエ・・・】システムで解決した。

どう言う事かと言うと、”調理器具・拉麺セット10組”が4マネエで交換出来るのを【グフたん】が教えてくれたのだ。

………つて、安!?!?

【マネエ・・・】関連ではその他にも、”調理器具・中華セット10組”が6マネエ・・・、”携帯食料100人・10日分”が300マネエ・・・等があつて、どうやら、”人間の所為で生活を追われた亜人”の保護をし易くする為の措置として、食料品関係は異常に”コスト”が安いのだそうだ。

さすが【神様】、そこに痺れる!憧れるう!!

まあ、現状で保護しないとダメな亜人とか居ないんで、拉麺に【マネエ・・・】次ぎ込んでも大丈夫だろw

一応、70万あった【マネエ・・・】の負債は、全て返済済みだ。へんさいけいす

貯金が2000マネエ・・・しか無くなつたけどな。

今は、20人程に”**仕事**”^{抹殺}を振り分けて、【マネエ・・・】を稼ぎに
逝かせてる最中だ。

…そんな訳で、麺やスープの熟成も【腐蝕神の眷属】を使って、あ
っさり終わったので、これより調理に移る！

うおお〜〜!!

ドンドンドンド！ パフパフ!!

……………そんなに楽しみだったんですか、【アリさん】……………。

【アリさん】にも話をした処、どうやら”**拉麵**”に非常に興味を引
かれたらしくて、すげえ楽しみにしてたのは知ってたけど、ここま
で、テンション上がってるとは、思わんかったわw

つーか、その”応援セット”どこで調達したしw ……そう
すか、漏れの【マネエ・・・】ですか……。

【グフたん】も興味を引かれたっポインだけど、表情判かんねw

まあ、ともあれ気を取り直して調理すつか。

この為に”調理器具・拉麺セット10組”を5セット購入し、岩山の一部をくり貫いて、この厨房を造ったんだしな。

因みに、これだけ掘ってもこの巨大な岩山のほんの一部分しか使
て無いんだw

岩山^{デケ}巨大エw w

そして、2人1組で50セットになった眷属の、片方50人が一齊
に、煮立ったお湯の中に麺玉を入れ始める。

作るのは、まずは250人分。(幾等なんでも、正確な数が判らな
い【アリスさん】全員分は無理だから、日替わりで提供する事にした。
)

うおお〜!!

ドンドンドン! パフパフ!!

次に残った相方50人が、中華鍋で、具材を炒め始める。

うおお〜!!

ドンドンドン! パフパフ!!

麺を茹でてる方が、茹で上がる合間を利用して、ドnbrりとスープを用意する。

うおお〜〜!!!

ドンドンドン！ パフパフ！！

いや！【アリさん】どんだけテンション上がったんの！！？

最早、何かする度に笛や太鼓叩いてますよ！！！！？

そして、その声援で調子こいた最前列の眷属の一人が、ドンブリを宙に投げ、横に伸ばした腕にストツ！ストツ！ストツ！と一列にドンブリを受け止めて、次々にスープを入れると言うパフォーマンスをかましてくれたんですが。（藻マイラ、拉麵作るの初めての筈だろ！??）

コントロールを失った一個のドンブリが、”ひゅ〜〜〜つ”と飛んで来て

「「「「「あつ（汗）「「「「「

”すぽっ”と俺の頭に被さりましたよWWW

じゅわ〜〜!!

ドンドンドン！ パフパフ!!

……【アリスさん】、漏れの事が嫌いになっただんですか？（涙）

「これはひどいw」

「いや！ きっと悪気は無いんだよ！？」

「そそ！ 勢いで太鼓叩いてるだけだと思っし！？」

「多分、ナニも考えていないだけだと思っしw」

「無我の境地って奴だ。」

「絶っ^ぜ対^てえーっ違っしw」

・
・

.....

.....

出来上がった拉麺は最高だった。

本来の味の他に、”懐かしさ”で味付けされたその麺は、夢にまで見た”究極の拉麺”って感じで、俺は泣きながら麺を啜り続けた。

∴俺らは涙は流さないんで、見た目は無表情なんだけどね。

【アリさん】にも、大好評で期待を裏切らなかつたようだw

【グフたん】は、無表情に触手を伸ばして麺を啜っているが、”喜

「… nder” 時の思念が伝わって来るので、満足しているんだろうw

……ドンプリから拉麵啜る【ZOID Sグスタッフ】か……。シ
ユール過ぎるww

「… 僕も食べたいです、王様（泣）」

……んん？ 聞こえんなあ？

「うっ、悪気は無かったのにいゝ(T?T)」

「まあ、チカタナイw」

「うん、チカタナイねw」

「アミバかよw」

「取り合えず27号は今晚、そのまま逆さ吊りな。」

「うえええええええん!!!」

Episode:10 究極の拉麺を求めて(後書き)

~~~~~  
おわり。

a n o t h e r : : 0 1 転生者の受難・エルフの場合(前書き)

初の外伝モノです。

アムロくん視点ですね。( ^ ^ )

「やあ、僕の名前は”レイ・アムロ”、この名前で判ると思うけど、いわゆる【転生者】って奴だ。」

「種族は【エルフ】、森に住んでて精霊魔法が得意なナイスな種族の出身で、」

「……現在は縄でグルグル巻きにされたまま、逆さ吊りになってる。」

「どうしてこうなったw」

「……そろそろ、現実逃避はお終いか？ だったら、いい加減に吐け。」

現在、僕をこんな目に合わせて、棒でグリグリと突付いて来るのは、最近になってから【神様】に扱って生み出された、13番目の種族で、【飛蝗】に似た外見の”軍団”と言う名の連中だ。

とりあえず、こうなった時の経緯を、始めから説明しよう。

・  
・

・  
・  
・  
・  
・



.....

ファースト・コンタクト  
最初の出会いは、衝撃的だった。

僕達は、食肉を集めに【世界樹の森】に、数人の仲間ですりをしに  
来ていたんだ。

基本、僕達の食性は「穀物・木の実・果実」がメインの”草食”な  
んだけど、偶には”動物性タンパク”も摂取ないと為らない、栄養  
バランス悪くなるからね。

それでも、他の生物に比べれば、愕くほど少ない摂取量で十分なの  
で、今みたいに数人で班をつくり、定期的に狩りをして、保存して  
置くだけで済むんだけどね。

あの時は丁度狩りの日で、僕が当番に当たった日だったんだ。

その日は朝から森が騒めており、何だか普段とは様子が違ってい  
た。

いま思えば、”彼”の来訪を妖精や精霊が【歓迎】して居たんだろ  
うね。

そして、”彼”が落ちて来たんだ、比喩的表現じゃ無いよ？ 本当  
に空から落ちて来たんだ、受身も取らずに！

地面に開いた【人型の穴】を見た時は『マンガみたいだ』と思って  
目が点になったものさ。

でも、本当に愕おどろいたのはそのまま元気に、穴から這い出て来た時だ。  
てつきり、死んでると思っていたからね。

そのまま、穴から顔を出して『じーーーーーっ』と、  
見つめ合っていた（決して色っぽい意味じゃ無く）”彼”と僕らだ  
ったけど、”彼”が【アクション】を起こした時に、つい言っちゃ  
ったんだw

「コイツ動くぞ!?!」ってさ。

…思えばあの時から、目を付けられてたんだろうね。

我ながら、迂闊だったなあ…。

それから、僕らの長や幹部達が現れて、”彼”と色々話をしていた。なんでも、羽を出せば飛べたけど、『初めて見た世界の美しさに見とれて』、飛ぶ事を忘れて見入ってたんだと。

どこから、突っ込んで良いんだろ？

それで、ピンピンしてたんだから、『あの高さから落ちるのなんて意識する必要が無い』って事だよな？

って、どんだけだよw ……チート生物乙w

その後、僕らの里に着いたあとは、里の重鎮達と『彼が与えられた使命について』、話をしてきたみたいだけど、それが終われば、宴会だった。

僕が、”彼”も【同じ世界】から来た【転生者】だって、気づいたのはこの時だよ。

…なんで判ったかった？

”彼”が楽器と羽の演奏で歌った曲が、【ゴダゴ】の曲だったからだよ!!!wwww

その後、長に許可を貰った”彼”は、腰のポーチからデカイ卵を取り出して（四次元ポットまで持ってんのかよ！？）、世界樹の根元で卵を孵化させ様としていた。

長と僕ら数名は念の為、見学（と言う名目の監視）をしていたんだけど。

最後の奴が【エッグン】みたいだったのは笑えた。

【同じ世界】から来た【転生者】として、色々話を聞きたかったけど、里中で”彼”とコンタクトを取れば、目立ちすぎるので諦めるしか無かった。

今度、機会をつくって会いに行ってみよう、と思っていたら。

”飛蝗<sup>ホッパー</sup>”と名乗る、”彼”の眷属達が【行商】にやって来た。

彼らが造ったと言う、この世界には無かった”蒸留酒”、”サトウタケ”の他にも質の良い肉製品（燻製・腸詰）などの交易品は、里の皆には、大好評だったし、僕自身も懐かしい食べ物に、つい頬が緩んでしまったものだ。

その上、彼らとの交易が盛んになれば、彼らを訪ねて行く機会も増える筈<sup>はず</sup>だし、僕は素直に嬉しかった。

だから、何回目かの【行商】でやって来た彼らが、偶々《たまたま》そこに居た僕を指名して客人として、彼らの拠点に招待された時

も、疑う事なく付いて行ったんだ。

これで、色々と話が聞けるって……。

……そんな時期が僕にもありましたww

そして縄でグルグル巻きにされ、逆さに吊り下げられてる。【今  
ここw】

「本当にどうしてこうなったw」

「…まあ、様式美って奴だねw」

「漏れらは、藻マエがどんな経緯でこの世界に来たかを知りたいだけだw」

それで逆さに吊りとか、ありえないだろお!?

「だから、様式美だとw」

そんな、様式美は認めねえええー!!!??

「良いから、早く吐いちゃえよW」グリグリ

ちよWWW!?!? まWWW!?!?

.....グリグリすんなー!?!?!? W

「だが、断る！」キリッ

「まただよ(笑)」

「理不尽すぎる!?!?!?」

•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•



「成る程、別に使命や仕事がある訳じゃ無く、偶然、輪廻の輪から外れて、さ迷った所を【造物主達】ロベルトと愉快な仲間に保護されて、この世界に転生したと。」

「そそw チート能力は無いけど、元はニートのデブヲタから、スマートでイケメンの【エルフ】になった上に、憧れの【魔法】まで使えるんだから、【神様達】にはマジ感謝してるよw」

「それなら、そうと素直に言ってくれば、あんな事には為らなかつたのにw」

「いやっ!?!おかしいでしょおお!?!?  
何も聞かれる前から、イキナリ逆さに吊りにされたんだけど!?!?!」

「まあ、様式美ですからw」

「だから！そんな様式美は認めねえっつってんだろおおおおー」

・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「…成る程、あんた俺と違って苦労してんだな…。」

ひとしきり、叫んで落ち着いた後、僕は彼の身の上話と使命についての話を聞いていた。

人間を滅ぼす為の”因子”としての自分、両親との一方的な別れ、背負った使命の重要性、どれもが重く悲しい事だ。

「【造物主達<sup>ロベルト達</sup>】には、本気で感謝してるんだ。人間以外<sup>…</sup>の存在<sup>…</sup>にしてくれたって事をさ。」

「…そっか、本人がそう言うんじゃ、他人の僕がとやかく言う事じゃ無いな。」

まあ、今聞いた内容が、僕の口から他に漏れる事は無いと思ってくれていいよw」

「お、サンキューw それより腹減って無<sup>ね</sup>え？  
懐かしい食い物用意したんだけどw」

「!?!?!この懐かしい香り！ まさか!?!?」

「そそw 拉麺だよww」

「藻マエは、最高だあああ~~~~っ!?!」

「まま、いいから喰ってみw」

「頂きます!?!」

ズルズル！ はふはふっ！ ズルズルズル~~~~!!

「うめえ!! 懐かしいこの味！ 二度と喰えないと思っていたよ  
~~~~!! (泣)」

•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「いや〜恥ずかしい所見せちゃったな、つい懐かしくてさ〜（照）」

「これからは、喰う機会も増えるんだから、良かったんじゃない？w」

「ああ！迷惑じゃなきゃ、又食べに来させて貰うよ、今度はちゃんと代金払ってさ！！w」

「H A H A H A！ 何いつてんの、藻マエは今日から【エルフ】と【レギオン】の”親善大使”として、ここに常駐だぞw」

「……………はあ！！？」

「既に【エル・パス】の爺じいさんには、手紙で確認して、『好きに使って下されw』って返事が来てるぞw」

「あのジジイ！ 売りやがったあああああ！?!?」

「これは酷いw」

「チカタナイねw」

「うんうん、チカタナイw」

「ずきずき……………!!?!?」
「(泣)……………」

a n o t h e r : : 0 1 転生者の受難・エルフの場合(後書き)

ネタに困った時は、外伝書くと便利ですなw

Episode:11 セイレーン、儚き幻想の彼方(前書き)

みなさんのお陰で総合ユニーク2000突破しました！。(^ ^)

Episode:11 セイレーン、儂き幻想の彼方

今日は、会った事の無い種族に会いに行こう！

1号〜5号は早速、支度しやくすね。

「…また、唐突にw」

「何時もの事だけどねw」

「まただよ（笑）」

「猫耳さんの所？」

「我が俣だなあ、相変わらずw」

今回、訪ねるのは【セイレーン】の集落だね。

「さすが王様！そこに痺れる、憧れる！！」

「一生憑いて逝きます！！」

「王様は漏れらの埃ほこりです！」

「前は6号〜10号だったからな〜、今回は藻マエラを連れてかないと不公平だろ？」

「王様サイコーw」

「抱かれてもイイっすw」

「うっかり、惚れそうになりましたあ！w」

「うほ！イイ王様！！w」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

…そんな訳で、漏れらは現在いま、【ワン・ターレン】に聞いた森の手前に来ています。

「速!？」

「これが、王様のスタンド能力か。」

「「ここで、4号(5号)は絶対違つと断言してみます。」」

「御坂シスターズ乙w」

元の世界の伝承では『その美声で船乗り達を魅了した』と、あるから水辺に住んでるかもしれん、川を探して上流に向かおう。

「りょうかい」

「あっちの方から水の匂いがするよ。」

「うん、水音も聞こえるね」

「距離はどのくらい?」

「3モルダントくらいじゃね？」
キロメートル

……「空気に混じった”水の匂い”と、微かに聞こえる”水音”からしたら、そんな感じだな。

んじゃ、そっちに行こうか。

音も無く、気配も希薄な状態で、廻りの景色に溶け込みながら、のんびり景色を楽しんで歩く6人の昆虫人。
インセクター

…なんか、平和すぎて昼寝したくなって来たわw

ああ一応説明しとくと、漏れらが足音起たてないのも、気配が希薄なものもデフォルトなんで、別に意識してやってる訳じゃくて、無意識にそうなっちゃっただけだからw

しばらく歩いていると、大きな樹の下に【トゲに覆われた丸くて茶色い木の実】が、大量に転がっていた。

懐かしいなー、昔よく喰ったな。

今度、栗ごはんもいいかもなーw

エ
エ
エ
エ
エ
（ ; ）、 （
エ
エ
エ
エ
エ

又か？ 又なんですか！？

” 異世界の常識シリーズ ” ですか？ そうなんですか！！？

•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

……
アバドーン
蝗の王です、
なんとか誤解を解いたとです。

……
アバドーン
蝗の王です、
どっと疲れが来たとです。

……
アバドーン
蝗の王です、
いつか”神殺し”
を手に入れるとです。
#

「お、やっと着いたみたいだね。」

「結構、大きな溪流けいりゅうだねえ。」

「深さも其れなりにありそうw」

それじゃ、この川に沿って上流に行ってみつか。

其れから、暫しばらくの間黙々あいもくもくと溪流けいりゅうを遡さかのぼって行くと、一つの生命反応を感知した。

「なんだろね？」

「大きな生体反応だね」

「この反応なら、かなり強い生物だよね？」

手掛かりは何も無いんだ、一応行って見よう、∴原生生物なら狩つて、お土産にも出来るしな。

……そして、念の為に気配を殺して、茂みの中を移動する俺らは、こちらに背を向けて水浴びする女性を見つけたんだw

背中しか見えないから顔立ちは判らないけど、腰まで届く長くて艶のある黒髪は素晴らしかった。

(ちょ、王様マズインじゃあ?)

(つむ変態と言つ名の紳士としては、このまま覗きを続けるのは沽券にかかわるなw)

(変態と付いてる時点でアウトでしょw)

(覚悟を決めて堂々と出て行くしかないな。)

(…ナンだろ?嫌な予感しかしないんだけど…) 【正解】

ガサガサ

もしもし、お嬢さんちょっとお尋ねしたい事が……。

()(ちょ!?! イキナリ出ていくとか!?!)()()

そして、漏れらに気づいた女性は堂々と振り向いて、こう言ったんだ。

『ぬう！何奴なにやつ！？』

ワシを【セイレーン族】族長・次女、【すつざんあんどんこ枢斬暗屯子】（17才・処女）と知つての狼藉であるかぁ—————！！！？』

……………「ふうっ!!」 【吐血】

(キアア (T T) !!!!!!!)

(いやあああああ!?! 化けモン!?!?)

(ヒゲ生やした乙女とか!?!?)

(それより、王様がリジエクシオンで、血イ吐いたああ!?!?)

(いや! リジエクシオンは別の世界だから!?!w)

(予感的中!?!?)

『ぬお!?! いきなり血を吐くとは面妖な!?!?!?』

(…オマエが一番面妖だったの…)

(バルクアップした筋肉で乳と言うより”大胸筋”なんですが…)

(服着ろ!目に猛毒すぎるだろ!?!?)

(それより、さっき【セイレーン】って名乗ったよ!?!?)

(なんと言う【嘘・誇大な表現・まぎらわしい】ですかw)

(ジャロに訴えるってレベルじゃ無えーぞー!?!?)

(俺の知ってる【セイレーン】と違うw)

……………むくっ

(あ、復活した。)

「驚かせてしまい、申し訳ありません”美しいお方”。

我らは、怪しい者ではありません。

【造物主】に生み出された13番目の種族、”レキオン軍団”の長、アバドーン蝗の王と、その眷属たる飛蝗達ホッパです、お見知りおき下さい。

本日は、【セイレーン】の長に挨拶すべく、【ワン・ターレン】殿に教えられたこの森おまに赴いたのですが、道に迷ってあのような場所に出てしまったのです。

願わくば、”長”の処に案内して戴きたいのですが。(キリッ)「

『ふっはははっ！第一声が”美しいお方”とは、正直な御仁よ！（ニヤリ）』

そういう仔細があるならば、是非も無い事、ご案内申す！我が後について参られい。』

（ちよ！？ どうしちゃったの！？ 王様？）

（アレを”美しい”とか、有り得ないでしょ！？）

（……あ、もしかして……。）

（なんか、分かったの？）

（多分だけど、さっきのインパクトが強すぎて、まだ”主脳”がオチてる状態なんじゃ……？）

（…っわw）

（だから、身体中に幾つか存在する”補助脳”が日常生活を営んでい
るんだよ。）

（なんと言うエイトマンw）

「それよりも、美しいお方。」

出来れば、お召し物を身に着けて戴きたいのですが、若い眷族達には”目の毒”です。

『ほほう、”我がエロス”はそのような小童こわっはさえも、幻惑しよるか
（ニタアリ）』

（目に”悪い”って言ってんだよ!?!）

（断じて”エロス”なんてチャチなモンじゃねえだろ!?!）

（もっと、恐ろしいモノの片鱗を味わったよ!?!）

『ふむ、では暫しばし待たれよ、蝗アバドーンの王殿。

先ほど洗った、ワシの”越中”も乾いた頃ゆえ。』

すぱーん、すぱーん！

（”越中” フンドシかよ！？）

（タオルで『すぱんすぱん』股間を拭くなぁー！！！？）

（後ろ向いても、見える【全方位視界】が憎すぎる！！w）

（これ、何て罰ゲーム！！！？）

・
・

.....

.....

アバドーン
蝗の王です、只今化けモン殿の案内で、溪流沿いの道を進み【セイ
レン】の長に会いに逝く途中です。

.....
帰ってえw

……マジ帰りてえww

大事な事なので、2回言いました。(泣)

くそう、気絶してる間に”補助脳”^{サブ・ブレイン}が、案内してって言っちゃまったしなー。

”補助脳”^{サブ・ブレイン}は自我とか感情が無いから、それを考慮しないで【目的遂行】の為の判断を下すからなー。

気絶するまでは、確かに【セイレーン】の長に会う心算^{つもり}だったから、運が悪かった。(涙)

……ゆらあ……

ん？今水の中でナニか動いたような……？

『むう！ 汗子かんこではないか、突然水の中から現れたら、客人達が驚くであろう。』

『申し訳ありません。』（ニヤリ）

姉者が、見慣れぬ方々と歩いておられたので、つい悪戯心が湧きま
して。』

『ふう、相変わらず”おちやっぴい”な娘よ、仕方の無い奴めW

失礼いたしましたお客人、之これなるは我が妹、【成吉思汗子じんぎす かんこ】（16才・
処女）という者。

先ほどの”邪気の無い”悪戯ゆえ、以後見知り置き下されい。』

（いや、邪気ありまくりだろ!?!）

（ちっとも”おちやっぴい”じゃねえよ!?!）

（”おちやっぴい”って言葉に謝れW）

『それと、此方の御仁は彼ら”レギオン軍団”の長、アバドーン蝗の王殿。
どつやら驚くと、血を吐く”習性”が御有りのご様子。

今も、うぬの美しさに驚いたあまり、血を吐いたようであるな。』

(ねーよ！そんな”習性”w)

(っーか！どんな”習性”だよw)

(あと、美しいとか”吹いて”んじゃねー！！！)

『ふむ、思わぬ時間を食いましたな、先を急ぎましようぞ。

早く、族長にご紹介したいですからな。

惜しむらくは、今日は長女である姉者、**【ほくと北斗羅王姫あめ】**(18才・
処女)が不在である事よ。』

『ワシとあんとん暗屯子姉様は、黒髪であるが。

羅王姉様は、毛先をドリルのようにカールさせた、輝くような長い金髪をしておる。』

(…居なくてよかった…)

(たのむ帰してくれ、漏れらのライフはとっくにゼロよ…。)

(化物屋敷ですか…は!?)

.....

.....

..

…… やつと、着いたか。（着きたくは無かったけど）

案内された住居は、確^{しっか}りとした作りであるが質素で、この部族も自然の一部として生きているのだと思わせた。

暗^{あん}屯^{とん}子^こ殿^いが手招きしているので、住居に入って逝くと奥の座敷に黒くて長い髪の女性？が此方に背を向けて座って居た。

『母者、此方の御仁は”レギオン軍団”の長、アバドーン蝗の王殿と、その眷属たる飛ホッ蝗殿達です。』

本日は母者と、我ら【セイレーン】に挨拶しに参られたそうなので、ご案内申し上げます。』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『？……………母者？』

くわっ！……！！

『！』
『ワシが【セイレーン族】族長！ ”江田島平” である！……！！』

……ぶくぶくぶくぶくぶくぶく 【アワ吹いて気絶中】

（ちょ！！？王様ああああ！！！？）

（コイツがそうかああああ！？）

（もうやめて！王様のライフはもうマイナスよ！！）

（もうヤダこの部族w）

『ぬお！？ 【神託】では飛蝗バッタと聞いておったが、”蟹”であったか！？』

（いや、オメエの所為だろ！？）

（蟹ちやうわ！）

（それより！王様の口から魂出てるよ！？）

（押し戻せえええ！！！？）

(いれ、何て混沌^{カオス}W)

・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

……まあ、そんな喧騒の中、無事に再起動を果たした俺は”蒸留酒”や”腸詰”などのお土産を渡し、挨拶を済ませて逃げるように（実際、逃げたんですけどね）その場を辞して来たんだw w

そんな訳で、漏れら6人は背中の中を飛び、家路を急いでいる最中だ。

「あゝ怖かった。」

「マジありえねーw」

「漏れ、今回の件で”最強生物”としての自信無くなったわw」

「記憶封印してえw」

……取り敢えず、漏れただけこんな目に会った腹立つから、残った
連中にも【なづろーでいんぐ】で、”トラウマ”のお裾分けするw
ww
ww

「最悪だ、この人w」

「いいぞもつとやれw」

「さすが王様！そこに痺れもしなけりや、憧れもしないけど！！w
ww」

「貴方って、ホント最低のクズだわww」

その後、拠点に帰った漏れらは、『土産話を聞かせる』と言って集めた95人に、『なうろーでいんぐ』を使った「リアル疑似体験」を転送して、”トラウマ”のお裾分けを遣ったんだw

∴その所為で、拠点は【阿鼻叫喚】の坩堝るつぽと化し、それから暫らくの間、漏れは皆みんなからハブられますたw

だが！懲こりぬ、引ひかぬ、省かえりみぬ！！w

Episode : 11 セイレーン、儚き幻想の彼方（後書き）

最後の最後に最低に終わる W

そしてホントに儚い幻想だった件 W（伝説と現実のギャップ的に）

Episode : 12 強さの意味は（前書き）

昨日は忙しくて更新出来ませんでした。

ホントにすいません。

Episode : 12 強さの意味は

やあ、セイレーン？の所為でトラウマが増えた、蝗アバドーンの王だ。

最近ハッパは、抹殺対象の外道共も、順調に減って来てるので、20人位の飛蝗ハッパに引き続き殺やって貰い、

残りの80人には、【魔獣】の討伐を重点的に殺やって貰おうと思うんだ。

【魔獣】の討伐に関しては、被害を受けたのが人間ヒューマンだけだったから、それほど力を入れて無かったんだよね。

亜人は強いし、自然と共に生きてるから”危険”に対して敏感で謙虚だし、”生きる”って事に関しては真摯で必死だからね。

その点、迂闊で油断しすぎる人間ヒューマンは、見得だのナワバリニッパだのに拘こって、防げる被害を拡大させているんだよね。

…そのまま滅びれば良いのに。

まあ、そうなる【造物主ロヘルト達】が悲しむからね。

仕方ないから、全滅だけは回避しないと為らない、メンドクさ！

…本当に滅びれば良いのに。

大切な事なので2回言いましたw

んで、なんで今回、方針を修正したかと言つと！

さっき、言った理由の他にも、レベルアップ。…要するに鍛える為だ。

俺達は強い、どんだけ強いかは”設定”の項目を読んでくれれば分かるw

それでも、”無敵”でも、”最強”でも、”不死身”でも無いんだ。

生まれたままでも恐ろしく強いけど、その強さの上に胡坐をかいてボケっとしてたら、鍛えに鍛えた他の種族に負けるんです。

この前の【セイレーン？】相手みたいに…！

……先日、出会った時に【コイツには勝て無エ!?】と、俺の本能が悟ってしまった!

神に使命を託されて、最強生物として生を受けたこの俺達が!!

自分の中に此れほど強烈な”誇り”と”矜持”が眠っていようとは、意外と言えば意外だったけれどもね。

でも、そのお陰で気づいた、気づかされてしまった!

自分達は、油断してた!…慢心してた!…強くなる為の努力をして無かったって事を!!!

俺は、元々平和な日本で暮らしていた逸般人。

闘いについては臆病で、危険に対して神経質なほど注意を払っていた。

戦いの直前は常に周囲への警戒を怠らなかつた。

戦ってる最中は常に油断を戒めていた。

戦いが終わった後も残心を行っていた。

でも、強くなる為の努力をして無かった、その証拠に俺らのレベルは今でも全員1ヶ台でしか無い。

最高レベルが俺の”9”で、あとは平均4〜7。

これは、お話に為らない。

例えるならLV1ゴーレムがLV99スライムに勝てない様に、いくら種族自体が強力でも鍛えてなければ、鍛えまくって努力した”弱い種族に”勝てない事だつてあるのだ。

318

……思えば何て当たり前の理屈、当然すぎて笑えてくる。

だから、鍛えなければ！

強く、より強く、更なる高みへと！！

その為に【10万マネェ・・・】もの大枚はたいてスキル【鍛錬の鬼イ】を手に入れて、より効化的にLVアップ出来る様にしたのだから

【鍛錬の鬼イ】 通常は敵を倒す事により失われた、その”存在の因果律”を補充する為に、世界が”失った分の因果”を倒した相手に追加する事で、”存在の格”が上がりLVアップが行われるが、このスキルを所持する事で、敵を倒さない”訓練”でも”経験値”が得られ、それを一定量貯める事でLVアップが可能となる。

「……………そんな訳で藻マイラ、死ぬ寸前まで戦え。」

「ちょｗｗｗｗ」

「……………またかｗｗ」

「王様いい加減、突然な無茶振りするの止めようよw」

「氏ね、じゃなくて死ねw」

「我が仮すぎるw」

「……藻マイラ、漏れはこの世界に来てから、毎日が幸せの連続でした。」

この世界の神様達に感謝しました。

この世界の美しさに魅せられました。

この世界の善良な住人達（人間除く）^{ヒューマン}が好きになりました。

これからだって、どんどんこの世界を好きになって、幸せを感じるだろう。

そして、何より藻マイラと言う眷属、いや家族を得られたって事が、一番の幸せで。

……誇らしいー！

「「「「!?!?!」」」」

「……王様。」

「なのに、俺の油断、俺の慢心故に、藻マイラに”更なる高み”へと続く道を指し示す事を怠った。

怠ってしまった。

……

…もっと、誇りたいんだよおお！ 藻マイラを!!

そして誇りにされたいんだ！ 藻マイラに!!」

「その為には、強くなければ！力が無ければ始まり無いんだ！

別に力だけが全てだなんて思っちゃいない。

自分を高めるなら、他の事だって遣らなきゃダメだ。

でも、俺らは最強生物。

まずは、最強に為らなければ、他の一歩は踏み出せない！」

「お、王様！」

「王様の愛に、全漏れが泣いたし！」

「漏れ、ここに生まれてよかった」

「僕もこの家族を誇りに思うよ！」

「俺達強くなるよ！」

「うんうん、そして漏れの為に馬車馬の如く働いて、漏れに楽隠居させるじー……」

「……最悪だこのやろー！ー！？」

「態々、上げてから落とすやがった!!!?」

「裏切ったな？僕の思いを裏切ったんだ！カヲルくん!？」

「そのまま、死ねばいいのに!？」

「このロリコンめ!!!」

「それじゃあ、早速【魔獣】を狩って、【マネエ・・・】と経験値を稼ぎに出発!」

「『『『『『あっさり、流されたし!!!?』』』』』」

「へ〜い」

「逝ってきま〜」

「あ〜〜だる」

……ちくせう、折角イイ事言ったのに、最後の最後で照れくさくな
って、”^{オトシ}やっちまった”ぜ……（泣）

（まあ、王様も最後照れくさくなったからって、アレはないわw）

（シンデレレw）

(王様のツンデレは最高やでえ〜〜w)

(へタレだしw)

(この方が、漏レラらしくて良いんじゃないかね？w)

∴あ、1号〜5号は残るよじつに。

「まただよ（笑）」

「……今度はなに？w」

「このメンバーだと嫌な思い出しが無いんだけど？」

「主に、【セイレーン？】的な意味で。」

「やめろ！その単語を口にするな！w」

「口にするだけで呪われそうだw」

安心しろ藻マイラ、今度の”^{抹殺}仕事”はこれだ。

『最近、^{バステト}猫型獣人の集落付近に、頻繁に現れる様になった、空飛ぶ【魔獣】の群れの抹殺。報酬40000マネエ・・・』

「^{バステト}猫型獣人来たーw」

「キタ

(。。(

!!!!!!」

「ワツフルwワツフルw」

「この展開どこかで見たような？」

「これが、^{デジャヴユ}既視感って奴だと言うのか？w」

「「ここで、4号(5号)は絶対違つと断言してみます。」」

「この前の反動もあつて、スゴイ喰い付きだな藻マイラw」

「今度は、実物知ってるから安心だねw」

「ああ、今度こそモフモフだな！(キリッ)」

「どんだけイケメンなんだよw」

まあ、大丈夫だろ、”突然変異”でも居ないかぎりW W

「「「「「 フラグを立てるなああああ!!? 「「「「「

・
・

・
・
・
・
・

.....

そして、時は動き出す!!

「ザ・ワールド乙w」

「んで、ここはどこなん？」

「漏れら、急な展開にも動じなくなっ たしw」

ここは、バステト猫型獣人の集落から3キロメートルモルダント離れた地点だね。

「よっしや、【マララム酒】スタンバイ良し！」

「マララムの粉と砂糖で作った【ネコだんご】OK！」

「その他、交易品問題無し！！！」

こやつ等、猛って（盛って）おるわww

んじゃ、バステト猫型獣人さん達を刺激しない様に、ゆっくり歩いて逝こう
かw

「その字やめれw」

そうやって、漏れらが集落に近づいて行くと、なにやら騒がしい感

じの喧騒が聞こえて来た。

「なんか、騒がしいね？」

「うん、活気とかってレベルの騒がしさじゃ無いね。」

「漏れらの容姿に警戒してるとか？」

いや、漏れらの事は全ての種族の、”長”や幹部に伝えられてる筈だから、こんなにも露骨に警戒しては来ない筈ナンだが？

332

「それじゃあ、歓迎されているとかw」

「いや、悲鳴とか聞こえるしw」

「「「…悲鳴？」」「」

良く見たら、集落の中を右往左往してね？

「……って言うか、逃げまどってるんじゃないあ……？」

「……って、王様！あれ！？」

2号が声を上げた瞬間！2号から全員に【マイクロセカンド】の領域で映像と思考が流れ込み、それによって全員が1000分の1秒の中での思考に突入する。

（子供が、複眼を持ったプレラノドンに捕まり、連れ去られ様としている！）

子供は俺が助ける！！

お前らは、全員で他ののを蹴散らせ！人命救助を優先して牽制だけでもいい！そして、一番重要な事はワザと逃がす事だ！……奴らの身体に付いてる”寄生虫”を発信機代わりに使って、巣を特定する

レーザーで左右から半分……にされた【複プテ】が地上に崩れ落ちると同時に、他の【複プテ】共も逃げ出したようなので、他の5人も集まってきた。

そして俺は、意味が分からないな為りに、俺が自分を助けたと判ったのだろう、キラキラした目で見上げて来る猫型バスター獣人の子供を抱いたまま、
未だに、呆ぼけてる”長”らしき人物に、自己紹介をするべく歩き出したんだw

Episode:12 強さの意味は(後書き)

今度はネコミミですよ、猫耳！ww

Episode : 13 猫の森には帰りました(前書き)

13話投稿！。

猫の村でのお話しW

Episode : 13 猫の森には帰れました

やあ、現在”猫型獣人”^{パステト}の集落に居る蝗^{アバドーン}の王さ。

あの後、【パステト】の長に挨拶し、此処に来た目的（魔獣の討伐と交易）を話し終わった所だ。

部族の子供を救い、【魔獣】を追い払った事で、彼らはかなり感謝してくれて【魔獣】の情報や協力は勿論、【交易】の方も出来る限りの融通を効かせると、約束してくれた。

話しを聞いてみたが、幸いな事に今まで犠牲者は出なかった様なので、今回も間一髪間に合ったらしい。

それでも、獲物を求めて森や平原に出かけた時などには、何回か襲われたりもしたので、困っていたそうだ。

【パステト】や【コポルト】等の獣人種族は決して弱い種族ではない、むしろ強い部類に入るのだが、如何せん敵は空を飛ぶ^{いかん}。

大地を力強く蹴る脚も、大木さえも薙ぎ払う強靱な爪も、飛んでる相手には届かない。

そもそも、上からの攻撃と言うのは、かなり防ぎ辛いのだ。

そうした理由から、【魔獣】に対して有効な対処が出来なくて、かなり困っていたと言っ。

そして、やはり此処にも8号が助けた人が何人か居たらしくて、8号に”ありがとう”と伝えて欲しいと伝言を頼まれた。

【パステト】達は歓迎の宴を開くと言ってくれたが、流石に今日は集落が襲撃を受けたばかりだし、【魔獣】は追いつただけで、まだ何匹も残っているから、討伐が終わったらお願いすると言っていた。

さすがに撃退した今日ぐらいは、再度の襲撃を考え無くても良いだろうって事で、今夜一晚集落に泊めて貰って、明日討伐に向かう事にした。

今夜は【魔獣】について分かっている情報を、出来る限り集めてから、長の家で眠りについたんだ。

一夜明けて、早速俺らは寄生虫くんを発信機代わりにして、教えら

れた情報とすり合せながら、奴らの”巢”と思わしき場所に向かった。

奴らの巢は、”猫型獣人”バステトの集落から、そこそこ離れた処にある山の、山頂付近に出来た風穴を利用して作つてあるようで、寄生虫はっしんきに導かれてその場に行くと、ポツカリと洞穴が口を開けていた。

巢を見つけたからと言って、直すくに突っ込んだりはしない。

先まずは風の魔法を使つて、他に出入り口が無いか、手分けして探索してみた。

その結果、今俺たちが監視してる横穴の他に上に向かつて伸びる縦穴もある事が判明したので、2人をそつちに向かわせる。

そつだ、一応説明して措くけど、奴らが入れ違いで集落を襲うことも考えた古長の一人から、何人が残つてくれないか相談されたが、俺らは寄生虫はっしんきを使つて、奴らの個体数と位置を確認出来るので、心配要らないと説明しておいた。

そして、配置が完了したので、突入開始。

奴らはそろそろ起きて活動を開始する所だったのか、5匹は起きていたが他の3匹はまだ寝てるようだった。

まずは、1人1殺と指示を出し、それぞれの相手に向かつて行く。

とは言え、この【魔獣】は空中に居て攻撃してくるから厄介なのであって、地上に降りている時は動きはニブイしヨタヨタと動くので、あっさり首を刎ねて終わったが、俺は直後に横に跳んで避けた。

次の瞬間、俺のいままで居た場所で、鋭い鉤爪が空を切った。

どうやら、寝ていた奴らもやっと起き出して来たようだ。

次の攻撃に備えて身構える俺だったが、奴らは洞窟の外を目指して移動していた。

野生で生きる生物特有の”勘”で、この場所は自分達に不利だと悟ったんだろう。

だけど、やはり知能の低い野生の生き物、浅はかだ。

俺たちは、羽を伸ばして奴らを追いかけ、あっさりと追い抜いて奴らの退路を塞ぐ。

単純な直線で、長距離を競い会えば、奴らも俺たちと良い勝負が出来るのだろうが、あの図体でトップスピードに至るまでには、それなりの時間が掛かるのは必然と言うものだ。

だから、一瞬でマッハ3のトップスピードに至れる俺達からは、逃げられない。

逃げる事を放棄して、向かって来る奴らに対して、俺らは高速で奴らの廻りを飛び交い、”高周波爪刃”^{エルボ・ブレード}で切り裂いて往く。

一気に決りを着けないのは、地上に降ろして剥ぎ取る為だ。

【魔獣】の肉は栄養価が高くて、食用肉には理想的なのだ。

アリさんも、【イソギンサウルス】を持ち帰ろうとしてたろ？

…やがて、飛んでいる体力が無くなった【複プテ】は、地上に向かって降りて（不時着）して往き、俺らも後を追って地上に降りた。

あとは、首チヨンパ 解体 ポーチに入れる、のコンボ発生w

これで一応、仕事は終わったが、まだ後始末が残っていた。

「………すげえなコレ。」

「うん、壮観だね。」

「こんなに有ると、キモいなw」

「コレも始末しないと根本的な解決には為ら無いからね。」

俺達の前には、100個は超えるだろうと言う数の、【複ブテ】の卵がズラッと並んでた。

ここは、奴らの巢の中から続く、細長い裂け目を通ってきた処にある、孵化室と思われる場所だ。

「とりあえず、食用に出来そうな卵は回収して、孵化直前のは破壊するw」

「「「そだねw」「」」

「「「すごく、大きな目玉焼きが出来そうだと、4号（5号）は想像してみますw」「」」

「外の世界を汁じゆことも無く、他の生物の命を支える糧となる……。」

諸行無常を感じずには居られないが、これも、大自然の掬ってヤツ
だな。」

「汁じゆとかW」

「大自然の掬じゃ仕方ないW」

「そそWチカタナイWW」

「んじゃ、回収作業終わったなー？」

「「うん、こっちはok」「」

「「こっちも終了」」「」

「それじゃあ、こっちの始末も着けるか。」

.....”炎系下級呪文ラメエ”。

俺が放った”火の粉”が着弾すると、一箇所に集められた孵化直前の卵は”炎の柱”に飲み込まれて、蒸発して逝った。

ちなみに、俺たちの放つ”ラメエ”が、直径1ダル位センチで白く輝いているのは、それだけ【収束率】が高いって事だ。

俺らはチート生物だから、魔法の才能もハンパ無いんで、魔法制御や魔力の収束も他の種族とは勝負に為らないんだ。

それに、初めて使う魔法が嬉しくて、魔法制御や魔力の収束等の練習だけは、アホな程遣やったしなw

全ての始末を終えて、”猫型獣人”バステトの集落に戻って来た俺らは、まさに”熱烈歓迎”って感じの出迎えに会った。

これは、【コポルト】にも共通するんだけど、彼ら獣人系の種族は”力”を好む傾向にあり、”強い奴”に敬意を払う。

なにせ、敵で在ったとしても”強ければ凄い奴”と、ごく普通に考えるのだ。

だから、俺らもその例に漏れず、彼らの尊敬と好意を集めたんだ。

そして、結構空気な感じの長さんの名前は【ダルタ・ニヤン】と言
う名前だった。

先代の長が、老衰で死んでから古老や皆の推薦で選ばれたから有能
なんだろうけど、最近は何の所為か時々”置物”に間違えられると
笑って話していた気さくな爺さんだw

突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、

突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、

突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、

突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ、突っ込んじゃダメだ！

(シンジくんw)

(またかいw)

(つーか、ダルタニアンかw)

(三銃士とか居るんか?)

そんで、この後の展開と言つと、当然村を挙げての宴会だったりするw

俺らが持ち込んだ【カララム酒】は、予想を上回る大好評で、今回試作した【ネコだんご】は子供から大人まで楽しめる上に、【メタ世故^{せし}イヤ】の葉で包めば、有る程度（3・4日）の日持ちがする食べ物なので、弁当等の携帯食としても、評価が高かった。

彼らは、【コポルト】と同じく（あつちは【カララム】だったが）、【マララム】の実や種を分けて欲しいと言って来たが、やはり今回も【コポルト】と同じ理由で断った。

要するに、【マララム】（や【カララム】）は、彼らに取って魅力的すぎるのだ。

主食は飽くまでも、肉や少量の果実や木の実なので、仕事の出来る

男手は狩り、女手は果実や木の実の採集に従事する事になる。

当然、主食には成り得ない”嗜好品”の世話は体力の衰えた老人が子供達の役目になる。

目の前に好物があるのに、子供が食べる事を我慢出来るだろうか？

それを我慢するには、子供達の自制心はあまりに弱く、逆に【マラム】の魅力はあまりに強すぎる。

子供だけじゃ無い、大人だって摘み喰いはするだろう。

”1個だけなら、もう1個だけ”…こんな事が続けばマトモに収穫なんか出来っこ無いのだ。

加えて、俺らが世話しないと【カララム】と【マラム】は収穫するの3ヶ月も掛かってしまう(そう言う仕様だと【ルランジェル】が言ってた)。

以上の説明をしたら、自分達がどう行動するか容易に想像出来たのだろう、未練は残していたが納得してくれた。

俺らから買う方が、自分らで育てるよりも、遙かに多くの【マラム】を得られると気持ちを切り替えたようだった。

……ちなみに、先ほど話に出て来た【メタ世故イヤ】の葉とは、砂漠に生える長く大きくて鮮やかな緑の葉をつける【メタ世故イヤ】

(1)のシヨタコンめ!w)

(ペド野郎乙ww)

(だから、素直に”子供好き”って言えばとあれ程!?!?)

(それだと、詰まらないと4号)5号(は断言してみますw)

(!?!ガッテムツ!?!?)

そして、夜。

子供達は疲れて眠り、子供を持つ親達もそれぞれの家に帰って行き、後は若い者や一人身の者がいつまでも飲んでる様な時間帯。

人気の少ない倉庫や小屋が立ち並ぶ一角。

何人かの猫ミミっ娘を侍らせながら、彼女らに連れて来られますよw

【パステト】も【コポルト】と同じく【開放的】な種族なんですw

”開放的”な種族なんですよw

大事な事なので2回言ってみましたww

【パステト】の女の子も基本、【コポルト】と同じ姿してる。

違いは猫か犬かだけだね。

「そして魂太ゼクター | 無双w」

「「「「きゃああ〜ん?」」」」

その夜、漏れは『猫耳っ娘は意外と情熱的』だって事を知ったんだw

Episode : 13 猫の森には帰りました(後書き)

次回、奴らが再登場の予感……w

Episode:14 そして伝説よ、もう一度(前書き)

14話投稿！。

…ひい！(；、) 奴らが再び！！

Episode : 14 そして伝説よ、もう一度

やあ、猫耳っ娘達と仲良くなって、幸せいっぱいアバドーンの蝗アバドーンの王だ。

朝になったら、【ダルタ・ニヤン】から朝食に招待されたので、ぞろぞろと向かう事にしたんだ。

そして、開口一番

「昨夜はお楽しみでしたにやw」

…ひい！ (; ;) バレテェーラ

(学習しないなーw)

(何故バレないと思ったしw)

(D O O の宿屋乙w)

「ふおおおお、我が民はアチラに関してはフリーダムにやからの
うw

それを煩く言つつもりは全く無いんにやが、開口一番こう言つと、
大抵の客人はキョドってくれるので、その様を見るのが楽しくての
うw

「性質悪いいな！ この爺さん！？

……だが、それがいい！（キリッ）

「どんだけイケメンなんスカw」

「もうヤダこの変態w」

「王様マゾー？」

「うむうむ、新しく生み出されたと言っから、どの様な方達かと思
っていたんじやが、仲が良くて結構にやのうw

得てして、その様な状況で君臨する者とは、体面や焦りから上下の
隔たりを無意味に強くして、下に居る者達に厳しく当たってしまう
モノにやからな。」

「我等、”大勢なる者”の掟は【アットホーム】ですからw

「どんな掟やねんw」

「……だが、それがイイ！（キリッ）」

「イケメン乙w」

そんな感じで、用意された”うにごはん”や”うに団子”を始めと
した、彼らの精一杯のもてなしを受けて、ほのぼのと食事は進んで
逝ったw

食事が終わった後、昨日のうちに受け取った【メタ世故せこイヤ】の葉や、様々な交易品の整理をしてたら、拠点に戻る時刻になった。

名残は尽きないけど、仲良くなつた猫耳っ娘達や他の村人達に見送られ、俺達は”猫型バステト獣人”の集落を後にしたんだ。

.....

別に急ぐ用事も無いんで、景色を楽しみながらゆつくり見ながら帰って来たら、【グフたん】から客が来てるので、拉麵ラーメン出して持成もてなしていると連絡が来た。

【グフたん】から直接連絡が来た事を不思議に思い、他の連中はどうしたか聞いたら、全員出払っているとの事。

全員出払ってるなんて珍しいなと考えている内に、応接間に着いたようだ。

「それで、お客人はどんな人達だったん……？」

。(;)ハッ!?

くわっ! ! ! ! !

『ワシが【セイレーン族】族長! ”江田島平”である! ! ! ! !』

……びくびくびく 【ひきつけ起して失神】

(ちよっ W W おま W ! ?)

(出た ああ ああ ああ ! ?)

(ちよ ! ? 王様 ああ ああ ! ! ! ?)

(うわ、王様の口から魂出てるよ!?)

(見てないで、押し込めえええ!?!?)

『ふははははっ！ 相変わらず蝗アバドーンの王殿の反応は面白いのう!?!』

『うむ！ このリアクションを見る為に母者を案内して来た、甲斐があったと言うもの!?!』

『ほう！ 次女あんとんこや三女かんこから、聞いてはいたがこれ程面白いとはのう...。』

「「「性質たち悪いな！ あんた等!?!?」「」

「「「つーか”面白い”って理由で、一々人いちいち家の王様、瀕死ひとんぢにしな
いでくんね？(汗)」

「それより藻マエラ、王様の蘇生手伝えよ!?!?」

『だがワシは、退かぬ！ 媚びぬ！！ 省みぬ！！……！』

「『『『『『理不尽過ぎんだろおおお！！？』』』』』」

・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「……………あゝ……………2度目の幽体離脱を体験したわ。」

……………なるほど、道理で可笑しいと思ったら、眷属達あいつら、逃げやがった

な……。

「王様無理しちゃ駄目だよ。」

「無茶しやがって……。。」

「いや、したくてしたんじゃ無いだろw」

「いよ！ 不死身の男！w」

「！」「うるさいですよ、藻マエラ！？……もっと漏れの事心配する！！」

「……それで、話を戻すけど何で【セイレーン？】の一族が、俺ら

の家で拉麵らーめん啜すすってんの？」

くわっ！！！！！！

『ワシが【セイレーン族】族長！ ”江田島平 ”である！！！！！！』

「……………いや、それはもうイイから……………。 って通訳たのむわ。」

『うむ、ではワシが話あんどんそうか、と言っても大した事では無い。

この前、土産として戴いた”蒸留酒”や”清酒”、並びに”腸詰”なる物が非常に気に入った故、定期的に購入したい旨むねを伝えに参った。

『ちなみに、ワシらが拉麺を喰らうて居たのは、【アリスん】なる愛しげな者共が、馳走してくれた故よ。』

初めて、食してみたが真、美味で珍しき食い物よのう。』

(アリスん、愛しげとか言われてるw)

(気に入られたなw)

(アリスん逃げて！ 超逃げて！！w)

『うむ、齢18にして、あのような美味なモノを初めて喰らうたわ。』

(ひい！初登場来たああ！？)

(…出番の無いまま、消えていつて欲しかったって言うw)

(ラオウ顔に”金髪縦ロール”はやめて欲しかったw)

「…よーするに、酒とツマミをたかりに来たと。」

「人聞きが悪いのう。」

木賃きぢんと、代価たひは払うわい。

柘榴石ざくろいしや、紫水晶アメジスト、並びに砂金さごじゃ。」

ゴトンッ

そう言って置かれた皮袋の中には、確かに十分な量の貴金属が入っていた。

「貴金属とかには、あんま興味無いんだけど、他に特産品とか無い？」

』むづ、他のモノと言われてものう……。』

あとは、ワシら姉妹の中から嫁を出すくらいかのう！

ぐははははははっ！』

「……うん、貴金属でイイヤ。

て言うか是非、貴金属でお願いします。」

』ぶっははははははっ！

相変わらず、蝗アバドーンの王殿達は初心うぶじやのう！

では、その氣に為ったら何時でも言ってくれが良い！

お主らなら、我等姉妹も異論は無いからのう！！』

………無^ねーよ！

こっちは、本気で嫌がってんだよ！！

寝言ほざいて無いで、空気読めってのー！？

グビッグビッグビッ

プハッ

「ん？ 渡した酒、もう呑んでんの？」

『否、これは酒に非ず。』

【ユニコーン】の乳よ。

彼奴^{あいつ}らは、我等^{われら}の様な”穢^{けが}れ無^なき乙女”で無くば、触^ふれる事すら適^{あて}わぬ神聖^{しんせい}な幻獣^{まじな}故^{ゆえ}、我等^{われら}【セイレーン】は”靈^{たま}薬^{やく}”と名高^ない、この乳^ちを得^える事が出来るのだ。』

「お、特産品有るじゃん。

少量でもイイから分けて貰えるなら、かなり融通利かすよ?」

「……って、酒くさ!? 馬乳酒じゃ無^ねーの! それ!?!」

『酒では無いと言っておろつが。』

グビッグビッグビッ

プハッ

『まあ、少々発酵しておるかも知れぬがな。』 (ニタリ) 『

「腐ねってんじゃないの？」

.....

.....

・
・

そうして細かい打ち合わせをして、色々と話が着いた後、【セイレ^{バケ}モン^達？】は帰って行った。

ただ、帰り際の挨拶まで

『ワシが【セイレーン族】族長！ ”江田島平 ”である！！！！』

とか、有り得ねーだろ！w w

…他の言葉しゃべれ無いんじゃないのか？

その後、恐る恐る帰って来た眷属達には、逃げた罰として、交代制で【セイレーン?】の村に出向して、拉麵屋台の維持管理と運営、及び交易品の出張所としての役割をするよう、命令しておいた。

『…イヤアアアアアアアアアアアアアアアア!?!』

そんなコンナで、何時もの様に【レギオン】達が騒いでいる頃、拉麵を出した後には避難していた【アリさん】達も、恐る恐る戻って来て、夕陽に照らされた岩山の上に立ち、【セイレーン?】が去って行った方角を見て、しみじみと思った。

『自分らの知ってるセイレーンと違う、と。』

E p i s o d e : 1 4 そして伝説よ、もう一度（後書き）

伝説とは、規模の大きい”伝言ゲーム”みたいなモノで、

鵜呑みにするのは危険なんだとアリさんは、悟ったのでしたw

Episode:15 拉麵店、広がる野望(前書き)

15話投稿！。

Episode : 15 拉麵店、広がる野望

やあ、おはよう蝗^{アバドーン}の王だ。

前回、【セイレーン？】の襲撃（訪問）を受けてから1ヶ月が過ぎた。

でも、1ヶ月とは言え、色々な事があつたんだ。

まず、【セイレーン？】の集落に、俺達が経営する拉麵屋が出来た、その名も”飛蝗^{バッタラーめん}拉麵セイレーン支店”。

正面から見た俺達の顔をデフォルメした、丸いマークが目印の、ナイスなお店だ。

…ネーミングのセンスには、触れないでくれ頼むから。

最初は、”屋台”にしようかと思っていたんだけど、出向してる眷属や現地で雇う従業員の宿泊場所も兼ねて、一軒丸ごと建てる事になった。

それと予想外だったのは、付き合いのある他の種族、【エルフ】【コポルト】【パステト】に、【セイレーン支店】の情報が漏れて、彼らの集落にも【支店】を建てねば為ら無くなった事だ。

まあ、情報が漏れたのは、アムロの仕業だと分かったので現在、制
裁中だw

…前回逃げた事も、含めてなw

……………ぐりぐりぐり、つんつんつん。

「また、このパターンかああああ!!?!?」

「俺達の情報を漏らすとは、ふてえ野郎だw」

「ちよつとした、世間話の範疇だろが!?
秘密だなんて聞いて無かったぞー!?!?」

「その所為で、面倒な仕事が増えたんだよ!」

……………ぐうりぐり。

「ちよww、まww!?!?」

「その他にも、王様見捨てて逃げた事も含まれてるしねw」

「手前^{てめえ}らも一緒に逃げてただろうが!?!?」

「んん? 聞こえんなあ?」

俺らは懸命に、スキル【天才】【超天才】【鍛錬の鬼イ】、及び【魔獣】討伐を最大限に活用してLVアップに励んだ。

その甲斐あって、俺達は全員LV100に至り、クラスチェンジ階級上昇をすることに成功したんだ。

その結果、眷属達は”ホッパー飛蝗”から”ナイト・ホッパー騎士飛蝗”に【クラスチェンジ】を果たし、俺は、”アバドーン蝗の王”から”インセクト・ロード昆虫皇帝”に【クラスチェンジ】した。

最も、眷属達は変わらず【ホッパー】と呼んでも良いけど、改めて俺を【インセクト・ロード】とか、短くして【ロード】と呼ばせたりするのも、何か違和感がある。

考えて見れば、【レギオン】と言う種族の中で【ホッパー】とは兵隊とかの【階級名】に該当して、個人の区別は1号2号で認識しており、同じく【アバドーン】とは【王】と言う意味であって、俺個人の名称では無かったのだ。

…だったら、今後は【インセクト・ロード】を【階級名】と言う意味で使って、【アバドーン】を俺個人の名称として使っていけば、良いんじゃない無かるうか？

よし！ 呼び方の問題は解決したから、次は新たに獲得したスキルについて、説明しよう。

まず、”種族的恩恵”^{キフト}”

【レポート】 任意の眷属の元に空間転移できる、逆に眷属が居ない処には転移不可。

【エスケープ】 緊急避難。 危険な状態に陥った時、もしくは任意で、ポーチ内の空間に”封印球に封印”された状態で、転移する。 誰かに封印を解除して貰わなければ、自力での脱出は不可。

【サイコネシス】 物理的エネルギーを発生させて対象物を動かし、自分を対象として自身が宙に浮く事も出来る。 自重の50倍の重さまで可能。

【サーチ・アイ】 解析眼。 解析したい対象の詳細な情報を得る事が出来、物質の透視も可能とする。

【物質透過】 無機物や植物（大木）の中を透り抜けて、移動が可能。

【概念破壊】 対象とした”概念”を消し去る。

【ラーニング】 自分が受けたスキルを習得できる。 又、スキル【サーチ・アイ】を習得済みなら、解析しただけでスキルを習得可能。

【黄金虫】 コガナムシと読む。 金運に恵まれ、一生お金がついて廻るが、原始生活には無用の長物。

次に、”王”の個別恩恵（王個人が有するギフト）

【アポーツ】 任意の眷属を転移させて、傍らに引き寄せる。

【虚空からの帰還】 身体が原子の塵に変わっても、その場で再生する。

最後に、”種族的特長”^{生 態}

【虫の転生術】 身体が原子の塵に変わっても、”霊体核”が王の体内に吸収されて、卵の中に転生する。卵から生まれた個体は転生前の個体と同一存在。記憶もそのまま継承される。

【不死身の体】 ある程度の大きさの、細胞の塊が残ってさえいれば、そこから記憶までも再生可能。

(。 。)

(。 。)

「いつち見んなww」

……なんて言うか、俺ら寿命以外で死なないんじゃないかね？

って言うか、そもそも俺らに寿命とかあるのかね？

まあ、考えても判らんモノはどうでもいいか。

今回、得たスキルの中では【テレポート】と【サーチ・アイ】が頻繁に使う事になるだろう。

特に【テレポート】は、出向する眷属を週一くらいのローテーションで廻すんだけど、交代が一瞬で終わるからな。

お次は、【セイレーン？】達の名前について、なんか姓がバラバラだと思っていたら、彼女？らは実は姓とか家名は持って無い。

個体数も少ない上に、どうやら超感覚で個体を識別しているので、自分自身を表す”真名”^{メナ}を名乗るんだとか。

”名は体を現す”とか言うけれど、【枢斬暗屯子】^{すゝせんあんどんこ}とか、【成吉思汗子】^{せいし}とか、【北斗羅王姫】^{ほくとらおうひめ}とか、似合いすぎて有り得なくね？（汗）

【江田島平】^{えだじまへい}に到っては、見た目が黒いストレートロングの鬘^{かつら}か

ぶった”平八”だぜ？ ヒゲ生えてるし。

それと、【セイレーン】について判った事がもう一つ。

あの族長の一族以外にも、部の民が60人ほど居て、こっちは伝説通りに、キレイで歌の巧い姉ーちゃんばかりだった。

この連中、ある程度まで成長したら、老化が止まるらしいわw

もう、”生物学的”に有り得無えだろ！？

そんな訳で、最初は罰としてこの支店を作ったけど、今じゃ眷属全員、ローテーションの順番が来るのを、心待ちにしてる状態だ。

族長一家も、”強敵”として付き合う分には、気持ちのサッパリした奴らだしな。

……暑苦しいけどw

慣れって怖いな、順応能力高すぎるのも、考えモノかもなー。

あとは、【コポルト】の集落に住んでる”ロボ”に関してかな。

……主神エ……。(;)、(

で、【造物主達】に連絡取って聞いてみた所、彼もアムロと似たような境遇だったみたいだけど、彼は一般人であって、逸般人のヲタクでは無いらしい。

なので、アムロみたいな扱いはせずに、ごく普通に接して拉麺を始めたとした食い物や、前世話^{むかしほなし}などで、時々接点^{とど}を作るくらいに留めている。

最後に、一番肝心な事なただけ。

【魔獣】が手強くなって来たみたいだ。

これも、進化と呼んで良いのか解からないけど、倒し辛くなって来たんだ。

どう言う事が説明すると、まず”弱点”が設定されてるタイプは、弱点以外を攻撃しても死なない。

逆に言えば、弱点を攻撃していれば比較的簡単に倒せる。

獣人系などの近接攻撃型でも、結構狩れるタイプだ。

厄介なのが、与えた傷が”超再生”したりして、打撃系や斬撃系の攻撃方法では、倒すのが不可能になったタイプだ。

その他にも、攻撃を加えたら分裂するとか、なんか生態にバリエー

シヨンが出て来たのだ。

対処方としては、高位魔法で一気に全身へダメージを与えるか、俺らの操る【メギドの火】で、消滅させるとかの方法しか無い。

まあ、このタイプは個体数が極めて少なく、滅多に出没しないから、そこまで気にしなくても良いだろうが、楽観出来る事じゃ無いだろう。

これからも、監視の目を厳しくして往くつもりだ。

そうそう、監視と言えば今までの情報は、人里に近づきたく無かった俺らの代わりに、【グフたん】が人里に棲んでる”虫達”と交信して、情報収集してくれてたんだけど、【魔獣】等の広いフィールドに棲息してる、生き物に関しては、広い行動範囲を誇る【アリさん】が大活躍してくれた。

元々【アリさん達】は攻撃力に乏しい、温和な種族なので、身を護る為に【魔獣】等の”外敵”の動向に敏感だ。

その、本来は身を護る為の労力が、監視の為の労力と一緒に協力をしてくれると言う。

(* 、 、) <アリさんカワイイですよー。ハアハア

へんたいターレン
(変態大人乙w)

(このロリコンめ！w)

(このシヨタコンめ！w)

(このペド野郎w)

(裸マフラーめw)

うおおおおおいいい！？

裸に赤いマフラーするのは藻マエもだろうがああああ！？

(((((ペド野郎は良いのか……)))

…もう、ペド野郎でも良いかな。

【アリさん】カワユス！！ ヒヤッホー！！！！

∴ 以上がこの1ヶ月の間に起こった大まかな事柄かな。

∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴

∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ ∴

∴ ∴

これで、この1ヶ月の経過報告を終了するわw

で、現在俺は”バッタラーめん飛蝗拉麵セイレーン支店”に、やって来た所だ。

ガラガラ

「お仕事ごころう様ー。」

「あ、社長いらっしやうい。」

「「「いらっしやいませー。」」」

「誰が社長かw」

「「「サーセンwついw」」」

「なんとなくw」

「まあ、意味的には間違ってる…のか？」

「」「」「」「」

「んで、今日はどうしたのー？」

「なんか、連絡事項来てたっけ？」

「…どうでもイイけど、藻マエラ店員が板に着いて来たなw

「このまま、拉麺屋の店員として一生を過ごすか？」

「やめてよー」(T T)「」

「最近、それもイイかって思う時あるんだからー」><(「」

「洒落に為らないよー」(T T)「」

「…正直、すまんかった(汗)」

「まあ、気を取り直して用事を済ませるか。」

「「ああ、そうだったW」「」

「「それで、今日はどうしたの?」「」

「特製チャーシュー入りタンメン、特盛り海鮮しお味。」

「「サボって喰いに来たのかよ! W W」「」

「「「お前^めえに喰わせるタンメンは無^ねえ! W W」「」

.....

・
・
・
・
・

・
・

その後、【セイレーン】の綺麗処きれいどころを侍はべらせて、漏れと彼女達は夜通し歌い続けたんだw

「リア充モゲロw」

「爆発しろw」

「死ね、氏ねじゃ無くて死ねw」

「藻マエラも一緒に楽しんでるだろがあああ!!?」

Episode : 15 拉麵店、広がる野望（後書き）

…え？ オチですか？

そんなモノは無^ねえ!!!

Episode:16 拉麵店、更なる展望(前書き)

16話目投稿！。

最近、忙しくて度々^{たびたび}執筆時間が削られます。

困ったのう…。

Episode : 16 拉麵店、更なる展望

やあ、毎度おなじみ蝗アバドーンの王だ。

実は、【コポルト】の集落に居た”ロボ”のことなんだけど、結構な拉麵好きだった事が判明した。

俺は前世で、元の世界食べ歩きをメインにした【拉麵好き】だったけど、彼は趣味で拉麵を作るタイプの【拉麵好き】だったらしい。

飛蝗バッターーめん拉麵コポルト支店が建てられた当初、懐かしさとその美味さから常連として通かよつて来てた彼だったが。

”自分でも作りたい”と言う欲求を抑えきれずに居たところ、貼り出された”従業員募集”のチラシを見て、我慢出来ずに応募して来たとかw

さすが、趣味とは言え自分で作ってただけあって、彼の仕事ぶりは堂に入ったモノで、何日か様子を見たあと、早速調理スタッフとして働いて貰う事になった。

出向させてる眷属達との仲も良好で、彼自身もこの”店”を気に入ってくれたようだ。

彼曰く、

「此処では、^{この世界}拉麺作る器具が無かったし、そもそも”拉麺”と言う概念が無かったから、諦めてたワン。

だから君らには、^{レキオン}凄く感謝してるワン。」

「^{ホッパー}君らは、ソフト交代しても引継ぎが完璧()”なうろーでいんぐ”の恩恵で)だから、意思の疎通に齟齬が出ないのが良いワン。」

「新しいメニューが出来てもタイムラグ無しに、各支店に正確な情^{ムニ}報が廻るから便利だワnw」

等と、最近の彼はとても活き活きしてる。

そんな彼を見ていた周りの亜人種たちも、ちらほらと”従業員募集”のチラシに応募して来てるので、この世界に拉麺が広がって往くのも、そう遠い事では無いだろう。

まあ、問題と云えば”調理器具”だ。

これは【マネエ・・】システムで交換して手に入れた物なので、システムを利用出来ない他種族にとって、一番のネックなのだ。

必要な【マネエ・・】も少ないし、俺達が提供し続けようかとも考

えたが。

自分で使う道具を自分自身でカスタマイズして往くのも、この世界の拉麺が”発展”していく上で、必要不可欠な要素だと思ったので、止める事にした。

考えて見たら、この世界には”金属”を扱う事に掛けて、他種族の追隨を許さない、【ドワーフ】と言う種族が居たのを思い出し、彼らを巻き込めばイインじゃね？って事になった。

調理器具の図面は、【知識神の贈り物】で調べたら載ってたから、それを元に改良していけば良いだろう。

【知識神の贈り物】マジパネェっす！

【ドワーフ】を巻き込むと言う方針は決まったモノの、どうやってコンタクトを取れば良いのかが判らない。

敵対してる訳でも無いので、普通に注文すればイイとも思ったのだが、武器や防具、装飾品なら兎も角、これから注文しようとしているのは”鍋”とかと同じ”調理器具”だ。

何故、こんな事に悩んでいるかと言うと。

そもそも生きる事、生き残る事に、懸命に為らざるを得ないこの世

界では、あまり”料理”と言うモノが重要視されて来なかった。

調理とは、毒を持つ食材やそのままでは食べ辛い食材を、”食べれる”レベルにする為の方法であって、味や食感等を”楽しむ”モノでは無いのだ。

当然、調理器具など重要視しないし、興味も持たれ無い。

特に鍋などの”形の単純”な物なんかは、よちよち歩きの【ドワーフ】の子供が、金属に慣れる為に一番最初に作る物の定番なのだ。

他の種族の鍛冶屋だって似たようなモノで、弟子や見習いなんかは全員、鍋から始める。

細かく正確で、繊細な技術と美的センスが不可欠な、細工物専門の鍛冶師や、

金属に対する深い専門知識と熟練の技を求められる、武器専門の鍛冶師なんかは普通に居るが、

鍋などの調理器具専門の鍛冶師など、賭けてもいいけど、絶対に居ないと断言出来る。

そんな、常識が蔓延して居る世界で、ある程度技術を身に付け、その技術に見合ったプライドを持ち、全ての種族に知れ渡る程、”頑固”な事で有名な【ドワーフ】に、拉麺と言う”聞き慣れない料理”に使う、”調理器具”を造ってくれ。

そんな事言おうモノなら、良くて冗談として相手にされ無いか、最悪の場合には侮辱されたと思われる喧嘩になり兼ねないのだ。

マジックトークで。

・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

良い案も思い浮かば無いので、気分転換に散歩でもしようかと考えた俺は、【コポルト】の集落近くにある森の中を、どうしたモノかなーとウロついている内に、
鬼熊くまさんに出会いましたw

努力する事に目覚めた日から、レベルを上げ続け、【クラスチエンジ】を果たして尚、鍛錬を欠かさない今の俺に取って、今さら鬼熊デビル・ベアの一匹や百匹、何て事の無い相手だが、一応視線は逸らさない。

だが向こうも、俺の放つ”強者オーラ”を感じ取ったのか、視線を逸らそうとしない。
逸らそうとしない。

まあ、こっちと違って、向こうの場合は”目を逸らせば殺やられる！”
”と思って、視線を逸らそうとしないんだろうけどな。

じい————っ

やや暫らく互いの中で、かなりの温度差がある睨み合い（見つめ合い）が続いていたが、何時までも、こんな事して居てもアホらしいので、こっちの方から行動起してみるw

「突っ張り、突っ張り、突っ張り！」

ぱしん！ぱしん！ぱしん！

「くま！？ くま！？ くまっ！？」

「のど輪、のど輪、のど輪。」

かぼん！かぼん！かぼん！

「べあ！？ べあ！？ べあっ！？」

「がぶり寄り！」

ずんぞんぞんあああああー！。

「くままままー……！……？？」

「？……」

ぶわっ……！

「……」

……ふう。

あまり良いアイデアが浮かばず、ちよつとストレスが溜まっていたけど、適度な運動で丁度良いストレス解消になったなw

決して、動物虐待などでは無いんだ。

…ホントだよ？

「くま！（ウソだw）」

ん？

いま、デビル・ベア鬼熊から突っ込みが入った様な気がするけど気の所為かな？

そう思ってそつちの方を見てみたら、涙目で俺に腹を見せている鬼デビル・ベア熊と目が合ってしまったw

(* 、 、) やだ、何このカワイイ生き物。

思いも寄らなんだ鬼熊デビル・ベアの可愛さに、思わず撫でくり廻していたら、アイデアも固まって来た。

イキナリ”調理器具造れやオラ！”とは言わないで、まずは拉麵の素晴らしさを知って貰う事から始めたらイインじゃね？

拉麵の素晴らしさを知って貰いさえすれば、放っておいても興味持つだろ。

そして、調理器具を造れる職人が居ないと、さり気無く知らせれば、変わり者の一人か二人はその気になるかも知れんなw

……若干、運任せな部分かなりあるけど、巧く逝くような予感があるw

まあ、これ以上考えるの面倒だしw

【こっちが本音】

「そうと決まれば、準備しなけりや為らんし帰るか。」

そうして、俺は懐いたクマ（仮称）に跨って、一旦【コポルト】の
集落に帰る事にした。

.....

・
・
・
・
・

・
・

俺が帰ると【コポルト】の集落は、ちょっとした騒ぎになった。

…そりゃそーか、デビル・ベア鬼熊が凄いイキオイで『
…『…』と、土煙を上げながら走って来れば、そりゃービ
るわなw

んで、慌てて駆け付けて来た【ワン・ターレン】に
説教喰らってますw 【今ここ】

「王様、恥ずかしいからアホな事しないでよ。」

「自重するw」

「定期的に出向する藻レラの身にもなれw」

「バカなの？死ぬの？」

「僕らまで、アホかと思われるじゃない。」

「…！！？ガツデムツ！！？」

そんな、心温まるハートフルストーリーな展開のあと、俺の考えを
開陳した処、

「へたに色々やるよりイイんじゃない？…運任せだけ。」

「うん、シンプルイズベストだね。…かなり運任せだけ。」

「この拉麺なら大丈夫ですワン！…まあ希望として。」

「かなり見通し甘いけど、これと言って良い案も無いしね。」

……藻マエラ、賛成するなら文句言わずにする！！

「でも、いきなり支店建てんのは無理じゃね？」

「そりゃそーだw」

「最初は屋台でコツコツ逝くのが良いワン。」

「字が違っだろ、JKW」

「屋台で良^いんじゃね？」

んじゃ、屋台を出すって事でイイか。

それじゃー、早速屋台の製作に取り掛かるとするかw

「まず、飛蝗^{バッタ}マークは絶対付けなきゃw」

「移動する事を考えて沢山車輪を付けよう。」

「イメージ的に、三角屋根は外せないだろw」

「小さいと材料が積めないから、大きめにするワン」

「それじゃあ、馬車とか改造する？」

「大きさは十分だねw」

「頑丈にする為、金属で補強しようか。」

「使わない時の為に折り畳みのギミック付けてみるw」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

「……………」。

藻マエラ、少しは自重しろ!!!

なんなの！ この”移動要塞”みたいな拉麺屋台は!!!？

俺らなら何とか引つ張れるけど、他の種族じゃ絶対無理でしょ!？

417

「えへへっ、ついw」

「少しは自重したよ？」

「ほんの少しだけどw」

「だが反省も後悔もしていない!」（キリッ）

うおおおいい！！！！？

小まめな移動が出来なきゃ、支店建てるのと変わんないでしょ〜っ
！！？

「なら、諦めて支店建てちゃいなYO！」

「「「うんうん、仕方ないねW」「」

あほかああああああ！！！！？

藻マエラ、純粹混じりけ無しのバカですか！！！！？

「えええええ〜っ？」

「折角造ったのに〜。」

「馬車を改造したんだから馬に引かせる？」

「2頭でも無理だろうから4頭くらい要るかな？」

移動させるのに、馬4頭に引かせる屋台とかw

…普通に有り得ねーっての。

現地で4頭の馬の世話するだけで、大変だろー!?

しかも、こんなに大きかったら俺らのポーチにも入ら^{はい}無いし!

クギで打ち付けたから分解も出来ないし。

これ引っ張って、【ドワーフ】の処まで行くのかよ……。

「あ、いーこと思いついたw」

「この子、利用出来ないかワン……。」

…ん、さっき懐いたクマか？

「そそw この子に引かせればイイんじゃない？w」

「考えてみれば、引くスピードは要らないからね」

「スピードじゃ無くパワーなら鬼熊デビル・ベアの方が何倍も強いからね。」

…ふむ。モノは試した、引かせてみるか…。

…
…
…
…
…
…

•
•
•
•
•

•
•

「問題無いみたいだねw」

「結構、よゆうっぱいねw」

「バッタラーめん飛蝗拉麵クマラーめんと言うより、熊拉麵だなw」

「そう言えば、この子の名前は？」

「まだ、決めて無い、候補は【与作】【吾朗】【茂助】とかだけど。」

「なぜ、そんな名にしたしw」

「でも、イメージ的にはあってる…のか？」

「まあ、どうしてもイインじゃ無い？w w」

「よし！ そんな訳で今日からオマエは【吾作】だ！」

「くまっ」

「イキナリ、候補に無かった名前が!？」

「まさかの裏切りw」

「これは、考えに無かったw w」

「王様を信用した結果がコレだよ！」

早速、【フリードリヒ】に引いて貰って、出発だ！

「いやいやいや！w w」

「【フリードリヒ】って何なの！？」

「いま、【吾作】って決めたよね！？」

「貴方って、本当に最低のクズだわ！w」

細けーこたあイイんだよ！！！！

「「「細かい事」で斬って捨てられた！？」「「

「だめだ、この人達……だワン。」

……こうして、漏れ達【拉麵普及委員会】の面々は、【ドワーフ】
達を洗脳する為に【吾作】フリードリヒと共に【コポルト】の集落を出発して逝
ったんだw

Episode:16 拉麵店、更なる展望(後書き)

【吾作】と書いて【フリードリヒ】と発音する。

……このネタにも意味なんぞ無いわ!!!w

Episode:17 不思議な種族、フェアリー（前書き）

17話投稿です。

最近忙しくて毎日更新出来て無いけど、完結目指して頑張りマス。

Episode : 17 不思議な種族、フェアリー

やあ、^{アバドーン}蝗の王だ。

突然だが、この世界の”夜”が どうゆうモノか知ってるかい？

電気などの、人口的な明かりが無いこの世界では、夜とも為れば真
つ暗になる。

そりゃあ、月明かりや星明りは有るけれど、夜道ともなればそれじ
ゃあ心許無いんだ。

なんで急にこんな話をし始めたかって？

HAHAHAHA!

もちろん、さつき勢いのまま出て来たもんだから、途中の山道で夜
になっちゃったからに決まってるだろう？

「HAHAHAHA!じゃ無えよ!w」

「行き当たりばったりにも程があるだろ!？」

「朝なら兎も角、夕方出発とか無いわw」

「ナゼ、途中で野宿しなかったしw」

「…無計画すぎるワン…。」

「大丈夫だ、何も問題は無い。

そもそも俺ら^{レギオン}軍団は、赤外線でも暗闇でも見えるし、^{フリードリヒ}【吾作】も【ロボ】も”獣属性”なんだから、暗視能力は在る。

普通に行けば9日の行程も、不眠不休で突っ切れば4日の朝には到着だw」

「いや、問題有りまくりでしょw」

「不眠不休の意味が解からんw」

「何故、そこまで急ぐw」

「と言うより、藻マエラこそ何故休みたがるしw

漏れら不眠不休で1月は活動出来るだろ？」

「【吾作】と【ロボ】は無理だつてw」

「彼らを僕達の基準で考えたらダメでしょw」

「食料はポーチから出せるから、それに関しては無問題だけどねw」

「……………おおう！」

「……ホントに忘れてたんだ……」

「……なんか、すみませんワン……」

「いや、悪いのは主に王様だしw」

「だが、後悔も反省もしない!!」

「最低だよ!あんだw」

「人で無しw」

「まあ、俺ら虫ケラだしw」

なんとなくか、こんな感じで心温まる会話をしながら、最初の夜は
更けて行ったんだw

「……無^ねーよw」「」「」

・
・

・
・
・
・
・

.....

そして、一夜明けて。

山の麓にある小さな森の側で、【魔獣】の動向を監視しに来ていた【アリさん】相手に、屋台を広げて拉麺作ってますw

こんな処まで出張って来ているとは、【アリさん】マジ勤勉すぎです。

せめて少しでも、美味しい拉麺を食べて貰える様に頑張って作りますYO！

「「アリアリ」」

(* 、) ヤローカワイイじゃネエカ

【アリさん】達が満足して帰った後、屋台を閉めて移動の準備をしていたら、眷属が大量の”うに”を見つけて来た。

今夜は”うにごはん”にしようとか話してる眷族達を見ながら、未だに”栗とうに”の名前に納得イカナイ俺は、異世界の不条理さを考えていたが、視界の隅で妙な顔して”うに”を見ていた【ロボ】に気づいて、『嗚呼コイツも同類か』と親近感が沸いたりしたw

そんな感じで、2日目は終了。

そして、3日目。

森の中を突っ切る細い街道を、のんびりと歩いていたら、街道から少し外れた辺りで【フェアリー族】の行商人が、切り株の上で休んでいた。

【フェアリー族】と言うのは【神々】が2番目に造ったとされる種族で、エルフを体長20ダル位センチに小さくして、背中に蜻蛉や蝶の羽を生やした様な姿をしてる。

身体が小さい代わりに、魔法を始めとした不思議な力を持つてると言われており、好奇心が旺盛で、大抵の【フェアリー族】は風のように気ままに旅をしているので、この様に行商しながら旅費を賄っているらしい。

『おにーさん達、最近噂になってる13番目の種族のヒトだっちゃ？』

記念にサービスしとくから、何か買っておくれよ。

ついでに、色々な話を聞かせてくれたら、もっとオマケするよ〜w』

「んじゃ、そろそろ昼時だし此处で店広げるか。」

「了解っす。」

「分かったワン。」

「くまつ。」

『ちよつ W W W 店ってなんぞ W W W』

そんな彼女？^{フェアリー}の突っ込みを余所に、手馴れた動作で瞬く間に”堅牢な馬車”^{トランスフォーム}が展開して”拉麵屋台”に変形してゆく。

『へえ〜！ こんな風にしてお店に変わるんだあ〜。』

こんなに珍しい物、初めて見た。

で、このお店では何を売ってるの〜？』

「此処では、俺らがこの世界に持ち込んだ、”拉麵”と言う食い物を売ってるのだ。」

まあ、食い物を語るのに言葉は不要。

今回は初見って事で奢りだ、まずは食ってみなよ。」

『やった〜 おにーさん太っ腹だね！』

それじゃあ、お言葉に甘えて頂きます〜す
』

ずるずるずる、ぐぐぐぐぐぐ。

ちゅ〜、ちゅんちゅんちゅん。

『ぶは〜、ぐちそつちま！』

美味しすぎて、一気に食べちゃったよ〜。

こんな美味しいモノ初めて食べた〜
』

……速っ！！！？

しかも、”完食”だと!?

あの20ダル位センチの身体のドコに入ったし!?

さすが、”不思議”で有名な種族。

【フェアリー族】マジパネエ!!

「スゲエエエエエエ!?!」

「いま、30秒くらいで喰いきったよね!?!」

「それより、ドンブリに顔つつ込んで喰うとかW」

「ドコに入ったしW」

「くまつ!?!」

『えへへへっW』

わっちらの食事を初めて見た、他の種族のヒト達は皆みんな驚くなあ。』

「そりゃ驚くわW」

「なにも、おかしい事は無いなW」

『あ、そうだ自己紹介もまだだったよ。

わっちは【タルト】って言うの。』

…そうだ！ 鬼熊^{クマ}ちゃんもお腹空いたよね？

「この蜂蜜あげるね〜W」

「くま〜？」

「（*、、） タルトたんハアハア」

そんな感じで、美味しいもの喰って気分良くなった、フェアリー族の【タルト】は【吾作^{フリードリヒ}】に蜂蜜をくれた後、背負った小さな袋から、大量の商品を出し始めた。

…さすが、”不思議”生物。

四次元ポケ トも完備してやがるW

「コイツの名は【フリードリヒ】って言っただ。

字はこう【吾作】書く。」

『ちよつWWW意味不WWW』

おにーさんが、何を言ってるのかわからないよW』

「白くて腹黒いQBみたいに言うなW

いいか考えるな！
魂ソウルで感じる！！！」

「また無茶振りをW」

「相変わらず、王様の無茶振りは天下一品やでえ！！！」

…まあ、そんな漫才をやりながら、【タルト】に俺達の旅の目的を話した所。

どうやら、【タルト】は拉麺をかなり気に入った様で、【ドワーフ】に拉麺を浸透させて調理器具を造って貰う計画を、全面的に協力すると言ってきた。

ついでに、このまま【ドワーフ】達の【石の都】まで付いて来て、知り合いに紹介してくれるそうだ。

ピロリロリン

『フェアリー族のタルトが仲間になりました。』

そんなこんなで3日目終了w

そして、迎えた4日目。

【フェアリー】が5人に増殖しましたww

『ちよっwwww ゾウリムシじゃ無いんだからwwww』

『分裂増殖ちやうわww』

『昨夜の内に連絡取って、来て貰ったんよw』

『いままで見た事も聞いた事も無かった、美味しい食べ物だって聞いたよ?』

「OK! そう言う事なら問題無い。

四の五の言わずに、まずはコイツを喰らって貰おうか!」

……怖っ！！？

5人全員でドンブリに顔突っ込んで喰うとか！？

「集団で洗面器に顔突っ込む自殺みたい！？」

「5人も居たらシユールすぎる！？」

「見た目に合わず、ワイルドすぎるだろおお！？」

……

・
・
・
・
・

・
・

『これは、大ヒットする!』

『うん、間違い無く流行るねw』

『特に、濃厚な”味噌味”だっけ?』

『あれは肉体労働系の種族達、それこそ【ドワーフ】の好みに直撃だね。』

『うんうんw』

「そして、【ドワーフ】が調理器具を造って、俺ら意外にも拉麺を作れる様になったら、この世界の新たな食文化として根付く筈だw」

『そしたら、何時でも何処でも拉麺が喰える様になる!』

『楽しみだね!』

『いざとなったら、この”怪しい薬”で洗脳してでもw』

『ふえっ!ふえっ!ふえっ!』 【笑い声】

『怖っw w w』

……………俺の知ってる【フェアリー^{妖精}】と違う……………。

こうして、俺の幻想あこがれに少くないダメージを残して、4日目が過ぎ
て逝ったんだw

Episode:17 不思議な種族、フェアリー（後書き）

【フェアリー族】 その可愛らしい見た目に反して、

案外ハングリーでワイルドな、逞しい生き物でしたw

Episode:18 その頃、各支店では(前書き)

18話投稿です。

こんな拙作を何時も見てくれてる読者様方、

最近、度々遅れて申し訳無いです!!

でも、今回は忙しいのが理由じゃ無くて、

久しぶりにやったPSPゲームに再度ハマって、

書く時間が無くなっただけなんですけどね!(キリッ)

すみません、すみません!

誠心誠意、お詫びします。

めんじゅ

Episode:18 その頃、各支店では

やあ、【フェアリー族】を旅の仲間に加えて、今日も順調に街道を進んでる蝗アバドーンの王さw

今日はビックリするよつな報告が有るんだ。

朝起きたら、【フェアリー】が10人に増殖してましたww

「ちよつww、おまwww

なんで、これ以上殖やしたしww」

『めんwwww』

『でも、呼んだんじゃ無いよ?』

『噂を聞きつけて、向こうから来たんだからね!』

『シンデレレww』

……だから、何故顔を突っ込んで喰う？

！っ……って、ドンブリまで喰おうとするな！

ちよっ！！？ 屋台まで齧^{かじ}っちゃラメエエエエエエエ！！！！？

藻マエトラ、”シロアリ”かああああアアア！！！！？

……さすが、異世界！

俺の想像のナナメ上を行きやがる……。

「くまつ！（ガンバレ）」

（*、（）
【吾作フエアー】は優しいのう。

まあ、そんな感じで朝っぱらからフエアー”シロアリ”相手に大騒ぎした後
は、順調に旅程も進んで、現在”ひるめし昼飯時”だ…。

「速っ!？」

「また時間が跳んだようなw」

「気の所為だw」

そして、さっきから

(。 。) 〇≡≡ らーめん! らーめん!

(。 。) 〇≡≡ らーめん! らーめん!

(。 。) 〇≡≡ らーめん! らーめん! 【×10】

つて、うるせえ”^{フェアリー}シロアリ”共に、拉麵作って遣んなきゃ為ら無^ねえ
時間だよww

【おっぱいおっぱい】かっつての! www

「それで、味は何にするんだ？」

『自家製シナチク山盛りラーメン、特盛り熟成赤味噌味でw』

『椎茸旨みレボリユーシヨン餡かけ焼きそばw』

『ボキは、あつさり風味鶏がらスープ醤油味かなw』

『ぼつくは、海鮮しお味大盛りらーめん。』

『野菜の旨み・白味噌味。』

『激辛ジャージャー麺、わかめスープ付き。』

『特製焼豚入りラーメン、豚骨しお味w』

『刻みネギ大盛り塩焼きそば。』

『胡麻タレ・つけ麺、超大盛り。』

『真紅の海原・超辛担々麺。』

.....
アバドーン
蝗の王です。

コイツらに、自重を求めた漏れが愚かだったとです…。

……アバドーン
蝗の王です。

コイツら全員、違う種類の注文しやっがたとです…。

……アバドーン
蝗の王です。

オマエら、少しは空気読んで遠慮する……！！！！（泣）

「これはひどいww」

「なんてフリーダムなw」

「シロアリ」、恐ろしい子…！」

「それは良いから、藻マイラ！ さっさと調理の手伝いしる……！！w」

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

… ちょっと速い時間だったけど、俺らも食事を済ませて一息ついていた処で、ふと思った。

”他の眷属達はどうして居るだろうか”と。

近況報告は来てるモノの、最近顔を会わせて無い個体も結構居る…。

……あちこちに拉麵屋の支店建てちゃったしねw

久方ぶりに、各支店の様子でも窺って見るか。

(…そんな訳で、【飛蝗^{バッター}拉麵^{ラーメン}エルフ支店】の44号、そっちはどんな感じ?)

(！?ちよっ!? この”昼飯時”^{ひるめしじ}のクソ忙しい時に!?!? W W W
…突然、どうしたんですか!?)

おお！ そっ言えば他は”まだ”^{ひるめしじ}昼飯時だったわ W

44号の聴覚を通して客達の声も聞こえて来るし W W

<相変わらず混んでるね、此処は W >

<俺、^{チャーシュー}焼豚麺、あっさり醤油味。 >

<ワンタン麺の海鮮しお味ね。 >

<野菜らーめん、^{薄口}醤油 >

<シナチクラーめん、醤油味で。>

<斑海老まだじラーめん、コンソメ塩味。>

やはりと言うか、エルフの集落は味の好みが【あっさり系】や【野菜系】が中心のようだな。

今回急に連絡取ったのは、各支店ごとの味の好みの傾向を調査するのが一割と、残り九割はなんとなく、どうしてるのかなーってWW

(ちよつWWW ふざけんなWWW！

マルチタスク分割高速思考が無かったら、忙しさにパンクしてるわ！！！！WW)

<店員さん、僕に分まだ？>

<こつち、焼豚チャーシュー麺しお味追加ね。>

<餡かけ焼きそばの海鮮しお味ね。>

<こつち餃子も、まだかな？>

< にんにくラーメン、肉抜き。 >

(はいはい！ 只今。

オラオラオラオラオラオラオラ！！
！)

【秘技】阿修羅掌おお！！

【5倍速】

…うむ、修羅場に連絡してしまった。

それにしても 44号の奴、何かを開眼してしまったか…w

なんか、綾波っぱいのも居たようだけど、気の所為だね。(汗)

(それじゃあ、【飛蝗^{バッタラ}拉麵^{ラーメン}パステト支店】の79号^{トクミツさん}、どうぞ。)

(！？ダレが徳 さんですか！！！？)

一体なんの用ですか！？ この地獄のように忙しい時間帯に！！？)

各支店ごとの味の傾向の調査が一分、残り九割はなんとなくWWW

(死ねええええええええエエー！？ 氏ねじゃ無くて、死ね！！！！)

この修羅場の真っ只中に、そんな理由で連絡すんなああああああ
!!!!!!

マルチタスク
分割高速思考が無かったら、忙しさを死んでるわ!!!!!! W W)

< 店員さん、ウチの注文良いかニヤン? >

< こっち、焼豚チャーシュー冷し麺ニヤ。 >

< 冷やし餡かけ焼きそばの海鮮風にや。 >

< ニボシ出汁だし醤油にやん。 >

< 俺はニボシ出汁だしの塩味にや >

< カツオ出汁だしの豚骨しお。 >

< こっち、焼豚チャーシュー大盛り、つけ麺【マララム】タレでにや。 >

< ざるラーメン海老粉たっぷりニヤ。 >

< 豹紋蟹ヒョウモンカニの餃子も、まだかにやん? >

< アンター! ばっかじゃニヤいの!?! さっさと注文取りに来なさい
よー! >

(はいはいはいはい！　只今すぐ！！)

ド
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ラ
ア
ア
ア
ア
！！
う
！！！！

【秘技】千手殺うううう

【10倍速】

……千手殺って、”殺”ったらマズイだろWWW

44号と言い、^{トクミツさん}79号と言い、色々ハツチャケたなW

パステトの集落は、【魚貝系の出汁^{だし}】に【海鮮系】、後は【熱く無いモノ】かW

やっぱ、”猫舌”なのかねWW

それと今度は、アスカっぽいのも居たような気がするけど、
やっぱり気の所為だよね。(汁)

.....

.....

..

…このあと同じように、
【飛蝗拉麵バッタラーめんコポルト支店】にも念話を繋いで、

やっぱり同じようにブチ切られて、今回の状況確認は終了。

ついでに、この日は大したイベントも無く、こちらも終了。

ちなみに、コポルト集落では【肉系】、【味が濃い目】の傾向が好まれるようなんだw

Episode:18 その頃、各支店では（後書き）

ハツチャケすぎたフェアリー族の”表記”が、

【シロアリ】と書いて【フェアリー】と発音する様になりました。
（笑）

Episode:19 石の都(前書き)

19話投稿！。

こんな拙作に何時の間にか5000ユニークですか……。

いや、本当にありがとうございます。

9/5 文章やセリフの言い回し、ミスや細かい部分を修正。

Episode : 19 石の都

やあ、【シロアリ】^{フエアリ}に、毎日タダ飯を喰われている蝗^{アバドーン}の王だ。

9日にも及ぶ道のりを経て、ようやく【ドワーフ】の集落近くまで辿り着いたよw

彼らは、俺らと同じ様に岩山を掘って住んでいる種族で、段々と居住性や利便性を求めて掘り進んで行く内に、とうとうこの巨大な岩山を一つの”国”の様にしてしまったらしい。

以来、誰が呼ぶとも無く、その岩山の事を”石の都”^{みやい}、もしくは”岩の王国”と呼ぶ様になったとか。

【石の都】^{みやい}の入り口は、周りの岩に見事な彫刻を施して、巨大な金属製の扉を嵌め込んだ造りになっており、正面と山の反対側にある裏口の2箇所しか出入り出来なくなっていて、門の大きさは縦7メートル、横5メートル程も有るらしい。

『【石の都】^{みやい}の成り立ちに付いては、だいたいこんな感じかな。』

ちなみに、その岩山に来た理由は、様々な種類の豊富な鉱脈が有ったからで、最初は単なる採掘場のつもりだったらしいんだけど、

予想以上に巨大な鉱脈だったんで、いまだに地下に向かって掘り進んで居るらしいよ。」

「へえ、ただの【シロアリ】かと思っていたけど、意外に博識なんだ。」

『ちよっ！？ww ひどすぎね！？wwww』

「気の所為だw」

『そっかw ならいいや。』

……………それでイイのか？ 【フェアリー】不思議生物 エ……。

「それでね、今回紹介する予定のドワーフは【サンチヨ】【ポンチヨ】【パンチヨ】って名前の三つ子で、それぞれが、装飾品・武器・防具の職人で、かなり良い腕してるんで、結構名が知られてる人達だよ。」

「すぐ仲良しな兄弟で、いつも三人一組で仕事を請けているんだ。」

「

「ほほお、でもそれって効率悪いんじゃないかね？」

「まあね、それには理由もあってね。」

彼らは極端に得意と不得意の差が激しくて、苦手な事はやりたがら無いんだ。

【サンチヨ】は一番の兄でインテリタイプ。注文の窓口や交渉も彼がやってて、装飾に関するセンスと熱意は凄いけど、鍛冶場の熱さがキライ。

【ポンチヨ】は二番目でヤンチャな性格。武器造りへの情熱と発

想は凄いいけど、防具にはあまり興味が湧かないみたいで、デザインセンスが今一。』

【パンチヨ】は末っ子で、堅実で真面目な性格で、仕事にも反映したのか防具への興味と造詣が深く、武器とかは好きじゃ無いみたい。彼もデザインセンスはちょっと…。

って感じで、好き嫌いど、得意分野が見事にバラバラなんで、三人がそれぞれ足りない部分を補っているんだよね〜。

だから、三人一組で同時に幾つも注文を受ける事で、商売として成り立たせているみたいだよ。』

「なんと云うか、えらい極端で変わった兄弟だな…。

…それで、紹介して貰うのはイイとして、依頼は受けて貰えそうなのか？」

『結構、可能性は高いと思うよ〜。

それと言つのも、名が売れているってのは、腕が良いのも理由だけど、”変わり者”な事でも有名なんだよね〜w』

「……大丈夫なんだろうな？ そんな連中を紹介して。」

『変わり者って、悪い意味じゃ無いよ。』

一般に知られてる【ドワーフ】に比べたら、随分と融通を利かせられるからね。

…当然、造った”作品”に対しての”拘り”^{こだわ}は他の【ドワーフ】に比べてもかなり頑固だと思うけど。

それだけ、良い物を造るための”知識を得る”って事に貪欲で、それに見合った”自負”も有るって事じゃないかな。

まあ、確かにその”奇行”っぷりも有名だけどね……。 (ボソッ) 『

「おい！聞こえてんぞ！！ｗｗｗ

なんだよ、その奇行って言うのは！？」

『あゝ、いや、それ程珍しい事を仕出かすわけじゃないよ？』

他の【ドワーフ】の同様に、興味の湧いた対象意外は、目に入ら無くなるだけなんだけどね。

その度合いがね、極端なんだよね。

わっちが直接知ってるのは一例だけなんだけど、1月程家に鍵が掛かっていたんで、何も聞いてはいないけど旅行にでも行ったのかな？

と思っていたら、三人で家に引き籠もって研究や作成に掛かりきりだったみたいで、ひと段落ついて出て来た時は風呂にも入って無からクサイ上に、碌に飲み食いもして居ないから、【食死鬼^{ゲール}】みたいに痩せこけていたんで、廻りは本当に【アンデット】かと思つて、【ドワーフの僧侶^{プリースト}】に魔封じの魔法を掛けられたんだ。

まあ、実際は違うから効か無かつただけど、その所為で”聖なる力”の効か無い【新種の食死鬼^{ゲール}】！？

とか、勘違いされて更に大騒ぎになってさ、一歩間違えばそのまま”討伐”って為り兼ね無い騒ぎに発展したんだよねw

その騒ぎの所為で、かなり有名になつたみたいだしww

「そんな名前の売れ方は、嫌すぎるだろ！ W W W

…まあ、取り敢えずはその三兄弟に拉麺喰わせて、洗脳するか。

その方が確実っぽいしな W

「王様、”洗脳”とか嫌な単語使うの止めようよ W

「普通に僕らの”拉麺”なら気に入って貰えるワン」（キリッ）

「そそ、漏れらの拉麺なら大丈夫だし W

「それに、肉体労働系なんですよ？」

「だったら、最高の組み合わせでしょ W

『わっちらも大丈夫だと思っし〜 W』

『そそ W W ほっくらも保障するよ！』

『…いざとなったら、この”怪しい薬”で… W W W』

『ふえっ！ふえっ！ふえっ！』

「「「それはやめるおおおおおお！……？」
「「「

・

・
・
・
・
・

.....

そして、遂にやって来ました。

【ドワーフ】の住むと言う【石の都^{みやこ}】の入り口に。

…なるほど、聞いた話よりも遙かに荘厳で精緻な彫刻が為された
”門と扉”は、城門と言ってもおかしく無いんじゃない？ って思わ
せる程見事なモノだった。

ただ、聞いてた話しよりもかなり多目の、入り口を警備して居る【
ドワーフ】達が、妙にピリピリしてるような感じがして、気には為
ったけどな。

それでも【シロアリ^{フエアリ}】達が、俺らの身元を保障してくれたのと、ド
ワーフの首長^{ヘッド}から俺^{レギオン}らの話しを聞いているらしくて、すんなりと、
門を通してくれた。

近くに行くまでは判ら無かったけど、合わさった扉には”隙間”が一切無くて、彼らの技術力の高さを窺わせるモノだった。

門からの長い入り口を抜けると、道幅10ダント程、天井がかなり高い【主路】に出た。

【主路】の両側には、とても壁を削って造ったとは思え無い程 見事な造りの、多岐に渡る”工房兼住居”が並んでおり、

此処が【石の都】と呼ばれ出した理由を納得させる、光景だった。

「……気の所為かも知れんけど、妙に活気が無くな？」

まあ、これが普段通りなら良いんだけど、なんか聞いてたイメージと違うね？」

『…うん、さっきの入り口の警備兵と言い、なんか変だね？』

ナニがあったんだろうか…？』

「…多分、あるんだろうな。」

それは、これから挨拶しに行く【ドワーフの首長】ドワーフに聞けば、ハッキリするだろ。」

『ん？ 三兄弟の家に向かうんじゃないの？』

「うんにゃ、一応俺って【軍団】レギオンの王な訳だし、そんな奴が一族引き連れて初めて訪れたってのに、此処の”長”に挨拶もしないで、なんか色々と活動したら普通にマズイだろ。」

只でさえ、今は不穏な雰囲気だつてのに。

さっきの門番達も、そう思ったからこそ【首長】ドワーフの館までの道順を、詳しく説明してくれたんだと思うぞ？」

『へええ〜！ やっぱり色々考えてるんだね？』

ただの変な”拉麵飛蝗”ラーメンバッタかと思ってたYO!!！』

「うむ、なにもまちがってはいないな！w」

「うん、王様はただしく変なヒトだしねw」

「と言うか”変態”と言う名の紳士だしw」

「いろいろと残念なヒトには違いありません。」

「！？まさかの裏切り！！！！？」

…ぼん！

「くまっ」

……くっ！

……。
【吾作】フリードリヒの優しさが、裏切られて渴いた心に沁み込んで行くようだ

……行くようなんだが……。

クマに同情される俺って奴は……。 (泣)

「「「「これはひどいｗｗｗｗ」」」」

『「一番ひどいのは、おじいちゃん達だけだね」』
ホッパ

…お前も、言う資格は無^ねえけどな!! W

…
…
…
…
…
…
…
…
…

…
…
…
…
…
…

…
…

そこで、十字に分かれた【主路】メインストリートを曲がり、街の外周部分に造られた、上の階層に行くための輸送路を抜けて、【首長】ドンの住む館へとやって来た。

館の入り口でベルを鳴らして、出て来た家宰（執事）に訪問した用件を伝え、【首長】ドンが来るまでに通されていた応接間で待つ事し

し。… なんだか憔悴したような【ドワーフの首長】ドンが現れた。

『初めてお目にかかる。 最も新しき種族の王よ。』

ワシは、この【石の都】ストーンのドワーフを束ねる【首長・キホーテ】ドンと
言う者。』

……そう来たかw

今度は”ラ・マンチャの騎士”かよ！ww

そう言えば、あの物語では彼のお供に”サンチヨ・パンサ”ってのが居たな。

あの三兄弟の名前はコレの前振りだったのかw

てつきり、ドラ エ5の”サンチヨ”かと思って居たわw

あ、ちなみに”パンサ”ってのは”太鼓腹”って意味で、名前じゃ無いらしいよ。

『本来ならば、一つの種族の王とも在ろう方の訪問に、都を挙げて歓迎をしたい処なれど、事情があつてそれも儘為らんだ。

今は、訪れるには大分、時期が悪いと言わねばならんだろう。

有体に言えば最悪の時期だな。

…無論、【アバドーン】殿に、なんの落ち度が有るハズも無い。

ワシは歓迎しておるし、【石の都みやこのドワーフ】達も、お主達を歓迎するだろう。

マズイのは、我等【ドワーフ】の置かれた現状だのう。

ヘタをすれば、我等【石の都みやこのドワーフ】は、来年の今頃には滅んでいるかも知れん。

それ程、今は厳しい状況に我等は居る。

…まあ最も、ここ2・3日で状況が動くと言う程、差し迫った危険は無いのう。

訪れた目的は知らんが、手早く済ませれるなら、それに越した事は無い、さっさと目的を遂げて、急いで此処をあとにしなされ。

お主等にまで、災いが及ぶ前にな。』

ふむ、どうやらマズイ時期に訪れたようだな。

最初は素っ気無いと思われた【首長トシ】も、厳つい顔に似合わず親切心から心配してくれてる様だな。

ともあれ、此処で彼らに全滅して貰う訳にも逝かない。

【石の都^{みやこ}】はドワーフの集落としての規模は1・2を争うほどで、そんな彼らが滅ぶと為れば、【ドワーフ】はその数を大きく減らす事になる。

それは、世界のバランスに少くない影響を及ぼさずには居られ無いだろう。

ならば、俺達【軍団^{レキオン}】は、その理由とやらを見過ごすべきでは無い。

「【首長^{ドン}・キホーテ】殿、貴方も我等【軍団^{レキオン}】がこの世界に降り立った時に、【神々】の言葉を聞いた筈。

我等が【造物主】より託された使命は、たった一つ。

『“この世界のバランス”を保ち、平和を維持せよ』です。

貴方達【石の都^{みやこ}のドワーフ】達が滅べば、ドワーフの総数は激減し、それはこの世界に対して、少くない影響を及ぼさずには居られ無いでしょう。

それは、我等に与えられた使命に、直接関係して来る問題でもありません。

聞かせて貰え無いでしょうか。

貴方達を窮地に追い込んでいると言う”問題”とは何なのか。」

『……………ふう。』

分かった、お話し致そう。

正直、我等では、有効な打開策は浮かんで無いし、この話を聞いてお主等が諦めるなら、それはそれで関係無い者達まで、巻き込まなくて済むだろうしな。

それに、聞かれたとて問題など何も無いだろうしのう。』

俺がその言葉に無言で頷くと、いまだ、躊躇いを残しながらも話しはじめた。

『…最初の”災い”は、この【石の都^{みやこ}】の地下から来た。』

「地下？」

『そう、この【石の都^{みやこ}】の地下に広がり、今も尚、広がり続けて我等【石の都^{みやこ}のドワーフ】でさえ、目印を見落とせば迷い兼ねない程、入り組んで長大になった採石場。』

他の種族達ばかりで無く、我等【石の都^{みやこ}のドワーフ】でさえ、最近ではそう呼んでいる、別名【星屑の大迷宮】の底の底、最も深き地の底から、”それ”は現れた。

……いや、ワシ達が掘り起こして、覚醒^{めいめ}させてしまったのだ。

あの忌まわしい”魔神^{デューバ}”をな……。』

「……………魔神^{デューバ}……………？」

『その体色は地の底の闇のように黒く、頭部には太く擦れた2本の角が生え、ドワーフの成人の胴回り程の太さの腕は、我等が身に纏^{フル・プレイト}う全身鎧を一撃で拉^{ひしゃ}げさせる程の剛力を秘めておる。』

5 ダントは在ろうかと思われる巨大な体躯と強靱な肉体は、我等が振るう戦斧や槌にもビクともせぬ上に、歯や口腔までも黒い”口”からは、ワシ達を一瞬で炭化させてしまうほど高温の炎を吐く。

そして、全身真っ黒な身体の中で、そこだけが赫く光る三つの目から出された光線に当たれば、外傷は無いの息絶えてしまうのだ。」

「…それで、その魔神とやらは、まだ地下に？」

『ああ、その通りだ。』

この【石の都】に限った事では無いが、【ドワーフ】の坑道には崩落した時に連鎖的な被害が出ぬように、各階層を区切る出入り口には、堅固な扉を設置して、その廻りを強固に補強してある。

その堅固な扉が有るので、奴もおいそれと出ては来れないで居る。

……今の所はのう。』

「それほど長くは持たない？」

『そうは言わんが、このまま奴の事を忘れて、暮らして往くには心許無いと言わざるを得んな。

奴が居る限り、【石の都^{みやこ}】は放棄せねばならんだろう。

悲しい事だが、【ドワーフ】では奴を倒すのは無理だ。

…実際、魔神^{デーバ}が現れた時、廻りの【ドワーフ】は勇敢にも槌を手にして、戦ったのだ。

知らせを受けて駆けつけた警備兵も、一緒にな。

結果は、さつき話した通り。

自慢と取られるだろうが、我等【ドワーフ】と呼ばれる種族は、その頑健な身体と力が強い事から優秀な戦士でもある。

頑固で有名な性格は容易く諦める事を良しとせず、皆勇敢な心を持っている。

にも関わらず、魔神^{デーバ}に目だった傷も与えられずに、あつと言う間に70人ももの同胞が命を散らせ、30人が重症を負った。

無念では在ったが、有効な手段が無いままでは、無為に死者を増やすばかり。

涙を吞んで逃げ帰るしか無かった。

…その際、重症を負った30人が、ワシの命令に逆らってまで遣ってくれた、命と引き換えの時間稼ぎのお陰で、奴が上の街に出る前に、首尾よく閉じ込める事に成功したのだ。

ワシ達は100人の同胞が命と引き換えに与えてくれた、束の間の安息の中で即急に今後の指針を決めねば為らなかった。

あの扉ですら、いつまでも魔神を留め置けるとは、思えなかったのだな。』

「…当面、魔神は”扉”で阻んでいるとして、他の災いとは何です？」

貴方は、さきほど『最初の”災い”』と言われた。

ならば、他の懸念事項とは？」

『 ”人間”の事だ。』

あの、狡猾で卑劣な”悪魔”共め！

この【石の都】^{みやこ}は”隣人”として、近くにある”グランディ王国”の奴らとも少なからず、商売の取引をして来たのだ。

ワシ達は主に金属の加工品を、奴らは主に食料や身の回りの雑貨等を、中でも最も多かったのは酒だな。

我等に限らず、【ドワーフ】とは酒が大好きなのでな。

だが、【魔神】^{デーバ}が居る限り、鉱石は採掘出来ないので、奴らとの取引が出来なくなっただのだ。

ワシ達では【魔神】^{デーバ}に手も足も出ず。

さりとて、他から鉱石を調達しようにも、手間賃や輸送費を考えれば赤字になるので、儲けが無ければ、いずれは飢えてしまう。

いままで取引して居たと言う、義理もあつたので奴らにも事情を話し、今後の取引は無理になつたと断りを入れ、

それぞれ、知人や親族、中には旅に出ると言う者も居たので、この

【石の都】^{みやこ}を離れる事にしたのだ。

これまで暮らした”故郷”を離れるのは身を切られるように辛い決断であつたがのう…。

そんな我等に、あの恥知らず共は

『お前達の蓄えた財宝を全て、献上せよ。さすれば我が国の”騎士団”並びに”魔法兵团”が件の【魔神】^{ディーバ}とやらを討ち取ってやるう。』

と言って来たのだよ。

あまりにも侮辱した、腹が立つ言い草ではあったが、ワシ個人の感情で、1万5千人もの同胞の生活を不意にする訳には往かなかった。正直、申し出を受けるか悩んだが、財産の無い状態で放り出されても、結局飢える事になるだろうし、我等の弱みに付け込んで、そんな事を言つて来る連中が支援をしてくれる筈も無し。

一番の理由としては”騎士団”だか”魔法兵团”だかに、【魔神】^{ディーバ}が何とか出来るとは思えなかった。結局断る事にしたのだ。

そしたら奴らめ、取り繕うのを止めてワシ等に

『良いから言われた通りに、財宝を寄越せ。寄越さぬなら【石の都】^{みやこ}を攻め滅ぼすぞ。』

と言って来たのだ。

なんと云う信義に悖る奴らよ！

その後、奴らはワシ等が逃げれ無い様に街道や国境沿いに、監視の

目を配しておるのよ。

我等の戦士達が、奴ら如きに劣るとは考えて居らんが、ワシ等は女、子供、老人合わせても1万5千人、対する奴らは数だけは多く、兵士だけで5万人は居る。

戦いを挑んでも、数に押しつぶされるのが目に見えて居る。

故に、我等は内に【魔神】^{デューバ}、外では飢狼の如き”盗賊共の国”に挟まれて、退くも進むも出来ぬ状態になっておるのだ。

これが、我等を滅亡の危機に追い込んでいる”問題”と言う奴だ。」

「…なるほど、話しは理解出来ました。

【魔神】^{デューバ}もその王国（笑）とやらも我等【軍団】^{レギオン}が、始末を付けましょう。」

『……………はっ。』

「別に冗談で言ってるのでも、彼らを過小評価している訳でもありません。」

元々我等【軍団】^{レギオン}は、世界のバランスを崩しかねない要素である。増えすぎて、傲慢になった人間や、神にすらその発生原因の分からない【魔獣】を、神々に代わって監視する”監視者”であり、必要と判断すれば、たった一人で絶滅させる”処刑人”でもあるのです。

故に、【魔神】^{デーバ}だろうが、一つの国であろうが問題ありません。」

『あゝ、キホーテちゃんに”天の御柱”の事、話して無かったっけ？』

『タルト、”天の御柱”とは何の事だ？　ワシは聞いた覚えが無いのだが？』

『 なんとね、かねこれ彼此1年近く経っただけどね。 』

【 フェアリー シロアリ 説明中 】

『……………そうだったのか、外ではそんな事が……………。』

「はい、ですから可能か不可能かに付いては問題無く”可能”です。

」

『そう言った事なら、ワシの方からお願いする。』

この通りだ、【アバドーン】殿。

【石の都^{みやこ}のドワーフ】の首長、ドン・キホーテより、

【軍団^{レギオン}】の王、アバドーン殿に、正式にお願い致します。

【石の都^{みやこ}】に暮す1万5千人の【ドワーフ】達の未来を、どうか、護ってやって欲しい。』

「承知。

我等【軍団^{レギオン}】、大勢^{たいぜい}なる者の王、【アバドーン】の名に於いて、その依頼、確かに引き受けた。」

………「こつして、俺らは思いも寄らずに【ドワーン】の依頼を受け
る事になったんだw

Episode:19 石の都(後書き)

今回、珍しくシリアスでしたー。

お陰で、書くのに時間掛かってしまいました。

Episode:20 星屑の大迷宮(前書き)

20話投稿！。

Episode : 20 星屑の大迷宮

やあ、思いがけず【ドワーフ】を助ける事になった^{アバドーン}蝗の王だ。

現在、【首長・キホーテ】に案内されて、【星屑の大迷宮】に向かう為に、街の下層に来ているんだ。

【魔神】^{ディーバ}と【グランディ王国】、どちらも片付けないと為らないが、王国軍の方は出入口に堅固な扉^{けんこ}が有るので、簡単には入っては来れ無いだろうし、その防備を固めて立て籠もり、立て籠もってる間の食料はポーチから出して提供すれば済む。

人手が足りないなら【テレポルト】や【アポーツ】で眷属を召喚すれば良いしな。

逆に、【魔神】^{ディーバ}の方は何時扉を破られるか予測不能だし、【ドワーフ】の拠点の中の問題なので、まずは此方の方から片付ける事にした。

拠点が安全だって事は、それだけで精神的な余裕に繋がる訳だしね。

それで、この【石の都】^{みやこ}の構造を簡単に説明すると、大きく分けて、出入り口のある階層を【下層】、その上が【中層】、更に上が【上層】となっており、【下層】の下に【地階層】、そこから下に向けて【星屑の大迷宮】が、広がっている感じだ。

俺が今いるのは【地階層】で、目的の【魔神】^{デーバ}は【大迷宮】に入ってから、やや暫らく降りた場所にある”扉”で阻まれているようだ。

今回、俺と一緒に来ているのは、案内役の【首長・キホーテ】^{ドク}とドワーフの護衛2人、それと好奇心から付いて来た【シロアリ】^{フェアリ}達。

後は、【アポーツ】を使って俺らの拠点から召喚した、42号と51号の二人だ。

この二人は、戦闘要員としてでは無く、【ドワーフ】^{フエア}達と【シロアリ】^{アリ}達の護衛として呼んだ。

【魔神】^{デーバ}の方は、俺一人で十分だしな。

本当は、俺一人で行けば護衛要員を呼ぶ事も無かったし、戦闘区域に護衛対象を連れて行くなど、本来はあっては為らないのだが、

『ワシには見届ける責任がある。たとえ死んでも恨みはしない。』

と言い張って、意思を曲げようとしなかったのだ。

【ドワーフ】族、マジ頑固ww

そして、【ドワーフ】達が行くならと【シロアリ^{フェアリー}】達も付いて来たのだ。

まあ、コイツらに関しては不思議な力を持つてるので、身を護る事に関しては心配要^いらんだろっから、護衛の必要は無さそうだったけどな。

そんな訳で、主に【ドワーフ】達の護衛の為に、2人の眷属を呼んだ訳なんだ。

一応、説明して置くけど、護衛対象より護衛の方が人数が少ないのは、自分達の能力を過信した訳でも、護衛するって事を簡単に考えてる訳でも無い。

一人の人間を護り切ろうと思ったら、護衛は二人以上が望ましい。

それ程までに、護衛と言うのは困難な事だ。

だけど、俺達には”結界魔法”がある。

俺達はこの魔法を極める為に、多くの情熱を傾けて来た。

その結果、俺達独自の”決戦空間”とでも言うべきフィールドを形成する事に成功したんだ。

この”決戦空間”が使えるからこそ、少ない人数での護衛に支障が無いのだ。

ちなみに、さつきから説明を続けながら歩いているけど、【俺様脳内会議】マルチタスクの分割高速思考を使っているので、なんの問題も無い。

そして、ちょうど良いタイミングで【大迷宮】と【地階層】を隔てる”扉”に付いたようだ。

506

「でかい扉だな……」。

それに、ひどく頑丈そうだ。

その【魔神】デューバってのは、コレを突破するかも知れないって事だな。」

ほんの少し、躊躇うような素振りのあと、扉を開けようと手を伸ばした【キホーテ】を制して、

「念の為、扉の向こうに何か潜んで無いか、確認する。

42号と51号は、万が一に備えて扉の廻りに結界を組め。

万が一ここを突破されて、上層の居住区に行かなくてもしたら、甚大な被害が出るからな。」

俺は眷属と共に扉の向こうに意識を向け、何者かが潜んでないか確認した後、万が一にも此処を突破され無いように、扉を囲んで結界を組みあげた。

その後再び、【首長・キホーテ】に先導されて、いよいよ【星屑の大迷宮】へと足を踏み入れたのだ。

【大迷宮】の中は、今までの階層のように磨かれた壁面では無く、坑道独特の、土や岩が剥き出しのままの状態であり、細かい鉱石の粒が壁面に露出し、それが発光性のコケ類が放つ僅かな光を反射して、キラキラと瞬く様に光っていた、まるで夜空に輝く星屑のよう

「これは、聞きしに勝る凄い光景だな。
まさしく、地下世界に突如広がった星空のようだ…。」

『そうだろうとも、この場所こそが我等【石の都みやこのドワーフ】達にとつての、“魂の拠り所”とも言つべき場所なのだからのう。

お主が来てくれなんたら、此処を捨てねば為らなかつた…。

改めて礼を言わせてくれ。』

「まだ、何も解決した訳じゃ無い。

礼なら、全てが片付いて、心の底から皆が笑えるようになってから、改めて言ってくれ。」（キリッ）

（王様の凜々しさに全俺が泣いたw）

（マトモな事を言ってる…だと？）

（ナゼ普段から、こつでは無いのかw）

（何故、いつもは残念なのかww）

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

そして、俺達は明かりの無い坑道を下へと降って、歩き続けている。
このメンバーは全員、暗視能力があるので、明かりを必要としないし。

それにしても、エライ入り組んでいて、目印を見落とせば迷うつても、確かにうなずけるわw

……… いったい、どれだけの時間、歩き続けたのだろうか？

正確な体内時計を持つてるハズの俺でさえ、ともすれば時間の流れが曖昧になるような闇の中を、黙々と歩き続け、ようやく【魔神^{デーバ}】を閉じ込めた下層の扉に、辿り着いた。

『…着いたぞ、此処がその扉だ。』

【ドワーフ】達の顔色が悪い。

この頑健で知られる種族が、揃って疲れてる筈も無いから、忌まわしい敗走の記憶を思い出しているのだろう。

「やっと着いたか、長い行程だったな。」

まさに【大迷宮】の名に相応しい規模だったな。」

『ホントは、単なる坑道なんだけどね〜w』

「それじゃあ、さっきと同じ様に俺は扉の向こうの気配を探るから、42号と51号は結界の準備。」

「了解！」

「……よし、開けるぞ。」

皆は一箇所に固まりながら、進んでくれ。

42号と51号は、何時でも結界を張れるように、準備しながら護衛。」

扉を潜った瞬間から、まるでこちら側は別の空間だとも言つように、空気の質が重く纏わり着く感じに変化し、息苦しさを覚えるようになったので、全員、声を出さずに頷くことで、了解の意思を伝えて来た。

そのまま、ややしばらく進んで行くと、結構な広さの空間に出た。

「見たところ、あまり手を加えた様子がないな。」

元々あった空洞に、坑道が繋がったので階段を造り、床を平ゆかに削たいらつたって感じか？」

『ああ、その通りだ。お主等も大地の中の事象に詳しいのか？』

「俺らの種族は、スキル【ハリー急いで・掘ったー】を持つてるからな。」

『おお、お主等もか！飛蝗バッターだと聞いていたが、”ケラ”だったのか？』

「”ケラ”ちゃうわｗｗ あと、やっぱり【ドワーフ】も持つてるんだな。」

まあ、当たり前っちゃ、当たり前か。」

『うむ、なにや」「まで！」「…え？』

「……………」

その身に纏う禍々しさ、瘴気、向けられる強烈な殺意の波動に、

俺は、ある程度全力を出さなければ為らないと判断して、

うしろで【ドワーフ】達と【シロアリ】フェアリー達が息を呑む声が聞こえる
と同時に、眷属に向かって指示を出した。

「このまま全力で戦えば、坑道が崩落する！ ”飛蝗時空”ハッタジクウに引き
ずり込めー！」

「了解！」

それと、同時に眷属達を中心にして、僅かに瘴気が漂っていた坑道
内の空気が、清浄なモノへと塗り替えながら、【魔神】ディーバの居る場所
を瞬時に呑み込んだと思った瞬間。

【魔神】ディーバを含む、俺達全員がいままで居た坑道とは、全く別の空間
に居た。

俺達が、多くの情熱を傾けて極めた”結界魔法”の行き着く果て。

周りに一切の被害を与えない為に形成・隔離された、物質と非物質の狭間の場所。

”決戦空間”とでも言うべきフィールド。

通称、”飛蝗時空^{バッタータイム}”だ。

：なにやら、昔の特撮ヒーローモノで、悪役が使ってたような名前だが、気の所為だww

まあ、ぶっちゃけると俺らの力は強すぎて、ちよっと加減を間違えただけで、

”環境破壊って生易しいレベルじゃねーぞ!!!?”

ってな事になっちゃう訳よ。

世界のバランスを守護する俺らが、自然環境を破壊しまくるのはNGだし、手加減して戦ったとしても、ちよっと加減を間違えただけで、大惨事になる。

それを解決する為の方法として、俺達は”結界魔法”に光明を見出した。みいだ

あとは、アホほど訓練を繰り返していたら、何時の間にか”結界”で隔絶された内部は、

赤茶けた大地が続く荒野に、土山が所々に点在し、岩場にはかなりの大きさの水場と、砂地では天然ガスに引火した炎が吹き上げ、吹き上げられた炎によって、上空には常に乱気流が渦巻いている。

この中では”四大元素”が容易たやすく用意されるのだ、しかも無制限に。

更に見上げれば、満天の星空に俺らの顔を模した巨大な月が浮かぶ、ストレンジ・ワールド夕焼けの世界。

.....これ何でシユール空間？に進化していたWWW

『 『 じ、これは、いったい……？ 』 』

『 『 『 『 『 ちよつ W W W なんぞこの空間 W W W 』 』 』 』 』

「モチつけ、お前ら W

奴はかなり、手強そうだったんでな、あのまま坑道内で俺と奴が、ぶつかり合えば確実に崩落が起きると判断して、俺達【軍団】^{レギオン}の決戦フィールド、通称、”飛蝗時空”^{バツタシクウ}に、奴ごと引き込んだんだよ。

「

『へえ、結界魔法の究極の形だね。』

初めて見たよ、内部は造ったヒトの影響を受けるんだね W W W 』

「そう言う事、もう少ししたら奴が落ちて来るから、この”観戦所”から出ないようにな。」

……！！

目の前に現れた俺に気づき、奴は警戒しながら様子を窺うかがっている。

どうやら、奴にとって居心地の悪い清浄な空間の中では、勝手に違ちがうのだらう。

だが俺には、それを考慮してやる義理は無い。

ドゴンー！！

足場の地面が碎ける程の踏み込みで、瞬時に奴の懐に入り込み、渾身のフックをわき腹に叩き込む。

ゴツギイイイイイイン！！！！

とても、生身同士がぶつかったとは思えない様な音を響かせながら、

吹き飛んで、岩にめり込む【魔神】ディーバ】。

そのわき腹には大きな罅ひびが入っていたが、追撃をかけて放った蹴りを俊敏な動作で避けたかと思えば、瘴気に包まれ瞬く間に再生してしまった。

だが、この空間内では、闇の瘴気は補充出来ない。

力を消費して傷を治し、周りからは補充が利かない上に、この中では徐々に消耗して往くしか無いのだ。

長引くかも知れんが、勝利は揺るがない。

そもそも、”勝負”では無く”処刑”なのだ。

自分の為すべき事を再確認し、俺は果敢に攻勢を掛けてゆく。

接近戦で敵を翻弄しながら、分割高速思考で意識を分けて魔法を準備する。マルチタスク

秒間、数十発の拳の弾幕を打ち出して、【魔神】ディーバの身体を力づくで破壊し、更に収束させた無数のラメエ炎系下級呪文が、全方位から降り注ぎ、身体を抉り取って往く。

苦悶に啼き声をあげ、牽制の為に吐き出された奴の炎に敢あえて突っ込み、【レジスト】で強引に炎を無効化して、口腔に手を突っ込み、内部でチャプイッ氷系最上級極大呪文テエーを開放する。

間髪入れずに、【超加速】を発動して安全圏まで飛びのき、通常時

間軸に戻った瞬間。

ストレージ・ワールド
夕焼けの世界に、巨大な氷の華が咲いた。

その氷華が徐々に砕け散って光の粒子へと変わって消え去った後には、もはや無限の再生能力を失った【魔神】^{ディーバ}が、満身創痍のぼろぼろな状態になって、辛うじて立っていた。

バコン！！

音と共に、”第2の口”が左右に開き、
ストレージ・ワールド
夕焼けの世界に存在する”^あ四
大元素”を吸い込んで往く。

轟！！！！！！！！！！

炎は赤い光の粒子となり、土の山は黄色い光の粒子に変わりながら、水の粒は青い光の粒子に、最後の風は白い光の粒子となって、四色の光は渦を巻いて、”第2の口”に吸い込まれて往った。

全ての光を吸い込んで、”第2の口”が閉じられ【アバドーン】の全身が、眩い紫色の光に包まれる。

「これで終わりだ。」

そう宣言すると同時に踏み込み、拳を打ち込んだ。

打ち込んだ部分で光が弾け、徐々に奔流となって夕焼けの世界全体ストレンジ・ワールドを光が染め上げる。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

あまりの眩しさに目を開けて居られなくなった、【ドワーフ】達と
【シロアリ^{フェアリー}】達が、我に返ると、何時の間にか光は収まっており、

彼らは、元通り【星屑の大迷宮】の坑道にある広間に立ち尽くしているのだった。

あの不思議な空間を連想させるモノは、何も見当たらず、

『あの不思議な場所と出来事は、本当にあった出来事なのか？ あ
るいは、自分達は白昼夢でも見たのではないか？』

そんな風に思い廻りを見回していると、先ほどと変わらぬ位置に立
つて落ち着いている蝗アバドーンの王が、こちらに向かって話しかけた。

「これで、【魔神】デューバの方は片が付いた。

あと残るは、”人間”ヒューマン共の始末だな。

とは言え、少しくらいの余裕は有るだろう、まずは腹ゴごしらえだ。

【首長ドゥン・キホーテ】、あんたらドワーフに今まで喰った事も無い、
美味しいモノをご馳走してやるよ。

さあ、上に戻るうぜー！」

…こうして、俺は【魔神】^{デューバ}を倒し、今度は”人間”^{ヒューマン}に対処する為、
上に向かって歩き出したんだw

E p i s o d e : 2 0 星屑の大迷宮（後書き）

次回は、人間の王国が涙目。

Episode:21 ドワーフと拉麺と科学反応と(前書き)

21話投稿。

今回は閑話つぱい、日常のお話なんで、短めです。

人間涙目は次回以降に持ち越しです(汗)

Episode : 21 ドワーフと拉麺と科学反応と

やあ、【石の都】^{みやこ}に滞在中の蝗の王だ。^{アバドーン}

昨日は【魔神】^{デーバ}を倒してから、【星屑の大迷宮】で奴と遭遇した広間に刻み込んだ、”転移呪文の魔方陣”^{まじ}を使って、予め、出発前に【地階層】の入り口付近に刻んでおいた、魔方陣まで転移して来たので、帰る時は一瞬だった。

勿論、【首長・キホーテ】^{ドゥン}の了解は取り付けてある。

【地階層】から、【星屑の大迷宮】の下層に在る広間までは、かなりの距離があるので『移動が大分、楽になる』と、メチャメチャ喜んで貰えたしw

無論彼らも、”転移呪文”の存在は知ってたし、便利だから何とか出来ないかと思っでは居たらしい。

でも、種族的特長って奴で、彼らは魔術に対する適正は無い、魔法防御は高いのにw

適正が有っても、精々僧侶になるくらいだし、仲が良くて付き合いのある、他の種族に頼もうと思っっても、やっぱり魔術に対して適正の低い、”獣人系”の種族ぐらいとしか、付き合いが無い。

魔術が得意な【エルフ】とかの、”知的”な種族とは気が合わないらしくて、お互いに敬遠してるそうだ。

…なんと言う典型的な”類は友を呼ぶ” W

気が合うのは同じ”肉体派”または”体育会系”の、所謂”いわゆる脳筋”タイプばかりって事 DEATH ね W

…そりゃ、”転移呪文”を用意するのは無理だわ W

ん？ 【シロアリ^{フェアリー}】達に頼めば良いって？

ところが、そう上手くは行かないもので、【シロアリ^{フェアリー}】達は、不思議な力を使う事で有名だけど、魔法を使っている訳では無く、思っただけで発動する、原理のよく判らない力だそうだ。

『自分達も原理は判らないけど、便利だし使えるんだから良いやw』
w

って事で、済ませているので、自分達にしか効果が及ばないらしい。
所詮、コイツらも”類”に惹き寄せられて集まった”友”ってこと
だww

俺が推測するに、【シロアリ】^{フェアリー}達の能力って、多分”超能力”^{サイキック}に近い能力なんじゃね？と思うわけよ。

…まあ、こんな事を分割高速思考^{マルチタスク}を使って思考を廻^{めぐ}らせてたりしてる訳なんだな。

何故、分割高速思考^{マルチタスク}を使っているかって？

うん、実は現在結構^{いま}と言うか、か・な・り、忙しいんだ。

………只今絶賛、大量の” 麺玉 ” を湯きり中なんだYO!!!

「王様、ドンブリここに置くね!!」

「ちよつww それよりスープに味付けてよ!？」

「刻みネギもう無いよ!？」

「これ、カウンターの6番と7番ね!!」

「麺まだ!?!? スープ冷めちゃうでしょ!?!？」

「ギョーザ10皿追加来ましたワン!？」

「くまーっ!?!？」

…これ、なんてカオス？

<うおおい！真紅しんくの海原うみはら・超辛担々麺、2人前！>

<こっちは、椎茸しいたけ旨みレボリユーシヨン餡かけ焼きそば3人前じゃ
！！>

<ワシは、特製焼豚チャーシュー入りラーメン、豚骨とんこつ味噌味だな！>

<斑海老まだららーめん、熟成極味噌味、2人前じゃい！>

<豹紋蟹せうもんかにの餃子を、6人前くれい！>

<特製チャーシュー入りタンメン、特盛り海鮮味噌味おくれ。>

……オクレ兄さん！！！！？

いや、そんな事はどうでも良いが、コイツら拉麺気に入りすぎだろ
！！？

有り得無ねーだろ！ この熱狂ねぶりは！！

……いや、ガチ肉体労働系の種族だから、イけるとは予想してました
よ？

肉体労働系に味噌や豚骨系の拉麺は鉄板だからね！

だが此処までは予想出来なかった
ww

しかも、コイツら大喰らいばかりなモンで、一人で2人前とか、多い時には3人前以上を普通に注文しやがる上に、無駄に声がデケエから、うるさいのなんのってww

……此処石のみやいには、一箇所だけじゃ手が廻りきら無いから、【下層】か【中層】に、”飛蝗拉麵バッターめんドーフ・中央支店”と【地階層】の【星屑の大迷宮】前あたりに、”飛蝗拉麵迷宮前支店”の2店舗を建てないとダメかもしれんな……。

.....ドワーフェ.....。(;、)

そして、分割^{マルチタスク}高速思考で現実逃避しながらも、俺の手は高速で麺玉を湯きりし続けているんだなw

.....俺達的能力SUGEEEEEE!!

まさに、拉麺作りに最適な種族DEATHね!!!

「いや、そうじゃないから!w」

「忙しすぎて、生まれた目的忘れとるw」

「まただよ(笑)」

「いいから、手を動かさせ藻マエラああああ!!...!!」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

…つづ、やっと終わった…。

「なんとと言う、疲労感w」

「今までの、集落の中で一番キツかった…w」

「さつき、拠点から応援呼んで、店舗の建築準備したら、頼んでも居ないのに手伝いだして、魔改造始めちゃってますけどw」

「調理器具の方も、すごい人数でチーム組んで、設計や試作始めちゃってるしw」

「最初にアレコレ考えていたのが空しくなる位、積極的なんですわ」

「それよりも、ヒートアップし過ぎて、出来上がったモノを見るのが怖すぎるww」

「なんだか、予想もつかない方向に逝きそうなんですわ」

【正解】

今回の、この有様を眺めながら、脳裏にこんな言葉が浮かんで来た。

”まぜるな危険”

…ヤツらに、^{トワフ}拉麵を教えたのは早まったかも知れんw

「科学反応とか起しそつだよねw」

…そんな科学反応は、嫌すぎるだろおおお!!!!!??

.....

.....

・
・

……あれ？

そう言えば、なんか忘れてね？

「……もしかして、最初に依頼しようとしてた三兄弟？」

「ああ、そう思ってた時期が俺達にもありましたねw」

「サンチャ・ポンチャ・パンチャだっけ？」

「センチャ・バンチャ・マツチャだろ？」

「どうでもイイだろw 今更ww」 【酷っ】

「出演フラグ消滅のお知らせw」

「出番が来る前に＼(^o^)ノオワタ。」

「＼(^o^)＼ナンテコッタイ。」

「三兄弟涙目とかwwww」

なんだよ、名前の由来とか一応の設定とか有ったのに、出番の前に退場かYO!ww

哀れすぎて涙も出無^ねえなw

『 この虫ケラ共、酷すぎるwww 』 【x10】

黙らんか、この【シロアリ】共めw

この、どこにでも居る何の変哲も無い虫ケラに何かヨウカイ？

「そのフレーズ気に入ったんすねw」

「まあ、最近は行動範囲増えたから、”どこにでも居る”なw」

「”虫ケラ”って部分にも何の問題も無いw」

「俺らの知名度も上がって来たから、居て当たり前って意味では何の変哲も無い””って言うのも間違いじゃ無い…のか？」

『 そんな事は良いから、出来た店舗見てよw 』 【x10】

…酷っ！！！！？

「あつさり、流されたしw」

「そんな事呼ばわりですよw」

「妖精さんのツンは最高やでえーw」

・

・
・
・
・
・

.....

……うわあ……。

「やっちゃったぜ！ww」

「予想通りww」

「正直外れて欲しい予想だったけどなw」

「なぜこうなったしww」

ん？ 店舗建築の眷属がこっちに歩いて来たぞ？

「ごめん、抑えきれ無かった。(T T)」

「がんばったけど、無理だったわ。)<(」

「誰がやっても、無理W」

……まあ、これを制御するのは無理だわなW

気にすんな！ 藻マエラは良くやったよW

「うっ、王様の優しさに全漏れが泣いた。」

「王様のデレは無敵やでえーW」

「うほ！ いい王様W」

こっち来んなWWW

俺に尻ビツの穴は無ねえぞ！ W

『 え！ 無いの？ 』 【 × 1 0 】

おう、俺らは喰ったモノを胃の中で”原子分解”して、その時に発生するエネルギーを取り込んでいるからな。

老廃物が出る理由も無いんで、尻ビツの穴は要らないんだ。

『……………』

『……………原子分解ってナニ？』

『……………エネルギーってナニ？』

『……………老廃物？』

『……………？』

なんて、つかの間の平和で漫才しながら、一日が過ぎて逝ったんだ。
…無駄にw w

Episode : 21 ドーフと拉麺と科学反応と(後書き)

三兄弟、まさかの出番前に退場w

しかも、店舗がどんな魔改造されたかは、次回以降に持ち越された上に、

前回の予告と違って三兄弟に涙目フラグがww

そして、フリードリヒの理解力に隙は無かった件wwww

Episode:22 邂逅(前書き)

22話投稿♪。

話が進まんのう…。

Episode : 22 邂逅

やあ、尚も継続して【石の都】^{みやこ}に滞在中の蝗の王だ。^{アバドーン}

戦場^{めし時}がひと段落ついた、午後のひと時は落ち着くね〜 W

「今日も長閑^{のどか}に、”飛蝗拉麵^{ハッタラーめん}迷宮前支店”がゆっくりと目の前を、移動^{移動}していつてるよ…。」

「王様、そろそろ現実逃避はやめて、戻ってきてよ。」

「新しく雇った従業員への講習会があるんだからさ。」

「もう、アレはアレでいいんじゃない？ W」

ええ〜？ あの”魔王城”みたいな外観にキヤタピラで移動するの
が、拉麵店でいいの〜？

そもそも、”屋台”じゃ無いのに、なんで”支店”が移動すんの!?

元々の概念^{コンセプト}から、否定してんじゃない!?

「混ぜたらヤバイものが混ざったんだから、しょうがないw」

「これは、予想出来なかったw」

「幸運にも、喰う方以外に”作る方”にも興味を持ったのが結構居るから、ノウハウ叩き込んで、後は放置でいいんじゃない？」

「そそ、後は彼らの自主性に任せるって事でw」

それって、手に負えなくなったから、隔離して放置。

もしくは、”丸投げ”って言うんじゃない……？

「そつとも言うね。」

「いや、そつとしか言わんだろw」

「これ以上の、係わり合いは避けるべきw」

……………よし！ 採用。

「やっぱりw」

「さすが、王様は格がちがったw」

「だが、それがいい！」（キリッ）

よっしゃ！ そうと決まればさっさと講習会終わらせて、後は”見ざる・聞かざる・言わざる”を貫き通すぞ！

そして、手早く”人間”^{ヒューマン}共を始末して帰るべ。

「拉麺もどんな”突然変異”や”化学変化”を見せるのかと思っ
たら、

「予想以上にまともで、基本的に忠実だったw

「まあ、”職人気質”の強い種族だから、基本を疎かにする事のデ
メリットを、
ちゃんと弁えているのかもね。」

「……基本を身に付けたら、”魔進化”しそうだけど……。」

「まあ、それも有るだろうけど、最初に食べた味が気に入ったん
じゃない？」

「そーそー、”美味しいモノ”を最初に食べたは記憶は、”原体験”
として鮮烈に残るからねw」

「案外、心配要らないかも？」

「なら、なんで疑問符をつけたしww」

「あ、王様。調査結果が届いたよ。」

…お、来たか。　それで、どんな感じだ？

【グランディ王国】の様子は？

「うん、あの国では今まで【石の都^{みやこ}】との交流を奨励してた【グラ
ンディ7世】王が、病で寝たきりの状態で、宰相も高齢と心労の為
療養中。」

その間の国政を王弟の【ゴーゴン大公】と、文官の【ブロッケン伯
爵】が仕切ってるんだけど、この連中が今回の元凶で、間違い無い
そうだよ。

この二人、【グランディ7世】王亡き後、【ゴーゴン大公】が次の
王に為るために色々と根回ししていて、その為に使う”賄賂”の資
金を調達するのが目的と
考えて、間違い無いね。」

ちなみに、今回の出兵に関しては、【石の都^{みやこ}】がグランディ7世
王が病床なのを良い事に、金属製品の無茶な値上げを要求し、
呑まないなら呼び出した【魔神^{デーバ}】を嚇^{けしか}けると、脅して来たので自衛
(笑)のために、って言う発表だね。

…今度は、”Z”ネタかよ…。

…まあそれはそれとして、相変わらず”胸糞が悪くなる”ぜ、【人間共】め。

それで、その事に懐疑的、又は批判的な連中はいるのか？

居ないなら、てっとり速く”国ごと”消滅させた方が、面倒が無いかも知れん。

557

「残念ながら、国民の大部分は冷酷な【ゴーゴン大公】を嫌って、

穏やかな人柄の【グランディフ世】を慕っているし、

今まで交流して来た【石の都】のドワーフ達の”人柄”も知ってるから、

その発表を信じてる国民は殆ど居ないね。」

……ち、面倒だが、そう言う【人間】が、罪も無く死ねば【造物主

達】も悲しむだろうからな。

”王国ごと”、まとめて吹き飛ばすのはダメか。

だが、一部のそんな事を信じてる、馬鹿で発言力とか影響力とか有る奴。

それと、人間至上主義な奴とか差別を平気でする様な奴はこの機会に”刈る”ぞ。

「」
「」
舌打ちしたw 「」

「王様の”人間嫌い”、前より酷くなってるね？ww」

「まあ、いいけどね”人間”だしw」

「殺さない理由が”【造物主】が悲しむ”からだしねww」

「【造物主】がイケイケでGOサイン出したら、人間全滅してね？ww」

「それと、宰相が後見人になってる王女を筆頭に、若手の貴族達と宰相の一族が、弱い勢力だけどころかこの暴挙を止め様としてるみたいけど、

他の貴族は日和見で、このままでは王国は【ゴーゴン大公】のモノに為りそうだし、略奪も予定通りに行われそう。

それと、国王の病気の原因だけど、結果は”クロ”。

すぐに死んだら不自然だから、判りづらい種類の毒で徐々に弱らせているみたいだね。

これは、宫廷医師も抱きこんで居るから出来た事で、この医者の子の嫁が【ゴーゴン大公】の娘の一人なんで、この後自分等の血縁で全て固める為だろうね。

彼等の一族は全員、権力を高にきて好きに振舞っている連中で、マシな奴も愚かで無能なのしか居ないようだね。」

.....。

…なら、王女派と国民の大部分は、放置。

始末したいが、日和見貴族も今回は見逃すか。

だが、【ゴーゴン大公】に組した奴らや、この侵略戦争に喜んでい
る様な奴ら。

コイツ等は駄目だ。

「王様、無能なのはどうしようか？」

高い地位や恵まれた環境に居る者は、その分多くの”義務”を負う。低い身分の者や、貧しい者は”生きていく”上での保障が無いかわりに自由で少しの義務しか持たない。

奴らは今まで、経済的に裕福な暮らしをして”飢えた”ことが無く、恵まれた地位と身分で不自由も感じて来なかった。

なのに、奴らは”権利”を行使しても、”義務”を負おうとしていない。

気まぐれ一つで、人の命をたやすく左右出来る身分を持ちながら、”愚かで在る”と言うのは罪になる。

知らない事が罪じゃ無い、知ろうともしない事が罪だ。

上に立つ者が愚かなら、その言葉一つで人の命が簡単に失われる。

今回の騒ぎのように。

ただ、愚かなだけでも、高い身分を持っているなら、それは”罪”だ。

見逃す理由には為らない。

後は少々哀れだと思っけど兵士もな。

大概、命令されては居るんだろうが、実際にコチラの命を奪いに來る以上、容赦はしない。

命を奪おうとする者は奪う”権利”を持つが、力が及ばなければ逆に命を奪われる”義務”も同時に負う。

たとえ、そんな覚悟が有ろうが有るまいが、振るわれた剣が命を奪う事には変わりはない以上、攻めて來たからには、こちらも見逃す理由には為らない。

少なくとも、俺はそう考える。

多分、俺が人じゃ無くて、人のカタチをしただけの”システム”だからなのかも知れんけどな。

「王様ー、あんまりクヨクヨ 悩まなくてもいいよー。」

「そそw 前世は人だったかも知れんけど、今は違うんだし。」

「その判断に間違いは無いと思っよ?」

「漏れらばどこまで信じて付いてくからさーw」

……藻マエラ……。

…氣を使わせて、すまん。

ちよつと弱氣に為っていたかも知れん。

俺には、俺の考えを支持し、どこまでも信じて力ちからになってくれる眷オマ属エラが居るモンな！

これからも、自分自身の”正しい”と思う事を信じて、決断し続けて往くよ。

「「「「だが、イジるのは止めない！」「「「「（キリッ）」

それは、素直に止やめろよ！ 藻マエラ！！？

……折角の感動が台無しだYO！！！！（泣）

・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・

そんな訳で、俺達は現在、【グランディ王国】のはずれにある静養地として名の知れた、コリント男爵の治めるコリント領に來ている。

静養地と言えば聞こえが良いけど、ぶっちゃけると、なんも無い田舎ってことだ。

(なぜ、ぶっちゃけたしw)

(人間相手だと、とことん冷徹だよねw)

今回は、余計な被害を出さない為に、王女に手を出すなと警告すること、国王の不調の訳を教える”貸し”を作るのが目的で来ている。

”貸し”は主にドワーフ達の今後に役立つかも知れんからな。

この男爵は新興の貴族で王女派に属していて、此処には、療養の為に宰相が滞在しており、その見舞いを名目にして、王女派の主だった貴族達が、【ゴーゴン大公】一派に、押し込められている。

………駄目じゃんw 詰む一歩手前だろ。

これなら、わざわざ来る必要すら無かったんじゃないかね？w

(いや、ここで帰ったら無駄足になるしw)

(言つべき事だけは言っておかないと。)

(信じなくて、自ら死地に赴くようなら放置すれば良いんだしねw)

……仕方ない、人間ヒューマンなんぞと会話するのは不快だが、自分の”義務”を果たすとするか……。

そう言や、肝心の王女の名前ってなんだ？

興味のカケラも無いから聞かなかったけどさ。

「えーと、たしか【ピーチ姫】って言ったかな？」

……なんだか、誘拐されるのが趣味みたいな名前の姫さんだな、お

い
w
w

マリオとか居んのか？

べつやら、フレンドリーな俺の挨拶に言葉も出ないようだな。

(無^ねーよw)

(逆に喧嘩売ってるよ!?)

(誰だよ、この人野放しにしたの!!?)

(神様ですが、何か?ww)

(\ (^o^)/)

そんな感じで俺達は、王女達との”最初の遭遇”を果したんだww

E p i s o d e : 2 2 邂逅（後書き）

… 続きが気になる部分で切ってみるテスト W W

Episode : 23 会談(前書き)

23話目投稿です。

人と人の会話を書くのは難しいので

時間がかかりますね。

暫らくは、話しの流れ的に会話が続きますので、

読んでくれた人が退屈しないように

がんばります。(^ ^) v

Episode : 23 会談

やあ、前回ハツチャケた登場の仕方をしたお陰で、現在メチャメチャ警戒されている蝗アバドーンの王だ。

ま、その所為で敵に廻ったら廻ったで、心置きなく”刈れる”から、それはそれで気にしないけどNE！

(最悪だよ、この虫ボト！?)

(だが何も問題は無いなW)

573

「おい、そこヒューマンの人間の女。

【ピーチ姫】とか言う、叔父に王位を取られそうになってる奴ってのは、オマエか？」

『!?!? き、貴様何者だ!?!?』

「姫を”オマエ”呼ばわりとは無礼な!？」

取り合えず確認の為に聞いてみたら、周りの”有象無象”が腰の剣に手を掛け、
今にも切りかかろうとした様だが、【こっち見んなw】の気配隠匿スキルを使い、
悟られずに部屋に入って来ていた眷属達が、奴らの喉元に”生体剣”を突き
つけて、瞬時に無力化してしまった。

有象無象ども、活躍の機会も無いまま無力化されて涙目ww

ちなみに、”生体剣”って言うのは”エルボ・フレイド高周波爪刃”がこれに分類されるんだけど、俺達の身体の任意の場所から大きさや形を変えて出し入れ出来る、甲殻を变形させて造った、自前の武器の事ねww

「取り合えず、俺らに喧嘩売るのは止めとけ。

売られた喧嘩は全て買うつもりで居るから、お前ら普通に全滅する

ぞ?

ヒューマン

人間共。」

『く、先に姫様に対して無礼を働いたのは貴様ではないか!』

(王様、最初から喧嘩売ってたんじゃない?)

なんか、予想もしなかった処で、
人間と虫が、心を一つにしましたよww

だが、ちょっと前提自体を勘違いして居るようだから、親切な俺が一応説明してやるか。

「思い違いをするなよ人間共。」

礼儀だの、王族・貴族だの身分や階級なんてモノは、お前らが勝手に作って、

勝手に言い張っているだけで、俺達には関係無いし、その身分ゴッコに付き

合ってやる必要なんぞ無いって事を認識しろ。

そもそも、その理屈で言うなら、俺は軍団レギオンと言う種族を治める”王”だ。

お前らこそ、”王”の前に跪ひざまずけ。

…と、こう言われる訳だw

もともと、お前らなんぞに跪ひざまずかれてもキモいだけだから、要らんけどな。」

『な、貴様が王だと!?!』

『言わせて置けば、いい気になりおって!』

<あゝ、動くなよ?>

手元が狂って首と胴が、離れ離れはなはなに為るかも知れんぞ?>

『 『 くっ!?!? 』 』

<それと、間違い無くそのお方は我等軍団レギオン、”大勢なる者たいせい”を統べる王だ。

身体の色が違うから、間違えようも無いだろ？ 無礼を働くなよ？

……でないと、”刈る”ぞ？>

普段とは口調が違った、本気モードの眷属ホッパーに【殺気】を向けられ、心の底から

震えあがった”有象無象共”は、ようやく自分達が現在、命の危機に瀕ヒしているのだと、初めて理解出来たのだろう。

だらしなくブルブルと震えだして、立っているのもやっとな状態で、顔色を

青と赤に交互に変えると言う、中々器用な事をし出したww

そんな、詰まらん事で時間が喰われていると、今まで黙っていた【ピーチ姫】が、おもむろに口を開いて言って来た。

「…それで、貴方がたは何故このような処まで赴いて、私の家臣に剣を

向けているのでしょうか？

ここは病人が静養している場所であって、荒事をする場所では有りません。

私に御用が有るのでしたら伺つかいますので、乱暴は止めて下さい。

この通り、お願い致します。』

そう言ったかと思うと、王族にしては有り得ない程アツサリと、頭あたまを下げさげてお願いして来た。

…ほう、何も出来ん世間知らずの”お姫様”かと思っていたけど、意外な程

考え方が柔軟みただし、臣下を庇かばう”度量”も有る。

『ひ、姫様！？』

『その様に軽々しく、頭をお下げになるなど！？』

……ち、それに比べてこのクズ共ときたら。

「だまれ、”有象無象共”が！

何も考えずに戦力差の有る相手に喰って掛かる、無能なお前等の命を助ける

為に、主が頭あかしを下げた事にも気づけずに、その行為を批判するか！

！」

そう言い放つ俺の怒声と殺気で、途端に紙みたいに白い顔色に変わって、

震え出すクズども。

ザマザマ

……とは言え、あまりにもコイツらの無能さに腹が立ったので、つい、姫さんを庇うような言動を取ってしまったよ、おい。

(はいはい、シンデレレシンデレレ)

(王様のデレは宇宙一やで、ホンマ)

…つるさいよ、藻マエら！！！？

『先ほどからの言動は、あまり友好的な意思を感じませんが、私の行動の意味を瞬時に理解した上での言動を、鑑みるに、かなり頭の回転が速い方で、少なくとも今すぐ私達の命を如何こうしようとは、考えて居られない様子。』

命が狙いなら、私達はとうに冷たくなって居るでしょう。

態々脅すと言つ手間をかけ無いで、静かにさせれば良いのですからね。

(こっさり)

『……爺いも、そう思わないこと？』

『…はい、某もそう考えます。』

少なくとも、彼らが剣を突きつけているのは、剣に手を掛けた者達

のみです。

話を窺って見るべきでしょう。

：まあ、我等は戦力外と思われる故、放置されていると言つ可能性も

十分過ぎるほど有るのですがなw

まあ、今の状況では話を聞く以外に、何もする事が出来んでしよう。』

：俺達の超感覚は、容易くこの姫さんがかなり怯えていると看破しているが、
喩^{たと}えやせ我慢でも、この状況で冷静に判断を下して尚且つ、にっこり笑って
見せるとは、賞賛に値する凄い行為だ。

俺はこの姫さんに対する評価を、かなり上向きに修正した後、話に入る事にした。

「そう言えば、今更だが”自己紹介”がまだだったな。

俺の名は【アバドーン】、”蝗の王”と言つ意味で、さっき俺の眷属も言つてたと

思うが、【レギオン】と呼ばれる”種族”の王だ。

この名は、”軍団”とか”大勢たいぜいなる者”と言つ意味を持っており、どちらの言葉も【神】以外には行き来が出来ぬ、此処とは”別の世界”の言葉だ。

そして、彼らは俺の眷属で【騎士飛蝗ナイト・ホッパー】と言つ。

普段は呼びにくいので、簡単に【ホッパー】と縮めているけどな。

彼らは肩部分の”肩当ショルダー・ガード”そっくりな甲殻に付いてる”番号”で個体を識別しているので、番号が名前で、【ホッパーホッパー】が人間で言う所の”騎士”や”兵士”のような役職？に当たると思ってくれれば良いだろう。

取り合えず、自己紹介はこんな処だろう。

なんか質問はあるかい、姫さん？

ああ、それと言い忘れていた。

話し合いには相互理解が必要だと考えているんで、此処には現状、”認識阻害と人払い”の効果が有る結界を張って於いたから、叔父の監視や、時間なんかを気にせず色々な話しが出来るぞ？」

『そうですね、時間に余裕が有るのなら、性急に本題に往かずとも、

まずは相互理解の為のお話しから始めましょうか。』

『姫様、そのような悠長な事を申してる場合では有りませんぞ！

この連中がどの様な怪し^けからん企みを抱いておるのか、確かめませぬとー!..?』

『ふう…。』

「クツクツクツ。」

『…え？ え？？』

溜め息が、姫さんと宰相の爺さんで、含み笑いがおれ、戸惑った声を出しているのが、自分じゃ”的確”な発言をしたと思ってるのに、残念な子でも見るようにため息までつかれた、KYな若貴族だww

「いや、失礼した。

あまりにも無能な家臣どのが、主の思惑を、絶妙なタイミングで次々とぶち壊す様がつい、可笑しくてなw」

『な、無能だと？』

「まあ、待ちなよ。

怒る前に、あんた同様にあんたのお仲間も、意味が判ってなさそうだから、俺が親切且つ、丁寧に理由を説明してやるぞ。

怒るのは、その理由を聞いてからにしな。

……理由を聞いた後にも怒る気力が残っているならな……。」

「姫さん達も、それで良いかい？」

『 ……お手数をお掛けします……。』

不満げだった、KYと愉快な仲間達は、そう言って鎮痛そうな表情をしながら、
又も頭を下げた（今度は宰相の爺さんも一緒に）姫さんの行動に、

理由は
分からないが、さっきの様に何かマズイ事を行ったのは理解したらしく、青い顔して大人しくなった。

「クツクツクツ」。

それじゃあ、お勉強の時間と逝こうか？

さっき、その”有象無象くん”は、何も考えずに発言してたが、本来

”話し合い”ってのは、特に種族を代表するトップ同士の会話なら尚の事、言葉の持つ”額面”通りで簡単な意味の”会話”なんてのは有り得ない。

…そう、有り得ないんだ。

だからからこそ、最初は簡単な会話から、相手の【知識量】、【会話の持っけていき方】、【嗜好】を引き出していき、最後に【狙いは何か】を、本題に入られる前に、あらかじめ予想を立てる事で、相手の真意を看破し、会話を有利に持っていく。

これが、トップ同士の会話では常識だし、実際、姫さんもその心算つもりで、

『まずは相互理解の為のお話から始めましょう』と会話を始めようとした

矢先に、さっき、プライドをねじ伏せてまで、命を救い。

にも拘かわらずそれを批判した”無能な家臣”に、今度も場ばを乱らんされる
と言った

風に、味方に足を引っ張られ続けた所為で、ごっそりと氣力を削がれてしまい

『ため息』を付かずには居られ無かったって事だ。

だから、プライドだけは人一倍有るクセに、必要な事を何一つ出来ないで居る

オマエラを”無能”と呼んだんだ。

……理解したか？
人間ヒューマン。」「

『 『 『 『
.....
『 『 『 『

.....返事が無い、只のしかばねのようだww

『 いやはや、お手数をお掛けして、お恥ずかしい限り。

本来なら、恥ずかしさの余り、顔向けさえも出来ぬところですが、
どうやら貴方様の話は”私共に取って”聞いて於かねば為らぬ内容
と、お見受けしました故、恥を忍んでお話しのお話を聞かせて戴き
たい。』

「…ほう、何故そう思われますか、宰相殿？」

『さようですな、まず貴方が我々に求めるモノが思い当たらぬのが
一つ。』

現在の我等は、王弟殿と争うと言うのもおこがましい程の勢力でしか有りませぬ故、貴方達が何かを求めて交渉なり、提案をしたとして、今の我々には、この身と命以外に、引き換えるモノがありませんぬ。

命が狙いなら、とうに奪われておりましようし、何らかの理由で身柄を要求されても今の状況では、無理やり拉致すれば良いだけの話し。

わざわざ、話しの場を設ける必要すら感じませぬ。

今ひとつは、長いこと宮廷の欲深い妖怪共と、舌戦^{ぜっせん}を以^もつて渡り合
つて来た、経験を基にした”人物鑑定”とも言つべきモノでしてな。

私は長い長い間、欲深な人間や欲望そのものと言ったモノを数多く見て来ましたので、他人の欲望やその欲してるモノが何なのか、そして、欲を持つ人間かそうで無いかを、大まかにでは有りますが、判別出来るのですよ。

…貴方達からは、驚く程”欲望”と言うものを感じとれませぬ。

まるで、人の世の俗事など関心など無いとでも言うように。

…まあ、種族も違えば価値観も変わりましたように、確かに貴方達には通常の

”欲望”などは意味が無いでしょうからな、単に私が、貴方達の欲望を感じ
とれ無い”だけ”と言う可能性も有りますが。

あとは、こう申しても決して悪い意味で申してるのでは無いと、
最初にお断りしておきますぞ。

貴方達は我等と違って細かな表情の動きは判別し兼ねます故、確信
は今ひとつ持てませんが、何となく『話を聞かぬ様なら、それは
それで別に構わない。』と思っているように見受けられました。

まるで、『見て見ぬフリも嫌だから、取り合えず教えてやるけど、
向こうが

信用し無いなら、無理に助けなくても良いか。』とでも表現したら、
一番

しっくり来るでしょうか。

なにせ、話しを持って来た俺達としても、相手がバカであるよりは、理解力が高いほうが話しが速くて助かりますからw」

『…では？』

「ああ、先ほど宰相殿が感じた通り。

言葉を飾らずに言いますが、俺達は、貴方達がどうなるかと興味が無い。

たとえ、王弟の兵士に捕まり処刑されようが、この後奇跡的に王女が王位を次いで、女王となるのが、どうでも良い。

だが、貴方達は王国に住む民達からの信頼も厚く、事実、国のため民のために色々と骨を折っている。

それ故、この後に俺達が王弟一派と攻めてきた軍を始末する間の、ほんの

短い期間、巻き添えを喰わ無いようにして貰うのと、戦争中や戦後処理で、

罪無き者が苦しむ事が無いように尽力して欲しいと忠告しに来たつてのが、
今回赴いた主な理由だ。」

『……ふうむ、今更貴方の言葉を疑う訳ではありませんが……。

いや、我等を偽る理由が無いのは、先ほどお話しした通りなのですが、腑に
落ちぬ点が少々ありますな。

三点ほどある不鮮明な部分を、確認させて戴いても良いですか？

まず、なんとも簡単に”始末”すると言われますが、王弟殿の編成
した軍の

規模は、国境や主要な場所の警護を正規軍が行う関係上、山賊と殆ど
区別の無い傭兵とは言え、5万もの軍勢ですぞ。

ドワーフの総数は、およそ1万数千と言った程しか居なかった筈、
その全てが

戦える訳も無い故、動員出来るのは1万も居るかどうか。

如何に彼らが、生まれながらの優れた戦士で在ったとしても、5倍もの差がつけば、単純に一人あたりの負担は1対5。

貴方達が一体どれ程の人数を有して居るのかは定かでは在りませんが、ドワーフが1万として残るは4万。

少なくとも同数の4万は居なければ厳しいのでは無いでしょうか。

それと次に、その人数に思いを傾けていた時に気づき、迂闊にも、今まで失念しておりましたが、我等、この世界にて神々の手により生み出されし、“ヒト”の種族は”12”であつた筈、現存する12の種族、その全ての名前の他に、容姿と大まかな能力を諳んじてる私^{そら}でさえ、貴方達の事を今の今まで、その存在する事すら知りえず、微かな噂ですら聞いた覚えが有りませぬ。

先程からの会話からも推察出来ましたが、高度な知能を有している事実を疑う

余地が無い事から、ヒトに似た姿をしてるだけの、別の生物と言う訳でも無し。

ならば、貴方達の素性とは？

そして最後に、見逃してしまいそんな程の違和感が在るのみですが、先程の会話にあった『貴方達がどうなろうと興味が無い。』との言葉。

ならば、何ゆえ『罪無き者が苦しむ事が無いように尽力して欲しい』と忠告しに
来られたのか？

成る程、確かに先刻せんこく私自身が『見て見ぬフリも嫌だから』と推測したように、
純粹に親切心からの忠告と考えもしましたが、貴方は、ハッキリと『処刑されようが、くくどうでも良い』と申された。

それ故、純粹に親切心から来る”忠告”と考えるには、違和感が拭えぬのです。

と言つて、この話しを受けた処で我等に負担がある訳で無し、素直に話しを受けても問題無いとは思いましたが。

私としても、病を患^{ひやま}つて老いさらばえた、この命。

今更惜しむ心算^{つもり}は欠片も有りませぬが、姫様の安全だけは、お守りしなければ為らぬ立場にありますれば、不鮮明な部分を見逃したままで、

このお話しにうかと飛びつく訳にも往かぬが道理でありましょう。』

「……その懸念は、当然と言える。

まず、宰相どのが俺達の事をご存知無かつたのは、単純に”今まで存在しなかつた”からだな。

存在しなかつた者を知りえる筈も無い。

それ故、俺達の事を知らぬと言つのは、むしろ当然。

我等は、神々の手によって新たに生み出されし、最も新しい13番目の種族。

この世界に初めて立ってから、まだ1年ほどしか経っていないしな。

「

『！…なんと、13番目の種族ですと？』

『…まあ…。』

「そつだ。

最も、知らないのは人間^{ヒューマン}だけで、他の11種族は知ってるけどな、何せ【造物主】が、各種族の主だった者達に、直接”声”を伝えて知らせたからな。」

『?.....はて?』

何ゆえ我等には知らされ無かったのでしょうか?』

「そうじゃ無い、知らせ無かったんじゃ無くて、あんた達”人間”^{ヒューマン}が、
神々や精霊の声を聞かなくなったんだ。

最初は12種族全てが、神々や精霊の声を聞くことが出来た。

自然と共に生き、^{ちか}力勝る時は獲物の命を糧として、^{ちから}力及ばぬ時は逆に相手の命をつなぐ糧となり、世界と繋がっていく事で、この世界の命そのものとして暮らしていた。

その時代では、12種族全てが幸せに生きていたんだ。

だけど、あんた達”人間”^{ヒューマン}は、何時しかそんな生活に不満を持ち始めた。

あんた達の持つ”欲望”って奴は、他の種族よりもかなり強かったんだろっな。

獸に怯える事の不満は、強固な住居を建てる事で解消してゆき、獲物が取れずに食べ物を得られず、飢える事への不満は、取れる時に取り尽して独り占めする事や、開墾で畑を広くしていったって解消しました。

お陰で、他の種族の分まで取り付くし、それでいて省みることもしなかった。

それだけでも大概だが、その時の何種類かの動物や植物が、乱獲の所為で

”絶滅”し、今もあんた達”人間”^{ヒューマン}の所為で何種類かの動植物が絶滅し続けているんだ。

絶滅した生物は、もはや取り戻せない。

過酷な生存競争に勝ち抜いて、必死に進化を続けた命が、一つの種族の”欲望”の所為で消えて行く。

それが、どれほど傲慢で罪深い事か理解出来るか？

それから後は、加速するように”人間”^{ヒューマン}達は、自然との共存を自ら

放棄して、
離れていったんだ。

火を使う事によって、夜の闇を畏れる気持ちを無くし。

自分達の生活の向上と安全の為に、石で囲まれた”街”を築き”都市”を
創りあげ、大自然を敬う事を忘れ。

自然や精霊、果ては神々への感謝と畏れの気持ちさえ無くし、【宗教】と
言う名で神の権威を騙り、私欲にまみれていった。

せめて、あなた達の寿命がもっと遙に長く、頑強な体を持っていた
なら、
長い生の営みの中で 自らの行いを振り返ったり、反省したりして、
間違いや
過ちに気付いたのかも知れないが、人間の命は短くて、深い知恵を
得たと
思ったら、すぐに寿命が尽きてしまう。

その結果、あなた達の大部分は奢り高ぶり、自分達以外の【他の種族】を

【亜人（人で無い者）】と呼び、見下す様にまでなっていたんだ。

心当たりがあるだろ？ 他ならぬあんた等の国の人間がそれを理由に、大した罪悪感も無しに、今まさに【ドワーフ】の街を略奪しようとしてるんだからな。

そんな事を続けてりゃ、種族単位で”声”も聞こえなくなるって。だから、知らされないんじゃ無くて、あんた等が自分で自分の耳を塞いでいるんだよ。

そもそも、1年前の天と地を繋いだ光柱を目撃し、”声”が聞こえるまでは、神々の存在を本当に信じちゃ居なかったら？

あんた等”人間”^{ヒューマン}って奴は、実際に自分達で見ないと、他の種族が神は存在すると言っても信じない様な、疑り深い種族だしな。」

□ □ □ □
.....
□ □ □ □

「おいおい、あんた等”人間”^{ヒューマン}が、欲深くて狡猾で如何し様^{どうよう}も無い
ナマモノだって
事は今更だろう？

だから、そんなにクヨクヨすんなよ W W 「

(.....このヒト絶対 S だ W W)

(.....ド S だね W W W)

(.....超 S 乙 W W W W)

HAHAHAHAHA!

まあこんな感じで人間共を涙目にしながら、次回に続くんだWW

Episode : 23 会談（後書き）

人間達が涙目になりましたww

まあ、こんなモノじゃ済まないんだけどねww
) ^ ^
b

Episode : 24 天敵(前書き)

24話投稿！。

O H A N A S H Iの続きですね。

Episode : 24 天敵

「やあ、人間共ヒューマンに”知られざる真実”って言う奴の、ほんの一部分を教アバドーンえてやった、親切な蝗アバドーンの王だ。」

「王女も宰相も、KY野郎どもですら、全員何ごとか”思アバドーンつ処”が在るのだろっ、
神妙な顔で俯アバドーンいているし、王女に至ってはちょっと涙目になっているよっだ。」

……うむ、カワイイ娘が泣いてる姿を見るのは興奮するな！

(変態！w)

(大変態！！ww)

(へんたいターレン変態大人！！！ww)

(変態三段活用キタコレ！ww)

(ダメだダメだ、ダメ人間だ！w)

(もうヤダ、この変態w)

(シリアスな空気が木っ端微塵だよ！！)

(さすが王様は格が違ったww)

それほどでもない！(キリッ)

それにしても”変態三段活用”とは、成長したな、貴様ら！
(主に突っ込み的な意味で)

(褒めて無えよww)

(そして、嬉しく無い褒め言葉だよww)

(脳が残念すぎるw)

はっはっはっ、愚かな人間共め、俺らが無表情な顔しながら、マイクロセカンドの時間の中で、こんな漫才をやっているとは気が付くまいww

(ホントにねw)

(気づけたら、超能力の領域だよw)

(藻マエラ、性質悪いなww)

「それで話しを戻すが、あと聞きたいのは、俺達の戦力と宰相殿が感じた違和感に付いてだったな。」

()(そして、何事も無かった様に話しを続けるお前が好きだあー！w)()

照れるなあ、おい！

眷属^{オマエラ}達も、モブ共を座らせて楽にしる。

此処は、俺らが張った結界の中だ、俺らが解除しない限り、たとえ俺達が

死んでも解除出来ないんだ、そいつらも結界の中で餓死したく無ければ、俺に

危害は加える事は出来無いし、そもそも普通の剣じゃ俺らに通じないだろ。

伝説クラスの魔剣か聖剣で無い限りは。」

『 『 『 ！！！！？ 『 『 『

『 …それが本当なのだとしたら、とんでも無い事ですな。

まあ、その真偽もお話しを伺っていけば、ハッキリするでしょうし…。

姫様、如何^{いかが}いたしますか？

某^{それがし}は、お話しを”伺うべき”と考えますか？ 『

「先に、断っておくが、聞けば少なからず”後悔”する事になるぞ？
何時だって、”真実”って奴は残酷で冷酷で、そして容赦が無いモ
ノだからな。」

これから話す事は、あんた等人間ヒューマンにとっては、特にな。」

『…でも、無関係では居られ無いのですよね？』

「ああ、間違い無く関係して来るだろう。」

『……………聞かせて下さい。』

姫さんは、やや暫しばらく躊躇ためう様子を見せた後、しっかりと顔を上げ
て、
ハッキリと”聞きたい”と言って来た。

…やはり、この姫さんは優秀だ。しっかりと”覚悟”ってモノを
持っている。

「ああ、そつちか。

その宮廷医師の息子に、大公の娘が嫁に来ることは裏で決まってるぞ、

そつしたら宮廷医師の家系は”王家と縁続き”になるからな、その医師は”欲”

の為に医師としての誇りも、人としての良識も、ついでに臣下としての忠誠も
棄てちまつたつて事だろう。

…実に”人間らしい”話だなww”

「そ、そんな…、あの方が。」

嘗ては、私財を投げ打つてまで、後進の為に私塾を幾つも建てたあの方が…。」

「人は変わるモンだろ？」

宮廷の中で、”欲望”と言つ名の妖怪共と過ごす内に、”染まった”つて事さ。」

『なんと言つ事だ…。』

『まさか、あの方が……。』

『……ん？”臣下としての忠誠も”？……まさか！？』

「気づいたか、ラオ……げんげん！ 宰相殿。」

『もしや、陛下のご病気も！？』

『……え、え？』

『……！！！！！！』

「その通り、宰相殿と同じ”徐々に身体が弱っていく毒”の所為だ。やっぱり、気づいて無かったのか、…よほど、その宮廷医師を信用して居たと見えるな。」

「だから、大公との”骨肉の争い”を嫌い、黙って此処に押し込められたって訳だな。」

「…はい、おっしゃる通りです。」

あんな人でも、同じ血を持つ叔父ですし、後継争いで、国が二つに割れたら、多くの人死が出ます。

それに、自分達が贅沢な暮らしをするには、悪戯に民を弱らせるのは得策では

無い、と言う考えは持つてる人でしたので、少なくとも国民に取っては、そうそう

酷い国王でも無いだろうと…。」

「まあ、お陰でその矛先は”他の種族”に向いてるんだけどな。」

「……………」

「それじゃあ、大公一派を始末するに当たって、何の遠慮も無くなつた訳だな。」

「…はい、お父様や、爺いの命を狙ったとなれば、もはや後継争いでは無く、

「もつとも、本当に純粋な人間ヒューマンじゃ無くて、本来は人間を滅ぼす為の天敵のような存在が、なんの間違いか、当の滅ぼす筈の人間ヒューマンとして生まれちまったらしいけどな。

だから、物心ついてから毎日が地獄だった。

周りの人間は何故か皆”敵”にみえるし、その原因は不明だしな。

その世界は、此処よりもかなり前に、他の世界……の神によって造られた、遥かに

豊かで技術や文明の進んだ世界で、この世界が辿るたど、未来の一つ、その可能性とも言うべき世界と言って良い処だった。

そんな世界の、平和な国の裕福な家庭に生まれた俺にとって、家から出ずに

引き籠もっても、生活に不足は無かったが、何時か、自分は人を殺してしまう

のでは無いか？ そんな恐怖を抱いていた。

当時、自分自身を人間だと信じてた俺は、人としての常識と、天敵としての

本能の狭間で、恐怖と葛藤に苦しんでいたんだ。

唯一の例外は、俺の両親だけだったので、家族と共に居られる時間だけが、

俺の救いで在ったけれど、俺の苦しみは歳を重ねる毎に、強く大きくなつていった。

だけど、ある日突然、そんな俺に救いの手が差し伸べられた。

救いの手を、差し伸べてくれたのは、他ならぬこの世界の【主神口ベルト】と

【神々】だ。

彼^かの神々、これ以降は【造物主達】と呼称するが、【造物主達】は自分達の造った世界に来ないかと言ってくれた。

それは、この【ロベルタ】と言う世界の事だったが、此処に来れば世界が違つので、俺の”天敵”としての本能が発揮される事もないし、俺が居る所為で両親の暮らす世界が滅ぶ事も無い、と。

唯一愛し愛された、両親と分かれるのは辛かったが、このままでは俺の所為で、俺の意思とは関係なしに、両親たちも”滅亡”巻き込まれると聞いては決断せざるを得なかった。

【造物主達】は世界の命運と言う大儀を翳^{かき}して、俺に強要する事も出来た

だろうに、俺に全てを話し、選択する機会を与えてくれたのだ。

結果、他に道は無かったとしても、俺は自分自身の意思で此処に来ることを

決める事が出来た。

又、ずっと感じてた人の身体を持ちながら、人と自分はどこか、根本的に

違うのでは無いか？ と言う疑問も、彼らの説明で納得できた上に、人とは

違う”理想の身体”まで貰った。

人で無くなる事への不安は、欠片も感じなかった、むしろ、ようやく本来在るべき

姿になったんだと実感したものだ。

そうした、数々の恩義を受けた時の、俺が感じた深い感謝と感動の気持ちは、

あんた等には到底理解出来ないだろう。

だから、俺は【造物主達】の使徒となり、彼らに受けた恩義に報いる為、

彼らの為に働こうと思ったのだ。

…誤解の無いように言っておくが、使徒になる事に関しては、たし

かに

【造物主達】からは交換条件の様に、提案はされた。

だが、彼らの提案を断ったとしても、この世界に”保護”はしてくれられた事を、

俺は疑ってはいない、事実、使徒に為らずに保護された、元の世界の住人とも

実際に会ったからな。

偶々、たまたま人としての知識を持ち、人とは違う心を持つ俺が、【造物主達】の使徒

としての条件に合致したから、誘われ、俺自身の意思で使徒になる事を

望んだのだ。

決して保護と引き換えに強制されたのでは無い、と断言しておく。」

『 『 『 『 …… 『 『 『 『 『

「まあ、いきなり話しの全部を理解する必要は無いぞ。

結局、いま話した俺の前世の話も、前振りであって、さっきの質問

の答えでは
無いからな。

それより、折角出したんだから、飲み物と菓子を喰ってみなよ、遙かに文化の
進んだ向こうの世界の菓子だから、かなり美味しいと思っぞ?」

『…それでは、お言葉に甘えて。』

『『『『『…ぱくっ…!!?』』』』』

「それで、長々と前世の話をしたが、ここまでで押さえて欲しいのは3つだけだ。

俺が深く【造物主達】に感謝しており、その恩義に報いたいと思っ
てる事。

俺が、人間ヒューマンと言う生き物の、心の在り方や、その性質を実際に体験
して知り
尽くしているって事。

遙かに進んだ、未来とも言うべき世界から来たので、この後の世界
と人間ヒューマンが
どうなっって往くのか、容易く想像出来る事。

世界の

バランス”を崩し始めた種族に対して、新しく用意された、いや、用意せざるを

得なかった、監視者であり、必要と”俺が”判断したら”天敵”として機能する、

抑止の為の戦力そのものなんだよ。」

Episode : 24 天敵（後書き）

又しても、続きが気になる所で切ってみるワナWWW

Episode:25 神の使徒(前書き)

25話投稿！。

長かったOHANA SHIも、これで一応の終了になります。

次回は、”拳と蹴り”でのOHANA SHIになりますw

Episode : 25 神の使徒

やあ、現在王女や宰相達に青い顔で凝視されてる蝗アバドーンの王だ。

………熱い視線を浴びてると、なにやら興奮するな！

(まだまだよw)

(変態に磨きがかかってキタコレ!w)

(いい加減、別のパターンにしる!w)

(お前は最高だああああ!!!)

「此处で、ハッキリと明言しておく。

俺は人間ヒューマンがキライだ。

誤解するなよ？ 今の俺に”天敵”としての本能は無い。

だから、本能に突き動かされて、全ての人間を闇雲に憎んでる訳じゃ無い。

純粹に、その愚かで傲慢な行動に怒りを感じているだけだ。」

() () やっぱり、何事も無かった様に話しを続けるお前が好きだあ
ー！w) ()

それほどでもない！ () キリッ ()

「さっき、言ったな？

俺は【造物主達】に深い恩義を感じ、感謝しているぞ。

だから無自覚にも、いや、無自覚だからこそ、彼等を失望させ。

今も尚、哀しませ続けるキサマ等人間がキライだ！

キライでキライでたまらん！！

…この世界に生きる全ての者は、皆【造物主達】に取って子供の様

なものだ。

想像して見る、12番目に生まれた末っ子が、脆弱さを哀れんで与えた”知恵”を

使って増長し、他の兄弟達を蔑ろないがしにして、更にはその大地までも汚し、蹂躪していく。

その結果がどうなるか、考えもせずにな。

自分達の住む場所を破壊した後、キサマ等人間ヒューマンは、一体どこで暮らしていくつもりだ？

それを、強大過ぎる力故に、黙って見ているしか無かった”親”の気持ちが想像出来るか？ 【造物主達】達とて、何とか出来ないか、色々と試みてはいたのだ。

だが、神とて万能では無い、強大な力の影響を完全に消す事は出来はしない。知っていたか？ 神と人が対峙したら、その身に纏う力の波動の影響だけで、人は簡単に死に到る。

神に害意が無く、ただそこに居るだけでそうなるのだ。

様々な試行錯誤の結果、【造物主達】が世界に介入する手段は、他

の種族に

”声”を届けて”神の名の元に”キサマ等人間の勢力を、削ぎ落とす様に

命令するぐらいしか、残ら無かった。

だが、この世界でその命令が実行に移された事は一度も無い。

…【造物主達】には出来なかつたのだ、”我が子”を攻撃させるよ
うな命令は。

結果として今まで放置したにも等しい事になってしまった。

神としての責任と義務を考えれば、怠慢だと考える者も居るかもし
れん。

だけど、俺はそうは思わん。

自分の子供を裁く事を、躊躇ちゅうちゆしない親など居ない。

そこまで悩み抜いて、責任と躊躇ためらいの葛藤の末、この俺に話しが廻
って

来たのだ。

誰が、その頼みを断れたと言っただ？

彼らの秘めた葛藤を理解し、その苦しみから解放する為に、俺はキサマ等人間を
「監視」する事を決意した。

そして、そこまで【造物主達】を苦悩に追い込んで置きながら、貴様ら薄汚れた
人間共は、「協会」なんぞを作って私欲を貪ったり、兄弟たる他種族を【亜人】と差別して虐げ、自分達の仕出かした総ての事を、事も在るうに”神の名の下に”と謳って、神の所為にして来たのだぞ！

この俺が、キサマ等人間を嫌い抜く理由が他にも必要か！！！」

『 『 『 『 『 …… 『 『 『 『 『

………やっべー！ つい話してる内にヒートアップして、目の前に居る連中を

攻める様に、怒鳴つちまったよ。

全員、涙目状態になっちまった。(汗)

「……ふう、少し興奮しすぎて、我を忘れてしまったようだ。

実際に俺が今言った事の総てを、あんた等がやった訳では無いし、さつき王女と

宰相殿に敬意を抱いたと言つのも嘘じゃないから、あんた等を嫌っている訳じゃないんだ。

まあ、まったく関係が無いとは思わんから、謝罪はしないがな。

ただ、重ねて言つが俺は闇雲に、あんた等人間を滅ぼそうとは思わん。

飽くまでも、邪な行いで他の種族や自然に対して害を為す者だけを”刈り取る”だけだからな。

正しき行いをする者は、俺達を恐れる必要は無いつて事だ。」

(お？ ちょっと涙目治ってきたかな?)

事実上、この世で最も硬い物質だって事だな。

これだけでも、手が出ないだろうけど、更に【不可侵】と【レジスト】の概念を

パッシブスキルとして、常時発動してる。

まあ、これでも、俺達の能力のほんの一部だけだな。」

『ちよっ!?!? おまww』

『『『 (涙) 』』』

(ビックリしすぎて、宰相さんコワれたww)

(そして、有象無象半泣きww)

(誰に剣を向けようとしたか理解したんだろww)

(ようやっとだけどなww)

「現在は更に【クラスチェンジ】を果たして、更に多くの能力やスキルを得ている

し、結界で閉じ込めれば、逃がす心配も無い。

ついでに言うなら、結界張ってる事からも推測出来るだろうが、魔法も使えるぞ。

……膨大な魔力と合わせて。」

『にんげん＼(＾o＾)ノオワタ。』

『アバドーン様、もうやめてあげて！爺いのライフはもうゼロよ！
！(泣)』

「具体的に言うなら、人間ヒューマンが渾身で放った”ラメラツテエー”炎系最上級極大呪文を、
片手間で放った

”ラメエ”炎系下級呪文で打ち消すとかw」

(追い討ちした！ww)

(追撃の手を緩めないww)

(容赦ね無ええええ！?)

(このドSめw)

(最低だこの虫！^モww)

(最悪すぎるwwww)

•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「さて、落ち着いたか？ 宰相殿。」

『……ええ、かたじけない。見苦しい処を、お見せしまして……。』

『

（まあ、王様の所為なんだけどねww）

（見た目は冷静で無表情だから性質たち悪いなww）

（だいたい合ってるww）

「まあ、これで戦力に関しては納得、戴けただろうか？」

『…はあ、骨身に沁みて理解致しました。』

「あとは、いま一つの”違和感”に関してだが……………」

『いいえ、改めて聴くまでも無く理解致しましたわ。』

罪無き者の保護とは、【造物主達】の意向なのですね？』

「イグザクトリー
Exactly」

『……………はあ、やっぱりですの。』

「だが姫さん、俺は貴族や王族の様に、権力を行使していくらでも、身を護る

手段のある人間は、確かにどうでもいいが、身を護るすべの無い力弱き者まで、

どうでもいいとは思っていないぞ？

あんた等、王族や貴族みたいに、身を護る手段があるにも係わらず、慢心や

油断で窮地に落ちいる奴は、自業自得と思ってるだけだ。

実際、油断したからこそ、姫さんの親父殿は毒を盛られたんだろうが。」

『……………はう。』

やだ、何このカワイイ生き物。

……………うむ、やはりカワイイ娘の泣き顔は良い！！

(このロリコンめ！ww)

(自分の欲望満たす為に泣かせんなよ！ww)

(あなたって、本当に最低のクズだわww)

それほどでも無い！(キリッ)

（ ）（ ） 褒めて無いから!! W W （ ）（ ）

「 そうだ、これをやろう。 」

そう言つて強引に話を逸らした俺は、ポーチから一個のタル（小樽）を出した。

『 ……いま、どこからこの樽を出したのですか??? 』

「 俺達の ” 不思議 ” の一つだ、気にしたら負けだぞ？ 」

これは中側を、結界を応用した ” 特殊な魔法 ” でコーティングした樽で、中には ウイッシュクウェーハ ” 生命の水 ” が入ってる。

まだ、宰相殿にも必要だろうし、姫さんのお父とんにも必要だろう? 「

『 …… ” お父とん ” てアンタ …… 』

「一応、我が国の国王なんですけど……。』

「グッー」

「細げえ事はいいんだよ!!」

（裏手突っ込みした！ww）

（宰相さん、再び涙目ww）

（人^{ひと}家の国王^{こくわう}捕^とまえて”お父^とん”とかww）

（無法者^{むぼうしや}過ぎるww）

……この後、細々とした事を打ち合わせた後、この戦争が終わった
ら改めて

会^あうと、再開^{さいかい}を約束^{やくそく}して、俺^{おれ}達は【石^{いし}の都^{みやこ}】への帰路^{きりく}についたんだ。

そして、”軍団”^{レギオン}が帰った後の、宰相の部屋では、

『今日はなんだか、一生分を驚いてしまったような気がするわね。』

それと、爺い。毒の事気づけなくてごめんなさい……。』

『なにを、仰せられるのですか、姫様。』

某こそ、宰相の重役にありながら、みすみす陛下に毒を盛られたばかりか、

彼らに教わるまで、疑い^{うたが}もしませんでした。

まことに、お恥ずかしき限りでございます。』

『……ふう、お互いに謝ってばかりいても仕方ないわね、過ぎたことを悔やんで』

ばかりいても、何も変えられ無いものね。

まずは、これからの事を考えましょう、その方がよほど建設的だね。

』

『左様で御座いますな。

おお、そう言えば彼らの話に驚いてすっかり忘れておったが……』

そう言って宰相は、ぶち抜かれて、すきま風が吹き込む窓をみながら

『……………？』

『窓修理して逝けよWWW』

Episode : 25 神の使徒（後書き）

そんな訳で、いままで神様にしちや対応がお粗末すぎね？

って、思われてた部分の理由と言っか裏話でした。

どんなことにも、裏に廻れば、表に出ない葛藤がある。

まあ、あくまで主人公視点での思いではありますが。

Episode:26 グランディ王国、決着(前書き)

26話投稿します。

お待たせして、すみませんでした。

Episode : 26 グランディ王国、決着

「やあ、おう。よ。たちとの会見を終えて、無事【石の都】みやこに戻って来た、アバドーンだ。」

「よう。よ。みたいに言うなww」

「このロリコンめww」

「でも、なんで拉麺屋が増えてんの？」

「また予想外の方向に爆走したww」

「報告します。」

「よほど嗜好に合致したらしくて、2軒じゃ間に合わなくなったんです。」

「今や、一部では自分の家に専用キッチン作る人とか出て来たしね。」

「このまま逝けば彼らの”主食”になつてくかも」

「建物や器材は自分達で作るしねww」

「一番の問題は”質の良い小麦粉”だったんですが。」

「それを扱ってるのは、反りの合わない【エルフ】だからねw」

「藻レラが、適正価格で卸す事にしたんで。」

「【倍々ハンマー】で、元手は只だしww」

ちよっ！ww どんだけ拉麺気に入ったのこイツら!!？

…イヴに禁断の木の実を与えた蛇の気分だぜww

「まあ、イヴほど可憐では無いけどww」

「こっちも、蛇ほどの可愛げは無いけどww」

藻マエラ、最近漏れにキビシ過ぎですよ!!??

………もっと、漏れを大事にしる!!! (泣)

「それで、全部の店を僕らが運営すると、大変とかってレベルじゃ無いんで、
ハッターラーメン
”飛蝗拉麵”のドワーフ・中央支店を、”ドワーフ支店”に変えて、他の店舗をドワーフに売り払って、小麦粉の仕入れだけを、請け負う事にしたんだけど。」

良し、ナイス判断だ2号。

さすが、最初のメンバーだけの事はあるな!

「それほどでも無いです。」 (照)

「王様、【アリさん】から連絡来たよ。」

王様が言った通り、安全の為に地中10ダントメートルで待機して居たら、

万単位の
生き物が動く振動を感知したって。」

さすが、【アリさん】見た目の可愛さに加えて、高性能だなW W
それじゃあ、眷属^{みんな}達手はず通りに頼んだ。

「「「「「
了解。」

・
・

.....

.....

俺の名は63号、レギオン軍団の一人だ。

今は王様の指令で、ヒューマン人間の”討伐隊”が通る筈の街道で、待機している。

今回、王様から出された”命令”は三つ、一つ目は、必ず全滅させる事。

二つ目、周囲の森に被害を出さない事。

三つ目、人間の司令官の鎧兜を回収する事。この3つだ。

最初の2つは問題無い、出会い頭に”飛蝗時空”^{バタジック}に引き込めば、敵に逃げる

手段は無いし、俺達^{レキオン}を倒す手段も無いので、必然的に達成出来る。

問題は、3つ目を達成する為に俺達の”魔法”は使えないってことだ。

なんでも、王国の中で協力関係を築いた連中に、討ち取った証拠として渡す為

らしいが、俺達の魔力で魔法を放てば、塵しか残らないから だそ
うだ。

まあ、甲殻を变化させた生体剣【高周波爪刃】^{フレード}を使うか、普通に殴る・蹴るで

戦えばいいんだろうけどね。

王様からは、【石の都】^{みやこ}と王国の間に大きな街道は無く、森や荒地が広がってる

ので、5万の大軍を一度に進軍させる事は無理だから、5つに分けて1万づつ

別々の街道や、道を使って来るだろうって言われてたけど、どうやら、王様の

予想通り、此処には1万くらいの数が向かって来ているみたいだ。

さすが俺達の”王”だけの事はある！

普段はあんなに”残念”なのに、決める時は決めてくれる！

……いつもこうなら良いのにww

まあ、グチは置いて”命令”を遂行するか。

「……”飛蝗時空”展開。」

……はあ、憂鬱だ……。

俺は名も無い一般兵の一人で、カークスって言うんだ。

今は進軍の最中で、俺と仲間達は輜重部隊に志願して、荷車や馬車を引いている最中だ。

今回の”討伐”が、真の目的を誤魔化す為の言い訳であって、本当は”略奪”の為なんだって言うのは、俺も俺の仲間達も分かっていた。

でも、分かっているからって、『本当は略奪の為の遠征には参加しなく無い』なんて、言える筈も無かった。

だってそうだろう？ みんな”公然の秘密”って知っているけど、表向きは

確かに”討伐”って御偉いさんが言えば、白だって黒になる。

それに真っ向から”略奪”なんて言えば、家族まで巻き込んで酷い目に
会うのは、目に見えているだろう。

だから、せめて兵役を免れないなら、戦いに参加しない輜重部隊に
志願して、
せめて略奪に加わらない様にするぐらいしか、力の無い俺達平民の
一般兵には
出来ないんだ。

とは言え、討伐隊に参加してるには変わらないから、気が重くなる
のは仕方が
無いって事さ。

……どんっ！

いてっ？ おいおい、どうしたんだよ？

気が進まないのは俺も同じだけど、こんな所で止まったりなんかし
てたら、
どやされるぞ？

そう思って、俯うつむいてた顔を上げ、前にいた幼馴染の方を向いて愕然
とした。

どうしたらいいんだ、カークス？」

い、いや、俺に聞かれても、俺の方こそ『どうする？』って聞きてえよ。

それにしても、一体なにが起こったんだろう？

1万近くの大軍が一瞬で消えるなんて……。

しばらく、啞然としてた俺らだけど、時間が経つにつけ背筋が寒くなって来て、
誰ともなく声をあげたかと思うと、一斉に王都に向かって駆け出した。

後先の事なんか考えられ無かった。

ただただ、恐ろしさのあまり家に帰りたかったんだ。

結果として、俺達は誰も罪に問われる事は無かった。

王都でも、大きな問題が起きていて、一般の兵士の事になんか構っていられる

状況じゃ無かったし、この時の俺達は知るはずも無かったけど、進軍そのものが

悪い事だと既に国中に知らされていたからだ。

……「いいえ、いいえ」

ワシとワシの率いる軍勢は、亜人の洞窟目指して進軍していた筈では無かったか……？

なのに、目の前が一瞬揺らいだと思ったら、次の瞬間には見た事も無い場所に居るではないか？

王都と亜人の間の街道は何度も通ったことがある。

道を間違えるなど、有り得ん事だし、そもそもこんな不思議な場所など、聞いた事すら無いぞ？

行軍していたのは、確かに昼間だったのに、ここは既に夕焼けになっている。

こんな、血の様な鮮やかな夕焼けなぞ今まで見た事が無い。

まるで伝説の【魔の跳梁する闇と人の過ごす昼が重なる時間に現れる】と

言う”降魔ヶ刻”のようでは無いか？

……なにを、馬鹿な事を。　ワシはどうかしてる。

それにしても、なんと不思議な場所だろうか？

見渡す限りの荒野の地平が見えるが、どうやって帰れば良いのだ？

キレイな水場はあるようだが、果たして飲む事は出来るのか？

所々から、炎も吹き上げているわ、上空では轟々と風が渦巻いている様だし、

極めつけにあの月はなんだ？

あの、昆虫（おそらく飛蝗？）の顔を模したような模様の、巨大な月は？

まるで、見下ろされて居るようで、部下共も気味悪がっているではないか。

などと思いつつも、気になって月を見続けていると、突然、月が喋った！

『よつこそ、お前たちの墓場へ。』

☞
☞
☞
☞
☞

つ、月が喋った!?

☞
☞
☞
☞
☞

.....無^ねーよw

まあ、この場所は声が反響して、廻りに響くから、月を凝視してる時に声が

したら、そう勘違いするかも知れんけどなww

「月が喋る筈無^ねかる^う？ 今、声を掛けたのは俺だ。」

「な、なんだアイツは!?!」

「あ、あの月にそっくりだ!」

「アイツが俺達を此処に連れて来たのか!?!」

「くそ! アイツも亜人だな!」

「ようこそ、墓場に。」

親切な俺が、良い事を教えてやる^う。

此処は確かに俺が作った特殊な空間だが、俺が死んでも解除されない。

……俺自身が解除しない限りな。

お前等を選ぶ選択肢は、『此処で俺に殺される』のたった一つきりだ。」

『なんだと？ 貴様は何者だ？』

何故、ワシ達の命を狙うのだ！？』

造りし存在うまれものに問いたもう

『汝なんじの名は何か？』

彼かの存在もの、答えて曰いわく

『我が名は軍団レギオン、我等われら 大勢たいせいなる故ゆえに。』

『な、なんだと？』

『レギオン（軍団）だと？ 大層な名をほざきやがる！』

「冥土の土産に教えてやる。

俺は、神々によって新たに生み出された、最も新しい種族、
【軍団】レギオンの中の一人。

我等の”王”の命めいにより、貴様らの命、貰めいい受ける。」

『 たった、一人で何が出来る！ 』

『 大きな口を叩きやがって、切り刻んでやらあ！ 』

『 『 『 死ね、おらあ！！ 』 』 』

ガツギイイイイイン！！

パキイイイイン！！

ゴシヤッ！！

おおw 軽くやっただけなのに、凄い勢いで水平に飛んだかと思っ
たら、岩に
めり込んでしまった。

『 『 『
！！！！ 『 『 『

『 『 『
なんてえ、怪力だ！？ 『 『 『

『 『 『
この硬さで、怪力じゃあ近づくのはヤバイぞ！？ 『 『 『

『 『 『
どけどけい！ 傭兵共！！ 『 『 『

『 『 『
我等”魔道兵团”に任せて下がれ！ 『 『 『

『 『 『
この虫野郎め、丸焼きにしてやるわ！ 『 『 『

『 見て置け虫ケラめ、複数の意思を一つに纏める事で、この様に
大呪文”を

絶対の自信を持って放った呪文が、敵を飲み込み、レギオン 巨大な火柱となつたのを

確認して、勝利に沸く彼等だったが、

ザッ、ザッ、と言う足音と共に、火柱の中から近づいて来る影を認識すると共に、

その歓声は小さくか細くなっていた。

炎の中から悠然と姿を現し、その照り返しの逆光の為、黒く影になつている

姿の中で、そこだけ赤く光を放つ目を一層輝かせて、ソイツは言い放った。

☐ ……手品の種はこれで終わりか？
人間。^{ヒューマン}
☐

「さつき、1万相手に何が出来るとか言っていたな、人間^{ヒューマン}。

…教えてやるう、俺達が【大勢^{たいせい}なる者】と名づけられた、その理由^{わけ}を。

そして、たった一人で此処に居た理由^{わけ}も。

……貴様らの命と引き換えにな。」

…俺が、たっ…た一人の軍団（レギオン）だ！

『 『 『 『 『 ひいひいひい！！？ 』 』 』 』 』 』

『 『 『 『 『 に、逃げろおおー！！？ 』 』 』 』 』

『『『 逃げろって、何処にだよお！？ 』』』

『こ、こら貴様ら、勝手に持ち場を離れるな！？』

『腰抜け共が！ こちらは1万から居るのだぞ！？』

その時、俺の元に、王様から”命令”が届いた。

< こちらの方は、片がついた。

王の名に於いて”命令”する。

各”騎士飛蝗”ナイト・ホッパーは、敵を速やかに”殲滅”せよ。 >

…その瞬間、俺の頭脳は急速に冷めてゆき、与えられた”命令”を
どうやれば、

速やかに遂行出来るのかを、検討し始める。

これが、俺達が”虫”の姿をしている事の最大の理由。

ひとたび、”王”の命令が下れば、只その遂行の為だけに、冷徹で

非常で容赦の
無い”機械”へと変わっていく。

俺は、極限まで感情の起伏が乏しくなった心を、ただ殺戮の為だけに
向けて
駆け出した。

ザシュツ！！

『ぎぎあああ！？』

バシュツ！！

『ひあああ！？ た、助け……。』

シュン！！

『アーーーーー！！！？』

バサア！！

『うほぁー！！っ。』

……そんな作業を続けて、暫らく後。

俺の目の前には、首と身体を切り離された、一際立派な鎧ひときわの男。

その傍らには、家族の肖像だろうか？

男を真ん中に、歳のバラバラな人間ヒューマンの男女が並んでいた絵を、入れたロケットが転がっていたが、俺の感情は揺らがない。

ただ、情報として認識しただけだった。

そして、男の鎧兜を、用意した麻袋に詰める作業の途中で、踏んでしまい壊れた

ようだが、俺は”王”の命令を完遂した後、振り向きもせず、その場をあとにした。

……我等が”王”の元に、帰るべく。

•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

俺と数人の眷属達は今、大公一派を総て片付けた事を伝えに、グラ
ンデイ7世王
の部屋に来ている。

部屋の中には、既に王女や宰相達が来ていて、人払いも済んでいる様
だったが、俺が【こつち見んなW】を解除して、目の前に現れると
かなり驚いた
様子だったww

『あ、アバドーン殿、一体どこから?』

『……急に目の前に現れるとは、想像もしていませんでしたわ……。
』

「失礼、だが宮廷の中を、俺の様な姿の者が、まして、王の寝所に
向かってる
となれば、騒ぎは必定。

ならば、姿を隠して来るしかあるまい。

それと、急に現れた訳でも無い、どうどうと部屋の扉を開けて入っ

だが、
気配を消して居たから、あんた等が認識出来無かつただけだ。」

『確かに、大騒ぎでしょうなあ。』

……それにしても、”気配を消す”ですか……。」

「ああ、見えてはいるが、”居る”と認識出来無いんだ。」

「だから、厳重な警備の何処にでも入って、外道共を始末出来るのさ。」

『……実に恐るべき話ですな。』

「別にそんな青い顔をしなくても、正しく生きて居るなら気にする必要は無いさ。」

俺達の獲物は、外道共だけなのだから。」

『今回、アバドーン殿の協力を得る事が出来た我々は、幸運であったと言えます。』

これからも、この幸運が続くよう、精進いたしましょう。

そして、アバドーン殿に、ご紹介申し上げます。

こちらに、おすすお方が、【グランディ7世陛下】で在らせられる。

『

「ああ、やはり何処と無く、おう、よと面影が似ている、流石、おう、よの
”お父^とん”だな。」

(また、おう、よとか言ったww)

(国王を”お父^とん”呼ばわりとかwマジ無法者すぎww)

『ちよっww だから国王を”お父^とん”とか、アンタ…。』

「…宰相殿、その仕来たりには、興味も無いし、関係も無い。

人間が、勝手に自分らで決めて、勝手に従ってる分には、口出しする気も

無いが、それを、俺達昆虫人にまで求めても、応じる気は無いぞ？」

「良い、キノピオ宰相。

アバドーン殿の、申す通りじゃ。

彼らに、我等人間の都合を押し付けてなにとしよう。

彼らには彼らの、我等には我等の、風習や考え方が有るのだ、今回の事も

それを認識しておらなんだ、愚か者共が【ドワーフ】達、あの頑固だが実直な

友人達を、我等と違い穴を掘って暮らしているからと言って馬鹿にし、亜人と

侮った故に起きたのだ。

我等は、もうそろそろ”学ぶ”と言う事を、憶えても良い頃だとは思わんか？

まして、彼らはこの国の恩人。

遜^{へりくだ}るべきは、我等の方ぞ。

…アバドーン殿、あわや宮廷医師クツパの盛った毒に、死ぬところでしたが、お陰を持ちまして、無い筈の命を永らえました。

これで、まだ幼い二人の息子【マリオ】と【ルイージ】が成人するまで、見守る事が出来そうです。

この通り、お礼を申しますぞ。』

『…陛下。』

はい、真にその通りでございました。

アバドーン殿、先ほどの某の愚かなる発言を、どうかお許し願いたい。』

ビッー！

「だから、細けえ事はイイんだよ！ W W W

俺は少しも気にしちやい無えよ。

”お父^とん”もコレから養生して、速く元気になるんだな。」

(だから、裏手突っ込みはラメエ〜！ww)

(宰相さん、再び涙目ww)

(無法者過ぎるww)

(そして、キノピオとマリオ・ルイージの消息がww)

(ついでに、クッパもなーww)

『……左様ですか、ならばお言葉に甘えて、この事はここまでと致しますが。』

それよりも、これからのアバドーン殿達”レギオン”の事を、国民にどう知らせたモノか……。』

「……？ 普通にあるがままを言えばイイんじゃない？」

『ですが、そうなれば実際に5万の軍勢を屠った、アナタ方に遺族の者共が、恨みを向けましょう。』

今回の件は、アナタ方が居なければ、どうなって居たかを考えれば、当然ながら王家としても最大限の敬意を払い、その事を公にすれば表立って、あなた方に敵対は出来なくなるでしょうが、恨みが消える訳では有りませんか。』

「いや、それは願っても無い事。

逆にそうやって、亜人に対して敵意を向ける者を、炙り出す事が出来る上に、俺達が敵意を集めれば、その分他の種族に向ける敵意も減るでしょう。」

『…！ それでは、あなた方が？』

「逆にお聞き致しますが、宰相殿。

恨みを集めたとして、我等にどんな不利益が？

本より、我等は人間との係わりを持たぬので、不興を買おうとも意味が有りません。

彼らが、攻めて来るとして、たとえ不意を付かれても、我等にカスリ傷一つ
付ける事が出来ないでしょう。

本来、【造物主達】より賜った使命の重さを考えたなら、もっと速くこころするべき
だった、と思ってる程です。」

『さようでしたか。』

ならば、我等からはこれ以上何も、申し上げますまい。

せめて、大々的に王家が感謝していると喧伝し、出入り自由の許可を出したと、
国中に布礼を出すようにしましょう。』

「んじゃあ、俺らは定期的に”生命の水”ウイッシュクウエーハとユニコーンの乳を、収めに来るか。

毒で蝕まれた身体には、何よりの特效薬だろうからな。」

『…！　なんとその様な貴重な品まで！？』

『……一体どうやって？』

「…どうやっても何も、俺らは人間ヒューマンと違って他の種族とは友好関係を築いて
いるからだけど？」

まあ、ユニコーンの乳は、【馬乳酒】になっちまってるんだけどな。
（汗）

『まあ、陛下はお酒も嗜まれるので問題有りませんが。』

（ ）（ ） 何故、馬乳酒？（ ）（ ）

……いま、宰相殿と、おう、よと、”お父^とん”の心が一つにな
った気がするww

』……あ、あの、その他にもですね、で、出来たらでいいんですけど
お……。』

() () ……なに、この可愛い生き物？ () ()

「あー分かった、【ケーキ】と【果汁水】は美味かったろ？ww」

『は、はい。とても！』

「オーケー、オーケー。」

それも、一緒に持って来るよ。

それじゃあ、今回の分を置いて行くから、次回はお布礼ふれが出回って
からな。」

『爺おや！今すぐ国中に布礼ふれを出してちょうだい！！』

『ちよっ！？ どんだけ気に入ったんですか姫エ・・・ww』

そんな、喧騒を余所に”お父^とん”に挨拶してから、俺達は拠点に帰る事に
したんだww

……ドワーフの店舗はどうするんだって？

(。°。°) アーアー、聞こえ無ーい！

(逃げやがったww)

(最低だよアンタww)

(だが、それがイイー!!) キリッ

Episode : 26 グランディ王国、決着（後書き）

次回からは、また日常のお話ですw

Episode:27 平凡な日常の中で 01 (前書き)

27話投稿！。

レギオン達の日常ですw

「やあ、【石の都^{みやこ}】から帰還して、今日も眷属達と面白ろ可笑しく過ごしている、アバドーンだ。」

今日は、ちよつとした出来事を話してみよう。

「……よし！ 藻レラも”化粧”してみっか!!」

「………今度は、何を思い付いたんですか？」

「キタコレ！ww」

「王様の、突発的な奇行には慣れて来たけどねww」

ちよつ！ 酷すぎね!!？ 藻マエラ??

「んで、今回は何すんです？」

「また、おもしろい事でしょ？ W W」

スルーですか、藻マエラ！！！！？

「まあ、待て皆^{みんな}。」

「ん？ どしたの1号？」

「たしかに、王様の突発的な思いつきで色々と惨事が起きたけど、概ね^{おおむ}皆^{みんな}も楽しめたじゃないか。

……… 一部を除いて。

だから、話しだけはちゃんと聞くつじやないか。

……… 話しだけは W」

おお、1号さすが長兄だな。

皆みんな静かになったぞ。

……ちょっと、トゲのある言い方だったけどなw

「まあ、化粧といつても、女の子がやるようなモノとは、趣きが違うんだけどな。」

藻レラって、普段はメチャ硬い甲殻と、纏う概念が強力無比な上に、たとえ怪我とかしても【超再生能力】で瞬時に治るから、何時までも”新品”のようにキレイなままだろう?。」

「……それは、イイことじゃないの?。」

「うん、素敵なことだしねw」

「いつも、ピカピカだよw」

うん、藻レもそのこと事態に不満が有る訳じゃ無いんだ。

…無いんだが、ちょっと物足りないって言うか…。

ほら、前にドワーフの戦士見た時にさ、使い込まれて、手入れはキチンとされていたけど、あちこちに傷とかが付いた鎧兜を着けていただろ？

あれ見ると如何にも”古強者”って感じがして、何とも言えない風格があったじゃないか。

逆にもしも、あの時身に着けてたのが、一回も使われて無いピカピカの鎧だったら、あそこまで強そうなイメージを感じたか？

多分、感じなかったと思うんだ。

「なるほど〜。」

「たしかに、そうだよな。」

「あゝ、なんとなく読めて来たかもw」

そこで、前世の藻レがやってたように、ピカピカの甲殻に、”プラモ”にする”汚し”みたいな塗装を試してみようって事だ。

「おお〜〜w
」

「さすが王様！w w
」

「藻レラには考えつかない事を考える！w
」

「そこに痺れる、憧れる〜〜w w
」

「よし、納得いったところで”染料”の調達だ〜。

・
・

.....

.....

おおっ、なんてこったいオリーブ!.....orz

「むっ、色々試したけど、コスったら直ぐに落ちる。」

「さすがに、これでは使い物にならないね。」

「いきなり、手詰まりにww」

「早くもしゅりょうw」

……くっ！折角皆もやる気になったと言っのに、ここまでなのか！？

「それじゃ、大体失敗も出尽くしたと思うので、この【レギオン専用塗料】で、本格的に始めましょうか。」

「「「「「はあ？」「「「「「

ちよっ！？ おま！？ ……え？ え？

そんなの、どこから持って来た！？

「……何処からも何も、普通に【マネエ・・】システムで交換しま

したが？」

おおつ、なんてこったいオリーブ！……orz

「「「「「
気づいてたなら、最初から出せよ……！！！！？」
「「「「

「だが、断る！」（キリッ）

「「「「「
ちよつ！？ おまwww
「「「「

「あつ、1号が”王様”に似て来ちゃったよう」（泣）

「もう、昔の1号は居なく無ったんだね……」（泣）

「いつかは、藻レラもこうなる時が来るのかな……」（泣）

「えう〜（泣）」

藻マエラ、失礼過ぎるにも程が有るでしょおおおおお！！！！！？

…………藻レに似るのが、そんなに大事おまじごとかYO！！！！？

「へえ〜、これって揮発性なのか〜。」

「でも、”完全無臭”なんだってw」

「さすが、神様謹製w」

「塗料一つでもチート仕様だね〜。」

「まあ、これで”塗料”の問題は片付いたんだし。」

「ああ、早速”お化粧”の実践だな。」

「【芸術神の加護】を持つ、藻レラの腕の魅せ所だな！」

「おら、ワクワクしてきたぞ！」

•
•

•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•

.....
聞
け
よ
W
W
W

それじゃあ、まずは藻レが”第一号の実験体”として、化粧をして貰う。

みんな、よろしく。

「僕らの”化粧”って全身だから、一人じゃ出来ないのが欠点だよねw」

「つーか、アフリカのインディオの”化粧”だよなw」

「まあ、だいたい合ってるw」

ぬりぬり。

ペタペタ。

さわさわ。

……うむ、全身を刷毛で擦こられて居ると、なにやら興奮するな!!

「まただよ（笑）」

「変態降臨 W W」

「大変態降臨 W W」

「変態大人降臨 W W」
タイレン

「変態三段活用乙 W W」

「ちょっと、動かないでくださ……あ。」

ぬるり。

「ぐあああああ!!?」

目が、目がああああああああああああああ!!?!?!?!?」

「ちよっ!?!」

「目に”揮発性”の塗料とかww」

「だから、動くなっって言つたのに!?!?!」

「いいから拭いてやれよ! お前ら!?!」

・
・

・
・
・
・
・

.....

.....うむ、酷い目にあつたww

良い子のみんなは、マネしちゃダメだぞ？

「無^ねーよww」

「そんな、身体張ったギャグかます子供、嫌すぎだろww」

「でも、話し戻すけど良い仕上がりだねww」

「うむ、これはカコイイ！..！」

「うっかり、惚れそうになるほごですww」

「掘れそう、とな!？」

「どっか逃げ、このホモ共ww」

良し、この素晴らしい塗料を使って、他の連中にも悪戯けしよひするぞww

「うわ、マズイ人にマズイ物与えたww」

「混ぜるな危険ww」

「…なんだか、騒がしいけど、なんの騒ぎだワソ?」

「イケニエ来たww」

「ロボさん逃げて、超逃げて!wwww」

……! 確保オ~~~~~!!!

「な、何するだ〜〜!!!?」

白い犬顔に、”太眉”を書いてやる〜〜w w

「アオオ〜〜ン!?!」

……くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく。

ぶぶぶぶぶ。 体育座りで泣いてちゃんのw w

「鬼だ、鬼がおる！ww」

「イジメっ子ってレベルじゃ無えーぞ！？ww」

「酷スww」

「しかも、専用の溶液使わないと取れないしww」

「誰だよ、この人野放しにしたの！！？」

「だから神様だつてのww」

「 / (^ o ^) \ 」

「よし！次は、アムロだな。」

「決定済みですかww」

「まあ、アムロならいいかww」

「アムロなら仕方ないww」

……藻マエラも酷でえな！？ W W W

……この後、アムロを追い詰めて、ガングロアフロにしてやったんだ。

まあ、今日も一日平和だったって事で W

Episode:27 平凡な日常の中で 01 (後書き)

コイツ等、毎日がこんな感じですよw

another 02 宰相、その激務の日々（前書き）

お待たせしました。

外伝の第2話を予告通りに投稿します。

今回は、他人から見た【レギオン達】がどう映っているのかを、宰相さんの視点から会話形式で、表現してみました。

「父上、取り急ぎ裁決の必要な案件の書類は、先ほどので終わりましたので、

少し休憩を取られてはどうかと思い、お茶の用意を致しました。

あまり、根を詰めても、返って効率を落とすばかりですから、

一旦、休憩を取られてはどうでしょう？」

書類の束があちこちに置いてある執務室の中で、山のようにあった仕事も、

急いで決済が必要なモノは粗方終わらせて、ようやく一息をついて居たら、

17人居る息子の内の一人、一番末のキーノが、紅茶と菓子を載せたトレイを

両手で支えながら、その声を掛けてきた。

と言つても、実際の血の繋がりは無く、

この子は所謂いわれる養子と言つやつなのですが。

この子に限った事では無く、私と17人の子供達との間に、血の繋がりは有りません。

私は、若くして今の陛下（グランディ7世王）に、その才を認められ、それ以後も色々と目を掛けて戴いて、文官としての立場を確固たるモノにして参りました。

当時は陛下も、若くして父王を失い、何かと苦勞しておられましたので、

平民では有りましたが、同じく若くして懸命に仕事に励む私と、ご自分の姿を重ね合わせた故の、親近感と言うべき感情もあつたのでは無いでしょうか。

以来、その信頼に応えようと懸命に仕事に打ち込み、そのお陰を持つて功績を認められ、気難しい貴族達もが認める”宰相”としての役職まで賜る様になりました。

そして更に、その役職に恥じぬ様、後ろ指を指されぬ様に仕事に打ち込む

内に、気づけば、何時しか婚期を逃しておりました。

その歳にまでなると、今更結婚しよう等などとは思えず、さりとて壮年に差し掛かって

来て以来、次代を担う”後継者”を育てる必要性を感じ始めていた私は、

身寄りの無い子供の中から、才気に溢れ、心根の真つ直ぐな子供を引き取って、

将来、この国を支えてくれる人材の育成を、と考えたのです。

そうして、引き取った子供達は皆誠実で、私の願った通りのより良い国を

創る為に、働いてくれる様になってくれました。

今では上の14人は、気立ての良い妻を娶り、子を^な生して、立派な父親としても成長してくれたのです。

お陰で、幼くして家族を失って以来、生きる為に必死に勉学に打ち込んだ

この私が、幼い孫に囲まれた”家族の団欒”と言う、望外の幸せも得る事が出来ました。

話しが逸れましたが、このキーノは一番最後に引き取った子で、兄弟の中では最も文官としての才に恵まれた子でしたので、私の秘書官として雇い入れ、日々の政務を手伝って貰っているのです。

まあ、宰相と言えど此処グランディ王国にて、グランディ7世王陛下に仕える
またもの臣下の一人に過ぎぬ者ですので、先程まで、陛下より賜りし”宰相”としての

役職を務めるべく、目が廻るほどの忙しさに忙殺されておりました。

宰相と言う役職ゆえ、当然、国政に深く係わって来る問題を多く処理する事になるので、忙しいのは当たり前と言えるのですが、先日、国の命運を大きく左右する大事件が発生し、その為、その後発生した膨大な量の、事後処理を行わなければならず、それに追われて今まで時間を取られて居たわけです。

ですが、今はそれも一段落ついた事ですし、少しばかり休憩を取っても、罰は当たらぬでしょうかな。

「父上、まだ【ケーキ】が少し有りましたので、お持ちしました。」

「おお、それは良い。頭を使って疲れた時は甘いモノが一番だからの。」

「ははは、父上は甘いモノに目が無いですからな。」

「なにを言う、そなたとて私に劣らず、甘いモノに目が無いでは無いか。」

大方、私をダシにして、自分も【ケーキ】が食べたかったのである
う？」

「流石父上。 お見通しでしたかw」

「当たり前だ、何年お前の父親をしておると思うてか。」

「ふふ。」

「はは。」

「「ははははっ！」「」

私の初心を常に再確認する為に、宰相の執務室とは思えぬ程に質素
で、
機能性だけを追求したこの部屋で、激務に疲れた心と身体を癒すべ
く、
息子と二人、他愛の無い会話を楽しんで居ると、息子がおもむろに、
思い出したかの様に声をかけて来た。

「……いやあ、それにしても良う御座いました。」

「ほお、何がじゃな？」

「総ての事柄が、ですよ。」

「……………」

「1月前までは、陛下は起きる事も出来ぬ程の重い病で、父上も健康を害して静養中で有りました。」

「今でこそ、それが【ゴーゴン元大公】の甘言によって道を踏み外した、

【元宮廷医師クツパ】の用いた”毒”によるモノだと判っておりますが…。」

それに加え、【ゴーゴン元大公】に王女様を始めとして、我等一族と王女を慕い支持していた、…少々、考えの足りない若い貴族達は、全員コリント領に、体の良い”軟禁”状態。

「…権力に阿おもねず、誠実を貫いた我等兄弟は、例えそのまま謀殺の憂き目に会おうとも、後悔する事の無いよう覚悟を固めておりますが、

その事に不平ひとつ言う事無く、貞節に兄上達に従う義姉上達や、幼い甥や姪たちを始め、残された国民がどうなつて往くのが、不憫であり、

同時に心残りであつたのです。」

「……まこと、その通りであるな。」

……実際、あの一件が解決せずに、あのまま進んでいたら、どう言つて未来を辿つて居たであつたらうか？

こうして激務に忙殺される事も無かつたで有ろうが、代わりに、自分の命は

言つに及ばず、敬愛する主の命あのみことや、大切な……。

こう申しては”不敬”とも執らるやも知れぬが、幼少の頃よりお世話させて戴き、

いまや本当の”孫娘”のごとく思つておる姫様。

【ピーチ姫】様の命も、危うかつたのでは無かろうか？」

「まさに、父上の想像された通りかと。」

……それを思えば本当に、我等はギリギリの処に居たのでしょうかな。

「

「その、呪わしくもおぞましい未来が、高い確率で、『有り得たかもしれない』ことを
思えば、あの、憎き【ゴーゴン元大公】や、【ブロッケン元伯爵】
等を、仮にも、
陛下と姫様の”血縁”でも在る事ゆえ、よもや『命までも取るうと
はしまい』等と、
人の良い事を考えて、役目を辞して隠居しようと思えていた、
”過去”の
自分自身を、縊り殺してやりたいと思えるほど、深い怒りと絶望を
憶えずには
居られぬ。

既に引退を考えていた、老い先短い私などは兎も角として、事も在
るうちに
陛下の玉体までも、【宮廷医師クツパ】を懐柔して、毒殺を謀って
いたとは、
まさに【神】をも恐れぬ悪魔の如き所業。」

「……父上。」

「この様な者どもに、もしも王権が握られ、強大な権力が握られて
いたなら、
そう遠くない内に民は辛く苦しい生活に追い込まれ、肝心の姫様は
【ゴーゴン元大公】に息子は居なかったゆえ、かの者の息の掛かっ
た、適当な

身分の傀儡かいらいとの結婚を強いられるか、それを拒否したなら、
本当に人知れず命を奪われて居たかも知れぬと言う、真つ暗な未来
しか
広がっていなかったであろう事は、想像に難くかた無い。

そればかりか、短くない年月を”友人”として過ごして来た、
【石の都いしのみや】のドワーフ達】を始めとした、【神々】によって共に生み
出された、
兄弟とも言つべき他の種族達を、事も在るうに”亜人”等と称して
蔑み、
侵略して行く様さまが容易に想像出来ると言うもの。」

「はい、それが単なる想像では無い証拠に、かの痴しれものれ者共は、
【石の都いしのみや】に対して、”討伐”と言う名目を作り上げてまで、攻め
込むつもりで
あったのですからな。」

……5万もの大軍を組織して。」

「そうなれば、その事が切欠となり、現在、各地で良く耳にする様
になった、
人間ヒューマンと他種族達による小規模な争い（その多くが、人間ヒューマンの側に問題
がある）

が、表面化して、人間ヒューマン対他種族の、血で血を洗うがごとき”地獄絵
図”も
かくやと思えるような、暗黒の時代に突入していた可能性も大いに

有り得たで
あるうな。」

「ですが幸いにして、その様な暗く陰惨な未来予想図は、回避されました。」

「うむ、これもひとえに”彼等”のお陰である。

そう、【神】の生み出した13番目の兄弟にして、この世界の”守護者”たる
役目を担^{にな}って誕生した、”軍団^{レギオン}”と名付けられし”彼等”のな。」

「……本当に、素晴らしい方達ですね。

そう言えば、あの後 政務に忙殺されて居^おりましたから、最初に大
まかな話を
伺^{うかが}っただけで、詳しい話しは聞きそびれておりました。

いったい、どのような方達なのでしょうか？」

「……うむ、そうだな。」

ファースト・コンタクト
最初の出会いは、まさに”衝撃的”であった。

……いや、”衝撃的”とか言う言葉では、とても表現仕切れないで
あるうな

あれは。(汗)

なにせ、突然。

『ぶうるるるあああああああ!!!』

という雄叫びウオークライが聞こえたかと思えば、窓ガラスの割れる硬質な音が
響き渡る中、

凄い勢いで回転しながら、飛び込んで来たのだからな……。」

「ちよっ!? ……どんな無法者ですかそれは?(汗)」

「ふむ、そなたの言いたい事は分かる。

かつての私もそのように、杓子定規な考えに凝り固まっておったか
らな。

だが、先日陛下に言われたお言葉を聴いて、私も此れまでの考え方を
変えて
いかねばと思う様になったのだよ。」

「……と、申しますのは？」

「うむ、陛下は私にこう申されたのだよ、『彼らに、我等人間の都合を
押し付けてなんとしよう。』

彼らには彼らの、我等には我等の、風習や考え方が有るのだ』と。

…このお言葉を聴いて、私は思ったモノだよ。

自分はなんと云う考え違いをしていたのか、とな。

アバドーン殿も、同じ事を申されたが 身分・階級等なごと言つものは、
我等人間が
勝手に決めて、勝手に従っているモノで、他の種族には、何の関係
も無い

”風習”では無いか、と。」

「……………！」

「先程、そなたが”無法”と感じた振る舞いも、結局は我等人間の都合や考え方の違いから来るモノで、相手からして見ればそれなりに理由のある行為と言う事も有り得るのだよ。」

「…なるほど、そう説明されれば、確かに自分は”人間”としての考えしか持たず、他の種族にはその種族なりの考えがあるのだとは、言われるまで考えた事も有りませんでした…。」

最初にお話を伺った時は、『なんと、ハツチャケた御仁なのだ』と思いましたが。」

【正解】

「うむ、人間としての考え方に凝り固まった我等にはそうも思えようが、一度言葉を交わして見て、その言動から【造物主】に対して深い感謝と敬愛の念を抱いて居るのが痛いほど伝わって来たわい。」

託された使命を遂行する為とは言え、人間の敵意を自分達で一身に背負う

ほどの”覚悟”を決めているあの御仁が、無意味にハツチャケる訳も無し。

やはり、それなりに理由のある行為なのであるうな。」 【不正解】

「左様で御座いましたか。」

「うむ、そなたも将来この国の政務に携たづなわる者として、これから”彼等”との接点も増えてゆくだらう故、良い機会だし、私が知る限りの”彼等”の事を教えておこうか。」

「はい、どのような事でしょうか。」

「彼らと出会ったのは僅か一月前、しかもその間の一月も互いに忙しく、まともに会話した回数も片手で数える程ではあるが、その短い間の中で感じたのは、彼らが善良で誠実な種族であり、同時に恐ろしく冷徹な”機械”のような集団でも

ある、と言つ事だ。」

「?…酷く矛盾している話ですね、そんな存在が有り得るのでしょうか?」

「確かに、これだけ聞けばそう思つたろうが、私が見る限りでは、まず間違い無いであろう。」

まず、彼らは見た目がほとんど同じでは在るが、確かに個人個人の”個性”と
言うモノが有り、その感受性は驚くほど豊かである。

なにせ、普段は争いを好まずに専ら、背中の羽を震わせて音楽を奏
で、
歌を歌い、詩を読んで、彫刻を刻み、星の煌きに心震わせ、沈み行
く夕陽に
心奪われると言つように、普段は血生臭い生き方とは無縁に生きて
いるの
だからな。

これには、ちゃんとした理由があつて
世界の守護者たる役目を担い、戦つ事を半は宿命づけられた彼等
はあるが、
その戦闘力の凄まじさ故に、いざ戦いに為つたとしても直ぐに決着
がついて

しまつ。

結果、長い長い時を生きる彼らの一生の中で、戦いに費やす時間と言つのは

ほんの瞬きにも似た一瞬の間の出来事に過ぎぬのだ。

それゆえ、彼らは残る大部分の人生を、穏やかに生きて往けるように必要以上の”闘争心”を持たぬのだらう。

そして、”闘争心”を持たぬが故に、あのように穏やかで善良で居られるのであろうな。」

「ですがそれでは、いざ戦わねばならぬ時は困るのでは無いでしょうか？

いかに強力無比な力を持つとともに、闘争心を持たぬ者が、一人で万の大軍を相手に”全滅”まで追い込めるものとは、とても思えませんか？」

「うむ、まずそこから考え違いをしておる。

…彼らは”人のカタチ”を持つれっきとした一つの”人種”では在るが、

同時にその姿から分かるように”虫”でもあるのだよ。

”虫”で在ると言う事は、すなわち”王”を頂点とした命令系統をもつ、

一種の【システム】、機械でもあると言う事だ。

ひとたび、”王”からの【命令】が下れば、総ての感情を消し去り、冷酷な機械と

化して、一切の慈悲や感傷に囚ひわれず、どんな冷酷で残酷な事でも、躊躇ためらいも

戸惑いも見せずに遂行してのけるだろう。

そこには、”戦いに赴おもむく”と言うような感情も決意も存在しない。

ただ、『命令を遂行する』と言う鋼はの様な固い意思の元に行われる”作業”があるのみだ。

我等から見れば”戦い”でも、彼らにして見れば単なる”作業”でしか無い。

…闘争心など必要としないのだよ。」

「……………!」

「私が恐ろしいと評したのは、そう言う意味だ。」

我等人間ヒューマンが、道を違えず道理に反せず、良き行いを続ける限り、彼ら是我等の”良き隣人”として様々な分野に於いて、共に仲良く過ごして往けるだろう。

なれど、ひとたび我等が道を踏み外した行いや、道理に反した行いをした時には、彼らは一転して冷酷な処刑人へと変わり、我等の前に立ち塞がって、共に酒を酌み交した相手や、共に汗して一つの仕事をやり遂げた相手の上に躊躇する事無くその剣を振り下ろすだろう。

彼らは基本、善良で友好的ではあるけれど、その本質的な部分に於いて、決して無条件に人間ヒューマンの味方をしてくれると言う訳では無い、と心に刻み於け。

彼らが今回、王女派である我等の側に付いてくれたのは、我等が誠実に職務に励み、民の明日を思って働いて来たからこそ、合力しうじきしてくれずに過ぎず、このまま我等に組して、無条件に力を貸してくれると思ひ込むのは危険であるぞ?」

「…はい、父上の考える我等のあやうさ、彼らの危険さをしかと、

認識

致しました。」

「うむ、常にその事を念頭に置き、これからも精進に励もうではないか。

だが、誤解するで無いぞ？

あくまでも、彼らの剣が向けられるのは、道を踏み外し、我欲に駆られて

この世界の”自然”や他の種族に対して、不当な悪事を働いた者のみであって

市井に生きる善良な人々や、心正しく生きる者にとっては、真しんに”守護者”と

言えるような、強く優しい方達であるのだからな。」

「はい、彼らに受けた恩義は、決して疎かにして良いほど軽いモノでは有りませんでしたから。」

「……うむ、その通りであるな。」

おお、すっかり話しに夢中になって、思いの外、時間を喰ってしまったの。

やれやれ、仕事を終えて帰るには、今しばらくの時間があるゆえ、残った時間で出来る限りの政務を片付けて仕舞わねば為るまい。

そなたも大変であろうが、もう一頑張りして貰わねばならんな。」

「私は、大丈夫ですよ。

…父上こそ、病み上がりの上、そろそろ良いお年なので、ご無理は為さりませぬように。」

「…！？ 何を言うか、この若造め！

私はまだまだ現役ぞ！？

…まあ、正直な話し、彼らの提供してくれる”生命の水”と
”ユニコーンの乳”のお陰であるな。

あれを定期的に服用する様になってから、事の外、身体の調子が良
く、

活力が漲るようだと、陛下も申しておったし、事実私もこの通り元
気である。」

「ああ、あの”馬乳酒”ですか、…凄まじい程の効き目ですね。」

「ふむ、真まことにな。

クツパ亡きあとに宮廷医師に取り立てた者が、

『これでは、自分の仕事がありません』と、涙目になっておったわ。
(汗)

………何故、”馬乳酒”なのかは謎のままだがの。」

「なにか、効力を強めるのに必要なのでは？」 【不正解】

「いや、そう思い質問して見たのだが、なにやら答え難にくい様子であつたのでな…。」

それ以上、”突っ込む”のも礼を失すると思い、以後 聞いておらなんだ。」

「…なるほど、それも彼らの”風習”なのかも知れませんな。」

「うむ、我等には理解できぬ事も多々有ろうと思つゆえ、これ以上は聞かぬが

良いであるうな。」 【正解】

……そう、最後に締めくくり、私は再び激務に励むべく、机に向かって歩いていった。

another 02 宰相、その激務の日々（後書き）

うっむ、一応 時間に余裕を持って、

以前から指摘を受けていた”淡々としてる表現”を改善するべく、
時間を戴いた訳なんですが、

……あまり変わって無いかも？（汗）

でも、今回 時間に余裕を持って原稿を書いてみたのですが、
後から確認した時に、結構 細かい部分とかに気が付いたりとかし
て、

いい感じに作業が進んだので、これから2・3日置きに投稿した方が

イイかも？ とか思ってみました。

Episode : 28 月に祈りを (前書き)

ちよつと遅くなりましたけど

第28話 投稿します。

Episode : 28 月に祈りを

「……エル知ってるか？ この世界の月は12個有るんだぜ。」

「いえ、自分は99号ですが？」

「……いや、そこは素で返事しないで、なんかポケようよ。」

「また、無茶振りしるww」

「相変わらず突然にw」

「今度はどうしたんですか？」

「月がどうしたの？」

「おお、そうだった。」

「その月に関してなんだけども。」

「うん」

「なんか、問題でも？」

「この世界には、月が12個も有って、その月はそれぞれ12種族の名が冠されているじゃんか。」

「まあ、そうですね。」

「言い方を変えれば、それぞれの種族は1個づつ月を持つてるのに、俺らだけ何も無いって事だろ！？」

不公平じゃ無いか、俺らだって13番目の暦れつきとした”種族”だつてのに！！」

「ああ。」

「なるほど、言いたい事は分かったw」

「そう言うことかいww」

「でも、仕方ないですよ。」

「月造った時には、僕ら居なかつたんだしw」

「暦しよめが出来てから、数百年経ってるしね。」

「簡単に諦めんなよ、お前ら！」

「諦めたら、そこでお仕舞いなんだよ！」

「セリフ自体は、ちょっとカッコイイ感じだけどw」

「言ってる内容は、単なる我が侘なんだよねw」

「でも、言われて見るとちょっと月欲しいかも。」

「だよな。」

「別に、今更しよめ暦に入らなくてもいいけど、月は欲しいよねw」

「そつだろ！ 藻マエラも”月”が欲しいよな！？」

「「「「うん、月欲すいです。」」」」

・
・

・
・
・
・
・

.....

「……そんな訳で”月”ちょうだい。」

『……唐突に、何事ですか？（汗）』

「いや、他の種族には対応してる”月”が有るのに、俺らには無いじゃん。」

だから、月おくれ。」

「…相変わらず酷ひどでえな、おいww

まあ、話しを続けるとだな。

他の種族に月が有るのが 羨ましいんで”月”が欲しくなったと言う事だな。」

『……………はあ〜。』

また、面倒な願い事を…………。』

「いいじゃんか、いいじゃんか！

藻レラも月が欲しいんだよおおおおお！！！！」

『子供ですか！ あなたは！！？』

『躰の出来てない幼児みたいなのですよ〜w』

『イイ年した大人がやると見苦しいですけんのーW』

……ちつ、ダメか。

『形振り構わずですけーW』

『どっちにしても、その提案は難しいですよ。』

『私達は、既に2000年ほど寝て居ないから、そろそろ”仮眠”しよう』

『思ってたので、碌に”神力”が残って無いのですよ。』

……はあ？

神様って、寝る必要あったのか？

『無論、通常の”生物”としての眠りとは、趣も意味も若干』

違う形では有りますが、我等とて”休み”を必要とする事に、変わり
りは無いですよ。』

『僕らは本来、”この世界”を造った時に大量に消耗した、”神力^{メギン}
”を
補充する為に、とつくの昔に”休眠”に入って居ないといけない筈
だった
んだけど。』

『ウチらは、世界と人間^{ヒューマン}の行く末が気になって、2000年もの間
ずっと起き続けていたのですよ。』

『お、ロベルト復活したなw』

……また人間^{ヒューマン}が原因かよ……。

んで、その”神力^{メギン}”が枯渇したら、かなりマズイのか？

具体的に言うと、消えて無くなるとかするわけ？

『そこまでの危険は無いですけー。』

『単に長く眠るだけですけんのー。』

『でも、我等の時間の流れは君ら”受肉”じゅうにくした存在とは根本的に違いますから、君らの時間で言うと数百年・数千年単位に為りますけどね。』

「じゃあ、問題無いじゃん。月作ってWW」

『ちよつWW!?!?』

『軽っ!?!?』

『酷でえな! おい!?!?』

『わがまま過ぎるですよ〜WW』

『とにかく、諦めて下さいよ。』

……ちくせつ、こつなつては致いたしかたし方無い。

あなた達の”月”を作りますから、それだけは止めて下さい。

い・い・で・す・ね？』

「月さえ貰えるなら、そんな労力使う必要無いし、勿論OKさあ」
W

『そのウザ顔が　いまいち信用なりません、頼みましたよ？』

「おう！　アリガトな！！」

『…まったくW　調子のイイ虫トですね。』

「お、そうだ。　この前から聞こうと思ってただけだ。」

『…？…なんでしょ？』

「この前、【フェアリー族】に会ったんだけどさ。

なんか、やたらとフリーダムで、妙に【ロベルト】を彷彿とさせたんだけど、
なんでか解かる？」

『なるほど、まあ当然と言えば当然ですね。』

彼等【フェアリー族】は、【ロベルト】が一人で造った種族ですから、
彼の影響をモロに受けたのですよ。』

「一人で？ 6大神全員で一族づつ順番に造ったんじゃないの？」

『それだと、無駄な時間が掛かるので、手分けして造ったのですよ。
全員で造った種族も居ますけどね。』

「…それで、奴らあんなにフリーダムなのかよ。
フェアリー

……納得はいつたけどなww

『酷っ！？』

『ちなみに、私が単独で造った種族は【人魚族^{マーメイド}】で、海で暮らす物^{もの}静^{しず}かで争いを好まない温厚な種族ですよ。』

『おいが単独で造ったのは、【ドラゴン族】でござす。

めっばう強いので、最初この世界の守護者にしようと思って居たんでござすが。

強さに能力を注ぎ込みすぎて繁殖力が弱くなり、気づいたら個体数がえらく少なくなったんで、断念したんですけん。

『わっしが単独で造ったのは、【ドワーフ族】ですけー。』

『ウチの単独で造った種族は【樹人族^{エント}】と言う、普段は深い森の奥でひっそりと暮らしてる”樹”のような外見の穏やかな種族なのでよー。』

『俺様が単独で造ったのは【地底人^{ドーム}】って言う奴らで、地底の洞窟に

引き籠もって、酒とか発酵食品を作っている無害な女系種族じゃん
w
』

『……引き籠もって作ってるのが それだけなら、
本当に無害なんですけどねー。』

にいさまの造った彼女達は、最近では酒よりも”ヤライ本”の
製作の方がメインになってるのですよー。(汗)
』

……嫌すぎる!?!?

地底に引き籠もって”ヤライ本”作りに夢中になってる種族とか!?

…あ、腐食神だから、その眷属は”腐女子”なのか!?

『不本意ながら、正解ですけー。(涙)』

兄ちゃんが係わると、何故か妙な方向に進化して逝くんですけー。』

おおおおおいいい!?!?!?

それで、イイのか。 6大神!?!?

……ん？”にいさま”、”兄ちゃん”？

「お、言って無かつたか？

俺らは三き兄み妹ぢ弟いじゃんww
」

「……初耳だわww

「ただ、なるほど言われてみれば、総ての生き物は死ねば腐って土へと還り、酒は大地の恵みである穀物から造られる。植物は大地に根ざして、豊饒も大地に関係した能力だもんな。」

「そーそーw 俺ら三き兄み妹ぢ弟いは”大地属性”の神なんじゃんw
」

「でも、【ブラッド】が長兄だって言うなら、なんで【ブラッド】が”地の神”じゃ無えの？

「確か、神様の中にも位が有って、地水風火の【四大元素】を司る4人は位が高く、その4人の中から”主神”を選ぶつてぐらいだから、長

兄なら

当然【ブラッド】が”地の神”に就くのが普通なんじゃ無^ねえ？

…それとも、ハツチャケ過ぎて、選考から外されたか？

『失礼にも、程が有るじゃん!!?』

『まあ、そう思われるのも無理は無いですよーww』

『普段の行いが行いですけー。(汗)』

『!?!まさかの裏切り!!?!?』

……酒神エ……。(;)、(

『でも、兄ちゃんの名誉の為ために弁解するんですけど、それはわっしの為ためなんですけー。』

「【ヘルトン】のため？」

『そうなんですじゃー。』

『それは本当なんですよー。』

『まあ、どう言つことが説明するとだな、

俺の弟は、でかい図体の割には気が小さくて、いつも自信無さげにしていたじゃん。

だから、【ルランジェル】と相談して、”地の大神”の役目をやらせて見る
事にしたんじゃない。

責任ある役目をこなして行く内に”自信”が付くのを期待してな！。

』

『そうして、【ヘルトン】ちゃんに実際に”地の大神”の役目をさせて

見た結果、ウチとにいさまの考えは見事に嵌まり、今では立派な”地の大神”になったと言っ訳なんですよーw』

『それでも、まだまだ兄ちゃんや姉いちゃんには、助けられっぱなしなんですがのー。』

「おお、しっかりと【兄ちゃん】やってるじゃ無いの。

……………で？ そうやって責任有る仕事を”人の好い弟”に押し付けて、

自分は悠々自適にフリーライフってか？」

『！？ギクウツ！！？』

『……………にいさま……………？』

『……………兄ちゃん……………。』

「……見え見えなんだよWW！」

「瞬間『イイ話しだなー』と、騙されかけたわWW」

『…そして、兄弟間に亀裂を残して放置とWW』

『…悪魔ですか、あなたはWW』

「それほどでも無い！」（キリッ）

『…寝^ねめて無えよWW！』

「あれ？ そうすると以前 俺ら【軍団^{レギオン}】に【倍々ハンマー】と【腐蝕神の眷属】を渡して、お供えさせたのって、

そいつらが”ヤライ本”作りに夢中になって、お前にお供えを仕無くなったからだな？」

『!?!?ギク、ギクウツ!?!?』

『……こいさま……。』

『……自分の眷属にお供えされ無くなるとかって……。』

……酒神エ……。(;、)

『……しよぼーん……。』

「まあいいや、これ以上は余りにも哀れすぎて、突っ込めんわW

んで、残りの種族が”合作”って事なのか？」

『ああ、そうなるね。』

具体的に言うなら、【コポルト】と【パステト】は、ヘルトンとアーバレストの合作。

【エルフ】はサイオンとルランジェル、
【アリ人】が大地の三兄妹弟で……。

「”さん”を付けるよ！ このデコ助野郎め！！？」

ビシッ！

『えうー！？ () > < 『』

『ちよっ！！？』

『”主神”に突っ込み入れたあ！？』

『無法者過ぎる!?!』

『どんだけ、【アリスん】好きなんですかアンタWWW!?!』

「【アリスん】の可愛さは、正義!?!」

『そして【人間^{ヒューマン}】が、6人全員で創造したのですよ。』

…相変わらず動じ無えな! おい!?!

『そこで、現在に至るってわけですね。』

「……………まで。」

そう言や、【セイレーン】は誰と誰が手がけたんだ?」

『 『 『 ……うっ？ 『 『 『

「確か、一彼女？等は水辺に棲息していたな？」

…なら、【サイオン】は確実に関係しているだろ？

何故、あんたが係わって居ながら、あんなのが誕生したし！？」

『 ……ふう。

…不本意ながら、その時に係わったのが【ロベルト】と【ブラッド】
だった
のですよ…。。』

『 『 うっ！…？ 『 『

「……やっぱり、この二人かい。」

藻マエラ、なんてモノを生み出してくれたし!!!?」

『 『 ちよっ!?!? ” やっぱり” とか酷くね!!!? 『 『

『彼女達の”部の民^{たみ}”は私一人で造ったのですが、
肝心の”長の一族”を創造する過程で、この二人がうっかりと大量に
”生命の雫”を注いでしまったのです。』

結果、あのような無駄に逞しい生き物が誕生してしまったのですよ。』

759

「お陰で、エライ目に会ったよ!!!」

うっかりで済むレベルじゃ無^なえーだろ!!!?」

2回も”幽体離脱”を経験するとか有り得ないわ!!!」

……うぜえ。(笑)

…あ、それと、今思い出したんだけど。

もう一つ聞きたい事があったんだったわ。

『……?』

『なんか、あつたのですかー?』

「ああ、ごく最近の事なんだが人間ヒューマンの国が【ドワーフ】を攻めようとして居たんだ。

幸いにして、偶々俺らがそこに居合わせたんで解決したんだけど、それが妙なんだよな。」

『…と、言つと?』

「人間共ヒューマンが、そんな大きな動きをして居たら、ウチの【グフたん】達が気づかない筈はずが無いんだ。

実際、後日確認して見たら気付いて居たって言うし、”緊急クエスト”として俺の部屋の方に書類を廻していたって言うんだよ。

…でも、俺は受け取って無いんだよな。

【グフたん】に頼まれて書類を届けに来た97号は、部屋に置いてある作業機の真ん中に、分かり易いように置いたって言うし、眷属達は絶対にウソを言う筈が無いしな。

彼らは職務に忠実な”虫”の特性として、【王】である俺にウソは言えないし、そもそもウソをつく理由も無いんだからな。

…今回は、偶々俺らが居合わせたから何とか出来たけど、そつで無ければ何人か【ドワーフ達】に犠牲が出たかも知れん。

だから、書類が消えた原因とか判るなら、調べて欲しいと思って。」

』そう言うことでしたか。

それは、申し訳無いことをしましたね。

私達も気付いて居ましたが、知らせようとしたら既に、【石の都】^{みやこ}に向けて出発していた後^{あと}でしたから、安心していたのです。

一言、知らせるべきでしたね。』

「んじゃ、理由を知ってるんだな？」

『はい、ただ口頭^{くちう}で説明するよりも、実際に”視^みて”貰^{もら}った方が分かり易いでしょうから、映像情報を直接脳に送りますよ。』

「おう、わかった。」

【サイオン】の言葉が終わると同時に俺の頭に映像が浮かび上がり、
…… 3・2・1と黒地に白い文字でカウントが始まる。

………記録映画かよ！w w

見えて来た光景は、俺の作業機の置いてある俺の部屋の中の映像で
ちょうど、そこにノックをした後入って来た【すっさんあんとんこ枢斬暗屯子】と四女
の姿が
映っている所だった。

あ、四女の事は説明して無かったよな？

あの後、何回か交易品を届けに行った時に、実は四女も居ると
言われて紹介されたんだが、意外な事に、良識の有る優はかなくて儂はかなげな
美人さんでした。

とても、あの一族と同じ血が流れてるとは思え無いが、
族長やあの三姉妹？の血を分けた妹なんだってよ。

…遺伝子って不思議！

名前は【メガ姫】^{ひめ}ちゃんと言って、14歳だそうだ。

”女神”を意識しての名前だろうか？

あの族長にしては、意外にセンスも悪くないかも。

外見は、まんま”ゼロの使い魔”に出て来る”カトレア”って感じかな。

何回か話もして見たけど、本当に心の綺麗な良い娘なんだ。

…けど、俺ら【軍団】^{レキオン}は友達としての付き合いしかして居ないけどな。

だって、もし彼女と付き合い行って行く内に、心が通い合って”結婚”とかって

成ったら、アイツ等と親戚関係になるんだぞ？

それは、嫌すぎるだろ！！

…それに、俺等の【虫の知らせ】がガンガン警報を鳴らして居るんだ。

”あの娘はヤヴァイ”って……。

何がヤバイのかまでは判らないが、あの娘に手を出すのは止め^やめ^やといった方がイイだろう。

…… 本当に、もったいない。 あんなに美人で心も綺麗なのに。

まあ、話しが逸れたな。

映像の中では、俺が帰って来る様子が無いと知ると、自分等も帰ろうかと話し会ってる姉妹？が映っていたが、突然【暗屯子】の奴が

クシャミをした。 …… ” 鬼の霍乱 ” か？

…流れ続ける映像の中では、優しい【メガ姫】ちゃんが、【暗屯子】の心配をしている。

< ……？ お姉様、どうなさったのですか？

真冬の水の中でも元気に泳ぎ廻り、生まれてから只の一度も風邪など召されませんでしたのに…。

< ぬう！ 何やら先ほどから寒気が止まらぬ。

… もしや、何がしらの ” 良くない事 ” が起こって居るのやも知れぬ。

>

< …… まあ。

お姉様達の”悪い予感”は高確率で当たりますから心配です。
あまり、酷い事で無ければ良いのですけど…。。>

<うむ。 平和が一番であるからのう。>

<はい！ お姉様は相変わらず優しいのですね…。(にっこり)>

…いや、心がさっぱりしていて善良なのは認めるけどよ。
そんな、野太い笑顔で笑われても、怖すぎんだろ…。

俺が映像を見ながらそう思って居たら、少し隙間の開いていたドア
から

気圧の変化によるモノだろうか、急に強い風が部屋に吹き込み、
ピンポイントで【暗屯子^{あんどんこ}】のミニスカートを捲くり上げた。

…!?!? >あああああああ!?!?

目が、目があああああああああああああ!?!?!?!?>

<…………あの、お姉様？>

もじゃ、先ほどから感じて居られる”寒気”とは、
いつもの”越中”^{ふんどし}を履き忘れていた所為では…？（汗）>

<ぬづ！？　ワシとした事がうっかりして居^おったわ。

……まいつちんぐ！（ニカッ）>

……ごるああ！！？

その一言で済ますつもりかい！！？

こっちは不用意に恐ろしいモノを視て”失明”しそうになったわ、
ボケエ！！？

<むづ！　鼻水が垂れて来てしまったのう。

……お？　ちよつど良い所に紙が有るでは無いか。

ずびびびび！　ちーん！！>

< あ、あのあの、お姉様？

…それって、大事な書類なのでは？>

< ふっははははっ！

相変わらず【メガ姫^{ひめ}】は細かい事を気にするのう！

そんな、細かい事なぞクヨクヨ考えずに、
もっとドーンと構えて居^おれい！！>

< ……あうあうあう……。 (汗) >

… お前が犯人かああああ！！！！？

お前がもっと細かい事を気にしろよ！！！！？

…… つたく、これが有るから【サイオン】の野郎、”映像”で
見せやがったんだな？

『 ……ええ、私達だけ”あんなモン”を見るのは不公平でしょう？w』

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

………と
言う事が有ったんだww

「ちよつ!？」
” 神さま ” に突っ込みとかww

「もはや ” 無法者 ” とかってレベルですら無^ねーぞ!？」

「そんな事よりも、なぜ藻レラにも映像見せたし!？」

「そつだよ!…しかも【なつろーでいんぐ】で!…」

「最悪だよ!アンタ!?!」

「藻マエラ、”神さま”への突っ込みを『そんな事』とかWW」

それで、今晚には準備出来るそつだからWW

「…………聞けよ!?!?」
【x100】

…………その夜_よ。

この異世界【ロベルタ】に、新しく”13個目の月”が出来た。
それは目だって大きい訳じゃ無いけれど、色んな意味で”異彩”を
放っていた。

まず、ぱっと見て判ることは”俺等”の顔を模してあるって事だ。

丸くデフォルメされた俺等の顔が、他の12の月に混じって浮かんで
いる様は、少し…いや、かなりシユールな光景だww

だけど、一番 異様な部分は、そのスピードだった。

……だって、他の月の10倍位の速さで【自転と公転】を
繰り返してるんだぜ？

目視で直ぐに分かるような速度で回転しながら、一晩の中に
10回も昇ったり沈んだりを繰り返す【俺等の顔そっくりな月】と
か。

……… どんだけハツチャケてるんだよ!!!?

ちくせう！ 無理を言った事への意趣返しを、こんな形で返して
来やがったよ!?

「まあ、あんな頼み方じゃあねーw」

「仕方ないねw」

「うん、仕方ないw」

「月が貰えただけ、良かったよw」

「貰え無かった時は、藻レラが【宇宙空間】で人間の月に
ペイントしてたかも知れん事を考えたらなw」

「そーそーw」

「それに、【アリさん】達は気に入ったみたいよ？」

「さつき、月見団子を持って岩山の上へのぼってから、
ずっと楽しそうにしてるしw」

……【アリさん】のセンスは良く判らんww

だが！ 可愛いから良し！！！！（笑）

「まただよ（笑）」

「このシヨタコンめ！WWW」
【x100】

……そうして、この日。

藻レラにも記念すべき種族固有の月が誕生した訳なんだW

Episode:28 月に祈りを(後書き)

無用な混乱が起きないように

各種族へは神様達から”声”が届きました。

まあ、混乱するなって言うのは無理だろうけどねww

Episode:29 魔獣(前書き)

29話目、投稿します。

やあ、最近 創作活動に精を出している【アバドーン】だ。

速いモノで、この世界に来てから もう2年近くの歳月が経過している。

そこで、この世界に俺等【軍団^{レギオン}】が ”生きて生活してた” と言う足跡^{そくせき}と言つか証^{あかし}を、形に残すべく 様々な芸術作品を作っていると言う訳なんだ。

……たとえ俺達が居なくなつた後も”俺達が此処に居た”
”確かに存在した”と、知らしめる為に。

まあ、居なくなる予定なんか無いんだけどねw

「そんな訳で、この【猫耳少女フィギュア】の出来栄えはどうよ？」
w

「おおっ!? お前は天才だああああ!!!」

「こっちの【エルフの魔法少女】も、ポイント高めぞ!？」

「なんの!こちらは【犬耳美少女侍】じゃーい!！」

……眷属達の創作魂も、ヒートアップしとるわww

「……ヒートアップと言うか、暴走してるんじゃない?」

「いつもの光景だ、何も問題など無いw」

『……芸術作品で【美少女フィギュア】かよw!』

「お、アムロじゃんか。」

また拉麺タカリに来たのか?」

『人聞きの悪い事 言うな!』

いつも代金払ってるだろうが!！」

「忘れたw」

『忘れんなよ!!!?』

「まあ、そんな事よりこの【フィギュア】の出来栄を見てみれw」

『ん? ……なるほど、これは凄い出来栄だな。』

この出来栄えなら、確かに【芸術作品】と呼んでも大袈裟じゃ無いかも。

……つーかドワーフ以外で、こんなに精巧な彫刻を作れる種族初めて見たわw』

「だろ? 藻レラの”目”は、その気になれば電子顕微鏡や天体望遠鏡

なみの性能を引き出せる上に、スター プラチナも裸足で逃げ出すほどの精密で素早い動きが出来るからな!。」

『相変わらず非常識なナマモノだな、藻マエラW』

オマケに【直観像素質】も持ってたよな？』

「標準装備だW」

『そのトンデモ能力を駆使して【フィギュア】作りとかW』

……なんと言う才能の無駄使いW』

「ちなみに、【直観像素質】と言う言葉は現実に存在する、興味のある人はググれW」

『メタ発言は 止めいW！』

…けど、細かい細工物の技術で【フィギュア】とか【模型】なんかを作るって発想は有りだな。

知り合いのドワーフに 話して見るかな？

案外、ヒットするかも知れん。』

「お前、エルフのくせにドワーフの知り合い居んの？」

『俺は前世で”元”人間だったからな。』

集落の連中ほど ドワーフに対して偏見は持って無いんだよ。

だから、変わり者扱いで納得されてるんだw

それに、相手のドワーフ達も変わり者で有名ならしいな。』

「”達”って事は、何人が居るんだな。」

『おう、【サンチヨ・ポンチヨ・パンチヨ】って名前の三兄弟なんだ。』

「へえ〜。…………ん？」

…どこかで聞いたような、聞かなかったような…？」

『ん？ 知ってるのか？』

「……………」

「……いや、思いだせんから気の所為だろ。」

『そっかw』

【三兄弟、復活フラグ終了のお知らせ】

「ところで、暇なら彫刻に使う倒木の調達に付き合えや。

生きてる樹を使うのは嫌だから、倒木や枯れ木を探して彫ってるんだけど、「エルフ」のお前なら森や樹の事は詳しいだろ？」

『応、そう言う理由なら喜んで手伝うぞ。』

「んじゃ、早速行くべしW」

・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

そんな訳で、アムロや数人の眷属と一緒に、拠点からは少しばかり離れた森に来て、材料の調達中だ。

『……お、また見つけ。』

…ほいつ、適当な大きさに分断したら、ポーチに突っ込んで回収つと。

『……枯れているとは言え、直系50ダルの樹を豆腐みたいに斬んなよ……』

つくづくとんでもないな、その【高周波爪刃】とか言った生体剣はよw

「まーねw

でも、手伝ってくれて助かったぞ。

さすが【エルフ】特有の”種族的恩恵”【森の守り手】だな。

森や樹の事なら初見の場所や種類でも、大凡の情報を取得出来るってのは便利だよなw」

『へへへ 便利だろ？

まあ、本来1種族に1つしか持てない”種族的恩恵”を、あんだけ沢山持つてる お前等には意味の無い自慢だろうけど、森と樹の事なら

任せとけよw」

「とは言え、藻レラがその”種族的恩恵”^{ギフト}を持って無いのが、現実ってヤツなんだから助かる事には変わりないけどなw」

ピンピロリン

「種族全員で、数回に渉る”森の探索”^{わた}という行為をしたので、あなたの種族はスキル【森の守り手】を取得しました。」

「……………。」 【x7】

……………つわ、やへ。

すっげえ、気まずい空気。(汗)

……………最悪のタイミングでのスキル獲得だ、コレ。

アムロの奴すこし涙目になってやがるし……………。

「……………本当に束の間の優越感ですた……………。(涙)」

「…………………………(汗)…………………………」

ヤバイ、流石に”ドS”を自認する俺でも この場面では
コメントすら出来ねえ。

何か言えばそれだけで追い討ちになるだろうっしな。(汗)

<ぶぶぶ！　ねえ今どんな気持ち？　ねえねえねえ？>

おおお　いいいいいい！！！！？

1号おまえは鬼かああ！？

見る！　半泣きになって来たじゃねえか！？

<…ちよつw！？　追い討ちとか！？>

<さすが、1号は格が違ったw>

<王様の上を逝く”ドS”誕生w>

<昔の1号は完全に消えたなw>

<…もう許してやれよ…。(汗)>

あとの3人は俺と一緒に、状況を確認しに行くぞ。(

(了解！) 【x5】

唐突に、目の前から俺達が消えたように見えて驚くアムロの事は残った2人に任せておいて、俺達3人は樹々の間を風のように駆け抜けて行った。

.....

・
・
・
・
・

・
・

波動を感じた地点に近づいて行くほどに、樹の倒れる音や
森の動物達の鳴き声が大きくなってゆく。

……どうやら、危惧した通りに 大きくて攻撃的な存在が転移して
来たのは、間違い無いようだ。

俺達はその場所に着くと、そこは開けた場所へと変貌して居り、
その中心に近い場所では全高20ダントは、優に超えるだろう

巨大生物？が、樹々も動物達も お構い無しに捕食してゆく
光景が広がっていた。

一見して双頭の象を思わせる、その奇怪な生物？は、それぞれの
頭部おほと思しき部分に巨大な一つ目を持ち、二つある頭部？の
真ん中に縦に裂けた巨大な口が付いており、その口を大きく開けて
脚を引きずって必死に逃げようとして居る一頭の馬を捕食しようと
追いかけて始めた所のようにだ。

（ 1号、あの馬を安全な場所まで【サイコキネシス】で移動させ
る。

71号60号は、俺と一緒にあの【魔獣】を叩くぞ。（

（（（ 了解！ ）（（

必死に逃げる馬を 弄なぶるように追い掛けていたソレは、それも飽きたのか 徐おもむろに2本の鼻？を伸ばして、哀れな獲物を捕らえようとしたが、それを果たす事は出来なかった。

今まで脚を引きずり、逃げる術すべなど持たない筈の 哀れな
かび
(と侮おぼっていた)獲物が、不意に 伸ばした鼻？を避けて空中に浮
上がったかと思ったら、かなりの速さで そのまま北の方角へと飛
んで

ゆくのだから。

今一步の所で 捕らえた筈の獲物に逃げられたソレは、
その尽きる事の無い悪意を秘めた巨大な目を、怒りで赤く醜く充血

させながら、空を飛んで逃げる馬を 追いかけてよとして、その二本の鼻？を伸ばしたが、その瞬間に疾^{はじ}った光線によって鼻？を二本とも斬り飛ばされ、その痛みで醜^{みにく}く引きつった咆哮を上げたのだった。

ソレが、獲物を逃した事による無念と、鼻？を斬り飛ばされた事による

痛みから来る怒りで、光線の疾^{はじ}つて来た方向を 憎悪の込もった目で睨みつけると、大きさは自分の10分の1以下、体重に至っては何10分の1以下しか無いであろう、ちっばけな生き物が 3体、自分を

恐れるような素振りも見せず近づいて来るのが見えた。

ソレは、たった今 自分を傷つけたのが、このちっばけな連中だと理解していた。

そして先ほど、動けぬ筈の獲物を 自分から奪っていったのも、この連中だと同時に確信した。

大した知恵を持たぬソレは、論理だてた分析能力も、どうやって自分の触手を斬り飛ばしたり、獲物を奪っていったのかを理解する知識も持って無かったが、生物としての勘が いま自分に向かって歩いて来る

連中が 正しく自分の”敵”であるのだと言う事は理解していた。

そして更に、ソレは知っていた。

つい先ほど生まれたばかりのソレは、自分が 如何いかにに強大な強さと強靱な身体を持っているのか、知っていた。

現に、先ほどまで此処に居た生き物達は皆、あの馬を除いて全てが自分に喰われて逝ったではないか。

だからこそ、その強い自分に対して 恐れも怯えも見せずに近づいて来る、このちつぽけな連中を不遜だと感じ、そして又再び、獲物を奪われた時に感じた無念と、傷をつけられた時の痛みを思い出しては、益々ますます 憎悪を募らせていくのだった。

だから、自分よりも遙かにちつぽけな その連中が、自分の攻撃圏内に

無造作に入って来た時、怒りで濁った不快な咆哮を上げながら、斬られた触手を瞬時に再生させて、その巨大な足に全体重を乗せるようにして踏み潰しに掛かったのだ。

その巨大な足が振り下ろされ、大地が大きく陥没し、周囲一面をまるで地震のように振るわせると、ソレは あたりに響き渡る程の大きな咆哮をあげた。

勝利のためでも、不遜な連中を殺した事による歓喜の為でも無いそれは、激しい痛みによる”悲鳴”であった。

足から伝わって来る激痛のため、慌てて足を避けたソレの醜い目に映ったのは、両腕から鋭利な爪を伸ばして天に突き上げ、まるで”A”の

ような姿勢で微動だにせず立っている、黒い奴の姿だった。

それを、目に留め理解すると共に 再び怒りの咆哮を上げて、今度はその太く強靱な触手を叩きつけようと、大きく振り上げたソレで

あったが、再びその触手は斬り飛ばされる事になる。

真ん中の黒い奴のやや後方で左右に展開して居た、緑色の2体が恐ろしい速さで飛んで来て、その腕から伸びる爪でそれぞれの触手を斬り飛ばしたからだ。

その激痛で、更に醜い悲鳴をあげたソレは、今度は大きく息を吸い込み始め、彼等を飲み込んで 直接その強力な胃液で溶かして喰らおうと、凄い勢いで吸引を始めた。

それを見て、周りに残った樹々も根ごと吸い込まれそうだと瞬時に判断を下した【アバドーン】は、ソレを自分達ごと”飛蝗時空”に引きずり込み、森には静寂が訪れたのだった。

一方、”飛蝗時空”に引きずり込まれたソレは、黒い奴を中心にして

何かの力が展開されたのを知覚して身構えていたが、攻撃が来るわけでも無く、気がつけば周囲の光景が変わっている事に戸惑っていた。

だが、不意に自分の上空で逆巻いていた風や、まわりで吹き出していた炎に、土や水などが色とりどりの光の粒子となって一点に向かって

ゆくのに気付き その方向に目を向けると、自分を此処に引き込んだあの忌々しい連中が、腹にある口で光の粒子を喰ってるのが見えた。

自分を無視して、呑気にメシを喰って居る、自分を脅威と感じて居ない

と考えたソレは、怒りのあまり我を失い走りだしたが、突如 遠くに居た

筈の奴等が、何時の間にか自分を囲むようにして飛び込んで来るのを知覚して戸惑った為に、一瞬対処が遅れてしまった。

結果、その一瞬の戸惑いのスキに三方から 彼等の”紫色に光る”拳や蹴りを受けて、身体が分解される激痛の中で 原子の塵へと還っていったのだった。

首尾よく【魔獣】を倒した俺等は、通常空間に戻りながら
たった今倒した【魔獣】について互いに意見を交換していた。

< ∴ 初めて観測するタイプの【魔獣】でしたね。 >

< しかも、一体あたりの被害状況も今までで 一番ですよ。 >

全くだな、それにしても今まで【魔獣】全体に感じていて、今回特に強く

感じた事なんだが、奴等の”攻撃性”は異常だと思った事は無いか？

<……？ 確かに凶暴だと思っていたけど、

そう言う”生き物”だからじゃ無いの？>

<うん、だからこそ【神様】も危惧したんでしょう？>

いや、俺も最初は”そう言う生き物”だと考えて、あまり深く考えて無かったんだけどさ。

考えて見れば、【魔獣】と一括りひとくで呼称しているけど、

『出現の仕方が不明で 分類不能な生物』の総称であって、姿や生態の違う別々の生物なんだよな。

なのに、性格は例外無く”凶暴”とか 変じゃ無ねえか？

<…なるほど、姿や生態が違えば 性格だって違う筈なのに、揃揃いも揃揃って凶暴とか…。>

<確かに、そう言われると変な話ですね。>

それに、一口で凶暴だと言っても現存する生物にはそれぞれの種族で違う理由があつて、ナワバリに入られたら怒るモノや、身体の熱を維持する為に 大量の食事が必要で、その為に凶暴な性格になつていくとか、凶暴な生き物にも それなりに怒る理由がある訳なんだけど。

今回、俺があつた【魔獣】の目を見て感じたのは”憎悪”と”渴望”
と言う、

野生動物には 有り得る筈の無い感情だつた。

まるで、目に入る全ての”命有るモノ”が 憎くて仕方が無いとでも言う
ような、そんな底の見えない深く暗い”負の感情”を感じ取つたんだ。

くうーん、じゃあもしかして人為的な処置をされたとか？>

それも疑つて見たけど、違つと思う。

以前、倒した【魔獣】を何匹か【サイオン】に渡した事があるんだけど、

人為的な介入の跡も、何らかの影響を受けて変異した形跡も皆無。

【魔獣】の遺伝子には、ちゃんと進化の軌跡きせきが刻まれていたそうだがから、今回のように虚空こくうから突然現れるのも、正体が分からない理由の一つだそうだ。

『おい、無事に片付いたのかー？』

「お、アム口達もこっちに来てたんだな。」

『ああ、怪我した馬が居るって聞いてな。』

それでも、治癒魔法はエルフの里 屈指の使い手なんだぜ？』

ぶるるるるっ すりすり

「ずいぶん、懐かれたようだなw」

『ああ、なんかウマがあつてなW』

<誰がウマイ事を言えとW>

「良かったな！ モヒカン号W！」

ひひんー！（怒）どげしー！

「ああ！？ 何をするんだ？ モヒカン号！？」

ぶるるるっ（まだ言うか）！！ げしー！げしー！げしー！

『ちよっ！？』

人の馬に、勝手に妙な名前つけんなー！！』

< え〜!?! カッコイイじゃん? > 【×5】

『!?!お前等のセンスは 意味不明過ぎだろお!?!?』

..... キュピーン!.....

「!?! アムロ、伏せろお!?!」

Episode : 29 魔獣（後書き）

またもや、続きの気になる部分で切ってみるテストw

そして、そのまま暫らく放置するワナw

Episode:30 魔獣の王(前書き)

30話投稿！。

前回のあとがきで『暫らく放置』と書いておきながら

その舌の根も渴かない内に投稿するワナw

……最初に言っておく！

俺の最も好きな事は、読者の期待を裏切る事だぁーwW!!!

「お前、^{ヒューマン}人間の子供の様な姿をしてるが ^{ヒューマン}人間じゃ無^ねいな？」

千切れ飛んだ右腕の傷口を押さえ、それ以上 血液が流れ出さないように細胞を操作しながら、平坦な声で質問してみる。

俺達は意思の力で、ある程度の【身体操作】を行えるので、流れる血と痛みを最低限に抑えて行動出来るから この程度の怪我は怪我のウチに入らないのだ。

また、大分^{だいぶ}この新しい自分に慣れても来たのも理由だろう。

平和な日本で暮らしていた頃なら、例えば痛みが無く すぐに再生すると

分かっているても、右腕が千切れたら こんなに冷静では居られ無かった

筈だしな。

むしろ俺を驚愕させたのは、俺に一撃で傷^{きず}を付けた事の方だ。

【不可侵】と【レジスト】の概念を纏い、例えその概念を無効化されたと

しても”竜王”の鱗以上の強度を誇る甲殻を持つ この俺の右腕を一撃で千切れる威力の攻撃手段を持つと言う事なのだから。

それが可能と言う事は、”空間”それも”次元世界”や”異世界間”に
まで、影響を及ぼせる能力しか有り得ない。

当然ながら、これ程の”異能”を持つなど 人間では不可能だろう。

俺が元居た【上位世界】の人間なら、極わずかな可能性でそう言う”突然変異”も生まれる可能性だって有ったが、此処は、新米創造神が

造った【下位世界】だ、人間が秘めた無限の可能性も、そこまで”進化の種”を蓄積していないからな。

余談だが、”進化の種”つてのは、【上位世界】に存在する人間だけが持つ、進化や可能性の選択肢を表す言葉で、長い年月を何代も掛けて進化の階段をのぼりながら、その過程で増えてゆく”未来の可能性”そのものを意味すんだ。

これから、長い年月の果てに この世界そのものが成長を続けていけば、やがて【上位世界】にランクアップして行き、それに伴って宇宙が広がって行く事で、その”可能性”も同時に増えて行く訳だ。

ちなみに、この長つたらしい説明も【分割高速思考】を使ってるから出来る事で、現在別の思考は【正体不明くん】と向かい合って絶賛警戒中ねw

ふふ、応える必要も無いほどの愚問だねw

「こっちは、ベラボーに聞きたい事が山ほど有るんだが、
答えを教えちゃくれ無^ねーか？」

へえ、腕一本吹っ飛ばされてるのに冷静だね。

「あんなもんで俺達を殺れるだなんて、思っちゃ居なかつただろ？」

まあね

そう言って肩を竦め、瞬時に腕を再生して見せる俺に、何でも無い
事の
様に返答して来る。

……コイツ、俺達の事をかなり調べてやがるな……。

そして、腕が再生されると同時に”光の粒子”となって原子の塵へと還ってゆく”元右腕”を【全方位視界】で映しながら、俺の頭脳はどう言う

質問で相手の興味を引いて、少しでも多くの情報を引き出すかを高速で

シュミレートしていた。

「それで、ある程度の質問には 答えてくれるんだろ？」

何せ、恨みを抱いてる相手を殺す前に、自分の恨みを知らせ無いつてのは、つまんねーからな？」

くすくす、初対面なのにそう思うなんて、自意識過剰すぎない？

「誤魔化すつもりが有るんなら、その”粘着質な視線”は隠しとけ。

その目を見れば一目瞭然だ。

お前なんぞ、見たことも会った事も無^ねえが アムロや俺を見る時の目は

確かに他のモノを見る時よりも”粘着度”が上がってるぞ?」

くふふ、そうかい！ この目が僕の本心を曝け出しちゃったか。

じゃあ、誤魔化さずに言っちゃおうかな。

うん、憎いよ、憎くて嫉ましくて気が狂いそうになるくらいね！

『……………？ ひい！？』

……………アムロが腰を抜かしたが、それも無理は無い。

それほど強烈な憎悪の波動であり、なまじ整った顔立ちだけに
一層凄惨な形相なのだから。

「……………解せんな。」

人間ならいざ知らず、初対面の人外からそれほど恨みを買った
憶えは無いんだがな。」

まあ、そうだろうねw

君等【レギオン】は神様のお気に入りであり、この世界の守護者として

”この世界”や精霊からも深く愛されているものね。

……コイツ、一見平静に話をしてる様に見えるが、『深く愛されて』
の
部分で嫉妬とか妬みの感情が揺らいだな？

「なるほど、俺個人とか眷属に恨みが有るんじゃ無くて、そう言う立場に居る者 総てが ”嫉ましい” ってことか。」

……ふ、ふふふふふふ。

本当にカンに触る男だね、君って奴は！

……”虫ケラ”の分際で生意気なんだよおおおおお！……？

いい気になってんじゃ無ーぞ！

このウジ虫風情がああああああああああ！……！

「……やっと、本性曝はしたか。

さっきの取り繕つくろった不快な笑顔よりも、そっちの方が似合にあっているぞ？

……お前の醜みにくい”心”に相応あしくな。」

……どつやら、君のことを侮あっていたよ。

その無表情で、ボーとして見える面つらとは ちらほらに、かなり頭が廻まるみたいだ。

「んで、さっきアムロを殺そうとしたのは何でだ？

お前の粘着質な性格的に、一撃で殺すんじゃない無なくて じわじわと 蹴なり殺す方が趣味じゃ無ないの？」

ああ、確かにそうだけだね。

そのエルフ個人に意味なんか無いよ。

送り込んだ木偶の反応がいきなり途絶えたから、様子を見に来てそのついでに君達を見かけたモノでね。

エルフ自体も嫌いだから いずれは種族総てを髑り殺すけど、個人単位ではそんなに重要じゃ無かったから、行きがけの駄賃に殺そうと思っただけさ。

「ただの八つ当たりかよ。」

アムロ涙目w

…そして、コイツがあのかケモンを送って来たのが判明つと。

「そう言や、お前の名前聞いて無かったわw

【正体不明の存在】じゃ面倒だから、有るなら教えろや。」

そうだね、【マーフィーくん】呼ばわりは僕も嫌だし、君達には知って貰う義務が有るしね。

……義務と来たか……。

よほど、深い恨みを抱いてるみたいだな。

それと、【ウイズ】知ってんのかよww!

僕の名前は” If^{イフ}”

かつて”可能性”と呼ばれたモノ達の恨み辛みや、

無念の”混沌^{こんとん}”を統べる”王”たる存在だよ。

……” If^{イフ}”、ね……。

「んで、さっきの奴や他の奴に”憎悪”を植えつけたのはお前か？」

いや、そんな事はして無いよ

彼等は最初から君達を恨んでいるのさ!

……或いは妬んでいるとも言っかな?

……あー成る程ね、何と無くつかめたわ。

「んで、今日はこれからどうするんだ？

……このまま、殺り合うかい？」

ふふ、そんなに警戒しなくても、今日はこのまま帰るつもりさ。

此方こちの方はとしても、まだ準備が出来て無いのでね。

焦らなくても その準備が整い次第、殺してあげるよww

……君達は最後の最後に、特に念入りにね……。

それじゃあね

そんな、有り難く無いセリフと共に、奴は次元を歪めて自分の影の中に沈むように入って消えていった。

「……おい、アムロ。」

いつまでも、呆けて無いでシャンとしろ。

いきなり巻き込まれた感じで 色々と聞きたい事とか有るだろうか
ら、
知りたいなら説明してやるぞ?」

『……え? あ、ああそうだな……』

えと、じゃあ。

………アイツ何で【ウィズ】知ってるの?』

「 最初の質問それかよ!!!? 」

< 喰いついたw!>

< なぜその質問にしたし W >

< やはり、王様と同じ属性か W >

そんな感じでやっぱり最後はぐだぐだに終わってしまったんだ W W

E p i s o d e : 3 0 魔獣の王(後書き)

最後のぐだぐだ状態はテンプレですw

Episode:31 If(イフ)の正体(前書き)

遅くなって、申し訳ありませんでした。

第31話投稿です。

Episode:31 If(イフ)の正体

「……と言つ事があつたんだ。」

『……いや、いきなりそう言われても、なんの事だか……。』(汗)

「いや、そこは神様なんだから、ちやっちやと理解しようよ。」

『無茶言わないで下さい。』(汗)

『相変わらず酷い無茶振りなのですよー。』

「しょうがない、記憶の閲覧でちやっちやと状況確認する。」

『……なるほど、原因と言っか”敵の首魁”が現れたと……。』

「ああ、これで【魔獣】の発生が偶然起こった理解不能な現象では無くて、”意思持つ存在”による悪意の仕業ってことがハッキリしたって事だ。」

『しかし、この”If”^{イフ}と名乗った存在は何者なのか……。』

『”次元世界”や”異世界間”にまで影響を及ぼせる程の”空間操作”の

能力を持つてるんでござすから。』

『最低でも【上位精霊】か【上位魔神】、最悪の場合【邪神】クラスの

存在である可能性が高いですけー。』

『あと問題なのは、肝心の”目的”だよな。』

『そんな奴が、なんでこの世界で【魔獣】を解き放っているのかも、さっぱり見当がつかないじゃん。』

824

「あーそれなんだけどな。

もしかして、俺の予想が当たってたら、正体と目的が分かるかもしれん。」

『え、本当？』

『それは、朗報ですじゃー。』

『私としては、どのような思考と推理の果てに、そのような答えに行き着いたのかと言う事の方に興味が湧きますが。』

「でも、まだ漠然とした考えであって、確証は何も無いんだよな。

だから、【サイオン】に調べて欲しい事があるんだ。」

『それは構いませんが、何を調べるのでしょうか？』

「今まで送った【魔獣】のデータを、
『過去にこの世界に存在していた生物』のデータと照らし合わせて、
該当する生物が居ないかどうかを調べて欲しい。」

『……？ はて？』

それは以前にデータを貰った時に 照会して調査済みですし、
『該当データ無し』と 貴方にも連絡して居た筈ですが？』

「うん、それでその時の俺も納得してたんで 見落として居たけれど、

以前に調べた『いま繁栄してる生物の祖先』じゃ無くて
今回調べて欲しいのは

・進化の中で適合出来ずに滅びた種族

・進化の可能性として突然変異で生まれたモノの、
結局適応出来なくて一代限りで滅んだような生物

この二つに絞って、調べて欲しいんだ。」

『…彼等、【魔獣】はそういった存在であるか?』

「いや、純粹にそうだとは思って無いよ。

なにせ彼等は、すでに滅んで居るんだからね。

だから、今回調べて貰う事が俺の予想通りなら、奴等の正体に迫れる
要因になると思う。」

『……成る程、おぼろげながら　なんとなく私にも見えて来ましたよ。』

早速、調べる事にしましょう。

ですが、一代限りの存在まで調査するとなると、個体の一つ一つを確認すると言つ事ですので、神とは言えそれなりの時間はかかってしまいます。』

「まあ、膨大な知識量だろうしな。

どんだけ、かかりそうなの。」

『……そうですね、3日は戴かないと。』

「……速つ!?!?」

何週間くらいは覚悟して居たのに。」

『…貴方、神様を舐めてますね？』

これでも、【知識神】なので、他の神よりはそういう能力に特化していても不思議じゃ無いでしょう？』

「サーセンw」

『……………はあ。もう良いですよ。』

これ以上は虚しくなりますから。

それでは、3日後に召喚シマヒしますから、待っていて下さい。』

「あー、頼みます。」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

……と言つ事があつたんだ。

<へえ、そんな事が。>

<んで、3日後には調査結果が出ると？>

<その間、僕等は何をすればいいの？>

<働きたく無いでござる！働きたく無いでござる！…！>

<ちよつww！おまww>

とりあえず、いま発言した56号は逆を吊りにするとして。

特訓を始めとした、戦力の増強だ。

<冷静に”逆さ吊り”とか言い切ったw>

<さすが、王様は容赦無いでえ〜w>

<…? これ以上の戦力つて、必要なの?>

<”過剰戦力”なんじゃあ?>

……これは俺の予想であつて 確証は無いが、
速ければ3ヶ月以内、遅くとも半年以内に 奴等【魔獣】共の大規
模な
侵攻が起こると推測される。

< !!!? > 【x30】

何度も言うが、確証は無い。

だけど、此処はもう俺の暮らして居た平和な日本じゃ無いんだ。

事実、俺の右腕を一撃で斬り飛ばす様な攻撃手段を持つような
”敵”も現れた。

最強種族である事に油断して、己を高める努力や鍛錬を怠れば、待っているのは”敗北と死”だ。

……油断して、実力を十分に発揮出来ぬまま 敗北する。

最も愚かな負け方だろ？

それに、俺達の”使命”を忘れたのか？

俺達は、只 勝利するだけでは無くて この世界そのものを守ら無ければ為らないんだ。

もし、予想通りに大規模侵攻が起きたなら、他の種族を守る為に広範囲に渡って展開する必要も出て来るだろう。

単なる強さだけを見るなら極端な話、たった一人でも何とか成る。

だが、広範囲を守るとなれば 今の俺達だけでは守りきれない。

だから、常日頃から連携や 様々な状況を想定して訓練を行い、鍛え続ける事が必要なんだ。

俺自身も、更に眷属を殖やしたり 一緒に鍛錬する等して、自分を鍛えて往くつもりだ。

<わかりました。>

<くんじゃ、早速色んな想定の元に訓練します。>

<殖やす仲間の分も、居住空間拡張しないかね。>

<今回、仲間は何人くらい殖やすんですか？>

今までの【魔獣】の出現数から推測して、多めに見積もったとしても

大規模侵攻に必要なくらい数を揃えるには、最低でも3ヶ月は必要だと考えられる。

それだけの期間が有れば900人は殖やせるだろう。

<!!!!!!>

<おお、いつきに千人になるんだw>

<それじゃあ、孵化室の拡張もしないと。>

< 肩当部分の”番号”も、新しく貼り直さないとねw >

よし、それじゃあ みんなそれぞれ準備にかかってくれw

< 了解ですw > 【030】

< さんじゃまず56号を”逆を張り”だねw >

< えっ〜…(^ >) >

< ……もう、許しちゃねよ。(汗) >

.....

「それで、結果はどうだった？」

・
・

・
・
・
・
・

『貴方の言った通りでしたよ。』

現在確認されている【魔獣】は、その総ての種類が嘗て一度、この【ロベルタ】の地に生まれ、生きた存在でした。

その”外見だけ”は、と注釈が付きますがね。』

『その能力、特に再生能力なんかを見れば、全くの別物の生き物と言えるのですよー。』

「まあ、本来は滅んだ筈の生物が存在するって事自体が在り得ない事なんだ。

それ位のイレギュラーは、在っても不思議って程じゃ無いだろ？」

『そうですね、今回の件は総てが異常であると言えますからね。』

……それで、聞かせて貰えますか？

今回、貴方が気付いた事を。 推測混じりでも結構ですので。』

「あーうん、まず最初に奴等まじゅうを見た時は”知性”を持った悪意ある存在の手に囚よって生み出された【合成獣キメラ】かと思っただけだ。

その後 倒サンブルした魔獣送って、調べて貰った時に『【魔獣】の遺伝子には進化の軌跡きせつが刻まれていた』って聞かされたから、どれほど異様な姿で

あろうが、奴等まじゅうは【合成獣キメラ】の類たぐいでは在り得ないって事が分かった。

此処までは良いよね。」

『はい、理解出来てるのですよー。』

『ええ、先を続けて下さい。』

「次に疑ったのは、異世界から連れて来られた生物だと言う可能性。ただ、奴等まじゅうの身体を構成する部位が、この世界に現存する生物の部位とかなりの割合で共通点が見られる事が、その考えに疑念いだを抱かせた。

……世界が変われば、その生態系も大きく変わる。

現に、元の世界の生物と この世界の生物では、身体的な共通点はそれ程多く無いんだ。

なのに^{まじゅう}奴等の構成する部位と、この世界の生物の部位は驚くほど共通点が多い。

まるで、同じ祖を持ちながら 進化の過程で変化して往った、とでも言うように。

その他にも、妙に この世界の環境に馴染んでいる様な 印象を受けたって事もある。」

『 馴染んでいる ” 様な印象 ですか？ 』

「 うん、なんて言うか

一番そう感じたのは、身体の色なんだけどね。

普通の野生生物は、棲んでる環境に合わせて ” 保護色 ” を持つてるだろう？

【イソギン・サウルス】は棲んでる砂漠の岩や砂に似た肌を、

【複眼プテラノドン】は棲んでた岩山と似た体色を、それぞれ持っていたんだ。

棲んでる環境に合わせて、体色を変化させるタイプの生き物で無ければ、そんな”保護色”には為り得ないと思うんだ。

無論、自分達の体色に合わせた環境を探し出して棲み着いたとも考えられるけれど、それにしても”保護色”に違和感が

無さ過ぎるんだよ。」

『……なるほど、”保護色”ですか。』

『そう説明されると、確かに”この世界”で生まれたと考えるもおかしくは無いでござすな。』

『身体的特徴も、異世界で発生した生物が それ程まで一致するって言うのは、確かに妙だからね。』

「そして、絶滅した種族や生物に限定して 調べて貰ったのは、
奴等まじゅうの攻撃性が”異常”だったからだ。」

『……………と言ひとつ？』

「今回、【双頭マンモス】と相對して、初めてその”目”を間近に見て分かつた事だけど、

奴等まじゅうの攻撃性の根底に在るモノは”憎悪”だ。

しかも、ただ闇雲に憎悪して居るのじゃ無くて、”妬みや嫉妬”などの

【負の感情】から来る、どろどろとした粘着質の感情から生まれた”憎悪”だ。

……あれ程 強力で強靱な生物が、生きているモノ

それこそ植物や力の弱い動物にまで向ける、尋常じゃ無い

”妬みや嫉妬”の感情と、それを源みなもとにする憎悪。

今までに、分かっていた【魔獣】の生態と その感情の意味。

そして、遭遇した【魔獣の王】と言つ存在が名乗つた”If”^{イフ}と言つ単語。

…名前には必ず、その存在を表す為の 何らかの意味が有る。

これら総てを一つに考えたら、この可能性が一番高いのでは無いか？
と思った。

……即ち、【魔獣】とは 嘗てこの世界で 進化を夢見て生まれな
がら、

世界に愛される事無く消えていった、無数の可能性を秘めた

生き物達の【悲しみ】や【無念】、【妬み】などの”想念”が、何
らかの

要因によって集まって具現化した存在で有り、【魔獣の王】が名乗
った

” If ” 《もしも》と言う名前には、

『もしも、自分達が世界に愛されて居れば』、

『もしも、違った選択が為されて居れば』と言う、

違う状況で 起こりえたもしもの可能性を示唆した名前なんだろう
と思う。

そしてこれなら、奴等の異常なまでの攻撃性も領ける。

……嫉ましかつたからだろう。

生存競争に勝ち残り、世界に愛されて繁栄を続ける 現在いまを生きる

総ての命が。

そして、神の信頼を得て特別扱いされている 俺達【軍団】レキオンが。「

『……それが事実なのだとしたら、なんとも悲しい話なのですよー。』

』

「ああ、それは分かってますけー。
そうじゃ無くて、今の人間ヒューマンと 世界や他種族の事を考えたんですけー。
」

「今現在の、【人間ヒューマン】に因よって 環境や他の種族が滅んでいくのも
”淘汰”の一環なのでは無いか？とね。」

「だとしたら、君をこの世界に召喚呼んで 【人間ヒューマン】に対処させてる
”僕等の行為”は、果たして正しいのか？と考えちゃってね。」

「そして、今やより強い存在として、確かに生きてこの世界に存在
してる

【魔獣】を駆逐すると言う行為も。」

「どこまでなら許されて、どこまでなら許されない行為なのか、
その判断基準が判らなくなって来たじゃん。」

「ああ、そう言う事か。」

確かに、この世界だけに限らず、宇宙規模で考えたって
《勝った方が正しい》とか《弱肉強食》とかって思想は、絶対の真理
だと思っよ。

《強い者が弱い者を助ける》なんて考えは、弱い者を喰いモノにする

クセに 強い者には助けて貰おうとする、
弱っちくてズル賢い【人間】が、
自分等に都合の良いように勝手に考えた言葉だしな。

そう考えれば、【人間】が他種族を滅ぼすのも、【魔獣】が
他の生き物を襲うのも、批判される様な事じゃ無いんだろうな。」

□ □ □ □ □ □
.....
□ □ □ □ □ □

「だけど、今回の一連の事柄は”前提”そのものが違う。」

『.....え?』

「まず、【人間】^{ヒューマン} だけど、一番 問題視されて居るのは”環境”
延いては この世界そのものまで破壊しかね無い、その愚かで無知な
所だったるう?」

奴等の考え無しな 欲や傲慢と言った”悪徳”によって、世界を

『 『 『 『 『
.....。 『 『 『 『 『

『そっか。 うん、有難う。 『

『 私達はこれまで通り、この世界に良かれと思う処置を 全力で
遣ってゆけば良いと言う事ですね。 『

「イグザクトリー
E x a c t l y

こうして、
【造物主達】ロベルトと愉快な仲間の”迷い”を取り除いて
その日は一旦帰る事にしたんだww

Episode:31 If(イフ)の正体(後書き)

そんな訳で、今回は”If^{イフ}”の正体についての説明回でした。

Episode : 32 神様と俺と人間と(前書き)

遅くなりましたけど、32話目を投稿します。

活動報告にも書きましたが、失業 再就職のコンボで

私生活での時間が取れずに、執筆作業も遅れがちですが

クライマックスも間近に迫り、完結までもう少しなので

なんとか、ガンバります。

Episode:32 神様と俺と人間と

やあ、あれから更に数日後。

またもや神様に呼び出し喰らってる【アバドーン】だ。

「……んで、あれから何か進展した？」

『……呼び出しくらったとか、私達のイメージ悪過ぎでしょう。』

『

ズッー…

「細けえ事あ、イイんだよ！」

『 ……相変わらず、【アバドーン】さんは無法者でござわすなW
』

『 ホントにねw
』

『 神様に ”裏手突っ込み” とか W W 』

『 …… まあ、色々と納得行きませんが 時間は有限ですから、話を進めましょうか。 』

相変わらずブレ無^ねえな！ おい W W

『 それで、ざっくりと結論から言つと原因は人間^{ヒューマン}でした。 』

「 ただよ (笑) 」

『 …… と言つても、彼等が悪意を持って ”何かをした” と言つ訳ではありませんが。 』

『 まあ、偶然に偶然が重なって起きた ”不幸な事故” と言えるのですよー。 』

『 …… でも、ある意味では必然であり、自業自得とも言えるんですけど。 』

「……取り敢えず、説明してくれ
でないと、判断つかないし。」

「まあそうでしょうね。」

……事の起こりは、才能ある一人の魔術師の研究してた”石”が
完成した事でした。

魔術師が その生涯を掛けて創造し、”賢者の石”と名付けられた
その石には”想念”を溜めて 力に変えると言う能力が与えられて
おり、
人々の祈りや願いで強大な力を発揮する その”石”を使って
平和をもたらす。

……それが魔術師の願いでした。 』

「普通に良い話じゃん。」

「そこで話が終わっていたなら そうなのですがね。」

けれど、欲に目が眩んで”石”を欲した”時の権力者”の手により

魔術師は殺害。

”賢者の石”はその後何人も欲に目が眩んだ人間の間を転々とした後に、その行方が分からなくなってしまうたのですが……。』

「あゝなるほど。」

人間が絡んだ話が”ハッピーエンド”で終わる訳ないかw
その”賢者の石”が、”If”^{イフ}に関係有るって事だな？」

『あくまで 推測に過ぎませんが。』

『そもそも、手掛かりが全く無い状態での調査でしたので。』

『わっしら全員の【神力】^{スギン}を集結させて、
アンサー・トーカー【解答】を使っただけですけー。』

『その結果”視えた”映像から推測し、得た結論でござす。』

『でも、ほぼ間違い無いと思ってくれて良いじゃん。』

「ほぼほぼ。で、その【解答】って何？」

アンサー・トーカー

『かなり希少なスキルで、文字通り知りたいたいと思う事象の”答え”が

判ると言うスキルです。』

『アバドーンちゃんはもう知ってるけど、”神”も【全智全能】って訳では

無いのですよー。』

『それでもこのスキルを使えば【全智】と言われる位の知識が得られるんでござすw』

『このスキル自体は希少ですが”単体”で有している【魔神】や【神】も、居るには居るんですけー。』

『でも俺等はそんなスキル持って無いんで、【神力】^{メギン}を集めて”なんちゃって【解答】”^{アンサー・トーカー}を使っって訳じゃんw』

……なんちゃって【解答】とかww

アンサー・トーカー

「……兄さま、間違った事は言って無いけど、もう少し”言い方”と
言うものが……。」

「……兄ちゃん……。」

「今更、アバドーンに取り繕っても仕方無いじゃん？」

……………長男エ……………（；、）

「まあ、このお笑い三きょうだい兄弟は放って置くとして、話の続き
ですが。」

『『『酷っ！？』』』

…お前等、仲いいなww

『 相変わらず、サイオンどんは動じないでござすな W 』

『 彼はマイペースだからね W 』

『 はいはい、胸にてを当てて考えて見るのですよー。 』

ぴゅっ

『 お胸さん、お胸さん教えて下さい。 』

『 そこで、ウチの胸に聞いてどうするですかー！？ 』

『 平たいひでした W 』

ドゲシィッ！！

『 成敗！！（怒） 』

『 サモハン！？ 』

……あれって、セクハラになら無^ねえの？ W

『 ああ、彼らは”夫婦”です。 』

『 ”いつもの光景”って奴じゃん W 』

なにい！？ この合法ロリと主神エが ”夫婦”だと！！？

『 ……【主神エ】って言うな！（泣） 』

『 ……【合法ロリ】って言うなですよー（怒） 』

なら】よう、よ】でWWW

そして、ロベルト。手前てまえにはこの言葉を送るぜ！

「この【ロリコン】めー！WWW」

『【ロリコン】ちやうわ！？』

『【よう、よ】って言うなですー。(怒)』

『いい加減、話を進めませんかー。(汗)』

『面白いから良いんじゃない？W』

『ほら、貴方アバドーンもこの”面白ろ夫婦”をからかって居ないで、話を進めますよ。』

『『酷っ！？』』

待て、待ってくれ。

最後に一つだけ聞かせてくれ！

ルランジェルはロベルトのどこが良くて結婚したの？

これを聞かなきゃ、気になって話どころじゃ無^ねえ W W !

『 あーうん。』

頼りないんで、ウチが付いててやらなきゃダメかなーと思って。)

照 (『

『 酷っ! ? 』

ぶぶぶ! 凄^{すげ}え 納得いった W W W

『 ……うわぁーん! ? 』

『 …ぶくく。 …… やっぱりそう思うだろう？ W 』

『 …ぶぶぶ……。 …… いかん、腹筋が崩壊でござす… W W 』

『 …… くっくっ。 …… ちょっと、笑わさないで下さい。 …… 腹筋が攣る。 …… 』

『 …… (ぶるぶる) …… 』

…ぶぶ。 …… おい、ヘルトン W

姉に係わる事なんで 大声で笑いたく無いのは解かるけど、
我慢のし過ぎは体に毒だぞ？ W W

…… っていかん！ また笑いが…。 …… ぶぶぶ！

……あゝゝw w

最強生物で不死身の俺が、あやうく”笑い死ぬ”ところだったわw w

『 まだ一回目だろうがw

俺等は既に何度も死にそうになったじゃんw 』

『 ……あうう(涙)……。 』

『 まあ、こんだけ からかつのも仲が良いのを祝福してる証拠
て事で

ごわすからw 』

『 ……いかん、笑い過ぎてどこまで話したか 忘れました。』

……大丈夫かよサイオンw

あれ？ そう言えば 今思い出したけど、最初に会った時にロベルトって

【全智全能】って言ってたんじゃあ？

『 ……ああ、あれね。”はったり”だよ。…それが何か？（キリッ）

……何か？ じゃ無^ねえよ！”はったり”かよ!？

しかも、無駄にイケメンになってる意味が分かん無^ねえよww!!

『 ……あ、ようやく思い出しました。』

今まで、考えてたのかよ!?

『 ……相変わらず、【アバドーン】さんの突っ込みには”キレ”が有るのーw 』

『 サイオンのマイペースぶりもなーw 』

……まあ、そろそろ本題を進めないとヤバいかw

それで？ 話の続きを聞かせてくれるか。

『 そうですね。……誰の所為で話が進まないかは 不毛なので
この際忘れましょうか。 』

『 それで その”賢者の石”が欲深な者達の間を転々と さ迷う
内に、

”負の想念”をドンドン取り込んで強大な力を得て、

更にその”負に偏った”力の所為で、本来ならそのまま消え往く筈
だった

彼ら【選ばれる事の無かった者達】の【悲しみ】や【無念】、【妬
み】など

の”負の感情”に反応して引き寄せ、”石”を核とした【上位魔神】

の
誕生に繋がったのだと思われます。』

「ここまで説明するのに、かなりの時間を使ったなー。」

『 …… 大部分の時間は関係無い事で潰れましたがのー。(汗) 』

「だが、そうなるとやはり人間共を ヒューマン このままの状態で放置する訳にも
イカンか……。 」

『 うーん、最近になって起こった問題は総て人間が係わってるで
ごわすからなー。 』

『 本当に困った種族に育ちましたのですよー。 』

『 やはり、創造した時に使った【知恵の実】の影響でしょうか？
』

「まあ、心配しなくても絶滅させる気は無いから安心してくれ。」

それに【知恵の実の影響】は、実は大した事は無いと思うんだ。」

「え？ そうなの？」

「だとすると、何が問題になってるんですかいのー？」

「人間の心ヒューマンに根強く存在する”心の闇”は、あの種族が抱える潜在的な【種族的な未熟】と【繁殖力の高さ】の所為だと思う。」

「【種族的な未熟】？」

【×5】

「そう、これは種族自体が”短命”な所せい為で、成熟して深い知識と分別を持つとほぼ同時に、種族の成体が死に至ると言う”寿命の短さ”が
全ての原因なんだろうな。」

考えてみて欲しい、もしも深い知識と分別を持つ成体が長い寿命を

得たら、当然”老化”による身体能力の衰えによる”引退”も先送りになり、成熟した大人の活躍の場が広がるし、【繁殖力】が低いと子供の重要度も飛躍的に上がり、種族全体で子供を見守る様になる。」

『 うん、当然そうなるよね。 』

「そうすると、【発言力】のある立場に”分別を持つ成体”が多く残る事になる。

更にそう言う”大人”が増えると周りの”子供”にも影響を与えるだろう。

具体的に言くと、周りの大人が自分や他人とかの区別無く”子供の”の教育に係わっていくんだ。

寿命が伸びて、思慮と分別を身に付けた大人達が。

……そう考えていくと、今の【エルフ】の教育形態に似てると思わないか？」

『 ……なるほど、つまり寿命を延ばして繁殖力を落とせば、【エルフ】の

様に思慮深い種族に変化してゆく可能性が高いと言う事じゃん？』

『 ハツチャケてるのは【知恵の実】の影響だと思っていましたが
……。』

「それも間違いじゃ無いんだろうけど、根本的な問題は人間全体が
抱える”心の闇”だ。」

その闇が【知恵の実】で得られるはずの”奇跡の可能性”を、
悪い方に捻じ曲げているんだよ。

……成熟した大人が少ない所^{せい}為で、分別や常識を 十分に教えられる
事も無く育った子供が、そのまま大人になって子供を作り、
その十分とは言えない分別や常識を、これまた完全に子供達に伝える
ことなく、次の世代に代わってゆく。

こんな事を繰り返していたら、種族全体が傲慢になって道を違^{たが}える
様になってゆくのは、むしろ当たり前だろ。

その所為で生まれた”心の闇”こそが問題であって、【知恵の実】
自体は

本来、深い知識と”奇跡の可能性”を与えてくれる”祝福”そのものでしか無いんだからさ。

だから、人間が抱える潜在的な【種族的な未熟】と【繁殖力の高さ】を
どうにかすれば、多少の時間は必要だろうけど 人間は
変わっていける。」

『……そうか、ずっと勘違いしてたよ。』

『ウチらは【知恵の実】こそが問題だとばかり思っていたのですよー。』

『真の問題は彼らが抱える種族的な問題と、それを理解出来なかった
我々にあったのですね……。』

「理解出来なかったのは、あなた等【神々】の責任じゃ無いさ。
あなた等は、最初から【成熟して完成された】種族として生まれた
んだから、【未熟で未成熟な】種族の事など 理解出来なくて当然
だ。」

むしろ、理解出来る方が不思議つてものだよ。

俺がその事に気付けたのは、俺もまた未熟で未成熟な人間ヒューマンとして
”生きた”事があつた上に、それを感情を交えずに思考出来る
人外の存在でも在るからだ。

……それに、これから必要なのは【後悔する事】じゃ無くて、
【どう対処して往くか】だろ？」

『 ……そうですね。』

【後悔】や【懺悔】は、この問題が片付いたらするとしますよ。』

『 今は、【魔獣】と【人間ヒューマン】の問題を片付けるのが先決
ですからのー。』

『 んじゃ、先に人間ヒューマンの方の問題を、片付けるとするじゃん。』

『 一番気がかりな”子供”でしたでごわすからな。』

「 やるとしたら、繁殖力を一気に100分の1くらいに落として、
30歳前では受精能力が無い様にすれば、手間も省けるよ。」

『 え？ 一気に100分の1？ 』

『 そんなに減らして大丈夫でしょうか？ 』

「うん、今の段階ではまだハツチャケてる種族でしか無いし、かなり数も多いからね。」

それに、前に【サイオン】が言っていたらどう？

『 寿命と繁殖力は反比例する』 法則が有るって。

だから、繁殖力を減らせば徐々に寿命も延びるし、” 少子化問題” とかは

すぐに気付ける上に深刻な問題だから、他の種族にちよっかいをかける

余裕も無くなるだろうしな。

そうやって、時間が経てば経つほど分別のある大人が増えていき、やがては 気付くだろ。

” 自分達の安全” を守るには、他の種族とも手を取り合って往かなければ

駄目だって。

……此処は俺の” 前世” の世界とは違い、助け合う【仲間】であり【兄弟】でもある、他の種族が居るんだから。」

『もう、何度目になるのか分からないけど、また言わせて貰うよ。
……有難う。君に来て貰って本当によかった。』

『長い間、気に掛かっていた【末っ子】の問題も光明が見えて来た
のですよーw』

『本当におんしにゃー、感謝しきれんてごわす。』

『この通りですけー。』

『貴方には、”神”で在るが故に 気付く事さえ無かった事を色々
と
教わりましたよ。』

『まあ、俺様は美味しい酒とツマミを、お供えしてくれるだけでも
感謝して
いるじゃん？w w』

それほどでもない。(キリッ)

・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

……結局最後はぐだぐだに終わる藻レラだったんだww

Episode : 32 神様と俺と人間と (後書き)

コイツ等は、世界が崩壊しようとして死ぬ間際であろうと

多分、変わらずに馬鹿やってるんでしょうww

another 03 平行世界への誘い(前書き)

遅くなりましたけど

外伝3話をお届けします。

『やあ、久しぶり。』

今回、突然来てもらったのは 君達に会いたって存在キトが居てね。

その存在キトに君達を紹介して欲しいと頼まれたんで、
急遽来て貰ったって訳なんだよ。』

「ほほう、いきなり眷属クワンごと呼ばれたから何かと思ったら、
主神エ・・・が 直々に紹介するような存在キトか……。」

『いや、今 何気なく”さらっ”と言ってたけど、語尾に『エ・・・
』を
付けてたよね？』

「で？どんな存在キトが 俺達に会いたいと？」

『無視すんなよ！ 聞けよww！』

『いやあ、話しに聞いたとおりに貴方達は仲がよろしいのですねw』

<そう見えたなら、貴方そうとう目が悪いですよ？>

<そーそーwこの二人は似すぎて居るので”同族嫌悪”してる
だけですからw>

<つーか、誰？ww>

『!?!いきなり目が悪いとか言われた!?!』

『これこれ、眷属^{キミ}たち 亀をいぢめちゃいけないう。』

『亀じゃ 有りません！ ちゃんと、紹介して下さいよ!?!』

『 ちよっ!?!? 言^ゆつては為らんことを!?!? 』

……しかも、”天使”が”創造神”に!?!?!?」

『 きいいいい! 半人前の”創造神”のクセに、もう権力を振りかざす

気ですか!?!?』

「はっはっはっ、女の子がそんな言葉使いをしちゃいけないよ。」

『 『 元凶が他人事みたいに言ってるじゃ無^ねー!?!? 』 『

…ひい! (; ;) () デスヨネー

<ダメだ、この存在^{ヒト}達WW>

<ダメ過ぎるW>

<ダメだダメだ、ダメ存在^{ニンゲン}だ!W>

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

•
•

『……………こほん！ 失礼しました。』

私とした事が、つい取り乱してしまいました。』

……………いやいやいや！ 今更 取り繕っても

”天使”が”創造神”に暴言吐いた事実は消え無いだろ W W

『だから、その事は掘り返さないで下さいよ!??』

『 まあまあ、僕は気にして無いから W 』

『 ……………あううう、すみません。 【ロベルト】さま……………。 』

< まああ！聞きました？奥さん!?? >

<ロベルト【さま】ですって!>

<たしか【ロベルト神】には奥様が居らした筈じゃあ…>

<これが、噂に聞く”天使”と”神”の【オフィスラヴ】って奴
なのかしら!?!>

<いわゆる”不倫”って奴よね!>

<奥様って、アノ方ですわよね?>

<そーそー、あの【よう、よ】な方ですわ!>

<まあ!それじゃあ【ロベルト神】ってロリ口……。>

『 ちよつとお!?!? 　そこでイキナリおばちゃんの井戸端会議みた
いな

ノリで、不穏な噂バラ撒か無い^なでくれる!?!?

ルランジェル
奥さんの耳に入ったらどうすんのよ!?!?!? 』

ぴかちゅ〜!!

……ん？何の音だ？

『！？イキナリ奥ルランジエルさんからの電話が！！？』

着信音かよ！！？

『おそろおそろ（あの、奥さん？ 何の御用でしょうか？）
ドキドキ（

……【ロベルト】ちゃん、帰って来たら”O H A N A S
H I”が
有るのですよ。

『……NOオオオオオオオオオオ~~~~~！！？』

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

【頭を抱えて床を転げまわる音】

< \ (^ o ^) / オワタ >

< \ (^ o ^) / オワタ >

< / (^ o ^) \ ナンテコツタイ >

.....藻マエラww

イイぞ、もっとやれw

『.....鬼ですか、あんた等は!?.?』

<...僕等は飛蝗ハッタですが?>

<やっぱり、目が悪いんじゃない?>

<眼科行った方がイイよ?>

『観念的な意味で言っただよ！
額面通りの言葉で受け取んなよ！！？』

…それで、結局何しに来たんだよ？

『きいいい！？ 理不尽過ぎてどうしてくれようか！…？』

……………つむ！

クール・ビューティーな お姉いちゃんに叱られるのも興奮するな
！！

<変態度がアップした！？>

<こっちの属性にも目覚めたコレ!?!>

<さすが王様に死角は無かったWW!>

<変態大人無双WW!>
へんたいターレン

『嫌な”虫”だな、お前等!?!』

それほども無い!(キリッ)

『褒めて無えよ!?!』

.....

・
・
・
・
・

・
・

『……はあ、やっと説明に入れるんですね……。』

『ここまで話を進めるだけで、なんでこんなに疲れるのかしら？』

ホントにねw (^ ^) 9 m プギャー

『 ……イラッ！ ……ガマンガマン！
ここで突っ込んだら又同じ結果になるわ！！』

声が漏れとるがなw w

『それでは、まずは大まかにお話し致しますね。

実は私の主が創造した世界の人間ヒューマンが、かなりハツチャケた事を
仕出かしましてね、今現在 滅亡の危機に陥っているのですよ。
』

ほうほう、まあ人間ヒューマンじゃ仕方ないな。

<うん、人間だしね。>

<人間じゃチカタナイW>

<人間バカぶーW>

『…本当に容赦無いですね、貴方達。』

事実は何時だって、容赦無いモノだしな。

……それで？ 何やって滅亡しそうになってんの？

『その世界での【白色人種系超大国】の軍部の関係者が、
バイオ・ソルジャー
生体兵士研究の一環として立ち上げた複数の計画の内、
バイオ・ソルジャー
”細菌兵器”を使って普通の人間を生体兵士に変えると言う
計画を進めていた研究所が在ったのですが、ちよつとした不注意が
きっかけで ここから未完成の細菌が外部に漏れてしまいましたね。

未完成であつた為 適合する個体が見つからず、
適合しない人間に感染した場合 知能や判断能力が極端に無くなり、
かわりに強力な身体能力と頑健さを持つ、いわゆる”ゾンビ”みた

いな
存在に変わってしまうような代物しろものが、感染爆発パンデミックを起して広まって
しまいました。

この”細菌”は空気感染しない様なのですが、噛まれて死んだ者は
【感染者】キャリアーとして蘇り、人間を襲い始めるのでヒューマン
”死んで感染拡大が止まる”と言う事が無いんですよ。』

ぷぷぷ！バカでーw w

<それは単なる自業自得だなーw >

<逝ってよし！ だねw >

』……まあ、それは確かにそうなんですけど……。

他にも問題なのは他の生物や環境に与える”影響”なんですよね。』

……ぷむ。

それで、俺達に話を持って来たって事は、人類の行いに
【メスを入れる】。

つまり斬っちゃっても良いって事か？

『……………。(汗)』

『……いや、あの、一応その地球の”知的生命体”って人類しか
居ないんで、いきなり斬っちゃうとマズイんですけど……。』

…え、そうなの？ 斬っちゃマズイの？

『……ええ、いきなりはマズイんです。

今回の事で、私の主も今の人類に愛想を尽かしたらしいのですが、
いくら【造物主】とは言え一度命を与えた物から、簡単に命を奪う
のは

傲慢な事ですからね。

それで、今の人類に存続価値が 有るか否かを確認する事に
したんです。

その試金石として、貴方達に協力して貰えないかと伺う為に、私が派遣されて来たんです。』

… 具体的には？

『取り敢えず、生態系や環境を守る為にも【感染者】^{キャリアー}は駆逐して下さい。』

彼らは生命体と言うよりも”殺戮”の為に存在する機械のようなモノに
変化しちゃってますから、もはや生物とは言えないのですよ。

その上で、^{ヒューマン}人類を救った貴方達にどう言った態度で接するかが、^{ヒューマン}人間が存続して往けるかどうかの判断基準となります。

命の恩人に対して、姿や能力の違いを理由に感謝を表せぬような生き物に、この先 宇宙に進出して繁栄する様な事は無理ですから。
なにせ、他の星で進化した生物が ^{ヒューマン}人間と同じ姿や能力を持つてる訳が無いので、肌の色や思想の違いで容易く争うような種族なら
そこでも同じ様に争いの種しか蒔かないであろう、と言つのが主の出した

結論です。』

それなら、将来 宇宙全体に悪影響を出さない為と言つ理由で、
処分も容認されると？

『そつ言つ事になります。』

なら、行動基準の線引きを決めて於こうか。

俺達は ヒューマン 人間に攻撃や敵対行動を取られた場合 反撃して命を奪つ。

だけど、個の責任を種族全体に取らせる気は無いので、
それが個人ならソイツだけを殺す。

もし、その個体が何らかの組織に所属していて、組織の方針が
容認出来ない様なら組織ごと潰す。

俺の条件はこれだけだ。

『はい、それで問題ありません。』

あとは、向かう時期なんだけど 今はこっちの世界も大変なんで、それが終わってからになるよ？

『いえ、私の主はベテランの創造神ですから 時間軸もある程度操作可能です。』

……なので 向こうで1年過ごしてから帰って来ても 1時間くらいしか経過して無い筈です。』

そうなんだ。

なら、時間的にも問題無いし ちょっと行ってみようかな。

でも、その前に聞いて於きたいんだけど。

『なんでしょっつ？』

なんで、俺等なの？

…わざわざ 他の神様の創った種族に頼まなくても、自分でそう言う種族創ってやらせりゃ良いんじゃないかね？

………？

『…ああ、なるほど そこからの説明に為るのですね。』

『貴方は、自分達の能力って強力過ぎると思った事は有りませんか？』

うん、何時も思ってるよw

『普通は、制約も無しにそんな強力な種族は創れません。』

まして、貴方達の神様は新米の神様で有り、まだ神力もあまり高く無いにも拘わらず。』

そうなんだ？

『理由は貴方アバドーンの存在自体が特殊な発生をしているからです。』

その様子だと、自分では気付いて居ないのでしょうけど、

”滅びの因子”が物質化するなど 実は初めてのケースなのですよ。

そんな存在をベースにして創られた種族だからこそ、有りえない程の強化を施せるのです。

そう言う意味では、結構沢山の神様達が 貴方に注目していると
言えるのですよ？』

知らんかったわw

『それにもう一つ、仮にそんな強力な種族を創れたとしても使命が終わったからと言って消す訳にもいきませんから、こうして既存の種族をレンタルして、用が済んだら返品するのが後腐れ無くて良いのですよ。』

そんな訳で、貴方達に連絡取った理由は理解頂けたでしょうか？』

レンタルとか返品とか、色々ぶっちゃけられましたよw

『はい、納得頂けた処で ちゃっちゃと逝きましょつかw』

ちょwwおまww

「アーーーーー!!!?!?」

…こうして、藻レラはゾンビ天国になった世界へと送り込まれたんだww

a n o t h e r 0 3 平行世界への誘い（後書き）

まあ、最後はいつものパターンでしたw

another 04 上級創造神（前書き）

お待たせしました。

今回短いですが、外伝4話を投稿します。

最終決戦に向けて少しでも戦力を強化する為、

昆虫人たちは平行世界へ赴きます。

そして、2万ユニーク有難う御座いました。

another 04 上級創造神

『 ふむ。 よく来てくれた。』

今回は、突然の頼みごとで苦勞をかけるの。』

…およ？ いきなりゾンビ天国に突っ込まれるのかと思ったら、
別次元の”神界”？

『 たったあれだけの会話で、いきなり別世界に放り込むとかは
無いじゃろ。』

おお！ さすがベテラン神。

この神様は親切っぽいぞ！？

『 …お主、今までどんだけ恵まれて無かったんじやい…。』

いやいやいや！ ちゃんと恵まれて居たよ？

お陰で、第二の故郷と居場所を得る事が出来たさ。

…ただ、出会った神様がフリーダムで悪ノリが好きだけで

（ 王様に言われちゃおしまいだよねw ）

（ ホントにねww ）

『 ……お主も、苦労してるの。』

まあ、程ほどにはw

…それで、どの様な準備をして行けば良いんでしょう？

『 ぶむ、そうじゃの。』

まず、やって欲しいのは【感染者】^{キャリアー}の駆逐。

ここまででは、聞いたな？

『

イエス・サー！

『 まあ、今回の原因である細菌兵器は、ある意味
もの凄く厄介じゃからな。』

映画みたく空気中に散布されて、何時までも残る事の無いように
この世界の大气に触れたら消滅するように、地球全体をフィールドで
包んで置いたからの。

お主らは 【感染者】^{キャリアー}の駆逐と、【接触感染】した生物だけを駆逐
して

くれたら良いわ。』

なるほど、それは助かります。

……でも、そんなだけの”能力”^{ちから}が有るなら、俺達 要らなくね？

< うん、そだねw >

< 僕等 要らない子でいますか？ >

『 そうでも無いんじゃない。』

この処置は 知的生命体に感知され無いで行える事象なので
問題無いが、”能力”^{ちから}を使って【感染者】^{キャリアー}を残らず消滅させたら、
地球規模の大問題として記憶されてしまっじやろ？ 『

……要するに、『知的生命体に知覚される様な使い方』が”禁忌”^{タブー}
だと？

『 ふむ、ぶっちゃけると そう言う事じゃな。』

< ぶつちやけたW >

< W W W >

此処は、お主の住んでいる【下位世界】では無く【上位世界】じゃからの。

神代かみよの時代が神話や伝説となり、神と人との間に大きな隔たりを
設もつける事によって、知的生命体が 真に高位の存在に
進化を遂とげ無ければ、【神】に辿り着け無い様に、色々と制限と
制約が有るんじゃないよ。』

…なるほど。

俺の住んでる【ロベルタ】は【下位世界】なので、
神と人が身近に在る訳か。

『 そう言う事じゃな。

……位階が上がれば上がるほど、神も人も”孤独”になって

往くんじゃよ。

まだワシが ” 駆け出し ” の新米創造神であった頃、やはり【ロベルト】達のように ” 仲間 ” が居て、自ら創造した ” ヒト ” と共に
過ごして居たものじゃ。

あの頃が、懐かしいのう……。

もう一度、【下位世界】を創造する事は 出来ないんですか？

『 ふむ、出来なくは無い。』

神としての位階が上がれば、管理可能な世界の数も増えて往くからの。

だが、【世界創世】には大量の【神力】を消費する上に、何事も最初が肝心じゃからの。

創造した世界が安定するまでは 目が離せ無くなるので、他の世界の管理を代わりの存在に頼まなくては為らないんじゃ。

故に、管理を肩代わりしてくれる 代わりの存在が見つかれば可能であるが、逆に見つから無ければ、無理じゃw 『

へえ〜、そうなんだ。

『 …… それでは、話を戻すでしょうかの。』

今回の世界に行くにあたって、お主からの要望は何か無いかの？

【サイオン】の小僧も、お主の意見は軽くは見れないと言って居^おたし、

意見が有るなら遠慮無く言ってごらん。

『

……【サイオン】が？

『 うむ。 神と人では、その存在の有り様が あまりにも違い過ぎる故、

神である自分の視点からだけでは無く、大地に生きるモノの意見も参考にしなければ、大きな勘違いを抱えたまま 間違った対処方をし兼ねない。 …… 今回の件で、それを お主から教わった。

と、言うておったよ。…理論や理屈を優先しがちな あの小僧がじや。

あの頭でつかちを、こんなにも良い方向に変えてくれた
お主の意見じや。

ワシもおろそかには考えて居らぬよ。』

うーむ、照れるなあ W

< へえ〜意外? >

< 待て、騙されるな皆! この王様はニセモノに違い無い W W!
>

< おお! 成る程!?! >

うるさいですよ藻マエラ!!!?

『成る程!?!』 じゃ無えよ!?!?

< サーセン W W > 【×10】

『 ほっほっほっ。 仲良き事は良き事かな。 』

< デスヨネー W W > 【×10】

藻マエラ W W W

……まあ良いや。

それじゃ、”核や放射能”に対する対抗手段が 欲しいです。

『 ……ほう。 ”核や放射能”とな？ 』

そう DEATH W 原因を作った国である【アメリカ】の連中や、

傲慢で

現実を認識出来ない【アジアの国】とかの指導者（笑）なんかは自分の国だけが滅ぶくらいなら、他の国も道連れにしようとして世界中に核ミサイルを打ち込む事くらいするかも知れん。

『 …… 今までの経緯からして 十分に有り得るのう …… 』

デスヨネー W 俺等は核ミサイルの直撃くらい平気だけど、自然環境は甚大なダメージを被るからね。

大地は修復出来るけど、それで滅んだ生物の復活は出来ないんですよ？

『 うむ。 10や100程度の単位なら兎も角、万や億単位での命の復活は流石に禁じられておる。 』

（ …… 『 禁じられている』 って事はやれば出来るんかい W ）

(流石は上級創造神 W)

(ハンパねえ W W)

『 ふうむ。…なるほど、【サイオン】の小僧が言う通りじゃな、確かに【大地に生きるモノ】の意見は参考になるわい。』

ならば、お主の種族にスキル【孔雀明王】を与えようかの。』

……【孔雀明王】？

『 そうじゃ。日本の”仏教”には仏法を守護する【明王】と言つ存在が居ると考えられておつての。』

その中でも【孔雀明王】とは、毒や穢れを喰らい 浄化する仏とされておる。

元々は、毒蛇を喰らう孔雀の姿から 考え出された仏の名前なんじゃがな。

……その名を冠されたスキル故、強力な浄化作用を有しておるぞ。
あらゆる有害な物質を取り込み、自身のエネルギーに変換
出来るんじゃない。

お主らが使用するとしたら、【第二の口】から有害物質を吸い込
んで、

一度に半径50キロの範囲を浄化出来るじゃろ。』

…ちよつww ナニそのチート生物ww

< 生体コスモ・クリーナーww >

< ガミラス星人涙目ww >

『そして、核ミサイルが発射されれば、迎撃は成層圏付近に
なるじゃろっ？』

ならば、宇宙空間でも制限無く活動出来るように、
半永久機関とでも言うべきエネルギー器官、【無限の心臓】インフィニティ・ハートも
与えておこうかの。』

【無限の心臓】インフィニティ・ハートとな!?

『 ふむ、知っておったか、ならば話が早い。』

お主も知っている様に、永久機関とまでは往かないが ほぼ無限に
近い
時間、少量ではあるがエネルギーを供給し続ける器官じゃ。』

欲しかったけど、交換するのに【1億マネエ・・・】もするから
手が出なかつたんだよなw w

< 凄っ!?!? >

< 流石、上級創造神は格がちがったw >

『 ほっほっほっ。 気にいったなら何よりじゃな。』

それが有れば、常に【メギドの火】を身体に纏まとわせた状態で
戦闘出来るから、【感染者】キャリアーを細菌ごと浄化するのに、一々
【四大元素】を取り込まなくても良くなるから 一石二鳥じゃろ。

」

それ処か、【生体レーザー】も打ち放題だし、【超加速】や

【一人ぼっちの王国】、【不死身の体】みたいに『エネルギーの消
費』で

使用が制限されるスキルが、ほぼ制限無しじゃ無いですか！ww

< 流石、神様の格が違いすぎるww >

< いや！太っ腹！！ww >

『ちよっ！？ 主、そんな強力な種族にしちゃって良いんですか！
』？

『おお、【ソナタ】か。

別に何も問題無いわい。

彼らと話して見て確信したが、驚くほど”欲”と言うモノを感じぬ
種族達じゃ。

これなら、心配要らぬよ。

むしろ、彼らにはこれから”力”を必要とする機会が多くなるじゃ
ろう。

その時の為にも、彼らへの助力は惜しむべきでは無い。 『

お、【その他】ちゃんじゃ無いの。

マジ空気だから気付か無かったw

『きいいい！? 【その他】じゃ無いつて言ってんでしょー!!!
!?

あんた記憶力無いの!? 馬鹿なの!? 死ぬの!?!?

あと【空気】とか言っな!?!?!? 『

『 ほっほっほっ。 【その他】とな?

確かに【ソナタ】と発音が似ておるのw
』

『ちよっ!?!? 主!?!?!?』

< まさかの裏切りww >

< 【その他】ちゃん涙目ww >

< これはヒドいw >

『【その他】じゃ無^ねえって言うてんだろ! この虫イ!?!?!?』

俺等【虫】で在る事に誇り持つてるから、その言葉はむしろ褒美
?ww

『きいいいい!?!? あー言えば!?!? 言ひ!?!?』

『……………あつゝ(涙)』

それじゃ改名って事でww

『……………待つんじゃ、腹筋が死にそうじゃww』

『……………えっ(^^)』

『 ……うむ！』

可愛い娘が泣いてる姿を見るのは興奮するな！！』

< 変態が二人に増えた！？ >

< 王様と同じ属性だった！？ >

< 変態！W >

< 大変態！！WW >

< 変態^{へんたいターレン}大人！！！！WWWW >

< ダメだダメだ、ダメ人間だ！W >

< 一瞬でも尊敬して損した！！？ >

それほどでも無い。(キリッ)

「変態三段活用」での突っ込みとは……中々やるのうW
流石、突っ込みに特化した生物の事だけは在るわいW W」

< そんな生物 居無^ねえーよW W! >

< 居たら怖いわW W >

「その見事な突っ込みの褒美じゃ。

移動基地と【サイクロン^{タイプ}型のバイク】を おまけに支給しようかの
W」

< やふー! W >

< 神様最高ですW W >

……それでイイのか上級創造神 W W

『 ……それと、本当に核ミサイル打ち込んで来る国が居たら、もう国ごと滅ぼしてかまわんわい。』

国民にもそんな指導者を選んだ責任が有る訳だしの。

そんな国は最早もはや変われまい。』

了解。それと動物や昆虫なんかには人間の生活圏から離れるように指示出してくれませんか。

『 安心せい、既に指示は終えておるよ。』

『 一応、滅ぼすのが目的じゃ無いんで、そこは間違えないで下さいよ。』

んじゃ、俺等は逝ってきます。

……聞こえて無いか…… W W

< 不和の種時いて居なくなるとか W W >

< ホント、性質たち悪いなこの虫トク W W >

そして、
今度こそ俺達はゾンビ天国に旅立って逝ったんだ
W
W

a n o t h e r 0 4 上級創造神（後書き）

まあ、最後は期待通りに
何時もの感じでww

a n o t h e r 0 5 死者の街(前書き)

おまたせしました(^ ^)

外伝5話を投稿します。

another 05 死者の街

やあ、ゾンビ天国になった世界に 100人の眷属達とやって来た
【アバドーン】だよ。

現在は 神様から貰った移動基地に乗って、日本海上空を
東京目指して航行中だ。

ちなみに光化学迷彩や、レーザー波吸収素材等のステルス機能付き
なので 各国の軍や情報機関にはバレて無いよw

< 王様ー。 あと1分ほどで東京上空に着きますよ。 >

< 探査端末機からの情報では【メリカ】アボンしてますねーw
>

< 【某アジアの国】もヤバイっしょw >

w < 【シア】では雪山で兵隊とゾンビが追いかけてっこしてますw
>

……えらい騒ぎになつとるがな W W

< あー。なんかヤバイかも？ >

< ……ん？ どしたん？ >

< 【メリカ】が核ミサイル撃つた W W >

…ちよっ！？ 間に合わんかった！？

< 各国の首都に向かってますね W >

< こっちにも向かって来てますがな W W >

< 迎撃ミサイル、ポチつとな。 >

…こっちに飛んで来ていたのは撃ち落としたけど、着弾した国には
何人か行って浄化しないとなー。

< 生き残った国が、報復に核ミサイル撃ち返しましたww >

……ちよつww!?

< なんと言うイタチごっこww >

< 取り敢えず、ミサイルの発射位置はマーキングしたけど
この後どうしますー? >

……仕方ない。

今 核ミサイル撃った 全ての国の軍事施設、及び大規模なエネルギーを
感知出来る全ての施設を攻撃して、徹底的に破壊しろ。

その後、様子を見て何も動きが無いようなら 10人1組の1個小
隊で

浄化と抹殺に行ってくれ。

民間人は無視して、軍関係者や政府高官を優先的に狙うこと。

10人はこの移動基地に残ってお留守番。

残った20人は俺と一緒に秋葉原の町に降りるぞー。

< 人間の居なくなつた街で、火事場ドロボウですね W >

< エロゲも漁あさつて来ます W >

< 皆へのお土産も確保する W >

< なんと云う嫌な生き物 W W >

………違ちがいよ!?

火事場ドロじゃ無くて、【感染者キャリアー】の駆逐と生存者の保護だつての

!!

< ……えー？ なら何で秋葉原なの？ >

『 ……えー？』とか言うな W W

秋葉原と言えば、ヲタクの街。

ヲタクの連中なら、俺達の外見や能力を見てもイタズラに敵対して来ないだろ。

なにせ奴等なら、宇宙人相手でもフレンドリーに接する事が出来るくらい、順応性が高いからな W

< すると、必然的に生き残りはヲタク率が高くなるな W W >

< ゾンビの徘徊する世界での【新世紀】を担^{にな}うのがヲタクか W >

< 確かに大部分がヲタクの世界なら平和になるかも W >

< ……だと良いんだけどな W W >

< 嫌な【新世紀】だな W W >

まあ、少し位なら お土産 貰っても罰当たら無いかなーとは思っ
たww

< それも理由に入ってるんかい!? >

< やっぱりww >

< やはり、王様は僕等の期待を裏切らなかつたww >

それじゃあ、早速装甲車2台とサイクロン16台の編成で 街に降
りるぞー。

< 了解ですw >

< やふーw >

< サイクロン乗ってみたかったんですよーw >

< 藻レは特殊装甲車に乗るっすww! >

……この特殊装甲車、普通に空飛べるんですがww

< 流石、神様謹製ww >

< チートすぎるww >

< こっちのバイクも空飛べるしww >

仕事しろや、ごおるああ!?

【x20】

< 一瞬でも、感傷的になった僕等が馬鹿だったよ!?

>

よし、行くぞ藻マエら!!

< 聞けよ!?

>

< 無視すんなww!

>

あ~~~~~
あ~~~~~
~~~~~

……ふん、やっと出て来たか。

< 沢山居ますね〜 w >

< 100体くらいは居るんじゃない？ >

< インフィニティ・ハート【無限の心臓】の性能テストには丁度良いんじゃない？ >

…ああ そうだな、各自散開して 駆逐せよ。

了解！ 【x20】

その瞬間、俺達全員の身体を紫色の電光が包み込んだ。

紫電を纏まとった俺達は、【感染者】キャリアーの群れに飛び込んで行く。

俺の拳を 奴等キャリアーの胴体に軽く当てると、一瞬紫色の炎が敵を包んで次の瞬間には灰になって崩れ落ちる。

……やべえ W W

【555】ファイズに出て来る【オルフェノク】みたいな死に方で、格好良過ぎるわ W W

眷属達の方も 【高周波爪刃】フレードを突き刺した敵や、蹴りを放った敵を灰へと変えて行きながら、新たらしい能力を検証して居るようだ。

……お？

一人の眷属が魔法を使つての拘束と【ロック・オン】のエフェクトを演出しながら、飛び蹴り 放ったぞ？

マジ格好良い W W！

……しかも、今回 シャレで連れて来た555号じゃん W W

< おお!？ >

< カコイイww!! >

< 藻レもマネして見るw >

< 藻れも、藻れもww >

< んじゃ、藻レはこうだw >

そう言<sup>タイアップ</sup>って今度は913号が、魔法で銀色のエフェクトと<sup>S</sup>st  
art Up<sup>」</sup>の  
合成音を演出して、【なんちゃってアクセル・フォーム】を  
再現しましたよww!

銀色の疾風が<sup>アウト</sup> 【感染者<sup>キャラ</sup>】の群れの中を通り過ぎ、<sup>」</sup> Time<sup>タイム</sup>  
Out<sup>」</sup>の  
合成音と共に地面を滑りながらエフェクトを解いて止まると、  
それと同時に灰と化して崩れ落ちる【感染者<sup>キャラ</sup>】の群れ。

……やっべw 格好良過ぎだわww

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•



【ゾンビから逃げて生き延びるスレ】

4 9 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 3

8 : 1 4

おい、藻マエ等生きてるか？

漏れは現在、秋葉原のミリタリーショップで

武器漁ってる途中で、そのPCからスレ書いてんだけど。

4 0 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 3

9 : 3 3

おう、なんとか生きてるわ

4 1 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 4

0 : 5 6

藻マエ勇気有るなww

漏れは怖くて外歩けんわww

4 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 4

1 : 3 7

藻マエの勇気に乾杯だぁーww

と言っても既に食い物も尽きて

TENGAしか無いけどなww

4 3 : ゾンビに成り掛けビ : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 :

4 3 : 0 9  
T E N G A W W W

<< 1 9 チャンスだからどさくさに紛れて銃GETしてみるW W

4 4 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 4  
4 : 4 1

<< 4 2 使用済みですね、解かりますW W W

＼ (^o^ ) / オワタ

4 5 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 4  
6 : 3 0

そんで、どうした？

可愛いゾンビっ娘でも見つけたのか？

4 6 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 4  
9 : 3 4

<< 4 5 可愛いゾンビっ娘、良いねー W W

4 7 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 5  
1 : 0 3

<< 4 6 藻マエラ見境い無しかW W W W

4 8 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 5  
3 : 0 0

いや、ミリタリーショップの2階でゾンビ入って来ない様に  
バリケード作って武器漁っていたら、急に表が  
騒がしくなったんで、窓から覗いてみたらさwww

4 9 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 5  
4 : 3 2  
見たら？

5 0 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 5  
6 : 1 0  
見たら？

5 1 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 5  
7 : 0 5  
2 0 人位の仮面ライダーが、ゾンビ蹴散らしてるwww

5 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 2 : 5  
9 : 4 4  
はあ？

5 3 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金) 1 3 : 0  
0 : 3 6  
はあ？

5 4 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
2 : 0 9  
はあ？

5 5 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
3 : 5 6

……可愛そうに、恐怖のあまり……

5 6 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
5 : 0 7  
1 9 に黙祷

5 7 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
6 : 3 7  
1 9 に黙祷

5 8 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
7 : 2 3

ちよ、おま w w

気がふれた訳じゃねーって w w w

ホントにライダーの集団がゾンビ蹴散らしてるんだって！

しかも、クロックアップやロックオンキックで！

ぞうえ x s c d v

5 9 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
1 3 : 0  
9 : 2 0  
ちよ! ?

6 0 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
1 3 : 1  
1 : 1 8  
ナニがあつたし?

6 1 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
1 3 : 1  
2 : 3 1  
たのむ、ネタだと言ってくれ!

6 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
1 3 : 1  
3 : 5 1  
……返事が無い、只の屍のようだ……

1 9 終了のお知らせ

6 3 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (金)  
1 3 : 1  
5 : 5 5  
マジか W W

•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

… 良し、この付近の【感染者】<sup>キャリアー</sup>は、今ので片付いたようだな。

< ……ですねw >

< 藻レラの【超感覚】にも感知出来ないゾンビは居ないでしょう。  
>

…ふむ、それなら当面は此方<sup>こちら</sup>を窺っている彼だけだな。

「 貴様、見ているな? 」 ばっ!!!

そう言つてJOOJOネタを振りしながら、ミリタリーショップの2階<sup>2階</sup>から此方<sup>こちら</sup>を窺<sup>ヒューマン</sup>っていた人間の方を振り向いて指を突きつけて見るww

『 !!!? 』 ガタンッ!

ぷぷぷ!…驚いてる驚いてるww





「 ……む？ その体型、メガネ、ファッション。貴様ヲタク、それもミリヲタかガンヲタだな？」

「 ……？？ に、2階の窓まで一足飛びで？？  
ほ、本当のヲ、ライダーなのか？？？」

「 ……質問に答える。  
貴様はヲタクだな？」

「 ひいー！？ そ、そうです僕はヲタクです。  
それも、ミリヲタとガンヲタの両方ですう。 (泣) 」

「 ……ナゼ泣く？ 」

< 王様王様、いきなりゾンビ全滅させる程の存在に にじり寄り  
れたら  
ビビりますってww >

< そそww 僕等の顔は威圧感 有りますからねww >

なるほど、忘れていたわw

「 ああ、いきなり不躰で失礼した。

君に危害を加えるつもりは無いし、そんな事するメリットも無い。

君達【ヲタク】と言われる種族を探していた矢先にいきなり遭遇したから  
つい興奮してしまったんだ。」

『 …へ？ そうなの？ 』

「 ああ、その通りだ。」

『 いや、別に《種族》じゃ無いんだけど……（汗） 』

「 ふむ、いきなり手間が省けたのは僥倖だった。」

『 ……聞いてよww 』

「 だが、断る!! 」

『 断られた!!!? 』

< あー、家の王様自己チューだから、気にしないでイイよww >

< そーそーww >

『 ……黒い身体に”王様”だつて？  
まさか、【ブラック・サン】なのか？  
もしかして、【シャドー・ムーン】も居るんだろうか？ 』

「 だれがRXやねんww 」

『 うお！？ ネットを返して来た！？  
さっきもJOOJOネタとかやってたし、なぜか詳しい！！！？ 』

「 我々はこの世界の素晴らしい”文化”である、”漫画やアニメ”を  
始めとした”ヲタク文化”保護する為に来たのだ。

ヲタクを探すなら、此処ココ 秋葉原が一番だからなWW 「

< いやいやいやWW >

< 最優先事項は【感染者キャリア】の駆除キョウでしょWW >

< フリーダムWW >

「 いや、一部人類の保護も目的の一つには違いないぞ？ 」

< そうだけどさW >

< 話す順序が違うだけで大きな違いですよーW >

『 え？ 本当に？  
ゾンビ退治してくれるの？  
』

「 ああ、それと君の仲間のヲタク達も保護しよう。  
だから、chにスレ立てて仲間の居場所を聞いて欲しい。  
通常時ならネチケツト違反だが、こんな状況なら何人かは応じて  
くれるだろう。」

『 本当に詳しいねww  
だけど、やるだけ遣ってみるよ。  
』

「 ありがとう。」

『 …でも、聞いて良いかい？  
なんで俺達ヲタクなの？

これは純粹に好奇心で聴くから、答えられないなら良いけど。  
』

「 ああ、いや隠す理由なんて無いから良いよ。

……そうだな、なんと説明したら良いのか。

うん、君は俺達の姿を見てどう思う？ 」

『 ……え？ 普通に格好良いと思うけど？ 』

「 ありがとう。

……なら、世界各国の軍事関係者や、欲の皮が突っ張った政治家連中なら、俺達の姿や能力を見てどう考えると思うかな？ 」

『 ……え？ 軍事関係？ 政治家？ 』

……あ、ああ？ 』

「 解かってくれたかな？ 」

俺達は、君達”ヲタク”の人達とは友人に成れると思うけど彼らとは成れない。

……それが理由だ。

俺達の外見は、君等の知ってるヒーローに似ているけど俺達はヒーローじゃ無くて、只のこう言う姿の種族に過ぎない。

正義の味方でも無いし、盲目的に人類を守る存在でも無い。

味方をする友人を選ぶし、助けるに値しない連中まで助けようとは思わない。

実際、今の状況だって 人間が原因だしね。」

「え？ やっぱり、どこかの国の細菌兵器なのかい？」

「そうだね、兵器と言うよりは生体兵士研究の一環で、細菌を使って強化兵士を造るって研究してた所の連中がすっかりミスで感染してね、その後の処置も拙かった所為で、感染拡大を起したってのが真相だよ。」

流石に、観測はしてたけどリアルタイムで止める方法は無くてね。

空气中に散布されるのは防いだけど、接触感染まで防止するのは無理だったよ。

……ちなみに、某白人系超大国ねww

『 やっぱり、あの国かよ!？ 』

「 うん、ぶつちやけ人類の自業自得と言える事だから、放って置くって

選択肢も有ったんだけど、この大地や自然、他の動物達には何の罪も落ち度も無いからね。

このまま、星ごと滅びるのは流石に哀れだと思ってね。」

『 そうだったのか……。 』

「 そう、そしてさっきの話に戻るけど”ヲタク文化”も共に滅びるのは

残念だったから、君達ヲタクと言う”種族”を保護する事に決めたんだよ。」



▣ だから、《種族》じゃ無<sup>ね</sup>えつてのww ▣

< 人間諦めが肝心だよww >

< 王様 話聞かないからww >

▣ 諦めんなよ、お前等！

諦めたらそこでお仕舞いなんだよ！ ▣

< どこかで聞いたようなセリフww >

< はっ！？ まさかコレが既視感<sup>デジャビュ</sup>！？ >

< ……絶対ちやうわww >

……こうして、最初の保護対象であるヲタクを捕まえて、1日目は  
過ぎて逝ったんだww

a n o t h e r 0 5 死者の街（後書き）

無事に1日目が終了しましたw

another 06 ヲタクと言ふ生き物(前書き)

外伝6話を投稿します。

待っていてくれた皆様、有難う御座います。

【ゾンビから逃げて生き延びるスレ】

7 3 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 3

8 : 1 6

おい、藻マエ等無事か？

1 9 がアボンしてから1日たったけど

今、何人生きてる？

7 4 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 3

9 : 3 3

まだなんとか生きてるわw

7 5 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 4

0 : 5 6

水も食料も、もう無いば

脱水症状でヤバいかも…

7 6 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 4

1 : 3 1

<<水も食料も、もう無いぽ  
漏れも同じ状況だわww  
TENGAでも喰うかww

77:ゾンビに成り掛けビ:20XX/0X/XX(土) 13:  
43:09

TENGAWWW

78:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 13:4  
4:41  
<<76 使用済みTENGAですかwww

\(^o^)/オワタ

79:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 13:4  
6:30

\(^o^)/オワタ

80:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 13:4  
9:34

\(^o^)/オワタ

81:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 13:5

1 : 0 1

藻マエラ W W W

8 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 5

3 : 0 0

世界中に核ミサイル落ちたって

ニュースで言ってたし、このまま人類絶滅 E N D かな？

8 3 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 5

4 : 3 2

でも、なぜか日本には落ちて来なかったな？

8 4 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 5

6 : 1 1

いや、こっちに来たのは途中で消えたみたい

8 5 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 5

7 : 0 5

途中で消えた？

8 6 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 3 : 5

9 : 4 4

途中で消えた？

87:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 14:0  
1:09

そろWWW

日本の秘密兵器じゃね?

88:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 14:0  
2:37

ミサイル迎撃用の?

89:生還すました:20XX/0X/XX(土) 14:03  
56

いや、ライダー達のお陰だWW

19生還!

つて言うかアボンしてねーよ!WW

現在、ライダー似の生き物に保護されて  
なんとか逝きてるよ

90:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 14:0  
5:07

おお!!?

生きてた!!?

91:ゾンビに成り掛け:20XX/0X/XX(土) 14:0  
6:37



『逝きてる』とかww

生きてるのか逝ってるのか  
どっちなんだよwww

9 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 : 0  
7 : 2 3  
ネタで良かったwww

9 3 : 生還しますた : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 : 0 9 :  
2 0  
ネタじゃねーよwww!!

ホントにライダー似の生き物に保護されたんだって!

9 4 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 : 1  
1 : 1 8  
.....可愛そうに、恐怖のあまり.....

9 5 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 : 1  
2 : 3 1  
1 9 に黙祷

9 6 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 : 1  
3 : 5 1

19に黙祷

97：生還すました：20XX/0X/XX(土) 14：14：

14

ちよ、おまww

だから、気がふれた訳じゃねーってwww

98：通りすがりの仮面ライダー：20XX/0X/XX(土)  
14：16：03

よし！

なら証拠を見せてやんよ！！

藻マエラこの板に現在位置を書き込んでくれ。

普通ならマナー違反だけど

こんな状況じゃ二度と元の世界には戻れないだろ。

書き込んでくれれば救助に向かうから  
信用して書き込んでくれ。

こんな状況じゃ詐欺や個人情報なんて  
有って無いようなモノだろ！？

名前は良いから、住所だけ書き込んで  
全裸待機しててくれ！

ライダー似の生き物が迎え……拉致しに逝くからwww

9 9 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 : 1  
6 : 5 6

なぜ、わざわざ言い換えたし W W W

1 0 0 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
1 7 : 3 7

しかも、全裸待機とか W W W W

1 0 1 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
1 8 : 3 4

モナー違反? W W W

1 0 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
1 9 : 3 2

モナーじゃねえよ W W W

1 0 3 : ゾンビに成り掛けビ : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 0 : 0 9

まあ、確かに19の言う通り

いまさら詐欺や個人情報なんか

気にしたって仕方無いしな W W W

面白そうだから全裸に正座で  
待ってるとするわ W W W

1 0 4 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 1 : 4 1

<< 1 0 3 面白そうだから全裸に正座で

漏れも全裸待機する W W W W

1 0 5 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 2 : 3 0

漏れも W W W W

1 0 6 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 3 : 3 9

漏れも W W W W

1 0 7 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 4 : 3 2

漏れも W W W W

1 0 8 : 通りすがりの仮面ライダー : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
1 4 : 2 5 : 3 4

藻マイラ、信用してくれて

ありがとな W W W

絶対迎えに逝くからな!

……藻レじゃなくてライダー似の生き物が W W W

1 0 9 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 6 : 0 3  
ちよっ! W W W W

1 1 0 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 7 : 0 9  
丸投げした! W W W W

1 1 1 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 7 : 3 2  
W W W W

1 1 2 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 8 : 1 7  
W W W W

1 1 3 : ゾンビに成り掛け : 2 0 X X / 0 X / X X (土) 1 4 :  
2 9 : 0 2  
W W W W

……ふう。

さてと、19が生きてたのは良かったけど世界はもう御仕舞いだな。  
ライダーなんてネタだろうけど、最後に笑いをくれたお礼に  
最期までネタに付き合ってたやるか……。

『 そして、律儀に全裸で正座して居る自分自身が好きだぁー W W  
』

< そおい！！！ > どじゅん！！

『 ぷるあつ！？ 突然カベが！！？  
』

そして、突然吹き飛んだカベの向こうから 現れたのは  
……………仮面ライダー！！？

『 うっそ！？ マジで！！！？  
』

< 宣言通りに全裸待機とは、中々やるな W W  
約束通りに、迎え……………もとい拉致しに来たぞ W W W  
>

『 ナゼ言い換えたし W W W 』

< 様式美と言つやつだ W W >

……そんな様式美はイヤ過ぎる W W !

< 君には2つ、選択肢が有る。

一つは、普段着に着替えて外に出るか。

もう一つは、その格好に俺等が着けている  
このお洒落で格好良い【赤いマフラー】を  
着けただけの姿で外に出るかの二択だ W W >

『 着替えますから時間下さい。』

『 【土下座】』



•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•

<  
\$  
k  
w  
w  
w  
>

……その場所には20人程のライダーと50人近くのヲタクが  
集まって居た。

「……よくぞ、集まってくれた。我が精鋭達よ!!」

『【風雲!たけし城】かよ!!!WWW』

『おお、リーダーっぽいのは色が黒いぞ!?!』

『初っ端からネタ来たコレ!WWW』

『凄い身体能力だったけど、やっぱり【中のヒト】は  
改造人間なのかな?』

「……【中の「」】など居ない!」

「吉田戦車 W W」

「【感染<sup>じゅん</sup>るんです】とか W W」

「 W W W W」

「 W W W W」

「証拠に口の中を見せてやる。」

「……ホントだ!」

「咽喉の奥まで続いでる!」

「本物の昆虫型生物だ!」

「【リアル】仮面ライダー来たコレ! W W」

「そして、更に！」

キイイインン！！！！

開いた口腔に光の粒子が集まり、  
閃光を發して口腔からエネルギーの束が伸びて  
射線上に在ったビルが丸ごと消滅した。

「うおおおお！？」

「すげえー！！？」

「究極技来たコレ！？」

「無敵過ぎる！WWW」

「……………これが漏れの【んちゃ砲】だWWW」

「【んちゃ砲】とかWWW」

□ その発想は無かったWWW

□ やつべ、一番親近感の沸くライダーかもWWW

□ 流石、【リアル】ライダーは格が違ったWWW

< なんだろ、初めて会った気がしないんだけどWWW >

< 所詮 彼等も僕等も【同じ畑のポテトとトマト】WWW >

< 根っこの部分は同じなんだろWWW >

「 それでは、状況が判らないだろうから

現在、この星でどんな事が起きてるのか説明しよう。」

……………【 昆虫人説明中 】……………

「またあの国かー!?」

「ロクな事 仕無<sup>し</sup>えー!?」

「迷惑とかってレベルじゃねーぞ!?」

「でも、結局アボンしたんだよなWW」

「ざまあWW」

「自業自得乙WW」

「WWW」

「そこで、これからの指針だが。」

「まあ、助けて貰った恩も有るしWW」

「【王様】の決定に従うよWW」

▣ 保護して貰って、我がままとか有りえねーしな W W ▣

▣ そそ W W W ▣

( 流石、王様だね W W )

( 【カリスマ値 S S】は伊達じゃ無い W W )

( と言うか、コイツ等【眷属】なんじゃね？ W W W )

( W W W W )

「 まず、最初にやる事は この秋葉原の主だった店で

【火事場ドロボウ】だ！！ W W 」

▣ ……ぶつちやけた！ W W ▣

▣ 火事場ドロかよ！！ W W W ▣

< 取り繕う気がカケラも無えー！！？ >

▣ そこはもう少し取り繕おうよ！？ W W ▣

< 欲望に忠実過ぎる W W W >

「だが！それがいい！！」 キリッ

< どんだけイケメンなんだよWWW >

「 WWWWWW 」

「 限定品や単品モノを見つけたら ”増やす” から知らせてくれW  
」

「 …… ”増やす” ？ 」

「 どうやって？ WWW 」

< 王様、そんな事出来たの？ >

「 ああ、この前 神器・【倍々ハンマー】を分解して構造を把握したお陰で、【倍々ハンマーEX】の製作に成功したからな。

これなら、食物以外も叩いて増やせるんだWWW 」



< 【神器】分解すんなや!!!? >

< 【罰当たり】とかって、レベルじゃ無<sup>ね</sup>えーぞ!!!? >

『 無法者過ぎる W W W 』

『 W W W W 』

『 それって、叩いて二つに割れただけなんじゃあ? 』

「 違いーよ!?! ちゃんと【増える】んですよ!?!? 」

『 W W W W 』  
< W W W W >

……なんたる W 【フキダシ】以外で、  
眷属とヲタクの区別が付かないんだけど W W W

「……それで、人間叩いても殖えるの？」

< 生物には効かないんでしょう？ >

「これで”生物”を叩いたら………」

「……叩いたら？」

< ……叩いたら？ >

「………『死』！ あるのみ！！」

「いやあああああああああ！？」  
「いやあああああああああ！？」  
>

「  
W W お W  
「 騒いで居たから”音”に引き寄せられて集まって来たな

う あ  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

☞ キタ (。 。) ……!!…!!…!!

☞ ナゼ嬉しそうにするｗｗｗ？

☞ めっちゃ居るし!!？

< 今度は沢山居るねーｗｗｗ >

< 見渡す限り、ゾンビの群れｗｗｗ >

< 移動基地からの連絡では1万程集まってるようです。 >

< あとは【新宿】や【池袋】方面に数万規模で居るみたい。 >

< コイツ等 片付いたら、当面は安心出来ますねｗｗｗ >

「 良し！ お前達！ 【薙ぎ払え!!】 」

☞ 決めセリフ来た!!ｗｗｗ

☞ 巨神兵来た!!ｗｗｗ

『 これで勝つる W W ! 』

< W W W W >

そして、眷属達の【んちゃ砲】で薙ぎ払われた後、

残ったゾンビ共は、眷属達に”魔法”で再現された【555】^{フェイス}の

【なんちゃって多重ロック・オン】の前に MOBとしての生涯を終えたのだった W W W

『 哀れな… W W W 』

『 MOBキャラ過ぐる W W W 』

『 諸行無常乙 W W W 』

『 【多重ロック・オン】格好良す！ W W 』

『 うっかり、惚れそうに為ったわ W W 』

「 周辺の状況を移動基地でサーチ。 」

< この周辺 十数キロに渡って、動体・生体反応 共に無し。 >

……よし、念のため1グループに必ず1人眷属が付いて、
お宝を集めて来る事WWW

< 了解WWW
了解WWW
>

.....

•
•
•
•
•

•
•

▣
…… 疲れた W W W
▣

▣
でも火事場ド口楽しす W W W
▣

<
結構、新鮮な感じ W W W
>

<
これはクセになる W W
>

「……そんな皆に残念なお知らせだ。」

「……？ 何かマズイことでも？」

「何があつたんですかー？」

「実は、以前試作で造つた【ダイオラマ魔法球】が有るのをすっかり忘れていたｗｗｗｗ」

「ちよつｗｗｗｗ」

「< 今までの苦勞がｗｗｗｗ >

「なぜ今頃思い出したしｗｗｗｗ」

「< 街ごと【魔法球】に取り込めば良かった罫ｗｗｗｗ >

「まあ、貴重な経験だったと言っわけ W W W」

「その一言で済ます気かい!!?」
「その一言で済ます気かい!!?」

……はっはっはっ、まるで眷属しか居ないような光景だな W W

「笑って流しやがった W W！」
「笑って流しやがった W W！」

……ごうして、ヲタクの群れを捕まえて2日目も終了ww

次回、『鬼哭の街』で、君はヲタクの涙を見る！

『 ……見ねーよ！wwww 』

another 06 ヲタクと言つ生き物(後書き)

それでは、又次回ww

another 07 鬼哭の街（前書き）

大変、お待たせ致しました。

待つて居てくれた皆様、申し訳有りませんでした。

外伝7話投稿します。

another 07 鬼哭の街

……ハアハアハア……。

『 ……もうダメだよ、さえ冴ちゃん。
これ以上 走れないよう。』

『 諦めんなよ、美樹みき！ こんな所でアナタ化け物に喰われても
良いつて言うのかよ！？』

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

『 ひい！？』

「……ちっ！ 追いついて来やがった！」

……くそ！ 動きの鈍いゾンビだけなら どうにでもなったのに、なんだよあの化け物は！？

まるで、岩で全身を覆ったゴリラみたいな外見で、どう見ても3メートル近くの大きさが有るはずだ。

今まで あんなの居なかつただろうが！？

畜生が！ わざとゆっくり追って来てやがる！

……まるで猫が鼠を弄るように！！

なんとか アイツを撒いてしまわないと。

……万が一にも あの子達の所に案内なんて出来ないぞ！？

「きゃあ！？」

「美樹い！？ ……ほら 早く立って！」

「ダメだよ、冴ちゃん。
……挫いたみたい。」

わたしの事は良いから、^{さえ}冴ちゃんだけでもあの子達の所に
戻ってあげて！」

『馬鹿！ そんな事出来つかよ！！』

……GURRRRRUUUUUU……

『ひっ！』

畜生！ アタシ等 こんな所で死ぬのかよ！？

……あの子達を残して、こんな所で！！

化け物の太い腕が振り下ろされて、アタシ達は互いを抱きしめて
目を閉じた。

……だけど、しばらく待ってみても予想した痛みや衝撃は襲って来なかった。

恐る恐る目を開けてみると、そこには信じられない光景が広がっていた。

岩ゴリラの太い腕は、第三者の手に因よって受け止められていたんだ。

ソイツは 奇妙な格好をしていた。

一見すると黒いライダースーツにブーツやグローブ、それに肩当てを着けているように見えるけど、身体のラインにぴったりしている甲殻？のようなモノで全身を覆われている様だった。

背の高さは180〜190前後、細身ではあるが全身に筋肉のラインが浮かび上がってる事や、岩ゴリラの太い腕を軽々と受け止めている事から、貧弱なイメージは無い。

なにより目を引き付けるのは、その仮面。

バツタを模したと思われるその仮面と姿、それに首に巻いた赤いマフラスカーフは、昔 近所の男の子達と一緒に見ていた映像の中の仮面のヒーローそのままの姿だった。

『……………嘘……………』

驚き唾然とするアタシ達に、ソイツは錆を含んだ低い美声で安心させる様に

「もう大丈夫だ。」

そう宣言すると同時に、岩ゴリラを空中高く蹴り上げた……………信じられない脚力だ。

GYUAAAAA!?

岩ゴリラは空中では自由が利かないのだろう。虚しく藻掻いているだけだった。

その【仮面ライダー？】が

「 Rider kick
」

と呟くと、言葉と同時に 紫色の電流が彼の身体を包み、
落ちて来る岩ゴリラに向かって、自らもジャンプして回し蹴りを放
つと

岩ゴリラは紫色の炎に包まれ、一瞬で灰となって消えていった。

「足を怪我しているのか？」

助かった事がすぐに実感出来ずにいるのだろう。

啞然としている二人の女の子の内、大人しそうなロングの黒髪の娘に話し掛けて挫くじいたと思われる足首かざに手を翳す。

先ほどの破壊の為に使った禍々しく攻撃的な光では無く
見る者全てをホッとさせる様な温かな紫色の光が 彼女の足に降り
注ぐ。

………うむ！ 捲くれ上がった学生スカートの裾からチラ見する
【絶対領域】は眼福だな！

まあ、そんな様子はカケラも見せずにストイックな無表情を装ってますけどねWWW

(相変わらず最低だこの虫^{ヒト}WWW)

(だが、それがイイ!!) キリッ

(この真面目な場面で【分割^{マルチタスク}高速思考】を無駄使いしているお前達が好きだー!WWW)

ヲタク達と一緒にコチラに向かっている眷族達が テレパスイーで突っ込み入れて来るしWWW

(テレパ【スイー】とかWWW)

(無駄に発音イイWWW)

『 ……わぁ? すーい!!』

痛みも腫れも、見る見る消えていく!?

』

「他に怪我とか無いか？」

「はい、ありません。」

……あの、申し送れました。
わたし、真誠高校2年の鈴木美樹と言います。
先程は助けて頂いて、有難う御座います。

その上、怪我まで治して貰って 本当に助かりました。」

「アタシからも、礼を言わせて下さい。
助けてくれて有難う。」

そして美樹の怪我也治してくれた事も。」

あ、アタシの名前は齊藤冴子って言います。」

「ああ、それはご丁寧にどうも。」

俺の名は【アバドーン】、君達の言葉で【蝗の王】と言っ意味だ。
以前から、この星の”ヲタク文化”に興味を持っていた
只の昆虫型生物さ。

この星の”ヲタク文化”を守る為、ゾンビを駆逐しに 遣って来た

んだ。

秋葉原の街は、俺達が活動するには勝手の良い街だからね。

『 …………… へ？ 』

『 …… あの、【改造人間】とかじゃ無いんですか？ 』

『 しかも、立ち寄った理由が【”ヲタク文化”を守る為】って…
… 』

「 ああ、【改造人間】じゃ無くて昆虫型生物だよ、ほら。」

《がばっ》

そう言って、口を開けて見せてやると。

『 …… 本当だ、咽喉の奥まで続いている。 』

『 でも、どうやって活動するのさ？

…………… その格好じゃ、大騒ぎになるだろ？ 』

「いや、この姿のまま【秋葉原の街】を歩いてても、偶に写真を頼まれるだけで普通に活動出来るぞ？」

この衣装どうしたの？って聞かれても【自作】したって言えば驚きはしても納得してくれるしなwww」

『……………。(汗)』

『………凄く、納得したかもー。』

『………まあ、あそこはそういう場所だよな。』

『こんなに堂々と宇宙人さんが歩いてるなんて、皆想像して無いんだろうなあ……………。(汗)』

「……………君等は怖く無いのか？ この姿が。」

「……んー、怖いか怖くないかって聞かれれば、怖くないかな。」

「アタシも別に怖いと思わ無いな。」

「……それはなぜだ？」

君達【人間】^{ヒューマン}は、少しの違いでも見つけたら 同じ【人間同士】^{ヒューマン}でも差別や争いを起こす生物の**はず**。

それは、俺の偏見では無く 君達の歴史が証明している**厳然とした事実**。

ましてや、俺は君達の命を容易く奪える程の能力を有し、外見もまったく違う生物だ。

普通なら、恐怖と迫害の対象となる筈の要素がテenko盛りだろ。なのに、なぜそんなにも普通に接してくれるんだ？」

「……まあ、確かに【人間】ってそう言う生き物だよな……。」

「……やっぱり、宇宙人さんからは そう見えるよね……。」

「……質問の答えだけどき。……うまく言えないけど 見ず知らずの」

アタシ達を助けてくれるくらいは、善良だつて事だろ？」

「それに、その姿を怖がるのは無理ですよ。なんたつて、わたし達日本人に馴染みの深いヒーローそっくりですもん。」

「まあ、そうだよな。」

それに、既にゾンビとか岩ゴリラとかの攻撃的な【敵】を知った後だもんな。」

「あの怪物さんから助けにくれたんですもん。怖がるなんて失礼な事出来ませんよう。」

「……そうか、有難う。」

なら、君達も俺達の【大事な友人】だな。」

「【達】つて事は、お仲間さんが居らっしゃるんですかー？」

「やっぱり、同じ姿なのかい？」

「それは会ってからの楽しみだなW W」

いま テレパスィーで呼んだから。』

『……………【スィー】ってww』

『無駄に発音イイな、おいww』

……… なんと言うか、【アバドーン】が紹介してくれた仲間は、
【妙な】連中だった。

全身を黒で統一した彼と違って、仮面やブーツとグローブ（っぽい
甲殻）
が、緑系統の色をしている【眷属】は理解できる。

彼ら【眷属】は ^{アバドーン}彼の事を”王様”と呼んで居たし、色以外は
^{アバドーン}彼とそっくりだから 同じ種族だって直ぐ分かるしな。

彼らが乗っていた【サイクロン】そっくりなバイクが変形して
【オート・バチン】と言う名のロボに変形するのも、まあ良い。
……… 出演作品が昭和と平成の違いは有るけど、
同じ”ライダーシリーズ”だし。
ただ、胸の部分にあるモニターで”顔文字”映して会話？
するんだよねーこのロボ。（汗）

……… まあ、それも納得するとして。

だけど、装甲車？から ソロソロ降りてきて、”萌えー”だの

”来たヒロイン来たこれで勝つる”とか騒いでる
武装した【ヲタク】の集団が意味不明過ぎるだろ!?

『なあアバドーン、このデブヲタ共は何者だよ？
ナニモン』

『酷っ!?!?』

『ツンデレヒロイン来たー! W W』

『ツンデレ! ツンデレ! W W W』

『でも、強気っ娘に罵倒されるとトキメクば W W』

『どんだけMなんだよ W W』

『変態逝って良し! W W』

『へんた^{変態}ーい、止まれ! W W』

『うるせえ! ツンデレ言うな!?!? この変態共が!?!?!』

『なんと言う ご褒美 W W W』

☞ 萌えーWWW ☞

☞ 冴タン、（、）ハアハア ☞

☞ ハアハアすんな!?

なんでアタシの名前知ってたんだ、このストーカーが!?!?
あと、”タン”とか付けんな!?!? ☞

☞ もー、冴ちゃんそんな酷い事言っちゃダメだよー。
ヲタクさん達だって、必死に生きているんだから、この人達は
こう言う習性なんだって理解してあげないとー。 ☞

☞ 美樹! コイツらに甘い顔しちゃダメだ!?!? ☞

☞ 女神さま来たコレWWW!?!? ☞

☞ 見た目が おしとやかで、中身もお優しい娘でしたWWW ☞

☞ 大人し過ぎて【空気】化するかと思っただけどWWW ☞

☞ 藻レラが応援します!?!WWW ☞

☞ えへへ、有難う御座います。（照） ☞

「こら！ 美樹が穢れるからヤラしい目で見んな！？」

「まあまあ、彼らは”ヲタク”と言う絆で結ばれた俺の大切な同志なんだ。あまり邪険にしないでやってくれ。」

「イヤな絆だな、おい！？」

「デスヨネーWWW」【x50】

（^^）gm プギヤー

「ロボに指差されて笑われる謂れなんか無いよ！！？」

「 なんと 言うカオス WWW」

•
•

•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•
•
•
•

『 ……なるほど、アンタ達は拠点を求めて
食料や生活必需品を回収して廻ってたんだな。』

「 ああ、その通りだ。
所詮、俺達は【来訪者】、……来たりて訪う者達だ。
いつかは、この星を離れてゆく。
その前に同志の住む拠点を造ろうかと思ってね。
まあ、ゾンビは全滅させるけどね。」

……それよりも、事態は厄介な方向に向かったようだ。
ゾンビ以外に、【不完全適合体】も 駆逐しなければ成らなくなっ
た。」

『 【不完全適合体】？ 』

「君が【岩ゴリラ】と呼んでいた個体の事だ。ゾンビと同じく、元々は【ブーステッド・ウイルス】に感染した人間の

【成れの果て】をそう呼称している。

ちなみに、そのウイルスは、アメリカの強化兵士研究所から漏れた未完成の細菌の事だwww」

「この状況の原因はあの国かい!!!？」

……はあ、まったくなんて事してくれただよ。

「そだwww」

……ちなみに、抗議しようにも既に国自体がアボンしてるから無駄。

向かわせた眷族からも、生存者を発見したと言う報告は無いしね。

「【撃ち込んだミサイルの所為】

「なんてこった……。」

…と力無く呟くアタシに、美樹が話し掛けて来た。

『 ……ねえねえ冴ちゃん、この人達に頼めば
子供達の食料を分けて貰え無いか？。』

「 ん？ ”子供達の食料”？ 」

『 はい、わたし達は子供達を集めて保護してたんですけど、わたし達を

指導してくれたた先生達も食料の調達に出たまま帰って来なくて、
……それで、わたしと冴ちゃんがなんとか子供達の食料を調達しよう
と、

隠れていた所から出て来たんですけど…。。。』

「 そこで、岩ゴリラに出会って追い駆けっこして居たと…。。。」

『 ……そんな長閑なモンじゃ無かったけどな…。。。』

実際、死んだかと思ったしな。(汗)

「……みんな！事情は聞いたな？
子供達に食料を届けに逝こうじゃないか！」

『 おう、もちろんですともww 』

『 王様、カコイイ！（・・） 』

『 ショタと よう 〴〵 を救いに！！ 』

『 よう 〴〵 （・・）ハアハア 』

『 さすが、仮面ライダーは子供の味方！ww 』

『 ショタツ子（・・）ハアハア 』

『 よう 〴〵 萌えー。 』

『 僕等、全員”小さい子供”が大好きですから！ （キリッ） 』

『 子供は未来の宝ですから！ （キリッ） 』

『 ”お兄ちゃん”と呼ばれたいばww 』

「わあ、ありがとうございます皆さん
助けて貰ったばかりか、子供達の食料まで。」

……良い人達に出会えて、よかったね冴ちゃん！
みんな子供が ”大好き” なんだって 」（ニッコリ）

「来た！天使来た！これで勝つる！WWW」

「美樹タン、（、）ハアハア」

「その笑顔に惚れますたWWW」

「萌えー！WWW」

「いやいやいや！？ 全然素直に喜べ無いだろー！？

メチャメチャ邪よこしまな煩惱がダダ漏れじゃん！！？

子供達のお腹は満たされても、

貞操がベラボーに危険じゃないか！！！？

それと！ハアハアすんな！！！？」

「失礼な！？」

『俺達は少年少女を愛でただけだ！』

『そして、”お兄ちゃん”と呼ばれただけだー。』

『物陰からコソコソと見守るのが悪いと言っのか？』

『なぜ、そんな所から見守る？WWW』

「その点については、俺が保障しよう！

俺達は変態と言う名の紳士！！

子供達に邪なりビドーを強要するような外道など

俺の仲間には、一人も居ないと断言出来る！！

……ちなみに、字はこう書く【チェントルメン】WWW」

『名前に”変態”と付いてる時点で 安心出来ないだろオー！？
しかも、【チ】に濁点かよ！！？』

「何を今更W 【オート・バチン】だって【チ】に濁点だぞWW

」

☞ 胡散臭せー！！！！？ ☞

「 まあ、飛蝗バツタだけに偽物バツタモンっぽいつて事でWWW」

☞ 誰がウマイ事を言えとWWW ☞

☞ 山田くーん、座布団2枚ねーWWW ☞

☞ そんなお前が好きだぁーWWW ☞

☞ お前等！ 純粹混じり気無しの【バカ】だろ！！！！？ ☞

☞ ……ふふ 冴ちゃん、すっかり仲良しさんだね ☞

美樹イイイイイ！！！！？

ここの天然ボケがああぁー！！！！？

「……………うむ、大分時間を喰った。
もうそろそろ日も傾く、急いで子供達に食料を届けよう。」

とか、ほぎきやがったWWW

「人事ひとじんみたいに言ってんじゃ無なー！？
オメーが一番の元凶だろがー！！？」

「よし！全員装甲車に搭乗！！」

「聞けよ！！？」

「流したWWW」

「相変わらず、王様のスルースキルは最強やでえーWWW」

「ビバ！傍若無人WWW」

『唯我独尊 W W W』

『落書き無用 W W W』

『最期、意味不明過ぎ W W W』

……オオ……オオオオオ……オオオン……

……日も傾き始め、皆が装甲車に乗り込もうとした時
遠くの方でゾンビ達のうめき声とも怨嗟の声ともつかぬ声が
風に乗って聞こえて来た。

最期まで残って警戒していたアバドーンが、その声を聞いて
ポツリと『…鬼の哭く街…か…』と呟いていたのが
アタシには印象的だった……。

……ところで、ホントにコイツ等を子供達の所に連れて
行っても良いのかなー？
不安しか感じ無いんだけど？（汗）

another 07 鬼哭の街（後書き）

そんな感じで、外伝7話終了です。

リアルで仕事が忙しいですが、

これからも頑張って逝きます。

another 08 ザ・マスクド・ライダー（前書き）

お待たせしました。

なんとか時間作って外伝8話を投稿しました。

待っていて下さった皆さん

有難う御座います。（＾＾）

やあ、現在 ちみっ子達に食料を届ける為に、
仲間達と移動中のアバドーンだ。

冴子ちゃんや美樹ちゃんの案内と 移動基地の正確無比な
ナビゲーションのお陰で 最短距離を走る俺達に、移動基地で
探査端末機を担当している眷族から緊急連絡が入ったのは、
目的の場所に着く途中の事だった。

< 王様ー、なんか急がないとヤバイかもー。

武装した集団が 目的地である小学校を目指して接近してるし、
統率のとれた動きをして居ないから武装した”暴徒”かも。 >

……！
みんなきょうだい 分かった、引き続きソイツらの監視を続けてくれ！
皆は同志や女の子達への説明をヨロシク頼む！！

子供達の笑顔を守るために。

夕陽に赤く染まった街を【サイクロン】が疾走^{はし}る。

・
・

・
・
・
・
・

.....

激しいスキル音と衝突音や爆音が鳴り響き、

スポーツタイプの自動車と高性能セダン車が十数台の他 違法改造された多数のバイクが、真誠しんせい小学校の正門前に集結していた。

『ここで間違い無いようだな.....。』

『 正木さん、こんな所に何の用っすか？』

『 この前ブツ殺した先公共の話じゃあ、食料なんか無いって事でしたけど？』

『 あの先公共にゃー笑ったなWW』

『最初は格好良い事 言ってたけど、痛めつけたらベラベラと
此処の事を喋り出したかなww』

『最期は髑り殺しにしてやったけどなww』

『『『『『ぎゃははははは！！』』』』』

『……今日はガキ共で”キツネ狩り”をしよつと思ってな。』

『！そいつはイイヤ！』

『流石、正木さんだww』

『俺、ガキ共の甲高い声を聞くとイラツとするんすよねww』

『面白そうなイベントっすねww』

『……ゾンビは湧いて出るわ、ポリ公共は死ぬわ、
……ようやく面白くなって来たじゃねえか。』

『まったくっすwwww』

『楽しいっすねww！』

『ヒヤッハー！全てブツ壊してやんぜー！！』

……どろどろ。

怖いヒト達が 正門前に集まって来たかと思ったら、

僕たちを晒しながら追いかけて廻し始めたんだ。

気が付けば、僕等は全員 グラウンドに追い詰められて居た。(T

T)

お姉ちゃん達は居ないし、どうしたらいいんだろう!?

……ああ、でもダメだ、此処にお姉ちゃん達が居たとしても、

あんな怖そうなお姉ちゃん相手じゃ たとえお姉ちゃん達が居てくれても、

きつとどうにも成らない。

僕が一番年長組なんだから、僕がみんなを守らないとダメなんだ!

『 ヒロシちゃん、どうしよう? 』

『 っ、怖いよう〜(T T) 』

『 えう〜(^ >) 』

『 ……あ、あの! ナゼ僕たちにヒドイ事するんですか? 』

『 ここには僕よりも小さい子供が居るんですけど、 』

『 この子供は見逃して貰えませんか? 』

『ぎゃはははっ!!』

『“この子達は見逃して貰えませんか？”だってよ!？』

『いかにも”優等生”の良い子ちゃんってセリフだねえ?』

『……ムシズがはしるんだよ!このブリっこ野郎が!？』

『テメエみてえな生意気なガキから血祭りに上げてやんよお!？』

『ひう!?(><)』

いきなりヤンキーっぽいヒトが怒り出したかと思ったら僕に向かって鉄パイプ?を振り上げて来た。

……ああ、僕はここで死んじゃうのかなあ？

もう一度お姉ちゃん達に会いたかったなあ……。

ギヤリイイイ！！ギユルギユルギユルギユル！！！！
ズザアアアアアア！！！！

……………それはいつか見た光景。

現実には有り得ない、映像の中のひとコマ。

憧れのあのヒーローが、映像の中の姿そのままに
僕等と怖いヒト達の間バイク（サイクロンだ！）を
滑らせながら止めたんだ。

……………まるで僕等を守るように怖いヒト達を正面に、
僕等を背に庇うようにして！

「……なんだ、てめえはあ!?!」

「イカレタ格好しやがって! ヒーロー気取ったつもりかあ!?!?」

「俺達が楽しんで居る所に水を差しやがって!?!?」

「……俺か? 俺は通りすがりの仮面ライダーだ。」

「……すごい! テレビでの決め台詞だ!?!
凄く渋くて、テレビで見るよりも何倍もカッコイイ声だよ!?!」

「……!?!? 吹いてんじゃねえ!?!」

「この勘違いしたコスプレ野郎が!?!?!」

「くたばりやがれ!?!?!」

ああ！？戦闘員達の何人かが、【仮面ライダー】にボウガンを
向けたと思ったら一斉に矢を放ったんだ！！

【仮面ライダー】が死んじゃう！？

カキーン！カキーン！キーン！カキーン！キーン！
ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！ヒュッ！
グサ！ドス！ザシュ！ブスウ！ザス！

『 …！？ぎゃああ！？ 』

『 ひいいー！？ 』

『 あぎゃああー！！ 』

『 うぼあー！？ 』

『 いてえよおおおお!! 』

『 ハートさま乙 W W W 』

.....!?

一瞬の事で、何が起こったのか全然分からなかった!?

【ライダー】さんにボウガンの矢が当たったけど
全部弾かれてしまったんだと思う。(多分)

そして、【ライダー】さんの右腕が消えたと思ったら 弾かれて
空中で回ってた矢が消えて、ボウガンを撃った戦闘員達の
右手から矢が生えていたんだ!!

きつと、北斗 拳のケンシロウみたいに 見えない位の速さで

矢を投げたんじゃないかな!?

「……!?!? な、なんだと!?!?」

「い、いま。何をやりやがった!?!?」

「人間わざじゃねえぞ!?!?!?」

「まさか、本物の!?!?!?」

「ばか! そんなワケあるか!?!」

「だ、だけど。人間に真似出来る事じゃねえよ?」

じゃり。

「……バチン。格闘形態。」

ゆっくりとした動作で【ライダー】さんが

【サイクロン?】から降りて声を出すと

キュイーンーン!ピピポパ!!

って感じの機械音がして、バイクがロボに変形したんだ!!

……すごい!すごいすぎるよ!!

ボウガンの矢も跳ね返すし、すごいマシンも持ってる。

やっぱり本物の【仮面ライダー】なんだ!!

「バチン、子供達を守れ。」

(^ ^)ゞ ラーサー

……!?

胸のモニターに顔文字映した!!?!

「バジンすげー!?」

「おもしろーい！」

「カコイイー！」

「微妙に残念な感じがする!?」

【正解】

そして、【ライダー】さんが 泣いて良く透る^{とお}声で、
おもむろに話し始めたんだ。

「……今を生きる子供達には二つの【権利】が有る。

一つは【生きる権利】。

もう一つは【幸せになる権利】だ。

この二つが、如何なる国家・組織の 法律・規則よりも優先され、
絶対の不可侵だ！！」

「だが、お前らはそれを土足で踏み躪ろうとした。

……今まで、散々好き勝手に来たたる？

そろそろ、自分でやった事の報いを受ける時だ。

……さあ、お前等の罪を数えろ！」

……ヤバイよ！ 格好良過ぎて泣きそうになって来たよ！

本物だ！本当に【仮面ライダー】は居たんだ！

【本物の仮面ライダー】が、いま 目の前に居るんだ！！

「バ、バイクが変形したあ！？」

「マ、マジでホンモノの【仮面ライダー】なんかよ！？」

「冗談じゃねーぞ！？」

「こんな、化け物みたいな奴と遭り合うなんて、聞いてねえよ！？」

「敵かないつこねえよ！？」

「これなんて無理ゲーWWW」

『 スタートアップ
S t a r t U p 』

悪の戦闘員達が怯んでいる間に【ライダー】さんから
【合成音】が聞こえて、その姿が掻き消える。

超高速形態だ!!

『 …!?!あぎやあああ!?! 』

『 ひあああ!?!? 』

『 あぎいいい!?! 』

『 ア————!?! 』

銀色の旋風が吹き荒れて、悪の戦闘員達が吹き飛んで逝く。

『 Time Out 』
タイムアウト

制限時間を告げる【合成音】と共に 地面を滑りながら姿を現すと、
あとには手足を押さえながら呻いている

悪の戦闘員達が残されていた。

やっぱり、【仮面ライダー】は最強なんだ！！

ヴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！
ドガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！
ギャリイイイイ！！！！

僕たちが【仮面ライダー】に見とれていると　すごい音が聞こえて来て、
すごく大きくてカッコイイ【装甲車？】みたいなのが2両と、
緑っぽいカラーリングの【仮面ライダー】が何人も（！）現れたんだ！

そして、【装甲車？】から完全武装した”メガネをかけて太った”お兄さん達が沢山降りて来て、悪の戦闘員に向かって武器を構えた。

「みんな、殺すなよ！」

コイツ等の命に価値なんぞ無いが、子供達に汚いモノなんぞ見せたくないからな！！」

『『了解です、王様！ W W 』』 【×多数】

『王様の優しさに全俺が泣いた！ W W W 』

『ヒヤッハー！汚物は消毒だー！ W W W 』

『小学生（、）ハアハア 』

「ハアハアすんなWWW」

ヒュン！ ブスリ！
パシユツ！パシユツ！パシユツ！

「ぎゃあああ！？ 腕があああ！？」

「ひひひひひひ！？」

「な、なんだ？ 奴等は！？」

「ライダーアイツの仲間か？」

「敵いつこねえ！！？」

「逃げろオオオ！！？」

「待ってくれ！置いてかないでくれよ！？」

……すごい!?

けっこう距離が有るのに、一発も外さないで当てている!!!?

このお兄さん達、メガネで太ってるけど凄腕だー!?!?!?

……おおっww

さすが、ガンヲタw 武器の扱いがハンパ無^ねえww

^{きょつだい}コイツら、武器戦闘に関してはムチャクチャ高性能過ぐるwww

▣ 王様ー奴等逃げて逝きましたよww ▣

▣ ふっ！口ほどにも無い奴らよ！ww ▣

▣ また詰らぬモノを斬ってしまったww ▣

▣ 斬^{..}つてねえじゃんww ▣

▣ よう、よ（、）ハアハア ▣

▣ ショタツ子（、）ハアハア ▣

▣ 小学生萌えーwww ▣

▣ だからハアハアすんなwww ▣

▣ 萌えんな！www ▣

『 ヒロシィー！ 』

.....スカッ！

『 あ、あれ？ 』

たっ たっ たっ たっ！

『 あ、あの！ 【ライダー】さん！！
危ない所を有難う御座いました！！
そ、それで！ぜひサインお願いします！！ 』

『 あーいいなー！ 』

『 あーん、ボクもボクもー！ 』

『 ワタシもー！w 』

『 ヒロシイイイイイイイイイイ！？ 』

『 ……これは酷いww 』

『 なんと言う残酷な現実ww 』

『 血の繋がった家族の絆も”憧れ”の前では無力とかww 』

『 まあ、リアル・仮面ライダーが目の前に居るんじゃないかww 』

『 涙目の冴タン（、）ハアハア 』

（^）（^）9m プギヤー

『 だから、ロボに指差されて笑われる筋合いなんか
無^ねえーってんだよ!!!?』

あと！ハアハアすんなあー！！』 (涙目)

『 もう！ お姉ちゃん五月蠅いよ？』

いま【ライダー】さんにサイン貰ってるんだから、
ちよつと静かにしててよ？』

『 ヒロシイイイイイイイイイ！?』 (号泣)

..... (;) () 冴子ちゃんエ.....。

切な過ぎて声も掛けられ無^ねえ………（涙）

でも、泣いてる冴子ちゃんもカワイイから録画三口！WWW

（ やっぱり、最悪だこの虫^ムWWW ）

（ 酷^{ひど}すWWW ）

ぼんぼん！

（ ^ ^ ） うんうん

『 肩を叩くなあー！ー！ー！ー！？
ロボにまで同情されたら泣きたくなんだろオオオー！？
』

< ……なんと言う屈辱WWW >

< このロボやりおるわ W W W >

< 誰だよこんなイヤなロボ造ったの!?!? >

< 上級創造神様ですが何か? W W W >

< / (^o^)\ >

『 みんなー! 食べ物いっぱい運んで来たよー W 』

『 お菓子もたくさん持って来たよー W 』

『 沢山有るからお腹いっぱい食べれるよー W 』

『 さあ! 並んで並んで W W 』

『 わーい W W 』

『 ありがとうーお兄ちゃんー W 』

『 ありがとうー W 』

『 ボクお菓子がいいなー W 』

- ☞ ……なんと言う多幸福感！WWW ☞ (感涙)
- ☞ 我が生涯に一片の悔い無し！！ ☞ (滝涙)
- ☞ ……「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」「お兄ちゃん」 ☞
- ☞ エコー掛けながら、フェードアウトすんなWWW ☞
- ☞ 無駄に凝った演出すんなよWWW ☞
- ☞ だが気持ちは解かるWWW ☞
- ☞ (、、)ハアハア ☞
- ☞ だからハアハアすんなってのWWW！ ☞

……こうして無事に ちみっ子達を保護した俺等は
日も沈んで来たのでそのまま寢床の準備に移ったんだ。

……冴タンの号泣が 少々煩かったけどなー W W W

< 冴タン【ブラコン】 説 W W W >

……言ってるなよ、藻マ工等WWW

another 08 ザ・マスクド・ライダー（後書き）

やられキャラのヤンキー達は

ヒロシ君の中で、悪の戦闘員扱いになってしまいましたw

そして、冴タンに【ブラコン】疑惑な件ww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7127v/>

昆虫人、異世界を逝く

2011年12月1日00時56分発行